

静岡県 富士市

天間沢遺跡

D・E・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P地区
(4・5・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16地区)

2024年3月

富士市教育委員会

例 言

- 1 本書は、静岡県富士市天間地先において実施した天間沢遺跡 D・E・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P 地区（4・5・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16 地区）の発掘調査に関わる報告である。
- 2 発掘調査は、富士市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査担当者等は各地区の調査経緯にて掲載している。
- 4 整理作業は、令和4年（2022年）11月に開始し、本書の刊行をもって終了した。
- 5 整理作業は、佐藤祐樹（富士市教育委員会文化財課主幹）・小島利史・佐原芳郎・若林美希（同文化財調査員）が担当した。
- 6 本書の編集は佐原、若林が担当し、調査経緯・遺構については若林、遺物等については佐原が執筆した。
- 7 現地調査における実測図および記録、写真撮影等は各調査担当者による。
- 8 遺物の実測・トレースは、佐原、金田純子、小田貴子、伊藤純子（同文化財整理員）が行い、拓本を井上尚子（同文化財整理員）、渡辺美規子（事務補助）が行った。
- 9 整理作業における遺物写真は、佐藤が撮影した。
- 10 土器の展開写真は、VisualSFM（Changchang Wu）、MeshLab（Paolo Cignoni, Visual Computing Lab）を使用し、佐原が作成した。
- 11 奈良・平安時代以降の土器については、池谷初恵（富士市文化財保護審議会委員）氏のご教示を得た。
- 12 本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。今後、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管する予定である。
- 13 本書の作成にあたり、次の方々にご協力とご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。（敬称略、五十音順）

池谷初恵 志村 博 西野雅人

凡 例

- 1 本書で示す座標は、平面直角座標第Ⅷ系（JGD2011 / Japan Plane Rectangular CS Ⅷ EPSG:6676）を用いた国土座標、世界測地系（平成 14 年 4 月施行）を使用している。調査は、任意の座標で測量し、世界測地系に合成した。
- 2 挿図の縮尺は、各国に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺はすべて任意である。
- 3 土器の実測図では、断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。
縄文土器・弥生土器・土師器  灰釉陶器 
- 4 土器・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）のマシセル表色系表記に準拠した。
- 5 遺構等の略号は、竪穴建物＝SB、土坑＝SK、溝＝SD、小穴＝Pit、炉穴＝FP、埋甕＝SU、配石＝SS、トレンチ＝Tr、グリッド＝Gr、水準高＝L、仮水準点＝KBMとした。
- 6 遺構・遺物ともに、法量の（ ）は残存値、[]は推定値である。
- 7 縄文土器は以下のように分類した。

I 群土器

縄文時代早期の土器をI群とした。時期としては早期後葉の条痕文系土器群のみである。

I群A類は、胎土に繊維および石英や青灰色の砂粒を多く含み、黒灰褐色を呈す。その多くは内面に条痕を施し、口唇近くの口縁部に1段、さらに弱く2段の段をもつ。この段部分を文様帯とし、爪形の連続刺突文で三角および斜行文を施す。口唇の刻みと、口縁内部にも口唇に並行して連続刺突を行うものがほとんどで、波状口縁や二対の注口のような酒坏状把手をもつものがある。出土地点もほぼQ地区に限定される。茅山下層式並行の東海系土器であるハッ崎I式に比定した。

I群B類は、A類より厚めで繊維を含む量が少なく、全体として赤みを帯びA類に比べて明るい胎土の土器である。棒状工具による斜め刺突と、平行押しき文による直線と弧線文が施文される。この土器にはまだ型式名は付与されていないが、愛鷹山山麓のいくつかの遺跡にて検出例が知られており、茅山下層式並行の土器と考えられている。

II 群土器

縄文時代前期の土器をII群とした。

II群A類は、器壁が非常に薄く、細線を地文とする土器をあてた。木島式に比定した。

Ⅲ群土器

縄文時代中期の土器をⅢ群とした。中期中葉から後葉まで、ほぼ連続して続いている。天間沢遺跡の主体となる時期で、特に中期後葉が量・質ともに充実している。

Ⅲ群 A-1 類は、隆帯による立体的な造形を特徴とする、勝坂式の範疇の土器をあてた。時期的には新道式から井戸尻式まで出土している。完形品は無く、把手等の部分的なものが目立つ。

Ⅲ群 A-2 類は、隆帯と条線文によって文様を構成する土器群をあてた。天間沢遺跡で最も多く出土し、その主体となる土器群である。曾利式土器に比定したが、曾利Ⅳ・Ⅴ式が大半を占める。

Ⅲ群 B-2 類は、隆帯と縄文で文様が構成される土器群を充てた。縄文が施文されていても文様構成が A-2 類にあたるものは A-2 類としている。加曾利 E 式に比定した。

Ⅲ群 C-2 類は、薄手で灰白色系の色調を持ち、撫糸文を地文に、並行沈線による弧線文と渦巻文を組み合わせた文様をもつ。咲畑式に比定した。

Ⅲ群 D-2 類は、薄手で灰白色系の色調を持ち、口縁部文様帯に隅丸長方形の楕円文を施文する。北白川 C 式に比定した。

Ⅳ群土器

縄文時代後期の土器をⅣ群とした。Ⅲ群から断続なく続いていると考えられるが、多くは E 地区に集中している。

Ⅳ群 A-1 類は、器面全体を、並行沈線による弧線や直線で描画し、磨消縄文、あるいは並行沈線内を列点文で充填するものをあてた。称名寺式に比定した。

Ⅳ群 A-2 類は、小型巻貝の最頂かと思われる刺突と沈線、および細かい縄文で文様を構成し、磨消縄文による帯縄文を多用して、器面を精緻な研磨で整形するものをあてた。堀之内式に比定した。

Ⅳ群 B-2 類は、やや厚めの器壁をもち、太い縄文原体を用いた付加条縄文を表面全体に施文した粗製の深鉢土器およびそれに類似する土器をあてた。

Ⅳ群 A-3 類は、磨消縄文と「の」字文で文様を描き、裏面口縁部に沈線を施文、器面を精緻な研磨で整形する土器をあてた。加曾利 B 式に比定した。

Ⅳ群 C 類は、胎土が灰白色傾向で、器厚が薄く砂粒を多く含む、西日本系と思われるものをあてた。

8 縄文土器の編年は、以下の文献を参考基準とした。(年代順)

戸沢充則 編 1994 『縄文時代研究事典』東京堂出版

今福利恵 ほか 1999 「2 縄文時代の編年」『山梨県史 資料編 2 原始古代 2 考古 (遺構・遺物)』山梨県

縄文時代文化研究会 編 1999 『縄文時代文化研究の 100 年 -21 世紀における縄文時代文化研究の深化に向けて-

縄文時代 第 10 号』縄文時代文化研究会

小林達雄 編 2008 『総覧 縄文土器』アム・プロモーション

目 次

例 言

凡 例

目 次

第 1 章	天間沢遺跡の概要	1
第 2 章	天間沢遺跡 D 地区（第 4 地区）	7
第 3 章	天間沢遺跡 E 地区（第 5 地区）	9
第 4 章	天間沢遺跡 G 地区（第 7 地区）	67
第 5 章	天間沢遺跡 H 地区（第 8 地区）	73
第 6 章	天間沢遺跡 I 地区（第 9 地区）	79
第 7 章	天間沢遺跡 J 地区（第 10 地区）	81
第 8 章	天間沢遺跡 K 地区（第 11 地区）	83
第 9 章	天間沢遺跡 L 地区（第 12 地区）	123
第 10 章	天間沢遺跡 M 地区（第 13 地区）	131
第 11 章	天間沢遺跡 N 地区（第 14 地区）	135
第 12 章	天間沢遺跡 O 地区（第 15 地区）	141
第 13 章	天間沢遺跡 P 地区（第 16 地区）	145
第 14 章	総括	151

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 章 天間沢遺跡の概要

第 1 図 天間沢遺跡 標準土層	1
第 2 図 天間沢遺跡 調査範囲図	2
第 3 図 天間沢遺跡 遺跡分布状況図	3

第 2 章 天間沢遺跡 D 地区 (第 4 地区)

第 4 図 D 地区 位置図	7
第 5 図 D 地区 トレンチ配置図、セクション図	7
第 6 図 D 地区 A-5Tr	
平面図、セクション図、エレベーション図	8

第 3 章 天間沢遺跡 E 地区 (第 5 地区)

第 1 節 調査に至る経緯と経過	
第 7 図 E 地区 位置図	9
第 8 図 E 地区 確認調査トレンチおよび本調査区配置図	10
第 2 節 発掘調査の成果	
第 9 図 E 地区 1・2 次調査トレンチ全体図 (北部)	11
第 10 図 E 地区 1・2 次調査トレンチ全体図 (南部)	12
第 11 図 E 地区 1・2 次調査トレンチセクション図 (1)	13
第 12 図 E 地区 1・2 次調査トレンチセクション図 (2)	14
第 13 図 E 地区 1 次調査 BTr ビット群	15
第 14 図 E 地区 2 次調査 3Tr SK01	16
第 15 図 E 地区 2 次調査 2Tr SU01	16
第 16 図 E 地区 2 次調査 2Tr SU02	17
第 17 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 全体図	18
第 18 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) FP01	19
第 19 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) FP03・FP04	19
第 20 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) FP05	20
第 21 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) SU03	20
第 22 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (1)	21
第 23 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (2)	22
第 24 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (3)	23
第 25 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (4)	24
第 26 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (5)	25
第 27 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (6)	26
第 28 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (7)	27
第 29 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (8)	28
第 30 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (9)	29
第 31 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (10)	30
第 32 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (11)	31
第 33 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (12)	32
第 34 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (13)	33
第 35 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ビット (14)	34
第 36 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (1)	35
第 37 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (2)	36
第 38 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (3)	37
第 39 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (4)	38
第 40 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (5)	39
第 41 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (6)	40
第 42 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (7)	41
第 43 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (8)	42
第 44 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (9)	43
第 45 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (10)	44
第 46 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (11)	45
第 47 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (12)	46
第 48 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (13)	47
第 49 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (14)	48

第 50 図 E 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (15)	49
第 51 図 E 地区 本調査区 (古墳時代以降) 全体図	50
第 52 図 E 地区 本調査区 (古墳時代以降) SD02	51
第 53 図 E 地区 本調査区 (古墳時代以降) SD01 (西平)	52
第 54 図 E 地区 本調査区 (古墳時代以降) SK02	53
第 55 図 E 地区 本調査区 (古墳時代以降) SD01 (東平)	53
第 56 図 E 地区 出土遺物実測図 (古墳時代)	54

第 4 章 天間沢遺跡 G 地区 (第 7 地区)

第 1 節 調査に至る経緯と経過	
第 57 図 G 地区 位置図	67
第 58 図 G 地区 トレンチ全体図	67
第 59 図 G 地区 トレンチセクション図	68
第 2 節 発掘調査の成果	
第 60 図 G 地区 SS01・SU01	68
第 61 図 G 地区 出土遺物実測図 (1)	69
第 62 図 G 地区 出土遺物実測図 (2)	70

第 5 章 天間沢遺跡 H 地区 (第 8 地区)

第 1 節 調査に至る経緯と経過	
第 63 図 H 地区 位置図	73
第 2 節 発掘調査の成果	
第 64 図 H 地区 トレンチ全体図、セクション図	74
第 65 図 H 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (1)	75
第 66 図 H 地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (2)	75
第 67 図 H 地区 SB01 平面図、セクション図	76
第 68 図 H 地区 SB01 セクション図	77
第 69 図 H 地区 出土遺物実測図 (古墳時代)	78

第 6 章 天間沢遺跡 I 地区 (第 9 地区)

第 70 図 I 地区 位置図	79
第 71 図 I 地区 トレンチ配置図、セクション図	79

第 7 章 天間沢遺跡 J 地区 (第 10 地区)

第 72 図 J 地区 位置図	81
第 73 図 J 地区 トレンチ配置図、セクション図	81

第 8 章 天間沢遺跡 K 地区 (第 11 地区)

第 1 節 調査に至る経緯と経過	
第 74 図 K 地区 位置図	83
第 2 節 発掘調査の成果	
第 75 図 K 地区 出土遺物実測図 (旧石器)	83
第 76 図 K 地区 調査区全体図	84
第 77 図 K 地区 SB22	85
第 78 図 K 地区 SB22 出土遺物実測図 (1)	86
第 79 図 K 地区 SB22 出土遺物実測図 (2)	87
第 80 図 K 地区 SB23	88
第 81 図 K 地区 SB23 9F	89
第 82 図 K 地区 SB23U1・SB23U2	89
第 83 図 K 地区 SB23 出土遺物実測図 (1)	89
第 84 図 K 地区 SB23 出土遺物実測図 (2)	90
第 85 図 K 地区 SB23 出土遺物実測図 (3)	91
第 86 図 K 地区 SB24	92
第 87 図 K 地区 SB24 出土遺物実測図 (1)	93
第 88 図 K 地区 SB24 出土遺物実測図 (2)	94
第 89 図 K 地区 SB24 出土遺物実測図 (3)	94
第 90 図 K 地区 SB25	96

第91図 K地区 SB25 出土遺物実測図 (1)	97
第92図 K地区 SB25 出土遺物実測図 (2)	98
第93図 K地区 SB26	99
第94図 K地区 SB26 出土遺物実測図 (1)	100
第95図 K地区 SB26 出土遺物実測図 (2)	100
第96図 K地区 SKA	101
第97図 K地区 SKA 出土遺物実測図 (1)	102
第98図 K地区 SKA 出土遺物実測図 (2)	103
第99図 K地区 SKA 出土遺物実測図 (3)	103
第100図 K地区 SKC	104
第101図 K地区 SKC 出土遺物実測図	104
第102図 K地区 SKG	104
第103図 K地区 SKG 出土遺物実測図	104
第104図 K地区 SKB・SKD・SKE・SKF	105
第105図 K地区 出土遺物実測図 (1)	106
第106図 K地区 出土遺物実測図 (2)	107
第107図 K地区 出土遺物実測図 (3)	108
第108図 K地区 出土遺物実測図 (4)	109
第109図 K地区 出土遺物実測図 (5)	110
第110図 K地区 出土遺物実測図 (6)	111
第111図 K地区 出土遺物実測図 (7)	112
第112図 K地区 出土遺物実測図 (8)	113

第9章 天間沢遺跡L地区 (第12地区)

第1節 調査に至る経緯と経過	
第113図 L地区 位置図	123
第2節 発掘調査の成果	
第114図 L地区 トレンチ配置図	124
第115図 L地区 トレンチ全体図、セクション図	125
第116図 L地区 SD01	126
第117図 L地区 SK63	126
第118図 L地区 SK64 ～ 67	127
第119図 L地区 SK63 ～ 67 土層注記	128
第120図 L地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (1)	128
第121図 L地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (2)	129
第122図 L地区 出土遺物実測図 (古墳時代)	129

第10章 天間沢遺跡M地区 (第13地区)

第1節 調査に至る経緯と経過	
第123図 M地区 位置図	131
第2節 発掘調査の成果	
第124図 M地区 トレンチ配置図	132
第125図 M地区 トレンチ全体図、セクション図	133
第126図 M地区 SK08 ～ 69	134

第11章 天間沢遺跡N地区 (第14地区)

第1節 調査に至る経緯と経過	
第127図 N地区 位置図	135
第2節 発掘調査の成果	
第128図 N地区 トレンチ配置図、セクション図	136
第129図 N地区 SB01	137
第130図 N地区 出土遺物 (縄文時代) (1)	138
第131図 N地区 出土遺物 (縄文時代) (2)	139
第132図 N地区 出土遺物 (古墳時代)	139

第12章 天間沢遺跡O地区 (第15地区)

第1節 調査に至る経緯と経過	
第133図 O地区 位置図	141
第134図 O地区 トレンチ配置図、セクション図	142
第135図 O地区 セクション図	143
第2節 発掘調査の成果	
第136図 O地区 SK01 ～ 02	144

第13章 天間沢遺跡P地区 (第16地区)

第1節 調査に至る経緯と経過	
第137図 P地区 位置図	145
第138図 P地区 トレンチ配置図、セクション図	146
第2節 発掘調査の成果	
第139図 P地区 SB01	147
第140図 P地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (1)	148
第141図 P地区 出土遺物実測図 (縄文時代) (2)	149
第142図 P地区 出土遺物実測図 (平安時代)	149

第14章 総括

第143図 縄文時代中期集落全体図	152
-------------------	-----

挿表目次

第1章 天間沢遺跡の概要

第1表 天間沢遺跡調査概要

写真図版目次

PL-1

1. E地区 (3次) 本調査区全景 (古墳時代以降、北から)
2. E地区 (3次) 本調査区全景 (縄文時代、北から)

PL-2

1. E地区 (2次) 2Tr 全景 (北西から)
2. E地区 (2次) 2Tr SU01 (268)
3. E地区 (2次) 2Tr SU02 (269)
4. E地区 (2次) 3Tr SK01
5. E地区 (3次) SD01 全景 (南西から)

PL-3

1. E地区 (3次) SD02 全景 (北から)
2. E地区 (3次) SD01 北端 (南から)
3. E地区 (3次) SD01 南端 (北東から)
4. E地区 (3次) SK02 (南西から)
5. E地区 (3次) Pd01・Pd02 (南西から)

PL-4

1. E地区 (3次) 縄文時代遺構全体 (EGr 以北、南から)
2. E地区 (3次) 縄文時代遺構全体 (DGr 以南、東から)

PL-5

1. E地区 (3次) 縄文時代全体 (EGr 以南、南東から)
2. E地区 (3次) FP01 (南から)

PL-6

1. E地区 (3次) SU03 (北から)
2. E地区 (3次) FP01 セクション (南西から)
3. E地区 (3次) FP03 セクション (南から)
4. E地区 (3次) FP03 (南西から)
5. E地区 (3次) FP04 セクション (西から)
6. E地区 (3次) FP04 (南西から)
7. E地区 (3次) FP05 セクション (東から)
8. E地区 (3次) FP05 (東から)

PL-7

1. E地区 (3次) 縄文時代全体 (GGr、東から)
2. E地区 (3次) G-4 Gr 遺物出土状況 (北西から)
3. E地区 (3次) F-2 Gr 遺物 (200) 出土状況
4. E地区 (3次) F-2 Gr 遺物出土状況
5. E地区 (3次) 作業の様子 (北から)

PL-8 ~ 12

E地区出土遺物

PL-13

1. G地区 1Tr 全景 (南西から)
2. G地区 SU01 遺物出土状況

G地区 出土遺物

PL-14

G地区 出土遺物

PL-15

1. H地区 1Tr SB01 (南東から)
2. H地区 1Tr 全景 (南から)
3. H地区 1Tr 東側セクション BB' (西から)
4. I地区 調査地全景 (南から)
5. I地区 1Tr 全景 (南から)

PL-16

H地区 出土遺物

1. J地区 調査地全景 (南から)
2. J地区 1Tr 全景 (南から)

PL-17

1. K地区 調査区全景 (南西から)
2. K地区 調査区南半 (東から)

第2章 天間沢遺跡 D地区 (第4地区)

第2表 D地区 遺構一覧表

8

第3章 天間沢遺跡 E地区 (第5地区)

第2節 発掘調査の成果

第3表 E地区 遺構一覧表

54

第4表 E地区 出土土器観察表

56

第5表 E地区 出土石器観察表

66

第4章 天間沢遺跡 G地区 (第7地区)

第2節 発掘調査の成果

第6表 G地区 遺構一覧表

71

第7表 G地区 出土土器観察表

71

第8表 G地区 出土石器観察表

71

第5章 天間沢遺跡 H地区 (第8地区)

第2節 発掘調査の成果

第9表 H地区 出土土器観察表

78

第10表 H地区 出土石器観察表

78

第8章 天間沢遺跡 K地区 (第11地区)

第2節 発掘調査の成果

第11表 K地区 遺構一覧表

113

第12表 K地区 出土土器観察表

114

第13表 K地区 出土石器観察表

121

第9章 天間沢遺跡 L地区 (第12地区)

第2節 発掘調査の成果

第14表 L地区 遺構一覧表

130

第15表 L地区 出土土器観察表

130

第16表 L地区 出土石器観察表

130

第10章 天間沢遺跡 M地区 (第13地区)

第2節 発掘調査の成果

第17表 M地区 遺構一覧表

134

第11章 天間沢遺跡 N地区 (第14地区)

第2節 発掘調査の成果

第18表 N地区 出土土器観察表

140

第19表 N地区 出土石器観察表

140

第13章 天間沢遺跡 P地区 (第16地区)

第2節 発掘調査の成果

第20表 P地区 出土土器観察表

150

第21表 P地区 出土石器観察表

150

PL-18

1. K 地区 調査区北半（東から）
2. K 地区 SB22 全景（南東から）

PL-19

1. K 地区 SB22 伊（南から）
2. K 地区 SB22 石器（181・182・184）出土状況
3. K 地区 SB23 全景（東から）
4. K 地区 SB23 伊 セクション（東から）
5. K 地区 SB23 伊（12・13・22）（東から）

PL-20

1. K 地区 SB23U1（14）・SB23U2（15）（北東から）
2. K 地区 SB24 全景（東から）

PL-21

1. K 地区 SB24 遺物（36・38）出土状況（東から）
2. K 地区 SB24 遺物（48）出土状況（南西から）
3. K 地区 SB25 全景（西から）
4. K 地区 SB25 遺物（57）出土状況
5. K 地区 SB25 遺物（65・81）出土状況

PL-22

1. K 地区 SB26 全景（西から）
2. K 地区 SKC（103）
3. K 地区 SKA セクション（南から）
4. K 地区 SKA（東から）
5. K 地区 SKAU2（99）（南西から）
6. K 地区 SKAU3（100）（西から）
7. K 地区 SKG（104）（北から）
8. K 地区 調査地遠景（南西から）

PL-23 ～ 37

K 地区 出土遺物

PL-38

1. L 地区 1Tr・拡張区全景（北東から）
2. L 地区 2Tr SD01 全景（南東から）
3. L 地区 SK63 南北セクション（西から）
4. L 地区 SK63（西から）

PL-39

L 地区 出土遺物

PL-40

1. M 地区 1Tr 全景（南から）
2. M 地区 SK68・69 南北セクション西壁（東から）
3. M 地区 SK68・69（東から）
4. N 地区 調査の様子（東から）
5. N 地区 3Tr 東西セクション北壁（南から）

PL-41

1. N 地区 SB01（東から）
2. N 地区 SB01 セクション（南東から）
3. N 地区 SB01 掘り方（東から）
4. N 地区 SB01P16（伊⁹）（南から）
5. N 地区 SB01 高坪（23）出土状況

PL-42

N 地区 出土遺物

PL-43

1. O 地区 1Tr 全景（南から）
2. O 地区 2Tr 全景（南から）
3. O 地区 5Tr 全景（東から）
4. O 地区 2Tr 南北セクション東壁（西から）
5. O 地区 5Tr 東西セクション北壁（南から）

PL-44

1. P 地区 調査地全景（西から）
2. P 地区 SB01（北東から）

PL-45

1. P 地区 SB01 セクション（東から）
2. P 地区 SB01 完壁（北東から）
3. P 地区 1Tr 全景（北西から）
4. P 地区 1Tr 東西セクション北壁（南から）
5. P 地区 2Tr 全景（北東から）
6. P 地区 3Tr 全景（南東から）
7. P 地区 4Tr 全景（北西から）
8. P 地区 4Tr 東西セクション北壁（西から）

PL-46

P 地区 出土遺物

第1章 天間沢遺跡の概要

天間沢遺跡は、世界遺産である富士山の南西山麓域に立地し、開析によって形成された尾根上の丘陵部に営まれた遺跡である。富士山は、数十万年前の更新世に活動を開始し、現在も活動を継続中の成層火山であるが、天間沢遺跡の最下層は古富士泥流と呼ばれる溶岩礫およびその砕屑であり、人類の生活跡が確認されるのは、この泥流より上位に堆積した火山灰土からである。この古富士泥流は、放射性炭素 C14 測定で約 3 万～1.5 万 yrBP の所産とされているので、ほぼ立川ローム層および愛鷹上部ローム層と同じ、古富士火山の噴火活動による生成と考えられる。天間沢遺跡では、この泥流層直上に黄褐色ローム層が堆積し、その上に富士黒土層 (FB)、栗色土層 (Ku) と、愛鷹上部ローム標準土層に対応する堆積が確認できる。そのため、この黄褐色ローム層は、中位に上層と下層を分けるスコリアが確認される場合もあることから、愛鷹上部ローム層の休場層 (YL) 相当層と考えられる。なお、確定することはできないが、活発な火山活動と関連づけると、この泥流は愛鷹上部ローム第1スコリア層 (Sc1) と同じ成因によるものかもしれない。

この黄褐色ローム層からは遺物は出土していないが、K 地区に後期旧石器時代の遺物であるナイフ形石器が確認できるので、天間沢遺跡の最初の住人は後期旧石器時代人と考えられる。

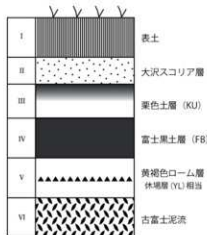
完新世になって、P 地区と Q 地区の富士黒土層からは縄文時代早期後葉の遺物が出土し、天間沢遺跡のほぼ全域で、栗色土層中で縄文時代中期から後期にかけての遺構と遺物が検出される。特に縄文時代中期後葉に最盛期を迎えている。天間沢遺跡は、近隣の縄文時代中期の遺跡として著名な富士宮市の国指定史跡千居遺跡や滝戸遺跡、沼津市の大芝原遺跡などとともに、富士・愛鷹山麓の拠点集落として営まれていたと考えられる。

その後も、栗色土層を切り込む形で、黒色土を覆土とする古墳時代前期の建物などの遺構、遺物が検出され、さらに奈良・平安時代から中世までの遺物

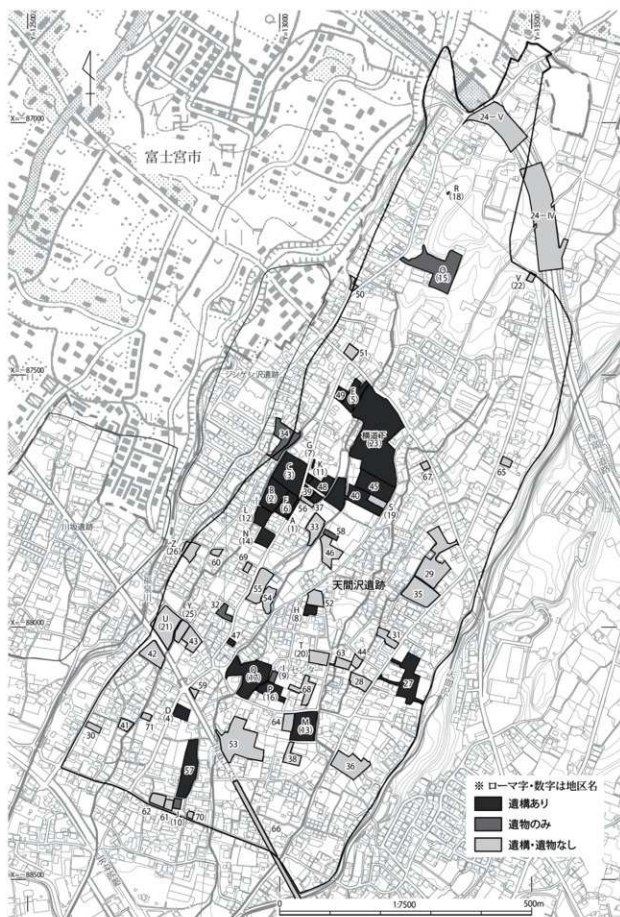
が出土していることから、天間沢遺跡は更新世末期から中世まで、人々の生活が営まれていることがわかってきている。

天間沢遺跡が発見されたのは昭和 2～3 年 (1927～28 年) のことで、富士宮市域を中心に遺跡踏査・遺物採集を行っていた岳南考古学会の佐野武勇氏が、旧鷹岡村天間の畑を踏査し、多数の縄文土器・石器を確認したことによる。その後も多くの研究者や学生により遺跡踏査が行われたが、小規模ながら初めての発掘調査 (第 6 地区-1 次、旧: 第 1 次調査) が行われたのは、発見から 30 年以上が経過した昭和 35 年のことであった。

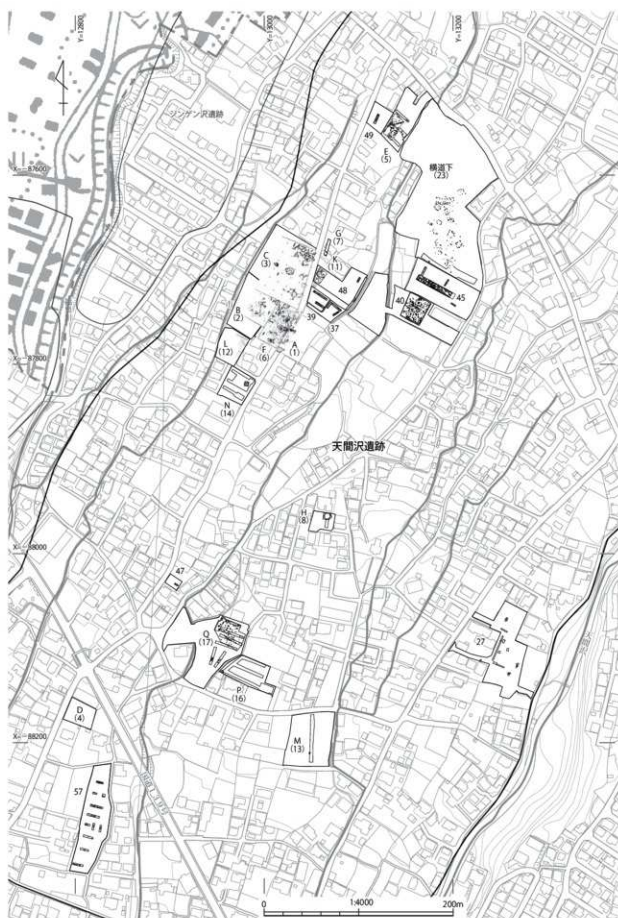
開発に伴う発掘調査が相次いだのは、昭和 45 年から昭和 47 年にかけてのことである。道路建設に伴う第 1 地区 (旧: 第 2 次調査 A 地区)、市立幼稚園建設に伴う第 2 地区 (旧: 第 3 次調査 B 地区)、市営団地建設に伴う第 3 地区 (旧: 第 4 次調査 C 地区)、ボーリング場建設に伴う第 23 地区-1 次 (旧: 第 5 次調査 横道下地区) と、3 年間という短期間に 4 次に渡る緊急発掘調査が実施された。近接した地区で実施されたこれらの調査では、縄文時代中期・後期および古墳時代前期の集落が検出され、とりわけ縄文時代中期の遺物出土量が際立っていたことから、天間沢遺跡は当地域における当該期中核的な遺跡と捉えられることとなった。



第1図 天間沢遺跡 標準土層



第2図 天間沢遺跡 調査履歴図



第3図 天間沢遺跡 遺構分布状況図

第1表 天間沢遺跡調査履歴

調査年度	調査番号	地区・次 (旧地区名)	調査種類	調査期間	所在地 調査の契機	対象(㎡) 調査(㎡)	年代	設備	遺物	備考
S35		6地区-1次 (第1次 F地区の一部)	学習調査	1960****	天間 1048 - 1 学研調査	100	縄文中期	配石遺構		
S44		1地区 (第2次 A地区)	調査	19700123 ～ 19700405	天間 1048 外 調査高島天間沢建設	300	古墳初期	配石遺構 建物2	縄文土器・石器 土師器	2
S46		2地区 (第3次 B地区)	本 調査	19710910 ～ 19711028	天間 1047 - 1 市立天間沢視察建設	2,600	縄文中期	配石遺構・土坑5・建物1	縄文土器・石器	2
S46		3地区 (第4次 C地区)	本 調査	19711224 ～ 19720627	天間 1045 - 1 外 調査市立天間沢建設	3,400	縄文中期 古墳初期	建物11・土坑15 建物2	縄文土器・石器 土師器	2
S46		23地区-1次 (第5次 調査下地区第1次)	調査	19711224 ～ 19720215	天間 905 グリーンランド建設	500	縄文中～後期 建物6	配石遺構・建物1	縄文土器・石器 土師器	2
S47		4地区 (第6次 D地区)	試掘	19730325 ～ 19730329	天間 577 - 1 資料館建設		縄文中期	ビット状遺構	縄文土器 土師器	本書
S47		5地区-1次 (第6次 E地区)	試掘	19721224 ～ 19721229	天間 988 - 1 資料館建設	50	縄文中期 古墳初期	ビット状遺構 溝状遺構	縄文土器	本書
S53		6地区-2次 (第7次 F地区)	試掘	19781002 ～ 19781006	天間 1048 - 1 市立天間沢建設	1,053	縄文中期	土坑30・建物2 石石遺構4	縄文土器・石器	1 2
S54		24地区 (第1～V地区)	試掘	19791006 ～ 19791116	天間 916 調査市立天間沢建設		縄文 弥生	なし	縄文土器・石器・有孔磨製 石製品	3
S58		17地区-1次 (Q地区)	試掘	19830418 ～ 19830419	天間 1106 - 1 天間公民館建設	1,142 125	なし	なし	なし	
S58		7地区 (第8次 G地区)	試掘	19831024 ～ 19831028	天間 1045 - 5 資料館建設	50	縄文 古墳	配石遺構1・建物1・土坑2 ビット2	縄文土器	本書
S58		8地区 (第8次 H地区)	試掘	19831107 ～ 19831112	天間 1130 - 1 資料館建設	50	古墳	壁状建物1		本書
S58		9地区 (第8次 I地区)	試掘	19831114 ～ 19831117	天間 1121 資料館建設	50	縄文	なし	縄文土器	本書
S58		10地区 (第8次 J地区)	試掘	19831118 ～ 19831122	天間 528・529 資料館建設	50	弥生前期	なし	土師器・車輪器	本書
S59		11地区 (K地区)	試掘	19841015 ～ 19841031	天間 1011 - 1 市立天間沢建設	200	縄文	建物5・土坑	縄文土器	本書
S61		12地区 (L地区)	試掘	19860905 ～ 19860910	天間 1062 - 3 市立天間沢建設	750 300	縄文 古墳古墳	土坑5 溝状遺構1	縄文土器・磨製石・打製石 土師器	本書
S62		13地区 (M地区)	試掘	19870511 ～ 19870515	天間 1312 - 1 外 市立天間沢建設	2,579 150	縄文 土坑2	なし	(周辺から)縄文土器・ 土師器出土	本書
S62		23地区-2次 (調査下地区第2次)	試掘	19870907 ～ 19870921	天間 999 外 市立天間沢建設	7,000	縄文	建物1・土坑1 配石遺構1	縄文土器・石片 土師器	
H01		14地区 (N地区)	試掘	19890605 ～ 19890622	天間 1061 - 1 外 市立天間沢建設	968 367	縄文 古墳初期	壁状建物1・ビット1	縄文土器・石器・石片 土師器	本書
H01		15地区 (O地区)	試掘	19890605 ～ 19890613	天間 1096 - 2 外 調査市立天間沢建設	4,758 660	縄文 中・近世	土坑2	縄文土器片	本書
H03		16地区 (P地区)	試掘	19911202 ～ 19911211	天間 1120 - 4 天間公民館建設	1,329 495	縄文 古墳	壁状建物	縄文土器・磨製石 土師器	本書
H03		17地区-2次 (Q地区)	試掘	19911219 ～ 19911219	天間 1115 - 1 外 天間公民館建設	648	なし	なし	なし	
H03		18地区 (R地区)	試掘	19920316 ～ 19920319	天間 1943 - 1 市立天間沢建設	144 22	なし	なし	なし	
H04		19地区 (S地区)	試掘	19920708 ～ 19920710	天間 1001 - 4 共同住宅建設	905 65	なし	なし	なし	
H04		20地区 (T地区)	試掘	19911013 ～ 19921026	天間 1127 - 1 外 共同住宅建設	960 312	なし	なし	なし	
H04		21地区 (U地区)	試掘	19921020 ～ 19921027	天間 501 - 1 音楽・事務所建設	2,915 184	なし	なし	なし	
H04		22地区 (V地区)	試掘	19930325	天間 1785 - 21 市立天間沢建設	144 40	なし	なし	なし	
H05		5地区-2次 (第2地区)	試掘	19930420 ～ 19930428	天間 988 - 8 外 市立天間沢建設	1,274 176	縄文 古墳	土坑・ビット	縄文土器	本書
H05		5地区-3次 (第3地区)	調査	19930524 ～ 19930705	天間 988 - 8 外 共同住宅建設	1,274 300	縄文 古墳	土坑・中継・建物 ビット状遺構・溝状遺構	縄文土器・石器	本書
H14		17地区-3次 (Q地区-1次)	試掘	20020508 ～ 20020520	天間 1117 - 1 外 天間公民館建設	1,633 365	縄文 古墳	溝壁	縄文土器・石器 土師器	4
H14		17地区-4次 (Q地区-2次)	本 調査	20030527 ～ 20020701	天間 1117 - 1 外 天間公民館建設	800 683	縄文 古墳	土坑	縄文土器 土師器	
H14		20地区 (V地区)	試掘	20020823	天間 509 - 1 外 共同住宅建設	635 90	なし	なし	なし	4
H17		26地区 (Z地区)	試掘	20060302	天間 937 - 1 市立天間沢建設	839 26	なし	なし	なし	5
H19 H19-22		27地区-1次	試掘	20080118 ～ 20080326	天間 1218 - 1 外 市立天間沢建設	3,266 87	古墳	壁状建物2・溝状遺構1	土師器	6
H20 H20-09		27地区-2次	試掘	20081107	天間 1218 - 1 外 市立天間沢建設	2,665 312	なし	なし	なし	4
H20 H20-02		28地区	試掘	20080521 ～ 20080522	天間 1167 - 1 外 集合住宅建設	995 56	なし	なし	なし	4
H20 H20-11		29地区	試掘	20081215 ～ 20081222	天間 1189 - 1 外 市立天間沢建設	4,000 209	なし	なし	なし	4
H21 H21-01		27地区-3次	試掘	20090406	天間 1242 外 集合住宅建設	1,866 13	なし	なし	なし	7
H22 H22-27		30地区	試掘	20110126	天間 625 - 10 外 不動産売買	342 8	なし	なし	なし	8
H23 H23-02		31地区	試掘	20110411	天間 1168 - 6 外 集合住宅建設	635 14	なし	なし	なし	8
H23 H23-08		32地区	試掘	20110603	天間 1096 - 1 外 集合住宅建設	628 19	縄文	なし	土器	8
H24 H24-15		33地区	確認	20121129	天間 1050 - 1 の一部 集合住宅新築	896 32	なし	なし	なし	9
H24 H24-16		34地区	確認	20121205 ～ 20121206	天間 964 - 1 外 及び市立天間沢 市立天間沢建設	2,158 72	縄文	なし	縄文土器	9

調査年度	調査番号	地区・次 (旧地区名)	調査場所	調査期間	調査内容 調査の経緯	計畧(㎡) 調査(㎡)	時代	遺構	遺物	報告書
H25	H25-03	35 地区	確認	20130418	天間 1174 - 3 外 宅地造成	1585 38		なし	なし	9
H25	H25-17	36 地区	確認	20130609 ～ 20130911	天間 1263 外 宅地造成	2,178 82		なし	なし	9
H25	H25-20	37 地区	確認	20131001 ～ 20131004	天間 1010 - 5 個人住宅建設	398 46	縄文	竪穴建物・ピット	縄文土器、石器	9
H25	H25-23	38 地区	確認	20131029	天間 1317 - 1 外 共同住宅建設	965 9		なし	なし	9
H25	H25-31	39 地区	確認	20140117 ～ 20140119	天間 1010 - 6 個人住宅建設	353 53	縄文	土坑・ピット	縄文土器、石器	9
H26	H26-12	40 地区-1 次	確認	20140722 ～ 20140728	天間 1001-1 外 長尾住宅建設	3,517 99	縄文	竪穴建物・ピット	縄文土器	10
H26	H26-15	40 地区-2 次	確認	20140818 ～ 20140821	天間 1001-1 外 長尾住宅建設	3,517 65	縄文	ピット	縄文土器	10
H26	H26-39	41 地区	確認	20150126	天間 615-1 外 不動産売買	507 9		なし	なし	11
H27	H27-03	42 地区	確認	20150417	天間 600 番 1 外 店舗建設	1,510 23		なし	なし	11
H27	H27-101	40 地区-3 次	本 調査	20150511 ～ 20150717	天間 1001 番 1 外 長尾新築	3,517 892	縄文	竪穴建物・溝 ・土坑・ピット	縄文土器・石器	10
H28	H28-25	43 地区	確認	20161114	天間 900 番 1 外 個人住宅及び集合住宅建設	996 7		なし	なし	12
H28	H28-27	44 地区	確認	20161121	天間 1159 番 1 外 集合住宅建設	454 12		なし	なし	12
H29	H29-05	43 地区-1 次	確認	20170509 ～ 20170510	天間 1000-1 宅地分譲	2,437 47	縄文	竪穴建物・土坑・ピット	縄文土器・石器	13
H29	H29-102	45 地区-2 次	本 調査	20170619 ～ 20170810	天間 1000-1 宅地分譲	272	縄文	竪穴建物・溝 ・土坑・ピット	縄文土器・石器	13
H29	H29-09	46 地区	確認	20170628 ～ 20170629	天間 1175-1 店舗建設	1,415 25		なし	なし	14
H29	H29-12	47 地区	確認	20170703	天間 1009-12 不動産売買	165 6	縄文	ピット	縄文土器・須崎石	14
H29	H29-15	48 地区	確認	20170720 ～ 20170721	天間 1011-1 外 宅地造成	1,455 30	縄文	ピット	縄文土器	14
H29	H29-16	49 地区	確認	20170817 ～ 20170818	天間 988-15 宅地造成	489 23	縄文	ピット・溝・不明遺構	縄文土器	14
H30	H30-24	50 地区-1 次	確認	20180724	天間 1809-14 個人住宅建設	276,000 4,429		なし	なし	15
H30	H30-25	51 地区-1 次	確認	20180725	天間 1884-1-1 住宅住宅建設	485,120 13,530		なし	なし	15
H30	H30-35	52 地区-1 次	確認	20180830	天間 1130-2 個人住宅建設	263,000 4,845		なし	なし	15
H30	H30-39	53 地区-1 次	確認	20180906	天間 569 番 1 18.5 店舗建設	4,801,740 56,246		なし	なし	15
H30	H30-60	54 地区-1 次	確認	20190108	天間 1079 12.5 不動産売買	872,410 5,143		なし	なし	15
H31	H31-31	40 地区-4 次	確認	20190826	天間 1001-6 個人住宅建設	321,000 12,693		なし	なし	16
H31	H31-48	52 地区-2 次	確認	20191105	天間 1130-2 個人住宅建設	263,000 5,687		なし	なし	16
H31	H31-03	55 地区-1 次	確認	20190417 ～ 20190418	天間 1075-1 外 宅地分譲品成	1,864,000 91,819		なし	なし	16
H31	H31-11	56 地区-1 次	確認	20190520	天間 1010-1 宅地分譲	260,000 10,552		なし	なし	16
H31	H31-34	57 地区-1 次	確認	20190909 ～ 20190912	天間 529-1 12.5 宅地分譲	4,200,000 173,008	縄文 奈良	土坑・ピット 竪穴建物・溝・土坑 ・ピット	土器・石器	16
H31	H31-39	58 地区-1 次	確認	20190919	天間 1137-1 個人農地改良	350,000 26,279	縄文	なし	土器	16
H31	H31-52	59 地区-1 次	確認	20191212	天間 584-13 不動産売買	227,090 4,078		なし	なし	16
H31	H31-54	60 地区-1 次	確認	20191216 ～ 20191217	天間 1068-2 個人住宅建設	198,440 4,781		なし	なし	16
R02	R02-09	17 地区-5 次	確認	20200422 ～ 20200423	天間 1115-1 新設性排水構造物	100,000 10,331		なし	なし	17
R02	R02-25	61 地区-1 次	確認	20200722	天間 529-1 倉庫新築	345,000 15,035		なし	なし	17
R02	R02-31	62 地区-1 次	確認	20200805	天間 528 不動産売買	293,000 17,113		なし	なし	17
R02	R02-33	63 地区-1 次	確認	20200827	天間 1157-3 不動産売買	562,150 5,541		なし	なし	17
R02	R02-49	64 地区-1 次	確認	20201014 ～ 20201016	天間 1120-5 個人住宅建設	702,000 16,098		なし	なし	17
R03	R03-32	65 地区-1 次	確認	20211014	天間 1812-4 店舗建設	297,830 3,144		なし	なし	18
R03	R03-15	66 地区-1 次	確認	20210820	天間 529-1 下地建設	56,280 8,000		なし	なし	18
R03	R03-33	67 地区-1 次	確認	20211115	天間 1208-1 個人住宅建設	255,410 6,314		なし	なし	18
R03	R03-39	68 地区-1 次	確認	20211124 ～ 20211125	天間 1124-1 不動産売買	1,286,14 25,875		なし	なし	18
R03	R03-52	69 地区-1 次	確認	20220203	天間 1072-7 18.5 土坑改良	230,000 8,719		なし	なし	18
R04	R04-17	45 地区-3 次	確認	20220616	天間 1000 番 1 個人住宅建設	204,790 3,372		なし	なし	19
R04	R04-101	48 地区-2 次	本 調査	20220801	天間 1011-7 個人住宅宅付併存化増設	4,643	縄文	なし	土器・石器	19
R04	R04-01	70 地区-1 次	確認	20220405	天間 522-18 外 不動産売買	69,020 6,330		なし	なし	19
R04	R04-40	71 地区-1 次	確認	20221121	天間 550 番 3 個人住宅建設	195,820 22,030		なし	なし	19

- 報告書 1 『天間沢遺跡第7次（F地区）発掘調査概報』（1979）
- 2 『天間沢遺跡1 遺構編』（1984）・『天間沢遺跡Ⅱ 遺物・考釈編』（1985）
- 3 『西富士遺跡（富士地区）・岳南広域都市計画道路田子湖臨海線埋蔵文化財発掘調査報告書』『天間地区』（1981）
- 4 『平成14・20年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』（2010）
- 5 『平成17・18年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』（2008）
- 6 『平成15・19年度富士市内遺跡発掘調査報告書』（2006）
- 7 『平成21年度 富士市内遺跡発掘調査報告書』（2011）
- 8 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成22・23年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第54集（2013）
- 9 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成24・25年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第57集（2015）
- 10 『天間沢遺跡』富士市埋蔵文化財調査報告 第58集（2016）
- 11 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成26・27年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第60集（2017）
- 12 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成28年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第62集（2017）
- 13 『天間沢遺跡 第45地区』富士市埋蔵文化財調査報告 第65集（2019）
- 14 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成29年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第66集（2019）
- 15 『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成30年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第67集（2019）
- 16 『富士市内遺跡発掘調査報告書—令和元年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第70集（2021）
- 17 『富士市内遺跡発掘調査報告書—令和2年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第73集（2022）
- 18 『富士市内遺跡発掘調査報告書—令和3年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第76集（2023）
- 19 『富士市内遺跡発掘調査報告書—令和4年度—』富士市埋蔵文化財調査報告 第79集（2024）

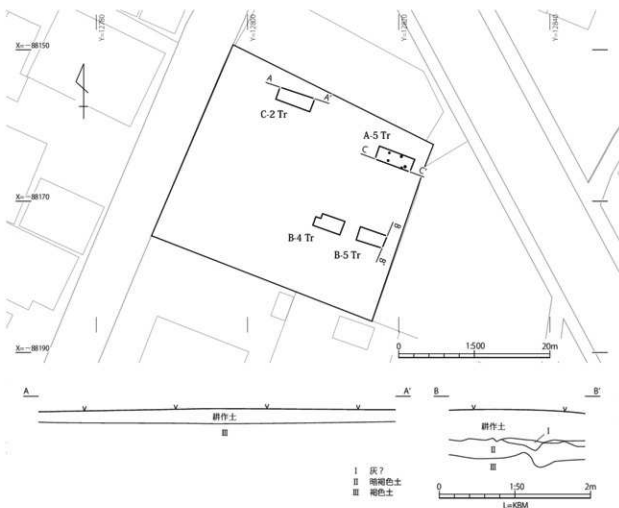
第2章 天間沢遺跡D地区(第4地区)

昭和47年度、富士市教育委員会では、天間沢遺跡の保護のために遺跡範囲の確認が急務となったことから、第1地区から南へ450 mほどの第4地区(天間577-1、旧:第6次調査D地区)と北へ250 mほどの第5地区(天間988-1、旧:第6次調査E地区)において遺跡範囲確認のための調査を実施することとなった。

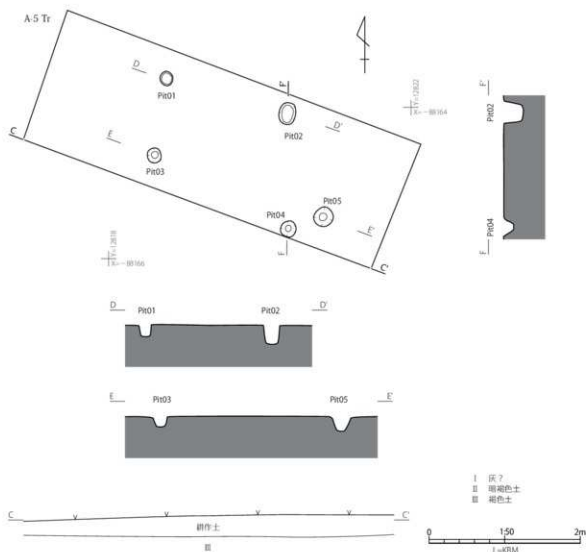
D地区の調査は昭和48年3月25日から同年3月29日にかけて行われた。調査地に4箇所のトレンチを掘削したところ、調査地南西に設定したA-5Trにおいて、地表下25cm前後から律令期と見られるビット5基(Pi01~05)を検出した。図化できる出土遺物はなかった。



第4図 D地区 位置図



第5図 D地区 トレンチ配置図、セクション図



第6図 D地区 A-5Tr 平面図、セクション図、エレベーション図

第2表 D地区 遺構一覧表

遺構種別	遺構名	検出位置	時代	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	土層	切り合い (古一新)	遺物の出土	備考
Pit	Pit01	A-5Tr	律令期	19	17	15	正四角形	平底	-	-	-	
Pit	Pit02	A-5Tr	律令期	29	22	24	楕円形	平底	-	-	-	
Pit	Pit03	A-5Tr	律令期	19	19	12	正四角形	平底	-	-	-	
Pit	Pit04	A-5Tr	律令期	21	20	9	正四角形	平底	-	-	-	
Pit	Pit05	A-5Tr	律令期	26	26	15	正四角形	平底	-	-	-	

第3章 天間沢遺跡E地区（第5地区）

第1節 調査に至る経緯と経過

1次調査に至る経緯

昭和47年度、富士市教育委員会では、天間沢遺跡の保護のために遺跡範囲の確認が急務となったことから、第1地区から南へ450mほどの第4地区（天間577-1、旧：第6次調査D地区）と北へ250mほどの第5地区（天間988-1、旧：第6次調査E地区）において遺跡範囲確認のための調査を実施することとなった。

1次調査の経過

E地区の調査（1次調査と位置づける）は昭和47年12月24日から同年12月29日にかけて行われた。

尾根方向に長い調査地に2本のトレンチ（ATr・BTr）を設定し掘削したところ、尾根を斜めに走る古墳時代の溝状遺構（SD）と縄文時代とみられるビット群を検出した。



第7図 E地区 位置図

文化振興課職員による確認調査を実施することとなった。昭和47年度の調査を1次調査とし、今回の調査を2次調査と位置づける。

2次調査の経過

2次調査は平成5年4月20日から4月28日にかけて実施した。調査地の南側に東西方向のトレンチを3本（1～3Tr）、北側に南北方向のトレンチを1本（4Tr）設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

その結果、1Trで溝状遺構（SD）1条、2Trで埋蔵土坑2基（SU01（A）～02（B））と覆土に焼土が入る土坑1基（FP1）、3Trで土坑1基（SK01）を検出した。調査地の南側には縄文時代中期・後期の包含層が良く残存しているとみられるが、北側部分では表土下が黄褐色ローム層であり、古墳時代および縄文時代の包含層がすでに削平されている状況が確認された。

調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した（平成5年5月25日付け、富教文第45号）。

2次調査に至る経緯

平成5年、事業者（個人）は富士市天間988番地8外（1,274㎡）において、共同住宅敷地造成工事を計画した。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置し、昭和47年に遺跡範囲確認のための調査が実施されたE地区にあたる。平成5年3月4日、事業者から文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。富士市教育委員会文化振興課は3月8日、届出を静岡県教育委員会に進達し（富教文第337号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった（平成5年3月26日付け、教文第3-144号）。

富士市教育委員会は文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し（平成5年4月15日付け、富教文第13号）、富士市教育委員会

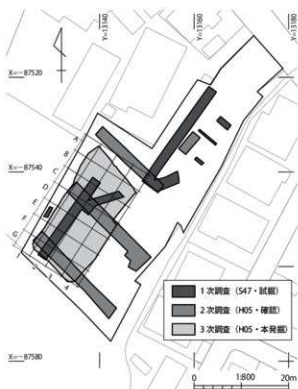
3 次調査に至る経緯

2 次調査の結果を受けて、共同住宅建物建設予定地である調査地南側部分について本発掘調査（3 次調査）を実施することとなり、富士市教育委員会は文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出した。また、平成 5 年 5 月 21 日、事業者と富士市教育委員会との間で「天間沢遺跡（E-2）埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」を取り交わした。

3 次調査の経過

3 次調査は平成 5 年 5 月 24 日から 7 月 5 日にかけて実施した。調査地南側の建物建設予定地を本調査区（約 300 m²）とし、任意の 4 m グリッドを設定した。グリッドの軸は座標北に対して 32.7° 東に傾き（N-32.7° -E）、北から南へ A ～ G、西から東へ 1 ～ 4 の区画記号を振っている。

重機により表土を除去した後、栗色土層から黄褐色ローム上層まで人力により徐々に掘り下げて、遺構・遺物の検出につとめた。



第 8 図 E 地区

確認調査トレンチおよび本調査区配置図

その結果、古墳時代以降の遺構として溝状遺構 2 条（SD01 ～ 02）とピット 2 基（Pit01 ～ 02）、土坑 1 基（SK02）を、縄文時代中期・後期の遺構として炉跡 4 基（FP01・03 ～ 05）、埋塞土坑 1 基（SU03）、ピット 93 基（Pit03 ～ 97）、土坑 31 基（SK03 ～ 34）を検出・完掘し、記録保存を行った。

遺物はコンテナ 5 箱分の土器・石器が出土した。遺物については、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」（平成 5 年 7 月 9 日付け、富教文第 112 号）を、静岡県教育委員会宛に「埋蔵文化財保管証」（平成 5 年 7 月 9 日付け、富教文第 113 号）を提出し、静岡県教育委員会から埋蔵物の文化財認定を受けている（平成 5 年 9 月 24 日付け、教文第 7-14 号）。

発掘業務の完了について、事業者には「業務完了報告」を提出し（平成 5 年 7 月 7 日付け、富教文第 106 号）、発掘調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した（平成 5 年 7 月 9 日付け、富教文第 114 号）。

調査の体制

2・3 次調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	山本 厚
		教育次長	小山 哲雄
	文化振興課	課長	小長谷秀夫
		課長補佐	若林 富彦
	文化財係	係長	佐野 誠一
調査担当		主査	渡井 義彦
		主事	久松 義昭

第2節 発掘調査の成果

1次調査の成果

溝状遺構(SD)は、北東から南西に延びる方向にあわせてトレンチを拡張・追加した結果、ATr西からBTr南東まで、少なくとも約34.5mの長さの溝となることが推定される。このSDは3次調査で検出されたSD01と同一遺構である。

BTr北東では多くの礫が出土したようである。

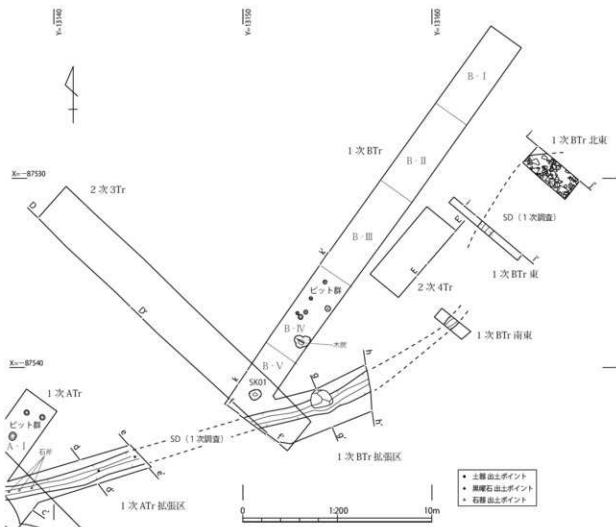
BTr-IV区で検出されたビット群は径17～30cmの正円形を呈するものが多く、そのうち3基は110cmほどの間隔で1列に並んでいるが、それ以外に規則的な配置を成すものはない。これらのビット群の南に位置する径80cmほどの不整形のビットでは、底から棒状の木炭が出土している。

2次調査の成果

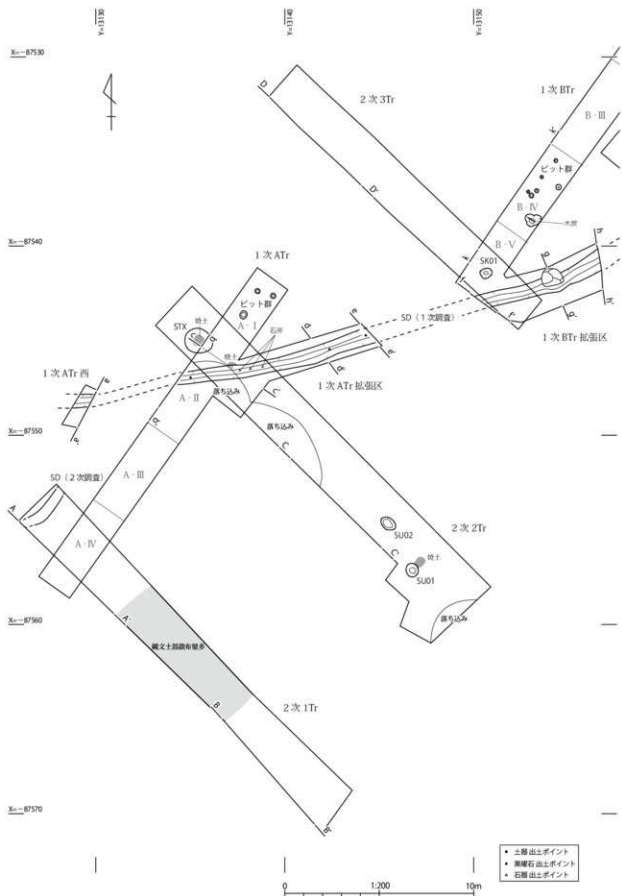
ITr西端において溝状遺構(SD)1条を検出した。この溝状遺構はこの後実施される本発掘調査(3次調査)で検出されるSD02と同一遺構である。また、ITr中央付近では縄文土器が多く出土する範囲が認められた。

2Trでは埋甕土坑2基(SU01～02)を検出・完掘した。SU01(SUA)は、堀之内式期の粗製深鉢268の土器が伴っている。SU02(SUB)は、堀之内式期の粗製深鉢269の土器が伴っている。

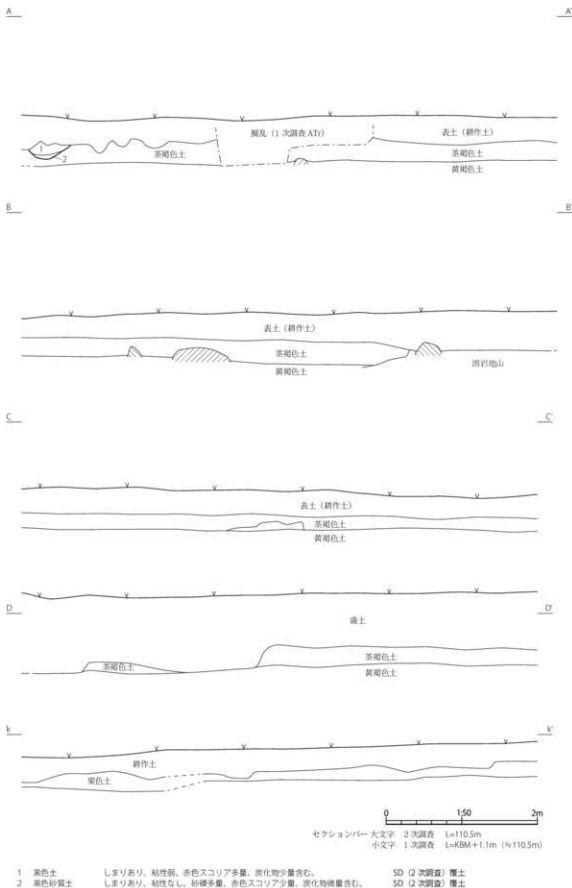
SU01は長軸72cm、短軸65cm、検出面からの深さ35cmの正円形の土坑に、底部のない縄文土器深鉢が正位置で埋納されていた。断面観察によれば、



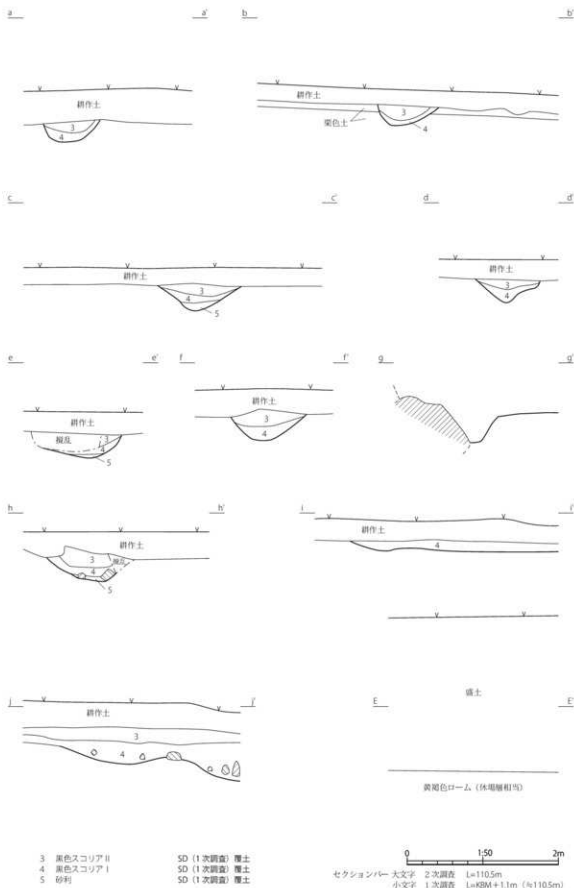
第9図 E地区 1・2次調査トレンチ全体図(北部)



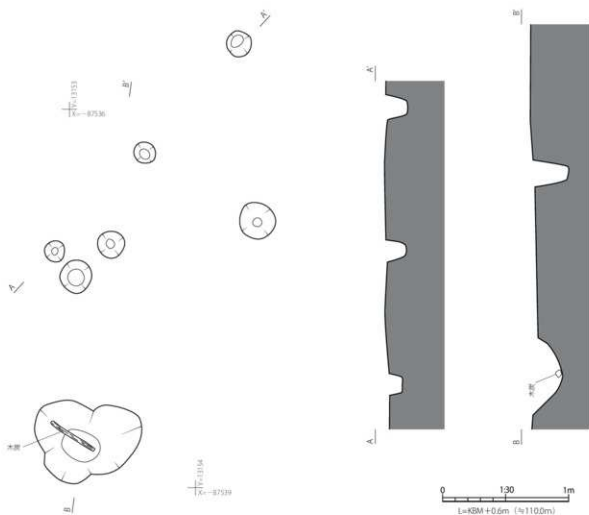
第10図 E地区 1・2次調査トレンチ全体図(南部)



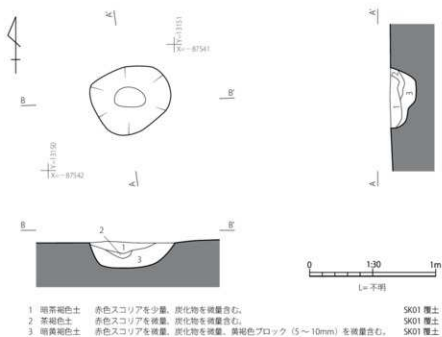
第11図 E地区 1・2次調査トレンチセクション図(1)



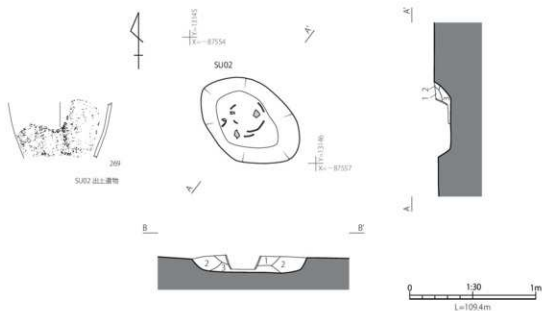
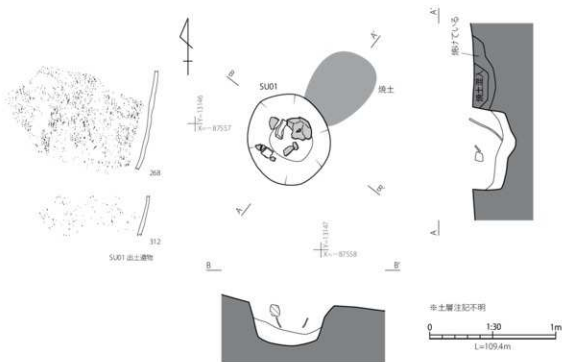
第12図 E地区 1・2次調査トレンチセクション図(2)



第13図 E地区 1次調査BTrピット群



第14図 E地区 2次調査3Tr SK01



- | | | |
|---------|---------------------------------|---------|
| 1 黒褐色土 | しまり良好、粘性あり。赤色スコリアを微量、炭化物粒を微量含む。 | SU02 覆土 |
| 2 暗茶褐色土 | しまり良好、粘性あり。赤色スコリアを少量、炭化物粒を微量含む。 | SU02 覆土 |
| 3 茶褐色土 | しまり良好、粘性あり。赤色スコリアを微量、黄褐色土を少量含む。 | SU02 覆土 |

SU01の北東に覆土に焼土を含む何らかのくぼみがあったようだが、詳細は不明である。SU02は長軸90cm、短軸61cmの楕円形の土坑から深鉢の下部が正位置で出土した。残存する深さが13cmであり、上半部分は削平されて失われたものとみられる。2Tr西端で検出された覆土に焼土が入る土坑(STX)は、3次調査の「第1号炉跡(FP01)」と同一遺構である。

3Trでは覆土に微量の炭化物を含む土坑1基(SK01)を検出・完掘した。楕円形・平底で、長軸62cm、短軸52cm、深さ20cmを測る。

3次調査の成果

・縄文時代の遺構

炉跡4基(FP01・03～05)、埋甕土坑1基(SU03)、ピット93基(Pi03～97)、土坑31基(SK03～34)を検出・完掘した。ピット・土坑の規模等は第3表に示す。

炉跡

FP01は本調査区C-2・D-2グリッドに位置する。2次調査2Tr西端で検出された覆土に焼土が入る土坑(STX)と同一遺構である。平面形は一部が隅丸の方形を呈し、平底で、火を受けた土が全面に堆積している。長軸133cm、短軸120cm、深さ24cmを測る。

FP03は本調査区E-2グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、平底で、長径85cm、短径74cm、深さ15cmを測る。

FP04も本調査区E-2グリッド、FP03の西側に位置する。平面形は円形を呈し、丸底で、長径60cm、短径57cm、深さ14cmを測る。

FP05も本調査区E-2グリッド、FP03の東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、平底で、長径90cm、短径67cm、深さ15cmを測る。伴う土器は曾利I式の龍目文土器なので、縄文時代中期後葉の遺構と考えられる。

埋甕土坑

SU03は本調査区F-4グリッドに位置する。浅鉢の口縁部が逆位で出土し、その下部に径34cm、深

さ14cmの正円形の土坑が検出された。浅鉢は土坑の底面より14cm浮いていた。出土している土器は同一個体の81・82・83で、堀之内2式の浅鉢形土器である。

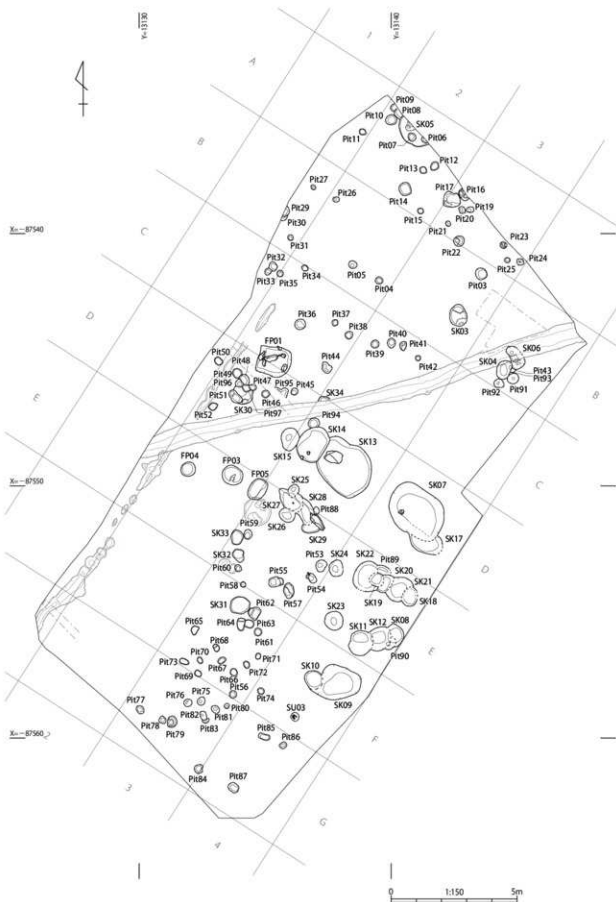
・縄文時代の遺物

出土した遺物は後期前葉の堀之内2式の時期を中心とする。土器は、少量の縄文時代中期中葉のⅢ群A-1類とした1の藤内式、2の井戸尻式以外はⅢ群A-2類とした曾利式(3～36)とⅢ群B-2類とした加曾利E式系(37～52)と西日本系と思われるもの(53・54)の中期後葉の土器である。また、中期と考えられる底部(55～58)を図示した。

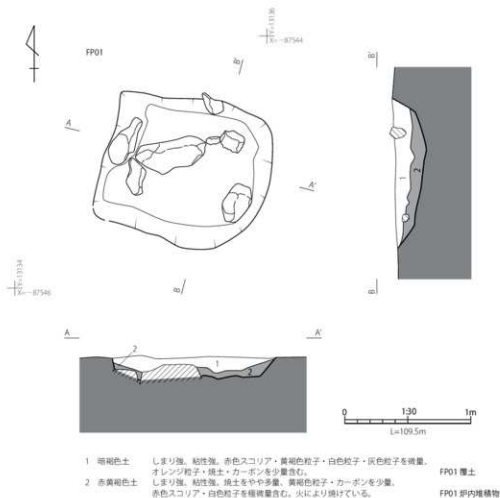
後期は、Ⅳ群A-2類、B-2類とした堀之内式がほとんどで、堀之内1式からの過渡期にあたる堀之内2式の古い時期に納まると考えられる。多くは頸部がくびれる深鉢形土器で、朝顔形の深鉢形土器は少なく、当地域の特色かもしれない。また浅鉢形土器と考えられるもの(69・72・76・81・82・83・84・85・87・145・175・176・184・187等)も高い比率で組成されるものと思われる。さらにE地区では、精製の注口土器(188～201)が多く出土していることが特筆され、通常の生活の場とは違う空間として利用された可能性が高い。

時期的には堀之内式期であるが、当地域に限定された土器群として、Ⅳ群B-2類(210～249)を区分した。やや厚めの器壁をもち、太い縄文原体を用いた付加条縄文を表面全体に施した粗製の深鉢形土器で、この土器は三島市北山遺跡などで、静岡県東部地域で主体的に出土する土器として注意されていたもの(瀬川1990)であったが、明確に検討されたのは馬飼野行雄氏によってである(馬飼野1997)。それによれば、堀之内2式に伴出する状況が顕著であり、本遺跡でもそれを裏付けている。このことから、静岡県東部地域の堀之内2式を構成する粗製土器と位置づけられるものと考えられる。分布範囲は、東は神奈川県西部に、西では静岡県中部の川根本町で確認されている。なお、設楽博己氏は『沼津市史 資料編 考古』29「鳥沢遺跡」にて堀之内1式の粗製土器としている。

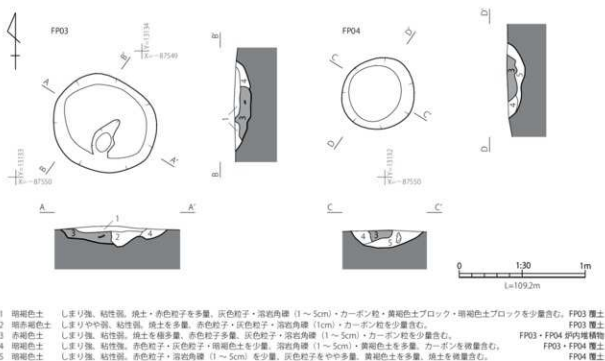
E地区の縄文時代で最も新しい時期はⅣ群A-3類



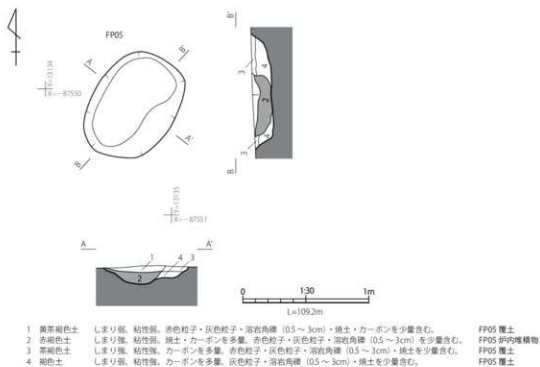
第17図 E地区 本調査区(縄文時代)全体図



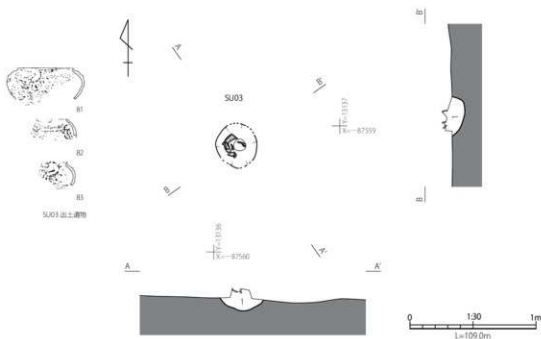
第18図 E地区 本調査区(縄文時代) FP01



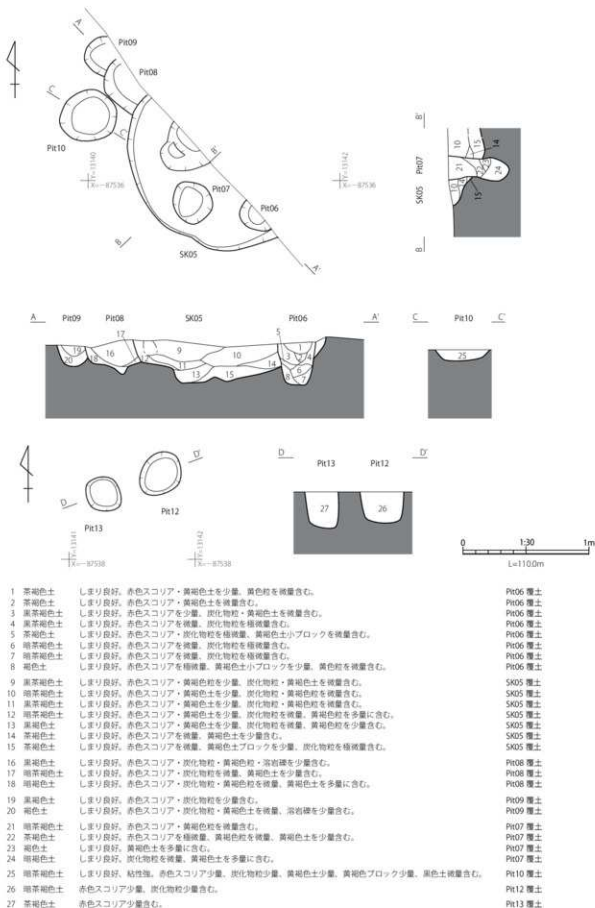
第19図 E地区 本調査区(縄文時代) FP03・FP04



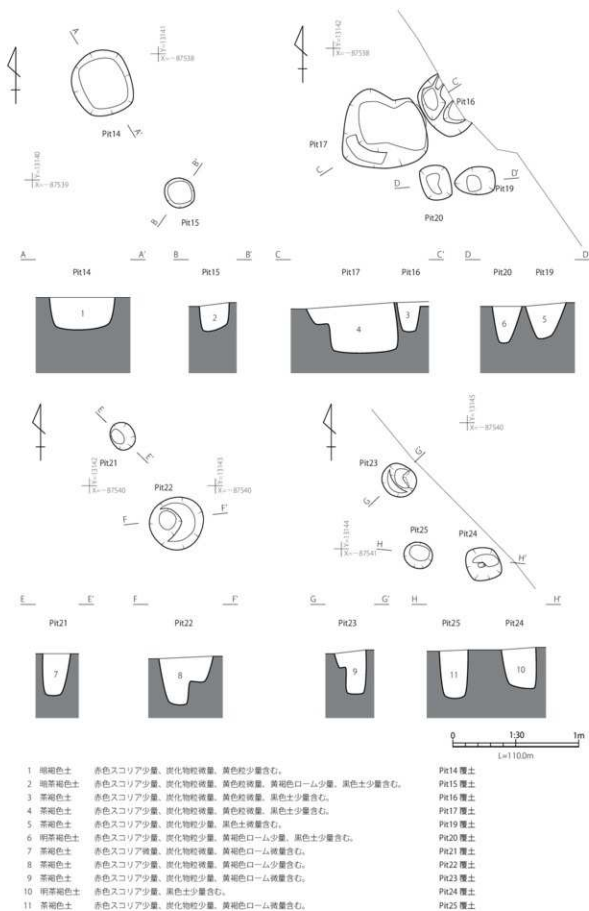
第20図 E地区 本調査区(縄文時代) FP05



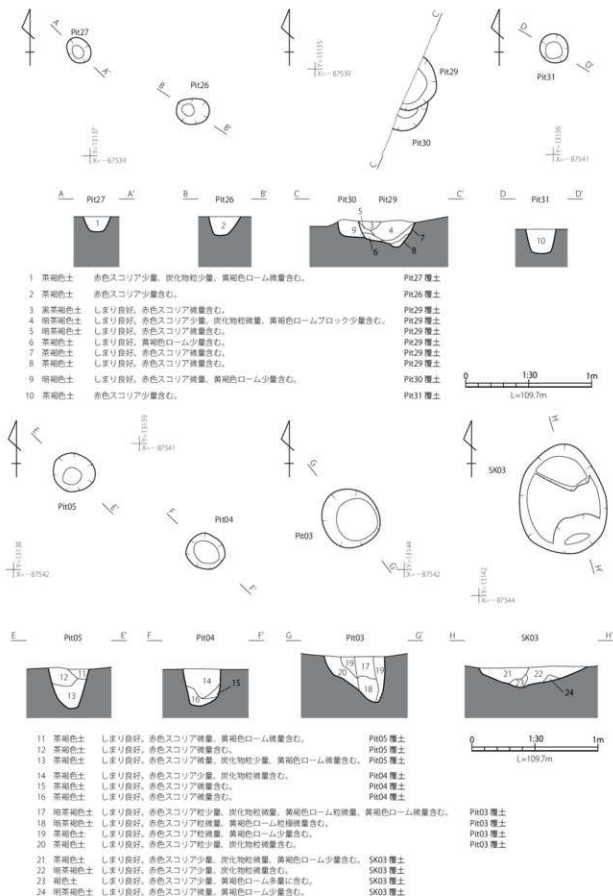
第21図 E地区 本調査区(縄文時代) SU03



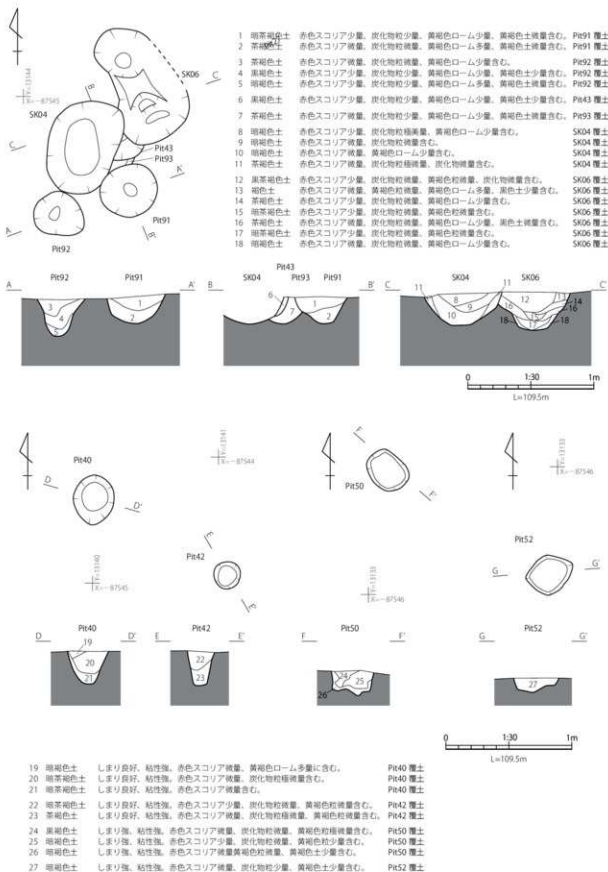
第22図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット(1)



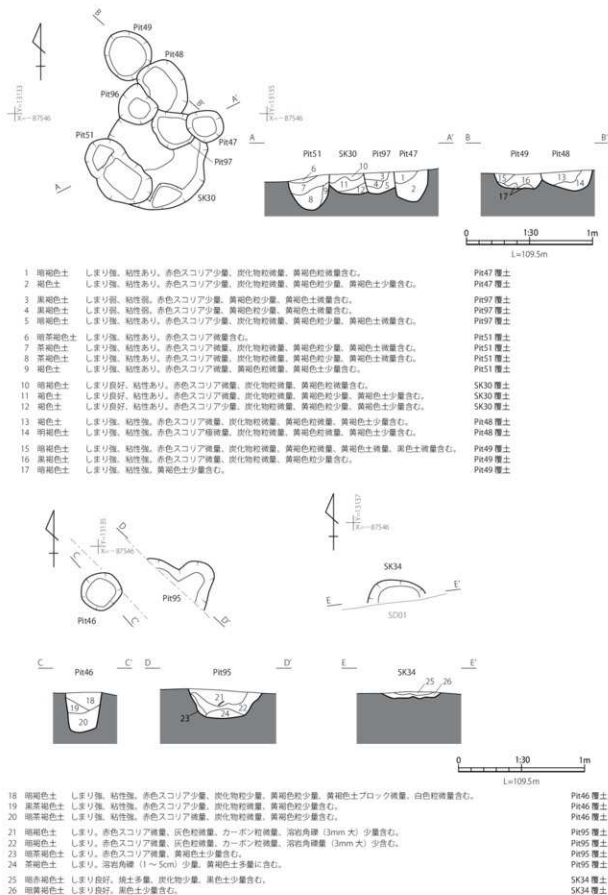
第23図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ビット(2)



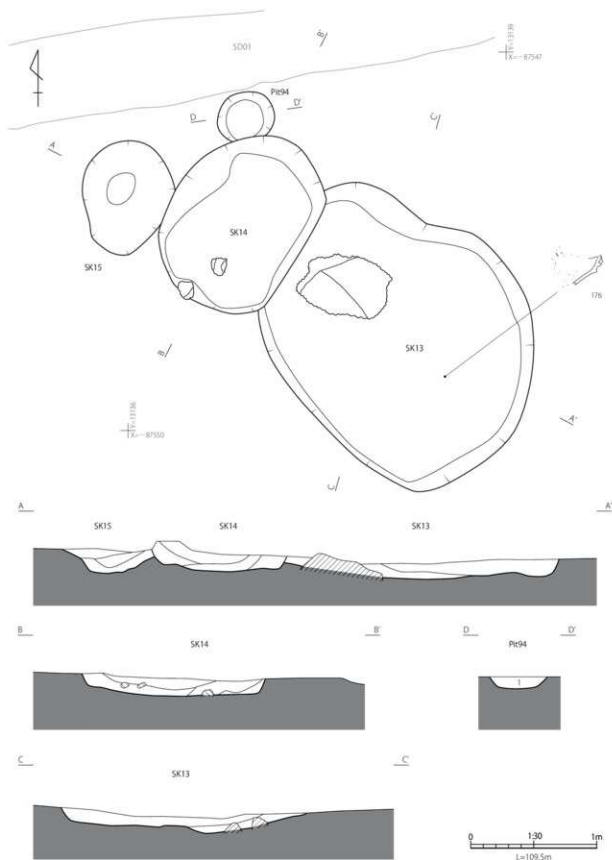
第24図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット (3)



第25図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット(4)

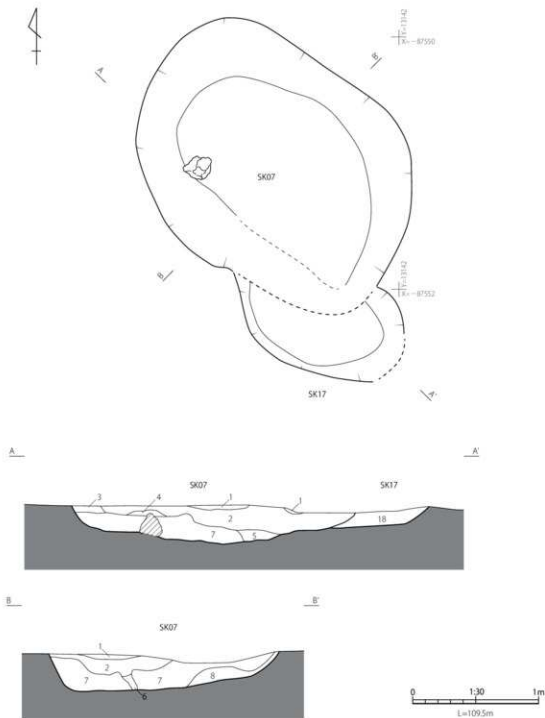


第26図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット(5)



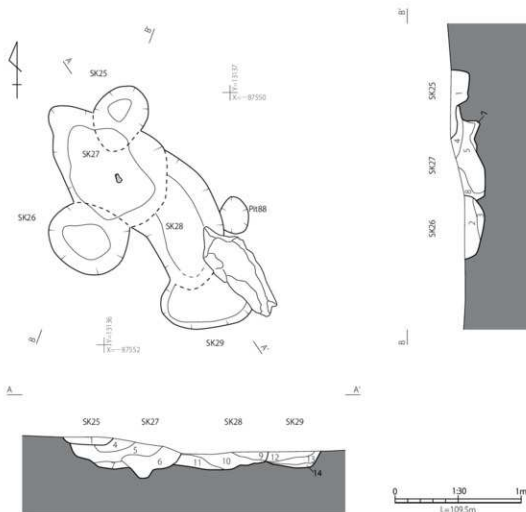
1 茶褐色土 しまり強、粘性強。赤色スコリア少量。炭化物粒少量。黄褐色粒微量。白色粒極微量。黄褐色土少量含む。 Pit94 覆土
※SK13～15の土層注記は不明

第27図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット(6)



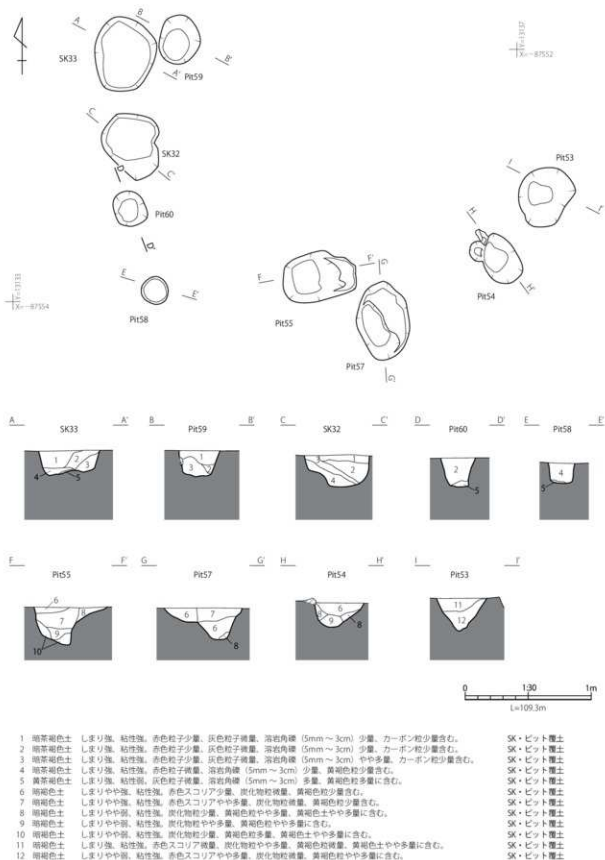
- | | | |
|---------|--|---------|
| 1 暗茶褐色土 | しまり強。粘性弱。赤色粒子極微量、白色粒子極微量、溶岩角礫 (2~10mm) 微量、カーボン極微量含む。 | SK07 覆土 |
| 2 暗茶褐色土 | しまり強。粘性弱。赤色粒子極微量、白色粒子極微量、溶岩角礫 (2~10mm) 微量、黄褐色土極微量、カーボン極微量含む。 | SK07 覆土 |
| 3 茶褐色土 | しまりやや強。粘性強。赤色粒子極微量、白色粒子極微量、黄褐色土極少量、黄褐色土極微量、カーボン極微量含む。 | SK07 覆土 |
| 4 暗茶褐色土 | しまり強。粘性弱。赤色粒子微量、白色粒子極微量、溶岩角礫 (2~10mm) 微量、黄褐色土極少量含む。 | SK07 覆土 |
| 5 暗茶褐色土 | しまり強。粘性弱。赤色粒子微量、白色粒子極微量、溶岩角礫 (2~10mm) 微量、黄褐色土極微量含む。 | SK07 覆土 |
| 6 暗茶褐色土 | しまりやや強。粘性弱。赤色粒子微量、白色粒子極微量、溶岩角礫 (2~10mm) 微量含む。 | SK07 覆土 |
| 7 暗茶褐色土 | しまりやや強。粘性弱。赤色粒子極微量、白色粒子極微量、溶岩角礫 (2~10mm) 微量、黄褐色土極微量、黄褐色土ブロック多量に含む。 | SK07 覆土 |
| 8 茶褐色土 | しまりやや強。粘性強。赤色粒子極微量、白色粒子極微量、黄褐色土極少量、黄褐色土極多量、カーボン極微量含む。 | SK07 覆土 |
| 9 茶褐色土 | しまりやや強。粘性強。赤色粒子極微量、白色粒子極微量、黄褐色土極少量、黄褐色土極多量、カーボン極微量含む。 | SK17 覆土 |

第 28 図 E 地区 本調査区 (縄文時代) 土坑・ピット (7)

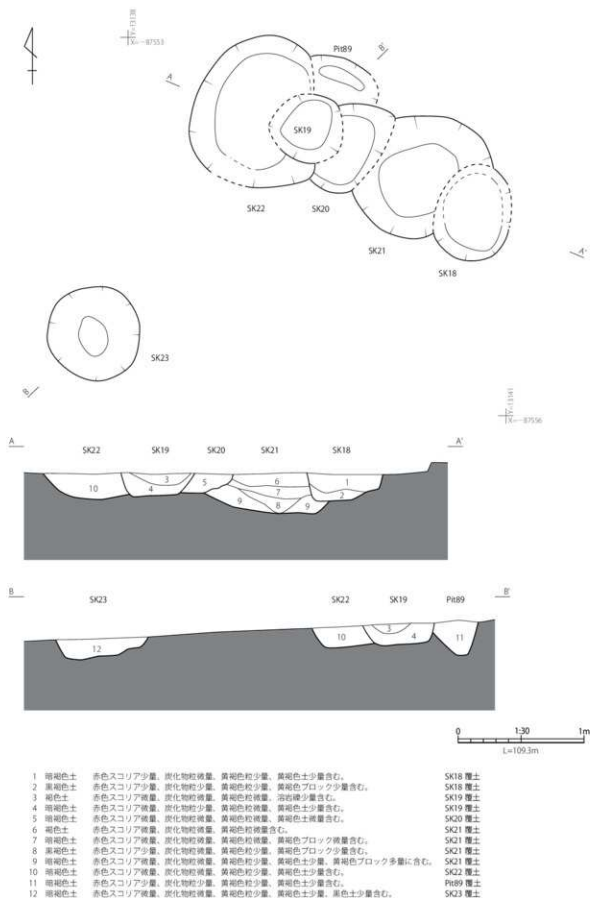


- | | | |
|---------|--|---------|
| 1 暗褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子極微量。灰色粒子極微量。カーボン極微量。暗黄褐色土ブロック微量含む。 | SK25 覆土 |
| 2 暗褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子微量。灰色粒子極微量。溶岩角礫 (1cm) やや多量。カーボン極微量。暗黄褐色土ブロック微量含む。 | SK26 覆土 |
| 3 茶褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子微量。灰色粒子微量。カーボン極微量含む。 | SK26 覆土 |
| 4 暗褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子微量。灰色粒子極微量。溶岩角礫 (1~3cm) 少量。カーボン極微量。暗黄褐色土ブロック微量含む。 | SK27 覆土 |
| 5 暗茶褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子微量。灰色粒子極微量。溶岩角礫 (1~3cm) 少量。カーボン極微量。暗黄褐色土ブロック微量含む。褐色土シミ状に少量含む。 | SK27 覆土 |
| 6 暗茶褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子微量。灰色粒子極微量。溶岩角礫 (1~3cm) やや多量。カーボン極微量。暗黄褐色土ブロック微量含む。褐色土シミ状に少量含む。 | SK27 覆土 |
| 7 茶褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子やや多量。灰色粒子やや多量。黄褐色土ブロックやや多量に含む。 | SK27 覆土 |
| 8 暗褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子少量。灰色粒子少量。溶岩角礫 (1cm) やや多量に含む。 | SK27 覆土 |
| 9 暗褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子微量。灰色粒子極微量。溶岩角礫 (1cm) やや多量。カーボン極微量。暗黄褐色土ブロック微量含む。 | SK28 覆土 |
| 10 暗褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子微量。灰色粒子極微量。溶岩角礫 (1cm) やや多量。カーボン極微量。暗黄褐色土ブロック微量含む。 | SK28 覆土 |
| 11 茶褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子やや多量。灰色粒子微量。溶岩角礫 (1cm) 少量。 | SK28 覆土 |
| 12 暗褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子少量。黄褐色粒子微量。灰色粒子極微量。溶岩角礫 (1cm) やや多量。カーボン極微量。暗黄褐色土ブロック微量含む。褐色土ブロック微量含む。 | SK29 覆土 |
| 13 暗褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子微量。黄褐色粒子少量。灰色粒子少量。溶岩角礫 (1cm) やや多量に含む。 | SK29 覆土 |
| 14 黄褐色土 | しまり強。粘性やや弱。赤色粒子極微量。黄褐色粒子微量。灰色粒子微量。溶岩角礫 (5mm) 微量。暗黄褐色土ブロック少量。褐色土ブロック少量含む。 | SK29 覆土 |

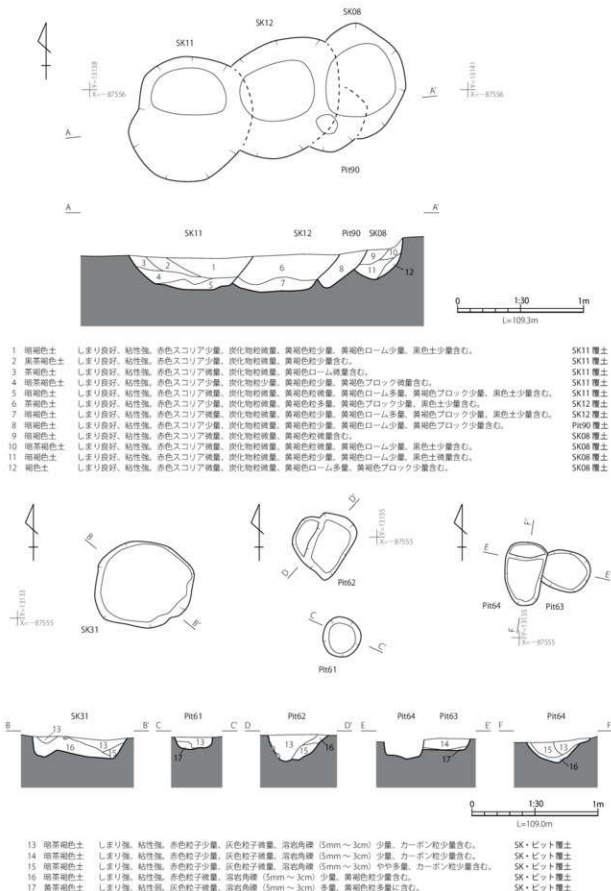
第29図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット(8)



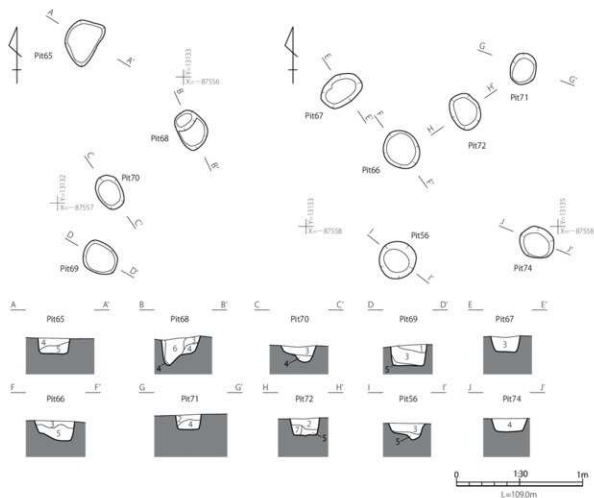
第30図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ビット(9)



第31図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット(10)

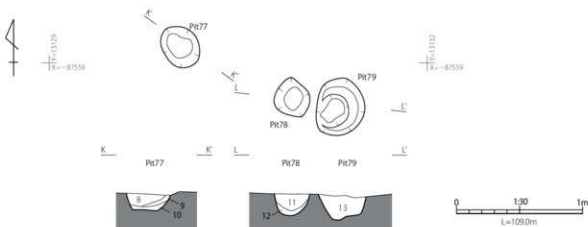


第32図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ビット(11)



- 1 暗茶褐色土 しまり強、粘性強。赤色粒子少量。灰色粒子微量。溶岩角礫 (5mm~3cm) 少量。カーボン粒少量含む。
 2 暗茶褐色土 しまり強、粘性強。赤色粒子少量。灰色粒子微量。溶岩角礫 (5mm~3cm) 少量。カーボン粒少量含む。
 3 暗茶褐色土 しまり強、粘性強。赤色粒子少量。灰色粒子微量。溶岩角礫 (5mm~3cm) やや多量。カーボン粒少量含む。
 4 暗茶褐色土 しまり強、粘性強。赤色粒子微量。溶岩角礫 (5mm~3cm) 少量。黄褐色粒少量含む。
 5 黄褐色土 しまり強、粘性強。赤色粒子微量。灰色粒子微量。溶岩角礫 (5mm~3cm) 少量。黄褐色粒少量含む。
 6 暗褐色土 しまり強、粘性強。赤色粒子微量。灰色粒子微量。溶岩角礫 (5mm~3cm) 少量。カーボン粒微量。黄褐色土少量含む。
 7 黄褐色土 しまり強、粘性強。灰色粒子少量。溶岩角礫 (5mm~3cm) 多量。黄褐色粒多量。黄褐色土多量に含む。

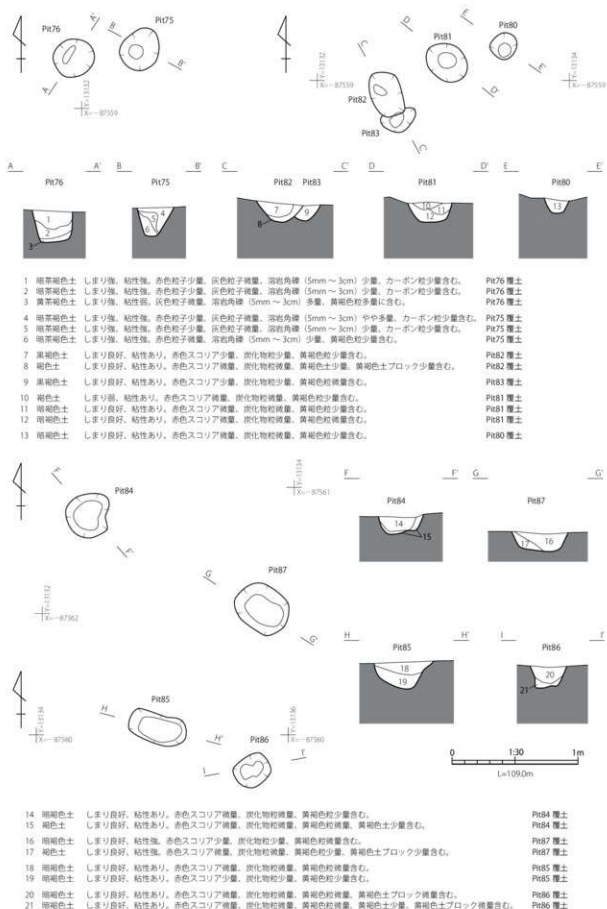
ビット層土
 ビット層土
 ビット層土
 ビット層土
 ビット層土
 ビット層土
 ビット層土



- 8 黒褐色土 しまり良好、粘性あり。赤色スコリア少量。炭化物粒少量。黄褐色粒微量含む。
 9 暗褐色土 しまり良好、粘性あり。赤色スコリア微量。炭化物粒微量含む。
 10 暗褐色土 しまり良好、粘性あり。赤色スコリア微量。炭化物粒微量。黄褐色土少量含む。
 11 黒褐色土 しまり良好、粘性あり。赤色スコリア少量。炭化物粒少量。黄褐色粒微量。黄褐色土ブロック少量含む。
 12 褐色土 しまり良好、粘性あり。赤色スコリア微量。炭化物粒少量。黄褐色粒少量。黄褐色土多量。黄褐色土ブロック少量含む。
 13 褐色土 しまり良好、粘性あり。赤色スコリア微量。炭化物粒少量。黄褐色土多量。黄褐色土ブロック多量に含む。

Pit77 覆土
 Pit77 覆土
 Pit77 覆土
 Pit78 覆土
 Pit78 覆土
 Pit79 覆土

第33図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ビット (12)



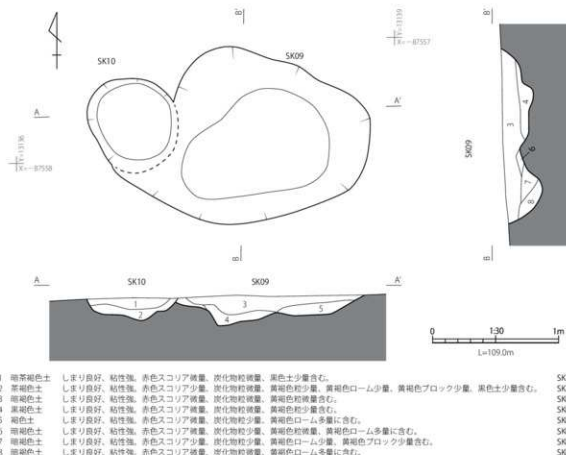
(296・297)で、加曽利B1式と考えられる。なお、中期のものも含まれている可能性があるが、311～325に後期と思われる底部を図示した。

石器は、小型の剥片石器類は、ほぼ黒曜石製で、石鏃(326～329)はすべて無茎凹基の小型なものである。330は原石に近い石塊の一部に刃部を形成した削器で、あるいは両極石核のブランクかもしれない。319～334は楔形石器で、331や332は両極石核の残核である可能性が高い。335は、緑色の軟玉(ネフライト)の剥片で、3～5cm程度の小円礫を両極打撃で剥離したもので、336のような玉斧や玉類の素材と考えられる。336は、非実用的な極小型の緑色軟玉(ネフライト)製定角式磨製石斧で、いわゆる玉斧である。精製の注口土器群の出土とあわせて、E地区が特別な空間であることを示す遺物である。

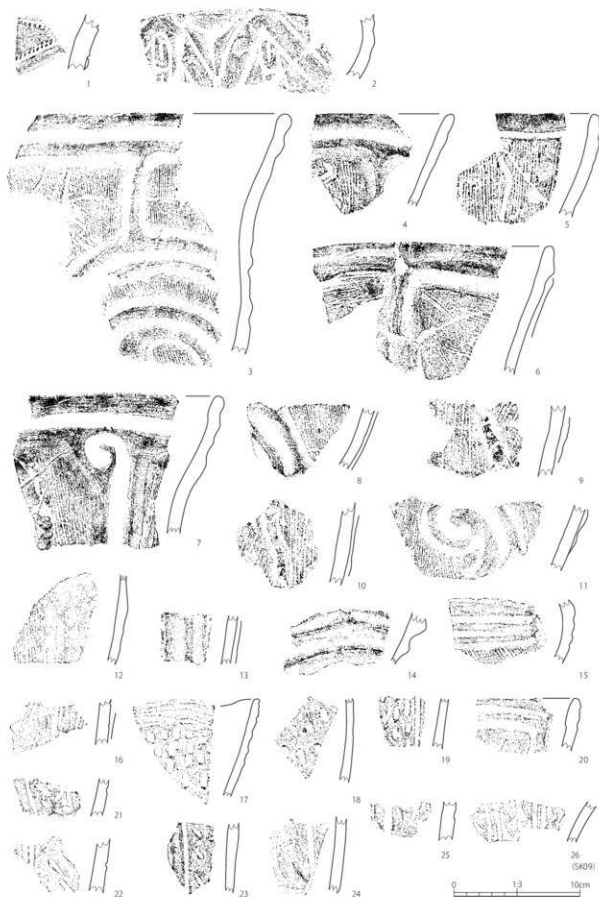
337は、上下が欠損している定角式磨製石斧で、強い被熱によって変質しているが、珪質な石材を素材としている。338～351は打製石斧で、基本形

態は短冊形であるが、338・342・344・351のようにバチ形に近いものや345・3473・346のように挟りが入り、分銅形といえるものがある。また340・341・343のように、リダクションでなく剥片素材そのまま、短い短冊形を呈すものも多く存在する。また、352は礫器としたが、製作技法は打製石斧と同様なため、打製石斧として使用された可能性が高い。

353と354は小円礫素材の石鏃で、353は十字に縄を掛ける上下左右に打欠きを行った礫石鏃である。354は両端に切れ目を入れた切目石鏃で、使用によるものか、楔形石器にリダクションしたか不明だが、両端に打撃痕がみられる。355は礫石で、敲打成形痕が顕著にみられることから、乳棒状磨製石斧からの転用の可能性がある。356・357は敲・磨石で、357は、後期の小型石棒の頭部の可能性がある。358・359は磨・凹石の欠損品である。360・361は、中期の大型石棒の一部と考えられる。



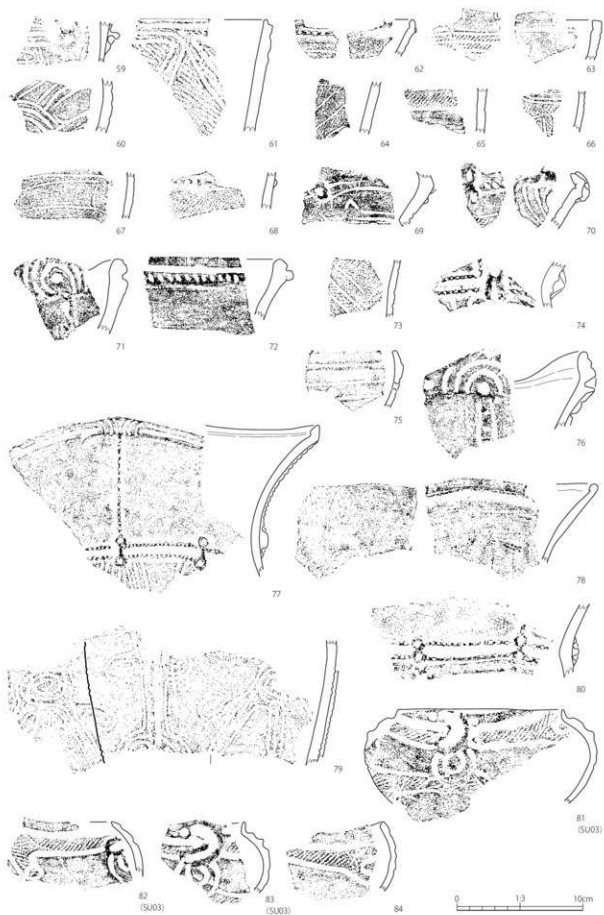
第35図 E地区 本調査区(縄文時代) 土坑・ピット(14)



第36図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）（1）



第37図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(2)



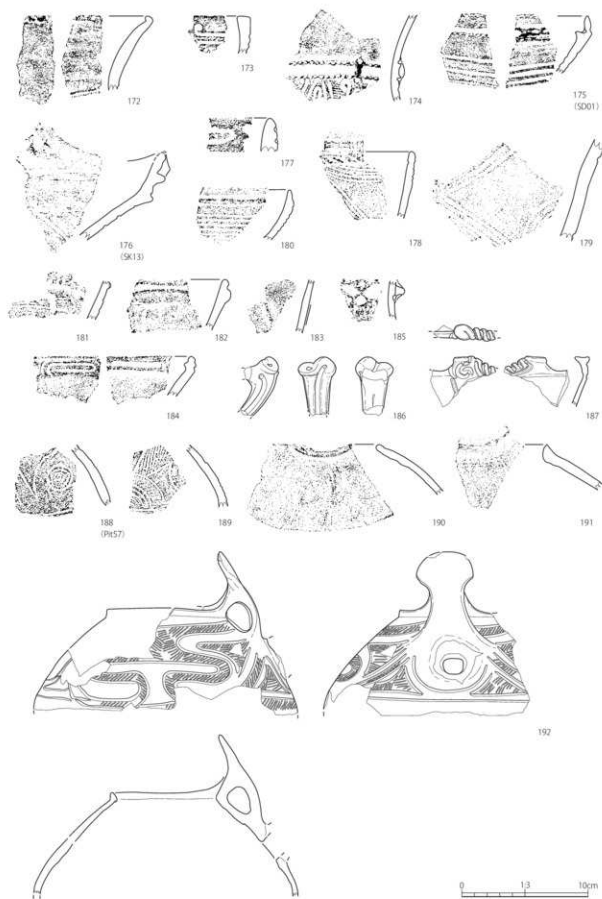
第38図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(3)



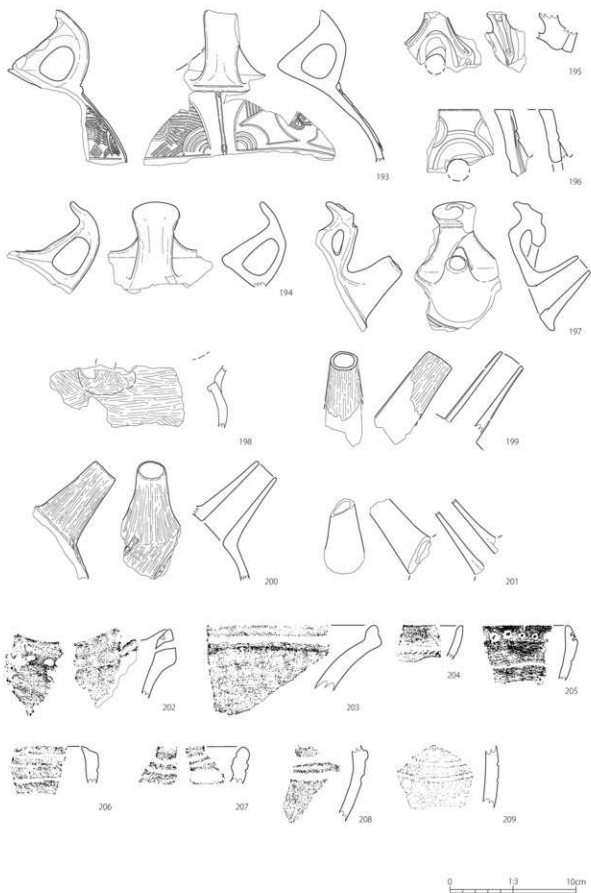
第39図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(4)



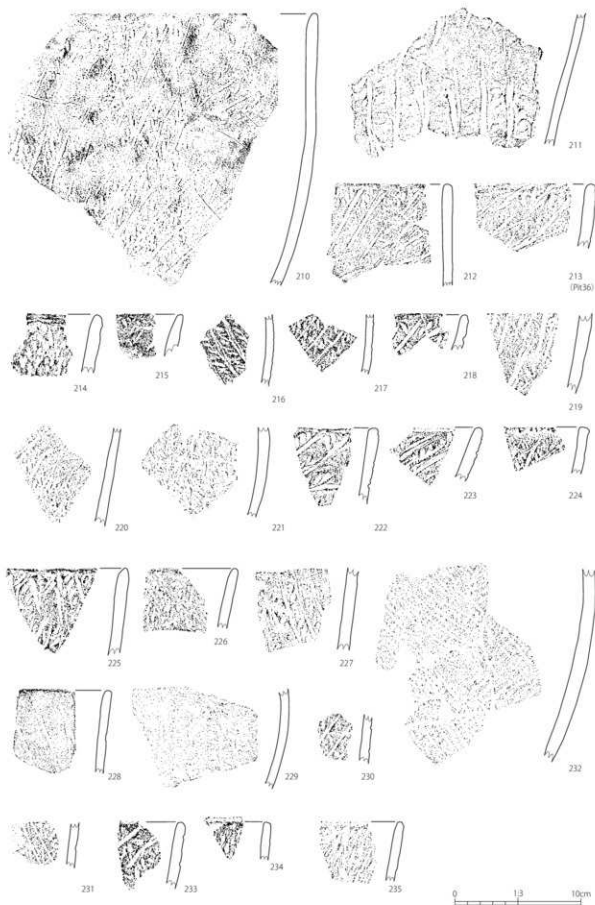
第40図 E地区 出土遺物実測図（縄文時代）(5)



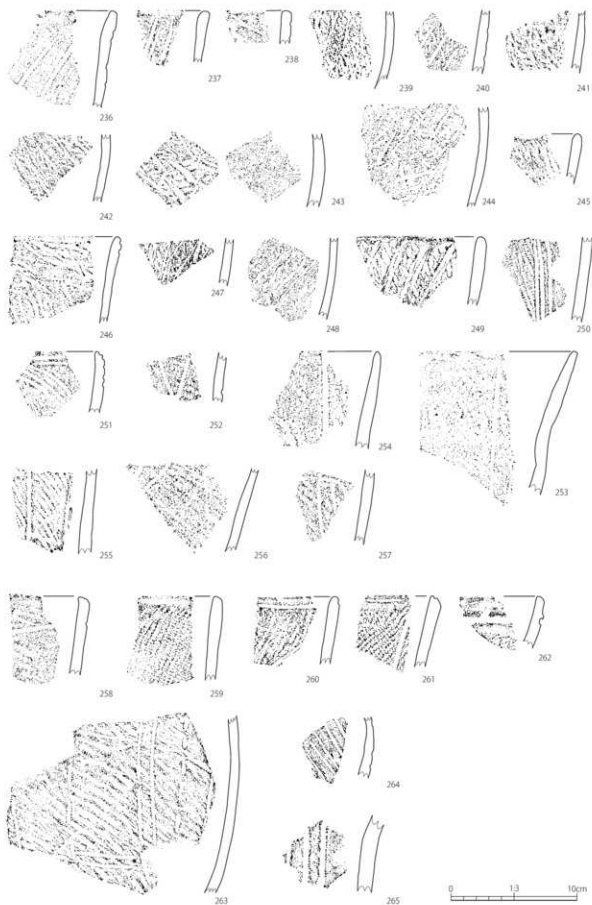
第41図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(6)



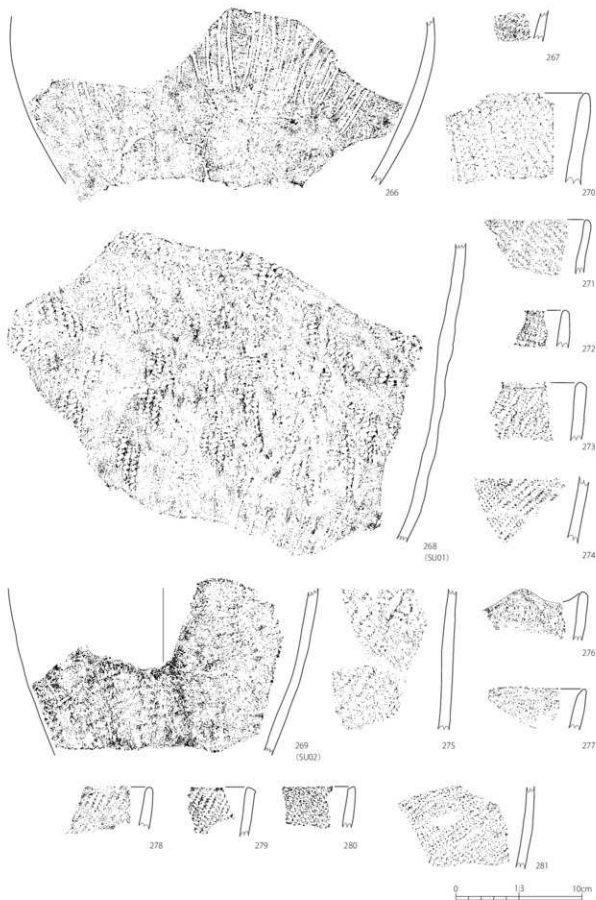
第 42 図 E 地区 出土遺物実測図（縄文時代）(7)



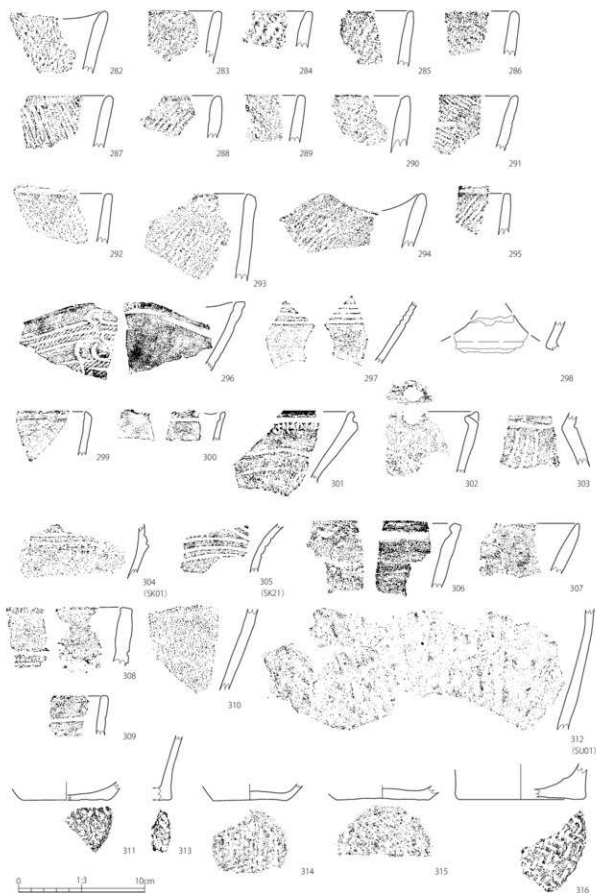
第43図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(8)



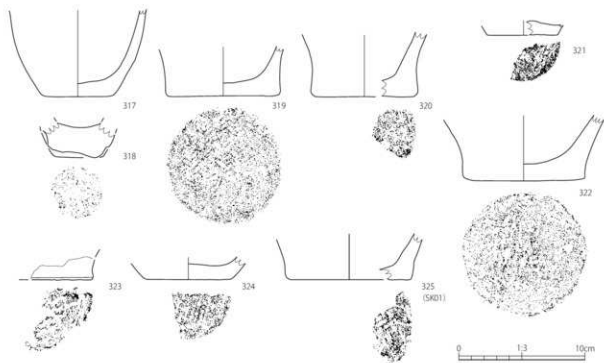
第44図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(9)



第45図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(10)



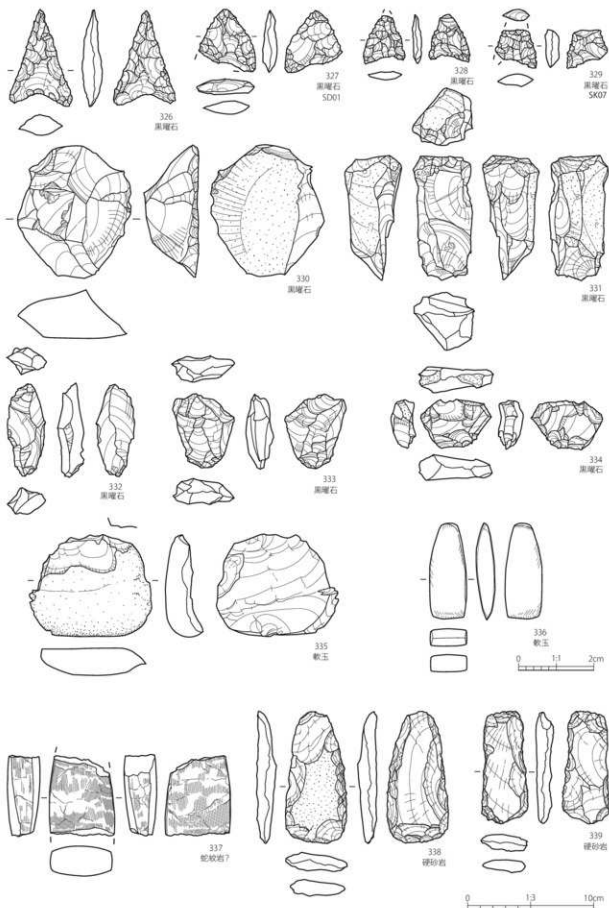
第46図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(11)



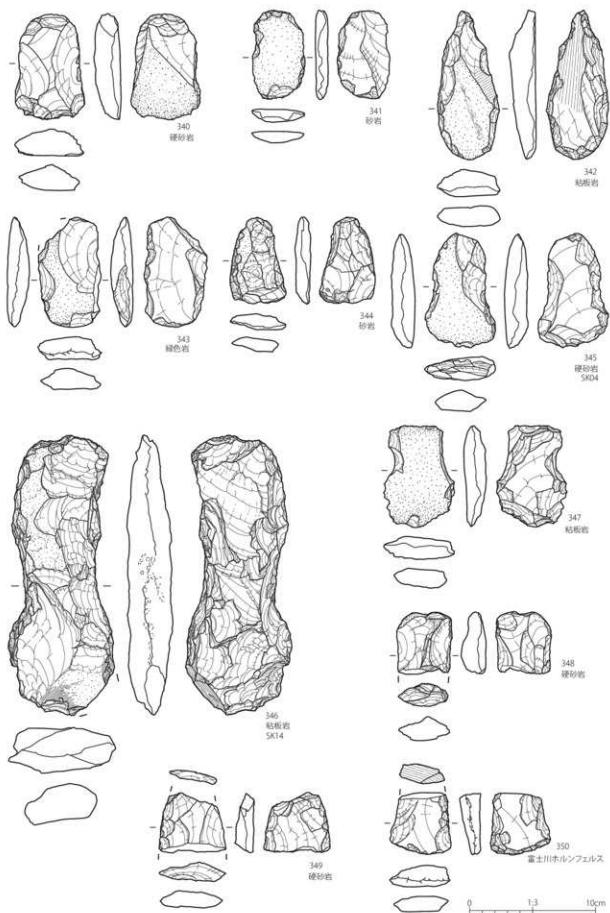
第47図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(12)

参考文献(年代順)

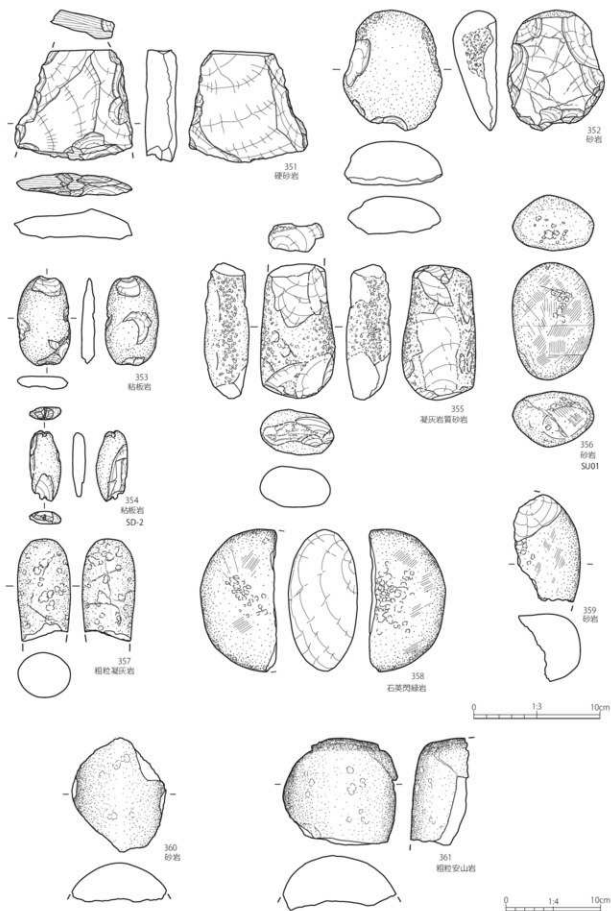
- 池田 純 1977 「IV. 1. 土器」『上長尾遺跡1』中川根町教育委員会 P27・P29
- 鈴木敏中 1986 『北山遺跡 農免農道建設用地内埋蔵文化財発掘調査概報』三島市教育委員会
- 瀬川裕市郎 1990 「縄文土器 - 東海地方 (3) - 連載⑨入門講座⑨」『考古学ジャーナル No.326』ニューサイエンス社 P31～P34
- 河合 修 1994 「第IV章 第4節 3群」『下関土遺跡』本川根町教育委員会 P43・P48
- 馬飼野行雄 1997 「17. 付加条縄文が施される土器 縄文時代編」『滝戸遺跡』富士宮市教育委員会 P178-p180
- 鶴田晴徳 1998 「第5章 総括」『鳥沢遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会 P92
- 設楽博己 2002 「29 鳥沢遺跡」『沼津市史 資料編 考古』P211～P212



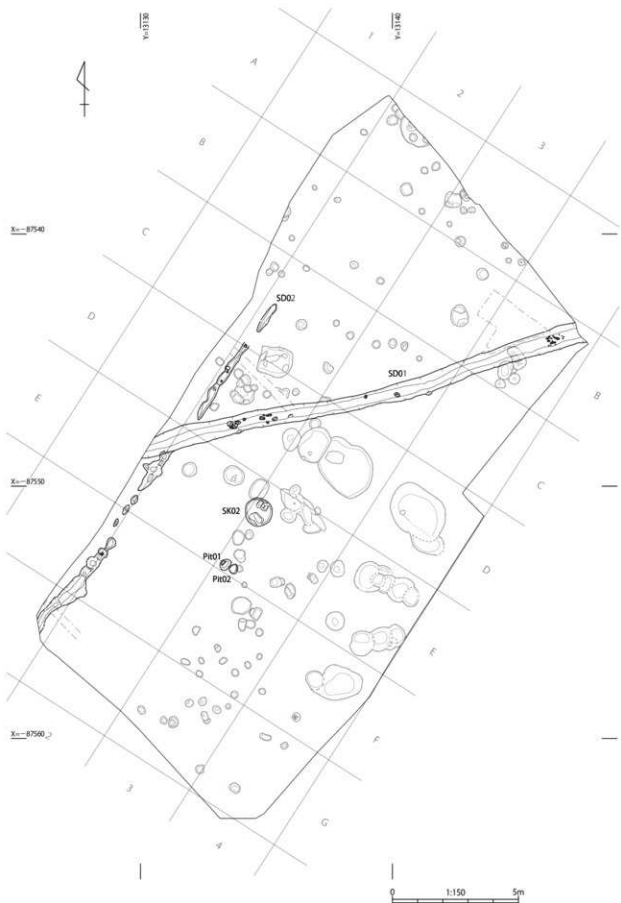
第48図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(13)



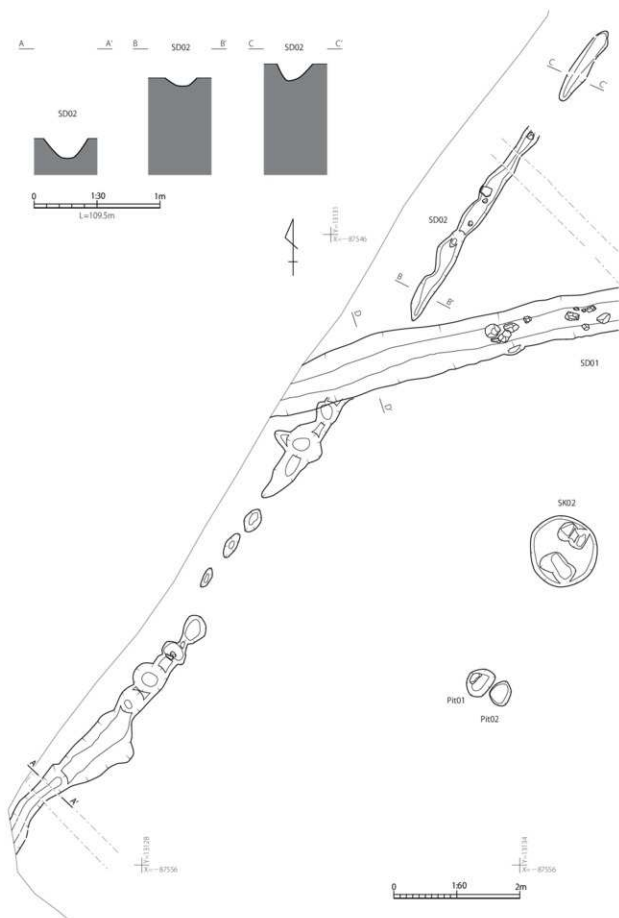
第49図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(14)



第50図 E地区 出土遺物実測図(縄文時代)(15)



第51図 E地区 本調査区(古墳時代以降)全体図



第 52 図 E 地区 本調査区（古墳時代以降） SD02

・古墳時代以降の遺構

溝状遺構2条(SD01～02)とピット2基(Pit01～02)、土坑1基(SK02)を検出・完掘した。ピット・土坑の規模等は第3表に示す。

溝状遺構

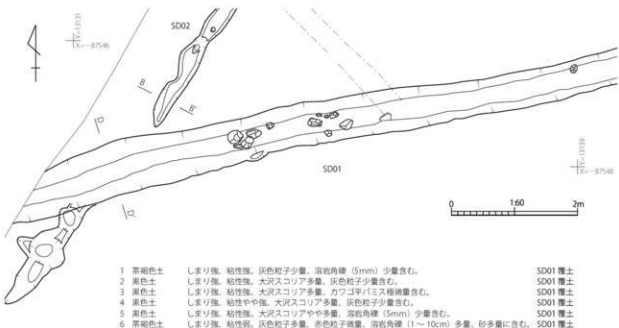
SD01は1次調査で検出された溝状遺構(SD)と同一遺構である。東から西へ向けて下る傾斜をもち、検出部分での落差は約35cm、全長17.70m、幅55～90cm、深さ22～48cmを測る。主軸方位はおおむねN-75°-Eである。SD02を切る。伴出遺物は、366・367の土師器なので、古墳時代前期の遺構であると考えられる。

SD02は2次調査1Tr西端において検出された溝状遺構(SD)と同一遺構である。途中が寸断されるが、1条の溝となるものと判断した。北から南へ向けて下る傾斜をもち、検出部分での落差は約60cm、全長15.85m、幅15～80cm、深さ15cm前後を測る。主軸方位はおおむねN-36.5°-Eである。SD01に切られる。

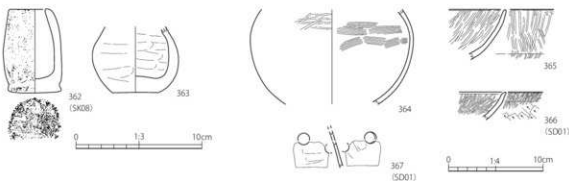
・古墳時代の遺物

362は、コップ状の小型壺形土器で、全体に縦位の研ぎをかけて、基部に沈線一条廻らし、高台状にしている。胎土は縄文土器に近い砂粒を含み、やや脆弱なので、縄文時代後期の土器の可能性もある。

363は手捏状の小型壺胴部で、口縁部は失われている。364は壺の胴部の破片で、表面にはヨコミギ、内面にはヨコハゲが観察される。365と366は表裏にミガキがみられる高坏の坏部で、366は内部にケズリ痕が観察される。367は円形透しのある高坏脚部の破片で、SD01より出土している。



第53図 E地区 本調査区(古墳時代以降) SD01(西半)



第56図 E地区 出土遺物実測図(古墳時代)

第3表 E地区 遺構一覧表

遺構種別	遺構名 (調査時)	時代	調査	位置	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (古一版)	備考
伊路	FP01	STX	2次	2Tr								FP01と同一遺構
伊路	FP01	第1号伊路	縄文	3次	本調査区	C-2・D-2	133	120	24	隅丸方形	平底	—
伊路	FP03	第3号伊路	縄文	3次	本調査区	E-2	85	74	15	正円形	平底	—
伊路	FP04	第4号伊路	縄文	3次	本調査区	E-2	60	57	14	正円形	丸底	—
伊路	FP05	第5号伊路	縄文	3次	本調査区	E-2	90	67	15	楕円形	平底	—
埋壊土坑	SU01	埋壊A	縄文	2次	2Tr		72	65	35	正円形	平底	—
埋壊土坑	SU02	埋壊B	縄文	2次	2Tr		90	61	13	楕円形	平底	—
埋壊土坑	SU03	埋壊3	縄文	3次	本調査区	F-4	34	32	14	正円形	丸底	—
溝状遺構	SD01	SD	1次	A・BTr								SD01と同一遺構
溝状遺構	SD02	SD	2次	1Tr								SD02と同一遺構
溝状遺構	SD01	SD1	古墳以降	3次	本調査区		1770	55~90	22~48	—	丸底	SD01・SK07→SD01
溝状遺構	SD02	SD2	古墳以降	3次	本調査区		1585	15~80	13~15	—	丸底	SD02→SD01
ビット			1次	ATr								ビット3基
ビット			1次	BTr								ビット7基
ビット	Pi01	Pi01	古墳以降	3次	本調査区	E-3	51	37	25	楕円形	丸底	—
ビット	Pi02	Pi02	古墳以降	3次	本調査区	E-3	40	33	12	楕円形	平底	—
ビット	Pi03	Pi03	縄文	3次	本調査区	B-3	48	44	35	正円形	丸底	—
ビット	Pi04	Pi04	縄文	3次	本調査区	B-2	30	27	29	正円形	平底	—
ビット	Pi05	Pi05	縄文	3次	本調査区	B-2	34	30	32	正円形	丸底	—
ビット	Pi06	Pi06	縄文	3次	本調査区	A-2	30	(14)	18	(正円形)	平底	SK05→Pi06
ビット	Pi07	Pi07	縄文	3次	本調査区	A-2	33	31	29	正円形	丸底	SK05→Pi07
ビット	Pi08	Pi08	縄文	3次	本調査区	A-2	(37)	(24)	19	(楕円形)	平底	Pi09→Pi08→SK05
ビット	Pi09	Pi09	縄文	3次	本調査区	A-2	(29)	(23)	16	(正円形)	丸底	Pi09→Pi08
ビット	Pi10	Pi10	縄文	3次	本調査区	A-2	46	40	8	正円形	平底	—
ビット	Pi11	Pi11	縄文	3次	本調査区	A-1	26	24	21	正円形 (平底)	—	—
ビット	Pi12	Pi12	縄文	3次	本調査区	A-2	37	31	25	楕円形	平底	—
ビット	Pi13	Pi13	縄文	3次	本調査区	A-2	31	27	28	楕円形	平底	—
ビット	Pi14	Pi14	縄文	3次	本調査区	A-2	51	46	24	楕円形	平底	—
ビット	Pi15	Pi15	縄文	3次	本調査区	A-2	25	23	18	正円形	平底	—
ビット	Pi16	Pi16	縄文	3次	本調査区	A-3	49	(25)	22	(楕円形)	平底	—
ビット	Pi17	Pi17	縄文	3次	本調査区	A-3	69	63	35	楕円形	平底	—
ビット	Pi18	Pi18	縄文	3次	本調査区	A-3	32	22	24	楕円形	丸底	—
ビット	Pi19	Pi19	縄文	3次	本調査区	A-3	28	23	28	楕円形	丸底	—
ビット	Pi20	Pi20	縄文	3次	本調査区	A-3	21	19	32	楕円形	平底	—
ビット	Pi21	Pi21	縄文	3次	本調査区	A-3	44	41	34	正円形	平底	—
ビット	Pi22	Pi22	縄文	3次	本調査区	A-3	28	25	30	正円形	平底	—
ビット	Pi23	Pi23	縄文	3次	本調査区	A-3	31	28	33	楕円形	平底	—
ビット	Pi24	Pi24	縄文	3次	本調査区	A-3	23	20	37	正円形	平底	—
ビット	Pi25	Pi25	縄文	3次	本調査区	A-3	26	20	15	楕円形	丸底	—
ビット	Pi26	Pi26	縄文	3次	本調査区	B-2	22	18	12	楕円形	丸底	—
ビット	Pi27	Pi27	縄文	3次	本調査区	B-1	45	(20)	19	(正円形)	平底	Pi30→Pi29
ビット	Pi29	Pi29	縄文	3次	本調査区	B-1	27	(20)	13	(正円形)	平底	Pi30→Pi29
ビット	Pi30	Pi30	縄文	3次	本調査区	B-1	24	22	18	正円形	平底	—
ビット	Pi31	Pi31	縄文	3次	本調査区	C-1	37	30	17	楕円形 (平底)	—	Pi33→Pi32
ビット	Pi32	Pi32	縄文	3次	本調査区	C-1	(28)	24	17	楕円形 (平底)	—	Pi33→Pi32
ビット	Pi33	Pi33	縄文	3次	本調査区	C-2	27	23	23	楕円形 (平底)	—	—
ビット	Pi34	Pi34	縄文	3次	本調査区	C-2	26	26	16	正円形 (平底)	—	—
ビット	Pi35	Pi35	縄文	3次	本調査区	C-2	44	43	31	正円形 (平底)	—	—
ビット	Pi36	Pi36	縄文	3次	本調査区	C-2	27	24	14	楕円形 (平底)	—	—
ビット	Pi37	Pi37	縄文	3次	本調査区	C-2	32	30	22	正円形 (平底)	—	—
ビット	Pi38	Pi38	縄文	3次	本調査区	C-3	33	31	28	正円形 (平底)	—	—
ビット	Pi39	Pi39	縄文	3次	本調査区	C-3						—

遺構種別	遺構名	遺構名 (調査時)	時代	調査	位置	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い(古→新)	備考
ビット	Pi40	Pi40	縄文	3次	本調査区	C-3	39	32	33	正円形	丸底	—	
ビット	Pi41	Pi41	縄文	3次	本調査区	C-3	37	27	14	楕円形	(丸底)	—	
ビット	Pi42	Pi42	縄文	3次	本調査区	C-3	21	21	25	正円形	平底	—	
ビット	Pi43	Pi43	縄文	3次	本調査区	B-4	—	—	15	(正円形)	(丸底)	Pi93 → Pi43 → SK06 → SK04	
ビット	Pi44	Pi44	縄文	3次	本調査区	C-2	49	33	23	不整形	(丸底)	—	遺構名重複(イキ)
ビット	Pi45	Pi45	縄文	3次	本調査区	D-2	29	25	25	楕円形	(平底)	—	遺構名重複(イキ)
ビット	Pi46	Pi46	縄文	3次	本調査区	D-2	32	29	32	正円形	平底	—	遺構名重複(イキ)
ビット	Pi47	Pi47	縄文	3次	本調査区	D-2	30	25	29	楕円形	丸底	SK30 → Pi97 → Pi47	
ビット	Pi48	Pi48	縄文	3次	本調査区	D-2	(45)	(33)	21	楕円形	丸底	Pi49 → Pi48 → Pi97 → Pi96	
ビット	Pi49	Pi49	縄文	3次	本調査区	D-2	40	36	13	正円形	平底	Pi49 → Pi48	
ビット	Pi50	Pi50	縄文	3次	本調査区	D-1	35	27	17	楕円形	平底	—	
ビット	Pi51	Pi51	縄文	3次	本調査区	D-2	63	36	27	楕円形	丸底	SK30 → Pi51	
ビット	Pi52	Pi52	縄文	3次	本調査区	D-2	35	28	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pi53	Pi53	縄文	3次	本調査区	E-3	49	40	28	楕円形	丸底	—	
ビット	Pi54	Pi54	縄文	3次	本調査区	E-3	45	28	21	不整形	丸底	—	
ビット	Pi55	Pi55	縄文	3次	本調査区	E-3	59	38	29	楕円形	平底	—	
ビット	Pi56	Pi56	縄文	3次	本調査区	F-3	30	30	25	正円形	丸底	—	
ビット	Pi57	Pi57	縄文	3次	本調査区	E-3	61	41	26	楕円形	平底	—	
ビット	Pi58	Pi58	縄文	3次	本調査区	E-3	22	21	17	正円形	平底	—	
ビット	Pi59	Pi59	縄文	3次	本調査区	E-3	39	32	34	正円形	平底	—	
ビット	Pi60	Pi60	縄文	3次	本調査区	E-3	28	24	18	楕円形	平底	—	
ビット	Pi61	Pi61	縄文	3次	本調査区	F-3	32	30	17	正円形	平底	—	
ビット	Pi62	Pi62	縄文	3次	本調査区	F-3	49	44	21	不整形	丸底	—	
ビット	Pi63	Pi63	縄文	3次	本調査区	F-3	(36)	32	12	楕円形	平底	Pi63 → Pi64	
ビット	Pi64	Pi64	縄文	3次	本調査区	F-3	50	29	16	楕円形	丸底	Pi63 → Pi64	
ビット	Pi65	Pi65	縄文	3次	本調査区	F-3	37	26	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pi66	Pi66	縄文	3次	本調査区	F-3	32	28	15	楕円形	平底	—	
ビット	Pi67	Pi67	縄文	3次	本調査区	F-3	34	23	14	楕円形	平底	—	
ビット	Pi68	Pi68	縄文	3次	本調査区	F-3	31	23	24	楕円形	丸底	—	
ビット	Pi69	Pi69	縄文	3次	本調査区	F-3	28	24	17	楕円形	平底	—	
ビット	Pi70	Pi70	縄文	3次	本調査区	F-3	28	20	11	楕円形	丸底	—	
ビット	Pi71	Pi71	縄文	3次	本調査区	F-3	25	20	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pi72	Pi72	縄文	3次	本調査区	F-3	29	23	15	楕円形	平底	—	
ビット	Pi73	Pi73	縄文	3次	本調査区	F-3	39	22	16	楕円形	(平底)	—	
ビット	Pi74	Pi74	縄文	3次	本調査区	F-4	28	25	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pi75	Pi75	縄文	3次	本調査区	G-3	35	30	26	楕円形	丸底	—	
ビット	Pi76	Pi76	縄文	3次	本調査区	G-3	32	30	27	正円形	平底	—	
ビット	Pi77	Pi77	縄文	3次	本調査区	G-3	36	28	12	楕円形	平底	—	
ビット	Pi78	Pi78	縄文	3次	本調査区	G-3	32	29	19	楕円形	丸底	—	
ビット	Pi79	Pi79	縄文	3次	本調査区	G-3	46	38	21	楕円形	平底	—	遺構名重複(イキ)
ビット	Pi80	Pi80	縄文	3次	本調査区	G-3	21	19	13	正円形	丸底	—	
ビット	Pi81	Pi81	縄文	3次	本調査区	G-3	36	28	19	楕円形	平底	—	
ビット	Pi82	Pi82	縄文	3次	本調査区	G-3	36	25	16	楕円形	丸底	Pi83 → Pi82	
ビット	Pi83	Pi83	縄文	3次	本調査区	G-3	29	(18)	12	楕円形	丸底	Pi83 → Pi82	
ビット	Pi84	Pi84	縄文	3次	本調査区	G-3	38	37	16	楕円形	平底	—	
ビット	Pi85	Pi85	縄文	3次	本調査区	G-4	46	23	23	楕円形	丸底	—	
ビット	Pi86	Pi86	縄文	3次	本調査区	G-4	29	24	19	楕円形	平底	—	
ビット	Pi87	Pi87	縄文	3次	本調査区	G-4	44	35	20	楕円形	平底	—	
ビット	Pi88	Pi88	縄文	3次	本調査区	D-3	29	(23)	—	楕円形	—	Pi88 → SK28	
ビット	Pi89	Pi89	縄文	3次	本調査区	E-4	62	(33)	26	楕円形	丸底	Pi89 → SK20 → SK22 → SK19	
ビット	Pi90	Pi90	縄文	3次	本調査区	E-4	(55)	(45)	23	(楕円形)	丸底	SK08 → Pi90 → SK12	
ビット	Pi91	Pi44	縄文	3次	本調査区	B-4	46	42	33	正円形	丸底	Pi93 → SK04 → Pi91	遺構名重複(変更)
ビット	Pi92	Pi45	縄文	3次	本調査区	B-4	41	33	30	楕円形	丸底	—	遺構名重複(変更)
ビット	Pi93	Pi46	縄文	3次	本調査区	B-4	—	—	21	—	丸底	Pi93 → Pi43 → SK06 → SK04 → Pi91	遺構名重複(変更)
ビット	Pi94	Pi79	縄文	3次	本調査区	D-3	46	(35)	10	(正円形)	—	Pi94 → SK14	遺構名重複(変更)
ビット	Pi95	サブトレ内 追加ビット	縄文	3次	本調査区	D-2	(60)	(30)	22	不整形	平底	—	
ビット	Pi96	番号なし	縄文	3次	本調査区	D-2	31	25	28	楕円形	—	SK30・Pi48 → Pi97 → Pi96	
ビット	Pi97	番号なし	縄文	3次	本調査区	D-2	(33)	29	17	楕円形	平底	SK30・Pi48・Pi97 → Pi47・Pi96	
土坑	SK01	土坑	2次	3Tr			62	52	20	楕円形	平底	—	
土坑	SK02	ST2	古墳以降	3次	本調査区	E-3	112	109	10	正円形	平底	—	
土坑	SK03	ST3	縄文	3次	本調査区	B-3	87	69	17	楕円形	浅い平底	—	
土坑	SK04	ST4	縄文	3次	本調査区	B-4	75	54	25	楕円形	丸底	Pi93 → Pi43 → SK06 → SK04	
土坑	SK05	ST5	縄文	3次	本調査区	A-2	152	(60)	31	(正円形)	平底	Pi08 → SK05 → Pi06・Pi07	
土坑	SK06	ST6	縄文	3次	本調査区	B-4	96	56	30	楕円形	丸底	Pi43 → SK06 → SK04	

遺構種別	遺構名	遺構名 (調査時)	時代	調査	位置	グリッド	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い(古→新)	備考
土坑	SK07	ST7	縄文	3次	本調査区	D-4	237	180	30	楕円形	平底	SK17→SK07	遺構名重複(イキ)
土坑	SK08	ST8	縄文	3次	本調査区	E-4	91	(63)	30	楕円形	丸底	SK08→P600→SK12	
土坑	SK09	ST9	縄文	3次	本調査区	F-4	158	140	20	楕円形	平底	SK09→SK10	
土坑	SK10	ST10	縄文	3次	本調査区	F-4	77	68	19	楕円形	平底	SK09→SK10	
土坑	SK11	ST11	縄文	3次	本調査区	E-4	99	97	33	楕円形	丸底	SK12→SK11	
土坑	SK12	ST12	縄文	3次	本調査区	E-4	109	89	33	楕円形	平底	SK08→P600 →SK12→SK11	
土坑	SK13	ST13	縄文	3次	本調査区	D-3	(240)	194	13	楕円形	平底	SK13→SK14	
土坑	SK14	ST14	縄文	3次	本調査区	D-3	147	110	14	楕円形	平底	SK13・SK15・P604 →SK14	
土坑	SK15	ST15	縄文	3次	本調査区	D-2	90	72	19	楕円形	平底	SK15→SK14	
土坑	SK17	ST17	縄文	3次	本調査区	D-4	144	81	25	(楕円形)	平底	SK17→SK34	
土坑	SK18	ST18	縄文	3次	本調査区	E-4	77	60	23	楕円形	平底	SK21→SK18	
土坑	SK19	ST19	縄文	3次	本調査区	E-4	59	55	17	楕円形	平底	P609→SK20 →SK22→SK19	
土坑	SK20	ST20	縄文	3次	本調査区	E-4	84	(47)	15	楕円形	平底	P609・SK21→SK20 →SK22→SK19	
土坑	SK21	ST21	縄文	3次	本調査区	E-4	112	97	25	楕円形	平底	SK21→SK18・SK20	
土坑	SK22	ST22	縄文	3次	本調査区	E-4	121	102	20	楕円形	平底	P609→SK22 →SK22→SK19	
土坑	SK23	ST23	縄文	3次	本調査区	E-4	74	74	19	正円形	平底	—	
土坑	SK24	ST24	縄文	3次	本調査区	E-4	65	54	25	楕円形	丸底	—	
土坑	SK25	ST25	縄文	3次	本調査区	D-3	54	41	17	楕円形	平底	SK27→SK25	
土坑	SK26	ST26	縄文	3次	本調査区	E-3	64	53	17	楕円形	丸底	SK27→SK26	
土坑	SK27	ST27	縄文	3次	本調査区	E-3	117	82	24	楕円形	平底	SK28→SK27 →SK25・SK26	
土坑	SK28	ST28	縄文	3次	本調査区	E-3	(111)	62	18	楕円形	平底	SK29・P608 →SK28→SK27	
土坑	SK29	ST29	縄文	3次	本調査区	E-3	(70)	(40)	16	楕円形	平底	SK29→SK28	
土坑	SK30	ST30	縄文	3次	本調査区	D-2	85	(77)	22	楕円形	平底	SK30→P651・P648 →P607→P647・P606	
土坑	SK31	ST31	縄文	3次	本調査区	F-3	80	70	19	楕円形	平底	—	
土坑	SK32	ST32	縄文	3次	本調査区	E-3	55	45	25	不整形	平底	—	
土坑	SK33	ST33	縄文	3次	本調査区	E-3	59	49	19	楕円形	平底	—	
土坑	SK34	ST7	縄文	3次	本調査区	D-3	45	(18)	5	(正円形)	平底	SK34→SD01	遺構名重複(変更)

第4表 E地区 出土土器観察表

神倉 図説	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第36図 PL-8	1	7.5YR4/3 濁	5YR4/5 赤濁	黒群 A-1 類	群内 2	隆帯による区画の隆帯に沿ってヘラ状工具による連続削突を施す。		R19
第36図 PL-8	2	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	黒群 A-1 類	井戸尻 1・2	三文文と楕円文の組み合わせた文様を配置した、口縁部近くの帯のみ部分。		R19
第36図 PL-8	3	BT-5	5YR5/4 赤濁	7.5YR4/2 灰濁	黒群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を縦位条線で充填、区画中央部に薄い波状の条線を施す。	R7
第36図 PL-8	4	BT-5	5YR5/4 赤濁	5YR4/6 赤濁	黒群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を縦位条線で充填、区画中央部に薄い波状の条線を施す。	R12
第36図 PL-8	5	BT-5	2.5YR4/6 赤濁	2.5YR5/6 明赤濁	黒群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を縦位条線で充填、区画中央部に薄い波状の条線を施す。	R4
第36図 PL-8	6	BT-IV	7.5YR4/4 濁	7.5YR3/3 暗濁	黒群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を横位条線で充填後、多方位に条線を施す。	R10
第36図 PL-8	7	2Tr	10YR5/2 灰黄濁	5YR5/4 赤濁	黒群 A-2 類	曾利IV	口縁部の隆帯から条線を下ろして縦の区画をつくり、その内部を細い条線で充填する。	R16
第36図 PL-8	8	BT-5	5YR5/6 明赤濁	5YR3/2 暗赤濁	黒群 A-2 類	曾利IV	太く薄い隆帯で区画された内部を縦位条線で充填、隆帯を施す。	R4
第36図 PL-8	9	BT-5	5YR5/6 明赤濁	5YR6/6 橙	黒群 A-2 類	曾利IV	隆帯と縦位、波状の条線。	R4
第36図 PL-8	10	BT-5	5YR5/6 明赤濁	5YR5/6 明赤濁	黒群 A-2 類	曾利IV	隆帯と縦位、波状の条線。	R4
第36図 PL-8	11	BT-V	5YR5/4 赤濁	2.5YR5/6 明赤濁	黒群 A-2 類	曾利IV	隆帯による隆帯文、区画内を縦位条線で充填、幅広く薄い隆帯で区画された内部を縦位の条線で充填する。南側表土中央部分出土。	R11 R31
第36図 PL-8	12	1Tr	5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	黒群 A-2 類	曾利IV	低い・幅広い隆帯の両側に同調を伴う懸垂文の区画内を縦位条線で埋める。	R3
第36図 PL-8	13	2Tr	10YR6/3 赤濁	5YR6/6 橙	黒群 A-2 類	曾利IV	大型の浅鉢の肩部、断面三角形の隆帯による楕円形区画内を縦位条線で充填する。	R233 R269
第36図 PL-8	14	G4Gr	7.5YR5/4 赤濁	7.5YR4/2 灰濁	黒群 A-2 類	曾利IV	浅く広い平行隆帯の下を斜めの条線で埋めている。	R166
第36図 PL-8	15	F4Gr	10YR3/3 暗濁	2.5YR6/6 橙	黒群 A-2 類	曾利IV?	太く低い隆帯に区画された内部を八字の文を連続して施す。	縦 R1
第36図 PL-8	16	10YR5/3 赤濁	5YR5/4 赤濁	黒群 A-2 類	曾利V			

神岡 図例	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第36図 PL.8	17	G3Gr	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	Ⅱ群 A-2 類	管利 V ?	口縁に平行して葦状の工具で二本の沈隆を施文し、その下を同じ工具で押引きのような刺激で充填する。器体は薄く後期、あるいは西日本系の可能性があり、18と同一個体。	R171
第36図	18	G4Gr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR5/3 に近い 褐	Ⅱ群 A-2 類	管利 V ?	葦状の工具で押引きのような刺激を全体に施す。器体は薄く後期、あるいは西日本系の可能性があり、17と同一個体。	R173
第36図 PL.8	19	ITr	10YR5/3 に近い 黄緑	10YR5/4 に近い 黄緑	Ⅱ群 A-2 類	管利 V ?	垂隆の区画内に斜め列点状に刺突文を施文。	R8
第36図 PL.8	20	G4Gr	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 に近い 赤褐	Ⅱ群 A-2 類	管利 V	二本の太く浅い沈隆で口縁に平行、懸垂し長方形区画を形成。連続した人字文の一部がある。	R172
第36図	21	2Tr	10YR8/3 浅黄緑	10YR6/3 に近い 黄緑	Ⅱ群 A-2 類	管利 V	底部付注。二本の平行沈隆による懸垂隆で区画された内部を連続した人字文で埋める。	R3
第36図	22	D4Gr	7.5YR7/6 橙	2.5YR5/4 に近い 赤褐	Ⅱ群 A-2 類	管利 V	二本の平行沈隆による懸垂隆で区画された内部を連続した人字文で埋める。	R110
第36図 PL.8	23		7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 に近い 橙	Ⅱ群 A-2 類	管利 V	二本の平行沈隆による懸垂隆で区画された内部を連続した人字文で埋める。	R1
第36図	24	G4Gr	10YR6/3 に近い 黄緑	7.5YR4/2 灰褐	Ⅱ群 A-2 類	管利 V	沈隆による懸垂文に区画された中を八の字文を施文する。	R271
第36図	25	E2Gr	5YR5/4 に近い 赤褐	7.5YR6/4 に近い 橙	Ⅱ群 A-2 類	管利 V	二本の平行沈隆による懸垂隆で区画された内部を連続した人字文で埋める。	R135
第36図	26	SK09	10YR4/1 褐灰	7.5YR4/3 褐	Ⅱ群 A-2 類	管利 V	平行沈隆による懸垂隆に区画された内部を八の字文で充填する。	R178
第37図	27	ATr-1	5YR4/3 に近い 赤褐	5YR4/3 に近い 赤褐	Ⅱ群 A-2 類	管利	太く薄い隆帯で区画。	R8
第37図	28	BT-5	5YR5/6 明赤褐	5YR3/2 暗赤褐	Ⅱ群 A-2 類	管利	口縁部に平行する太く浅い沈隆を引く。	R4
第37図	29	BT-5	7.5YR6/6 橙	7.5YR4/4 褐	Ⅱ群 A-2 類	管利	口縁部に平行する太く浅い沈隆を引き、縦位に薄く太い隆帯を施文する。	R7
第37図	30	ITr	5YR5/4 に近い 赤褐	10YR3/2 黒褐	Ⅱ群 A-2 類	管利	口縁部無文。	R5
第37図	31	ITr	7.5YR5/4 に近い 赤褐	7.5YR5/4 に近い 赤褐	Ⅱ群 A-2 類	管利	無文の口縁部。	R6
第37図 PL.8	32	ITr	10YR4/2 灰黄緑	7.5YR6/6 橙	Ⅱ群 A-2 類	管利	深縁部下部。垂下した筋みのある隆帯と沈隆による渦巻文。	R6
第37図	33	SD02 + D3Gr	7.5YR7/4 に近い 橙	10YR8/4 浅黄緑	Ⅱ群 A-2 類	管利	頸部に平行する平隆帯の集合沈隆に波状の粘土結を貼付。SD-2 出土。	R40
第37図	34	F3Gr	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅱ群 A-2 類	管利 ?	断面三角の隆帯を孤立に施文。	R161
第37図	35		5YR5/4 に近い 赤褐	10YR4/2 灰黄緑	Ⅱ群 A-2 類	管利 ?	狭い間隔で隆帯による懸垂隆を垂下する。	R1
第37図 PL.8	36	FP05	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅱ群 A-3 類	管利	平隆帯の集合沈隆を地文とし、その上に粘土紐をクロスして層付する深縁の筋部。第5号跡出土。	R255
第37図 PL.8	37	2Tr	10YR7/4 に近い 黄緑	10YR6/3 に近い 黄緑	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4	沈隆に区画された内部を斜めの RL で充填する。東側部は張り出し。	R12
第37図	38	2Tr	10YR7/4 に近い 黄緑	10YR6/3 に近い 黄緑	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4	口縁部二本の浅い平行沈隆の下に縦位に LR の織文を施文。東側部は張り出し。	R12
第37図 PL.8	39	E2Gr	5YR6/6 橙	5YR6/8 橙	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4	口唇部の文様状の区画に連続した地円文を施文し、その下に太めの LR の織文を全体に施文する。	R142
第37図	40	G3Gr	7.5YR6/4 に近い 橙	7.5YR4/3 褐	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4	浅い沈隆で区画された内部を LR の織文で充填。	R189
第37図	41	2Tr	10YR4/1 褐灰	5YR6/6 橙	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4	部を描く。浅く細い沈隆を両側にする薄い隆帯に区画された内部を LR の織文で充填する。	R12
第37図	42	3Tr	7.5YR6/4 に近い 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4	太い隆帯で区画された内部を縦位の RL の織文で充填する。	R4
第37図	43	ITr	5YR6/4 に近い 橙	5YR4/1 褐灰	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4 ?	RL の織文を縦位に施文。	R5
第37図	44	ITr	2.5YR6/8 橙	5YR7/6 橙	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4 ?	口縁に平行する沈隆の下に RL の横位織文。南側サブトレ東部分出土。	R9
第37図	45	ITr	5YR6/6 橙	5YR5/4 に近い 赤褐	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4 ?	口縁に平行する沈隆の下に RL の横位織文。南側サブトレ東部分出土。	R9
第37図	46	ITr	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/4 褐	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4 ?	口縁に平行して LR の織文。南側サブトレ東部分出土。	R9
第37図	47	ITr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4 ?	口縁に平行して LR の織文。	R8
第37図 PL.8	48	ITr	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/3 に近い 褐	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E4 ?	口縁に U 字形の太い隆帯を施し、その間に非常に薄く LR の織文で充填する。	R13
第37図	49	BT	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E ?	RL 横位を地文とし、縦位隆帯の両側に沈隆を施文。	R18
第37図	50	ATr-1	5YR2/2 黒褐	2.5YR4/8 赤褐	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E ?	縦位 RL の織文を地文とし、縦位平行沈隆による区画を描く。	R8
第37図	51	ITr	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	Ⅱ群	中期 ?	キャリバー形深縁くびれ部に横位 RL の織文。南側サブトレ西部分出土。	R7
第37図 PL.8	52	E2Gr	7.5YR7/4 に近い 橙	7.5YR7/4 に近い 橙	Ⅱ群 B-2 類	加管利 E ?	浅めの平行沈隆で三角形に区画された内部を、RL の織文でややランダムに充填する。器体中央部に渦巻文。後期西日本系（松ノ木式のモチーフに類似） ?。E-2 グリッド出土。	R142
第37図 PL.8	53	ATr	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	Ⅱ群	中期	口縁に平行する二本の沈隆を引く。	R17
第37図 PL.8	54		7.5YR3/2 黒褐	7.5YR5/4 に近い 褐	Ⅱ群	中期 ?	口唇直下の沈隆に沿う隆帯の上に、太い R の織を斜めに連続して押し刻みとしている。薄手で、胎土が白く重い粒子を多く含む。西日本系あるいは後期の畿内系文の可能性あり。	R1
第37図	55	BT-V	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅱ群	中期 ?	網代皿のある深縁部。	R11
第37図	56	ITr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅱ群	中期 ?	底面。南側サブトレ西部分出土。	R7
第37図	57	ITr	7.5YR4/2 灰褐	5YR6/6 橙	Ⅱ群	中期 ?	網代皿のある底面。	R8

神国 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第37図	58	ITr	10YR6/4 ぶい黄橙	5YR5/4 ぶい赤褐	Ⅳ群	中層?	網代直底部。	R6
第38図 PL.8	59	G4Gr	5YR5/4 ぶい赤褐	5YR5/4 ぶい赤褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内1	底部に大型の8字形浮点文を貼付し、平行や横溝に沈隆を引く。	R197
第38図 PL.8	60	ITr	7.5YR5/3 ぶい褐	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内1?	縁部に三本の平行沈隆で幅、直線を描く。西ツ池式?。事例3Aトレ出上。	R10
第38図 PL.8	61	G4Gr	5YR5/4 ぶい赤褐	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内1	単節Rの織文を横位に施文したものや地文とし、その上から平行沈隆で三角形の幾何学文を描く。	R196
第38図	62	BITr-V	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR3/3 暗褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	RLの磨消織文の施文後、口縁に平行する刻みのある隆帯とそれに平行する沈隆を貼す。	R10
第38図	63	ATr-IV	7.5YR5/6 明褐	7.5YR4/6 明褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	口縁に3本の平行沈隆内にLRの磨消織文を施す。	R9
第38図	64	ATr1Gr	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	沈隆で区画された帯状部にLRの細い磨消織文を施す。	R2
第38図	65	ATr	10YR7/4 ぶい黄橙	7.5YR6/4 ぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	沈隆で区画された帯状部にLRの細い磨消織文を施す。	R17
第38図	66	ATr	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	平行沈隆、沈隆で区画された帯状部にLRの細い磨消織文を施す。	R17
第38図	67	ATr-IV	7.5YR3/3 暗褐	7.5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	沈隆で区画された帯状部にLRの細い磨消織文を施す。	R9
第38図	68		7.5YR5/6 明褐	5YR5/4 ぶい赤褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	刻みのある細い隆帯の下に横位のLRの織文を施文。	R1
第38図 PL.8	69	2Tr	10YR7/3 ぶい黄橙	7.5YR7/3 ぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	平行沈隆で施文後、8字形浮点文を貼付。2トレンツ出上。	R23
第38図 PL.8	70	2Tr	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	口縁表面に斜め刻みのある隆帯、その下に沈隆で区画されたLRの織文を施文し、8字形浮点文を置く。裏面にも同心円状の沈隆を施文。B土坑壁の近くから出土。	R18
第38図	71	E4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内?	口縁部に沈隆による同心円を描く。同心円中央部には縦装飾の圧痕となる工具で刺突している。同心円より細隆帯を垂下する。縁帯土器?。E4グリッド出上。	R102
第38図 PL.8	72	D2Gr	7.5YR6/4 ぶい橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	口唇部に刻みのある隆帯を貼付し、接合部上部を沈隆で押さえる。D-2グリッド出上。	R234
第38図	73	D4Gr	7.5YR5/3 ぶい褐	5YR6/4 ぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	三角形の帯状区画内部にLRの磨消織文、D-4グリッド出上。	R110
第38図	74	E4Gr	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y3/2 黒褐	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	刻みのある細い隆帯を頸部に二本平行して貼付、直交した形で隆帯を垂下する。その交差部に8字形浮点文を貼付。上部にはLRの磨消織文(上下逆?)	R97
第38図	75	C3Gr	10YR7/2 ぶい黄橙	7.5YR7/4 ぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	口縁に平行する沈隆にLRの磨消織文、表面に丁寧な研ぎ。C-3グリッド出上。	R35
第38図 PL.8	76	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内?	波状口縁の突起部に半同心円を描き、その中心部に口唇表に帯貝先端部と思われる円状の刺突がなされる。同心円文から刻みのある隆帯で整直文を垂下する。縁帯土器?。G-4グリッド出上。	R193
第38図 PL.9	77	F3・G3Gr	7.5YR6/4 ぶい橙	7.5YR7/4 ぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	ラッパ状に広がる口縁部の突起部分より刻みのある細い隆帯が垂下され、底部に至る部分で同じ隆帯が二本平行で直角につながる。その交差部に、8字形浮点文が貼付される。重痕は4単位と考えられるが、8字形浮点文は順部隆帯上に8単位ある。順部より下は平行沈隆で区画された逆三角形内部に磨消織文。	R164 ・R188
第38図 PL.8	78	G4Gr	7.5YR7/4 ぶい橙	7.5YR7/4 ぶい橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	裏面に折り返し状の口縁、表面は無文だが縦直状のものが縦位に押圧される。裏表とも丁寧な研ぎ。G-4グリッド出上。	R212
第38図 PL.9	79	ITr・E3・F4Gr	5YR5/4 ぶい赤褐	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	底部に水平に刻みのある細い隆帯を施し、そこから4単位と思われる同じ隆帯を垂下する。それR31を区画として内部に沈隆で溝帯と直線で構成され、R45の文様を施し、その内部をLRの細い織文で充填・R72する。	R31 ・R45
第38図 PL.9	80	F4Gr	5YR4/6 赤褐	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	順部に平行する刻みのある二本の隆帯上に8単位と思われる8字形浮点文をおく。F-2グリッド、F-4グリッド出上。	R58 ・R72
第38図 PL.9	81	SU03・F4Gr	7.5YR7/8 黄橙	7.5YR7/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	内湾した口縁部の上半に、太い隆帯上に逆C状の沈隆と両側に同じ工具の末端による刺突を施し、その下に沈隆で同心円状の目形を描く。そのまわりはLRの磨消織文で文様を埋める。SU3出上。	R170
第38図	82	SU03・F4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	内湾した口縁部の上半に、太い隆帯上に逆C状の沈隆と同心円状の目形を描く。そのまわりはLRの磨消織文で文様を埋める。丁寧な研ぎ。R3と同一個体。埋埋3で取り上げ。	R168 ・R170
第38図 PL.9	83	SU03・F4Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	内湾した口縁部の上半に、太い隆帯上に逆C状の沈隆と両側に同じ工具の末端による刺突を施し、その下に沈隆で同心円状の目形を描く。そのまわりはLRの磨消織文で文様を埋める。丁寧な研ぎ。R2と同一個体。埋埋3で取り上げ。	R170
第38図	84	F4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内2	縦割状になる波状口縁部、入組み文状にLRの磨消織文で文様を構成する。埋埋3出上。	R170

棟号	図面番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地番号
第39号 PL.9	85	E2Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇部近くに平行して刻みのある細い隆帯。内側に折返し口縁状の成形。SD-1 出土。	R35
第39号	86	E2Gr	7.5YR6/4 に近い橙	5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	波状口縁突起部。口唇上縁中央に円錐形の刺突を施し、それを中心に同心円状の刻みを施す。SD-1 出土。	R42
第39号 PL.9	87	Pu05	7.5Y6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇部近くに平行して刻みのある隆帯とその下に帯状三角形になると思われる LR の磨消縄文。内側に折返し口縁状の成形。Pu5 出土。	R104
第39号	88	Pu04	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇部近くに平行して刻みのある隆帯とその下に LR の磨消縄文。Pu4 出土。	R162
第39号 PL.9	89	SD01 C3Gr	10YR4/2 灰黄褐	5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	半環状管による平行沈隆の内側を同じ工具で溝を入れる。丁寧な研ぎ。SD-1 出土。	R35
第39号	90	1Tr	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	IV群 A-2 類	堀之内 2	屈曲する隆帯上部の無文部で、側部よりやや放射状に広げて刻みのある細帯が貼付される。表面に丁寧な研ぎ。	R2
第39号	91	1Tr	10YR8/4 浅黄褐	7.5YR7/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球頸部に比喩による横間と直線の施文。南側サブトレ西部分出土。	R7
第39号	92	1Tr	2.5YR5/1 黄灰	10YR6/4 に近い黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	球頸部に比喩による横間と直線の施文。	R8
第39号	93	1Tr	5YR6/6 橙	5YR5/4 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	配厚し接をもつ口縁部に赤褐色の工具による刺突を施す。	R8
第39号	94	1Tr	10YR5/3 に近い黄褐	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状に深く折返し口縁。表口唇に平行して沈隆。裏面に丁寧な研ぎ。南側サブトレ出土。	R10
第39号	95	1Tr	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状に深く折返し口縁部分。口唇より垂下する刻みある細帯。南側サブトレ西部分出土。	R7
第39号 PL.9	96	G4Gr	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/3 に近い黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇より斜め刻みの隆帯を垂下し、その間を平行沈隆で三角形の幾何学文を施す。	R228
第39号	97	1Tr	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	裏面に斜め刻みの細帯と丁寧な研ぎ。	R8
第39号 PL.9	98	G4Gr	2.5YR6/6 橙	2.5YR7/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球頸部の中心に同心円の沈隆の周囲に帯状の LR の磨消縄文を施す。	R241
第39号	99	F3Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	弧状に彫らんだ器体部に平行沈隆による半同心円文を施す。間の空欄部に赤褐色に磨いた管状工具で X 字状の刻文を描く。	R161
第39号	100	F3Gr	7.5YR5/4 に近い黄褐	5YR5/4 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	横帯状に磨消縄文。	R161
第39号	101	F3Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状に深く口縁部。裏面に丁寧な研ぎ。	R154
第39号 PL.9	102	E2Gr	7.5YR5/1 黄灰	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球頸部の中心に同心円の沈隆の周囲に帯状の LR の磨消縄文を施す。	R156
第39号	103	F4Gr	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	IV群 A-2 類	堀之内 2	3本の平行沈隆の上下に、非常に細い LR を条が垂直になるように右斜めで充填する。	R166
第39号	104	F3Gr	7.5YR5/3 に近い黄褐	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部に縦帯状の磨消縄文。	R148
第39号 PL.9	105	E2Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR6/4 に近い黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	球頸中央部。LR の帯状磨消縄文の間を同心円状の集合沈隆で埋められている。	R157
第39号	106	F4Gr	7.5YR5/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	沈隆間を LR の縄文で埋められている。	R169
第39号	107	E2Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR4/3 褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	同心円状に集合沈隆を施文。裏面に丁寧な研ぎ。	R169
第39号 PL.9	108	F4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状にひろがる受け口状の口縁部近くの文様帯。連続した正三角形の幾何学文を帯状に細かい LR の縄文で充填する。	R169
第39号	109	F3Gr	5YR4/1 褐灰	2.5YR6/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	横帯に刻みのある隆帯とそれに平行する LR の磨消縄文。裏面に丁寧な研ぎ。	R153
第39号	110	SK14	2.5YR6/8 橙	5YR5/3 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	水平に刻みのある隆帯と LR の磨消縄文。	R180
第39号	111	G4Gr	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇に近接して水平の沈隆とそこからつづく群部の隆帯上に複線 LRL 9 の縄文を施文。	R172
第39号	112	G3Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	刻みのある隆帯の両側に平行する沈隆で略三角形になる区画を形成する。	R171
第39号	113	G4Gr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR5/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状にひろく無文口縁部。折返し口縁状の成形と表裏に丁寧な研ぎ。	R172
第39号	114	F4Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部に水平の刻みのある隆帯を施文し、その上に 8 字形浮点文を貼付。それを中心に半同心円の集合沈隆を描く。	R167
第39号	115	F4Gr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	折返し状の口縁に、横帯に刻みのある隆帯とそれに平行する沈隆。表裏に丁寧な研ぎ。	R167
第39号	116	F4Gr	7.5YR5/3 に近い黄褐	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	くびれ部に沈隆による横間の半同心円の文様を施文。	R167
第39号	117	G4Gr	5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	沈隆による半同心円の文様で RL の磨消縄文を施す。	R176
第39号	118	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	断面三角形の隆帯の上に半環状管による押印きの平行沈隆で弧状の文様を描く。	R175
第39号	119	G4Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	ラッパ状にひろく無文口縁部。折返し口縁状の成形。	R175
第39号	120	F4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR5/3 に近い黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	弧状の平行沈隆内を RL の磨消縄文で充填する。	R83
第39号	121	1Tr	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR5/6 明褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	垂下する刻みのある隆帯をもつラッパ状にひろく口縁部。折返し口縁状の成形。	R14
第39号 PL.9	122	1Tr	10YR7/4 に近い黄褐	7.5YR5/4 に近い黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部に平行する刻みのある隆帯の下に、三本の弧状になる集合沈隆を引き、その間に細かい LR の縄文を施文する。	R21
第39号 PL.9	123	F4Gr	10YR5/3 に近い黄褐	10YR3/1 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内 2		R76

神岡 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第39図	124	F4Gr	10YR3/2 黒褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内2	折返し口縁状の口唇に平行して細い隆帯と沈線が施文される。	R58
第39図	125	F4Gr	2.5YR3/2 黒褐	10YR5/3 に近い黄褐	IV群 A-2 類	堀之内2	二本の斜行する沈線の結合点に「フ」状の横四文を描画する。この区画内を細かいLRの縄文を縦文で充填する。	R75
第39図	126	G4Gr	7.5YR5/4 に近い褐	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	刻みのある隆帯の下に沈線による同心円と縦線を引き、その間を細かいLRの縄文で充填する。	R173
第39図	127	G3Gr	5YR4/2 灰褐	5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内2	沈線による帯状磨消縄文で三角形幾何学文を描く。	R190
第39図 PL.9	128	G3Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	頸部に平行した二本の隆帯を貼付、その上に八字形浮点を置き、そこを中心に下部に二本の沈線による三角形の幾何学文を描き、内部を細かいRLの縄文で充填する。上部は研ぎ、無文でラッパ状、やや放射状にひらく二本の隆帯を貼付する。	R188
第39図	129	G3Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内2	鉢形土器のラッパ状にひらく上半部、口縁部に平行する斜め刻みのある隆帯と垂下する隆帯を施文する。	R190
第40図	130	G4Gr	7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR5/4 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内2	沈線による帯状磨消縄文で三角形幾何学文を描く。	R174
第40図	131	D4Gr	7.5YR6/6 橙	2.5YR6/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	体部に水平に沈線を引き、その下にLRの縄文を横位に施文、その上に斜め沈線を引く。	R69
第40図	132	D4Gr	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内2	二本の沈線で区画された平らな模様に充填する。	R69
第40図	133	E2Gr	2.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内2	口縁に平行して刻みのある隆帯を貼付、裏面に折返し口縁状の成形と褐色色、丁寧な研ぎ。	R157
第40図	134	G4Gr	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	小型鉢形土器の頸部に平行して二本の隆帯を貼付、上の隆帯のみ刻みを入るが、その隆帯に8文字形浮点を置く。	R241
第40図	135		5YR6/6 橙	5YR5/4 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内2	体部に平行に貼付された隆帯に連続した、先端渦巻状の棒状工具による斜交にある四角形浮点を施す。点に放射状に沈線、刻み隆帯を直線、U字状に描く。	R1
第40図	136		10YR7/4 に近い黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内2	ラッパ状にひろがる口縁に頸部からやや放射状にひろがる斜め刻みのある二本の隆帯。	R1
第40図	137		7.5YR6/4 に近い橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	頸部のくびれ部に二本の沈線を横り字形に結合する。	R1
第40図	138		7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	肥厚した口唇に棒状工具による連続斜交文。	R1
第40図	139	F2Gr	2.5YR5/6 明赤褐	5YR4/3 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内2	ラッパ状にひろがる無文口縁部、刻みのある隆帯が貼付される。	R1 R123
第40図	140	D4Gr	10YR7/3 に近い黄褐	10YR5/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内2	平行沈線による細かいLRの磨消文。	R110
第40図	141	D4Gr	5YR4/6 赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内2	方形区画の帯縄文。	R110
第40図	142	D4Gr	5YR5/4 に近い赤褐	5YR7/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	沈線による磨消文と区画内を埋める非常に細かいLRの縄文。	R110
第40図 PL.9	143	D4Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	平行沈線による三角形の幾何学文の内側を細かいLRの縄文で充填する。	R260
第40図	144	D2Gr	10YR5/3 に近い黄褐	2.5Y3/2 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内2	細かいLRの縄文を地文として施文した後、平行沈線を施文する。	R37
第40図	145		7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR5/3 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内2	口縁に磨消状の浮点文を貼付し、その下にやや弧状に帯縄文を施文する。	R55
第40図	146	F4Gr	2.5YR4/4 に近い赤褐	7.5YR5/3 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内2	くびれをもつ鉢形土器の無文口縁部、くの字状に内向する口唇に平行する沈線が施文される。	R72
第40図 PL.9	147	ITr	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内2	頸部くびれ部の上部に二本の刻みのある隆帯より縦手状の文様を起点に垂直、斜線を組み合わせた沈線による、細かいLRの磨消縄文を施す。174と同一個体。	R31
第40図 PL.9	148	G4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	ラッパ状にひらく、折返し状の口唇をもつ口縁部、LRの縄文を密接して全体に施文する。	R203
第40図 PL.9	149	G4Gr	7.5YR5/3 に近い褐	5YR5/4 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内2	断面形深縁部。沈線による横文と縦、直線による文様の中を細かいRLで充填して帯縄文としている。	R227
第40図	150	G4Gr	10YR4/1 褐灰	7.5YR5/3 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内2	やや直線的な弧の沈線で区切られた細かいLRの磨消縄文。	R204
第40図	151	G4Gr	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内2	沈線による区画内に細い、磨消縄文を施す。	R202
第40図	152	G4Gr	5YR7/8 橙	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内2	くの字に内向する口縁部の上面に沈線と、四角形の頂点に刻みのある工具による斜交文を施文。	R204
第40図	153	F2Gr	5YR5/4 に近い赤褐	5YR5/4 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内2	頸部から張り出する胴部上半に、二本の沈線で縦位放射状に頸部を区分し、その内部を縦位LRで充填する。	R213
第40図 PL.9	154	F2Gr	7.5YR5/3 に近い褐	2.5Y3/2 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内2	太い沈線による同心円文の中央部と上部左右に半線に近い円輪状の先端をもつ工具で斜交文を施す。	R213
第40図	155	G4Gr	10YR6/3 に近い黄褐	10YR5/3 に近い黄褐	IV群 A-2 類	堀之内2	頸部に平行して刻みのある隆帯を二本貼付する。	R228
第40図	156	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内2	ラッパ状にひらく無文口縁部、内側に折返し口縁状の成形をする。縁飾あり。	R228
第40図	157	G4Gr	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内2	横に平行する集合沈線。	R212
第40図	158	G4Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内2	くの字形に内向する口縁部、外側上面に細線文で文様を描く。	R212
第40図 PL.9	159	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内2	半皿Rの縄文を横位に施文し地文とし、円筒状の工具による斜交から放射状に沈線を配する。	R241

神田 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第40図 PL.9	160	G4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	口縁部下にLRの縄文を充填する沈降区画文。	R200
第40図	161	G4Gr	5YR5/3 に近い赤褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	無文口縁部に、くの字形に内溝する形で口唇を成形し、その上面に平行する沈降を引いて肩状にしている。	R200
第40図 PL.9	162	1Tr	7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR5/3 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	縦断面深縁口縁部、折返し口縁状に内側を肥厚し、把手部分下に円孔を穿け注口状にしている。細かいLRの帯文で逆三角形の幾何学文を施している。	R2
第40図	163	SD01 ・D2-3Gr	7.5YR6/3 に近い褐	5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	無文口縁部の内側、折返し口縁状の口唇内側に斜め列点状の連続刺突文を施す。	R42
第40図 PL.9	164	P646	5YR7/6 橙	10YR3/1 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	波状口縁の突起部、表面に入組みで渦巻文を施し、表面は粘土で肥厚した部分に先端ドーム状の工具による連続刺突文を施す。	R246
第40図	165	SK01	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	大きくひろく折返し口縁状の口縁部で、表面に平行する集合沈降。	R112
第40図 PL.9	166	SD01 ・C3Gr	7.5YR6/4 に近い橙	10YR7/4 に近い黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	細かいRLの帯文で幾何学文を描画し、その区画内を集合沈降で充填する。	R35
第40図	167	SK01	10YR4/1 黒灰	7.5YR4/1 黒灰	IV群 A-2 類	堀之内 2	細かいLRの帯文による逆三角形の幾何学文を施す。	R112
第40図	168	SK01	5YR4/2 灰褐	5YR4/3 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	フラップ状にひろく、口唇を折返し口縁状に内向する成形を行い、その上面に平行する沈降を引く。	R112
第40図 PL.9	169	SK01	5YR6/6 橙	5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	無文口縁部。	R112
第40図	170	SK27	2.5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	縦断面深縁の胴部に沈降による幾何学文で区画し、その内部にLRの縄文を充填する。	R221
第40図	171	SK21	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	弦状の集合沈降を交互に入組み合わせた文様を施す。	R182
第41図	172	3Tr	2.5YR6/6 橙	5YR5/4 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	フラップ状にひろく、折返し口縁状の成形をする無文口縁部。	R4
第41図	173	3Tr	10YR6/3 に近い黄褐	5YR5/4 に近い赤褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	口唇部を平坦に肥厚し、斜め刺突を起点に口縁に平行して細かい帯文を横に引く。根位の縦的な文様を施す。	R4
第41図 PL.10	174	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	頸部くびれ部の上部に二本の刻みのある隆帯の上に8字文を貼付し、その下に縦手状の文様を起点に垂直、斜線を組み合わせた沈降による細かいLRの磨消縄文を施す。147と同一個体？	R174
第41図 PL.10	175	SD1 ・B4-C4Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	くの字形に大きく屈曲する口縁部、表面に平行沈降による磨消縄文、裏面は内部突起の文様を起点に平行沈降と面を開けて平行沈降を施す。丁寧な研ぎで、表面は灰色で内部は還元して黒灰色を呈す。SD-1 出土	R34
第41図 PL.10	176	SK13	5YR6/8 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	波状口縁突起部に内窪状の状による刺突を施し、くの字形に屈曲した部分の上部に平行した沈降を引く。屈曲部の下には三角形を成すように平行沈降を引く。(四つ施式の可能性あり)。SK-13P-1出土	R215
第41図	177	1Tr	7.5YR5/4 に近い褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	口縁に沈降と円形磨形工具による刺突文、南側サブトレ東部部分出土。	R9
第41図 PL.10	178	F3Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR5/4 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	3本の平行沈降でやや隆状に三角形の幾何学文を描き、口縁部を粘土層一本上乗せする形で形成。その裏面接合部に沈降を引き、表はそのまま接合痕をこし、斜めの連続した沈降を刻む。	R161
第41図 PL.10	179	F4Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR5/4 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	平行沈降によって菱形の区画文が描かれ、その交点に竹管による刺突文が施される。	R75
第41図	180		10YR5/2 灰黄褐	7.5YR5/3 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	溝く成形された口唇部に肩をつくるように、沈降を両側に斜め刻みのある隆帯を施し、平行してその下に集合沈降を施す。	R55
第41図	181	E3Gr	7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR3/1 黒褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	刻みのある隆帯の下に比隣で横口字の文様を描く。	R45
第41図	182	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	口唇部に平行した沈降の下に太い隆帯をつけて肩を形成し、その下に浅い平行沈降の懸垂文を施す。	R204
第41図	183	G4Gr	10YR5/3 に近い黄褐	10YR7/3 に近い黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	無文口縁部に細い隆帯を垂下する。器壁が薄く、西日本系の土器かもしれない。	R209
第41図 PL.10	184	G3Gr	7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	口唇上部に粘土線を乗せ、その内側接合部にさらに粘土線を貼り付けるようにして肥厚した口唇の内外両面に、横口字に巻く沈降文を描く。	R214
第41図	185	G4Gr	10YR5/3 に近い黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2 ?	くびれをもつ鉢形土器の胴部に8字形浮点文を置き、それを起点に下部に縦線的に広がる沈降を施す。器壁が薄く、文様も縦角的で、西日本系の土器かもしれない。	R209
第41図 PL.10	186	F4Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	隆状？把手部分。	R72
第41図 PL.10	187	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	フラップ状にひろく口縁部の把手部分。細い粘土線を巻きつけるように貼付けた隆帯から渦巻文をつくり、接続する形で垂下させる。	R202

神岡 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第41図	188	Pt57	10YR4/2 灰黄褐色	10YR7/4 に近い黄褐色	IV群 A-2 類	堀之内 2	球胴中央部に細い沈線で4本の同心円を描き、それを取り囲む形で細いLRの磨消縄文を施す。Pt57 出土。	R249
第41図	189	1Tr	10YR4/2 灰黄褐色	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	球胴部の中心に手同心円の沈線の周囲に帯状のLRの磨消縄文を施す。	R2
第41図 PL.10	190	F2Gr	10YR6/2 灰黄褐色	10YR5/1 褐灰	IV群 A-2 類	堀之内 2	無文の注口土器上半部。	R118
第41図	191	1Tr	10YR5/2 灰黄褐色	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器の口縁部。	R15
第41図 PL.10	192	1Tr・G4Gr	7.5YR6/4 に近い橙	2.5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器。細かくLRの磨消縄文。	R20 R172 R200 R202
第42図 PL.10	193	F2Gr	2.5YR4/1 黄灰	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器。LRの磨消縄文、肩みのある細い隆帯の文様の交差点に形の崩れた8字形浮点文を形成する。	R116 R213 R238
第42図 PL.10	194	F2Gr	7.5YR7/4 に近い橙	5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器の板状把手。	R238
第42図 PL.10	195	G3Gr	2.5YR5/6 明赤褐色	2.5YR4/3 に近い赤褐色	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口接合部。G-3 グリッド出土。	R190
第42図 PL.10	196	G4Gr	7.5YR6/4 に近い橙	5YR7/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口接合部。G-4 グリッド出土。	R230
第42図 PL.10	197	G4Gr	7.5YR7/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口土器の注口と把手の部分。	R176
第42図 PL.10	198	G4Gr	7.5YR7/4 に近い橙	7.5YR6/3 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内 2	注口接合部。G-4 グリッド出土。	R1 R231 R213 R240
第42図	199	F2Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内	注口部。F-2 グリッド出土。	R237
第42図 PL.10	200	F2Gr	2.5YR4/1 黄灰	5YR5/3 に近い赤褐色	IV群 A-2 類	堀之内	注口部。	R52
第42図	201	F4Gr	10YR5/2 灰黄褐色	2.5YR6/8 橙	IV群 A-2 類	堀之内	注口部。F-4 グリッド出土。	R237
第42図	202		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内?	注口部。F-4 グリッド出土。	R237
第42図	203	G3Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内?	注口部。F-4 グリッド出土。	R237
第42図	204	BTr-5	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内?	注口部。F-4 グリッド出土。	R237
第42図 PL.10	205	2Tr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内?	注口部。F-4 グリッド出土。	R237
第42図	206	F4Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内?	注口部。F-4 グリッド出土。	R237
第42図	207	F2Gr	10YR4/2 灰黄褐色	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内?	注口部。F-4 グリッド出土。	R237
第42図	208	1Tr	10YR6/6 橙	10YR5/3 に近い黄褐色	IV群 A-2 類	堀之内?	注口部。F-4 グリッド出土。	R237
第42図	209	F4Gr	7.5YR6/6 橙	7.5YR5/4 に近い褐	IV群 A-2 類	堀之内?	注口部。F-4 グリッド出土。	R237
第43図 PL.10	210	E2Gr	7.5YR7/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。ゆるく燃った太いRの端に横と逆方向に1を付加案にした原体を横位に断面全体に施す。	R49 R121
第43図	211	F2Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。ゆるく燃った太いLの端に横と逆方向に1を付加案にした原体を横位に断面全体に施す。	R49 R121
第43図 PL.10	212	G4Gr	7.5YR5/2 灰褐色	7.5YR6/3 に近い褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横と逆方向に1を付加案にした原体を口縁に平行して横位に施す。G-4 グリッド出土。	R212
第43図	213	Pt36	5YR6/4 に近い橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太くゆるいRの端に横と逆方向に1、あるいは燃り戻したRを付加案にした原体を口縁に平行して横位に施す。Pt36 出土。	R107
第43図	214	1Tr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	太いLRの縄文を横位に施す。	R2
第43図	215	1Tr	10YR7/4 に近い黄褐色	7.5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横と逆方向にrを付加案にした原体を口縁に平行して横位に施す。	R2
第43図	216	1Tr	10YR6/4 に近い黄褐色	5YR5/6 明赤褐色	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横と逆方向にrを付加案にした原体を口縁に平行して横位に施す。	R5
第43図	217	1Tr	10YR8/4 浅黄褐色	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横と逆方向にrを付加案にした原体を口縁に平行して横位に施す。	R5
第43図	218	A2Gr	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	IV群 A-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRLに1を付加案にした原体の縄文を縦位に施す。	R3
第43図	219	1Tr	10YR5/3 に近い黄褐色	7.5YR5/4 に近い褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横と逆方向にrを付加案にした原体を横位に施す。	R8
第43図	220	1Tr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横と逆方向にrを付加案にした原体を横位に施す。	R8
第43図	221	2Tr	10YR6/3 に近い黄褐色	7.5YR4/2 灰褐色	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの縄文を付加した原体に、燃り戻されたRの縄文を付加して横位に施す。	R3
第43図	222	1Tr	10YR7/4 に近い黄褐色	7.5YR7/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。無節Lの縄文を口縁に縦位に施す。	R6
第43図	223	F3Gr	2.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横と逆方向にrあるいはLの燃り戻した原体を口縁に平行して横位に施す。	R153

種別 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第43図	224	F3Gr	5YR5/4 ぶい赤褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向にrがあるいはLの横断しを付加条にした原体を口縁に平行して横位に施文。	R161
第43図	225	F3Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR6/4 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いLの端に横りついでい縦線を付加し、横位に施文。裏面は磨いている。	R148
第43図	226	E2Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Lの端に横りと逆方向に1を付加条にした原体を口縁に平行して横位に施文。	R169
第43図	227	G4Gr	7.5YR6/4 ぶい橙	7.5YR4/2 灰褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向に1を付加条にした原体を斜めに施文。	R176
第43図	228	G4Gr	7.5YR6/4 ぶい橙	7.5YR4/4 褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向に1を付加条にした原体を口縁に沿って横位に施文。	R175
第43図	229	1Tr	7.5YR5/3 ぶい黄	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向にrを付加条にした原体を斜めに回転させ、付加した横線が垂下線になるように施文。	R20
第43図	230	1Tr	7.5YR5/4 ぶい黄	7.5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向にrを付加条にした原体を横位に施文。	R14
第43図	231	G4Gr	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/4 ぶい赤褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いLの端に横りと逆方向に1を付加条にした原体を横位に施文。	R174
第43図 PL-11	232	F4Gr	10YR6/3 ぶい黄橙	7.5YR6/4 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いLの端に横りと逆方向に1を付加条にした原体を横位に施文。	R165
第43図	233	G4Gr	5YR7/6 橙	10YR6/6 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向にrを付加条にした原体を口縁と平行に横位に施文。	R174
第43図	234	G4Gr	7.5YR5/3 ぶい黄	7.5YR4/2 灰褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。口縁に平行して太いLRの横文を施文。	R174
第43図	235	10YR5/3 ぶい黄	10YR5/3 ぶい黄	10YR5/3 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。無断しもしくはRLの横断しを口縁に平行して横位に施文。	R1
第44図	236	D4Gr	7.5YR6/4 ぶい黄	7.5YR6/4 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。素焼と斜め割製によって、付加条による施文を模倣している。	R110
第44図	237	D3Gr	7.5YR6/4 ぶい黄	7.5YR6/4 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に、横りと逆方向にrの横線を付加条にして口縁に沿って横位に施文。	R109
第44図	238	E3Gr	7.5YR7/4 ぶい黄	7.5YR6/4 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Lの端に、横りと逆方向に1の横線を付加条にして口縁に沿って横位に施文。	R45
第44図	239	F4Gr	10YR6/3 ぶい黄	5YR5/3 ぶい赤褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Rの端に、横りと逆方向にrの横線を付加条にして横位に施文。	R74
第44図	240	G4Gr	7.5YR4/1 焼灰	7.5YR6/4 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Lの端にrの横線を付加条にして横位に施文。	R227
第44図	241	F4Gr	7.5YR7/4 ぶい黄	5YR5/4 ぶい赤褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Lの端にLの端の横断しを付加して縦位に施文。B-2	R58
第44図	242	F4Gr	7.5YR7/4 ぶい黄	5YR5/4 ぶい赤褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Lの端にLの端の横断しを付加して縦位に施文。	R74
第44図	243	G4Gr	10YR5/1 焼灰	7.5YR5/4 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向にrの横線を付加条にして、縦位に施文。内面に擦痕状の調整。	R211
第44図	244	G4Gr	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR4/2 灰褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向にrの横線を付加条にして、縦位に施文。	R211
第44図	245	G4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。Rあるいは横り戻したLRの端を口縁に沿って横位に施文。	R204
第44図 PL-11	246	F2Gr	7.5YR5/4 ぶい黄	7.5YR5/3 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に1の横線を付加条にして、ややラフに横位に施文している。	R213
第44図	247	G4Gr	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向にrの横線を付加条にして横位に施文。	R202
第44図	248	G4Gr	10YR8/4 浅黄褐	10YR4/2 灰黄褐	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。太いRの端に横りと逆方向にrの横線を付加条にして横位に施文。	R228
第44図	249	3Tr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内並行	粗製土器。口縁部に沿って、太いRの端に横りと逆方向に、横断したLRの横文を付加条にして横位に施文。	R30
第44図	250	F4Gr	7.5YR6/4 ぶい黄	10YR4/2 灰黄褐	IV群 A-2 類	堀之内1?	右下がりに施文されたRLの横文を地文に、三本の平行沈線が垂下される。	R58
第44図 PL-11	251	F4Gr	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 A-2 類	堀之内1?	LRの地文に平行沈線と三本の集合沈線による平行円文が施文される。	R83
第44図	252	F4Gr	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/4 ぶい黄	IV群 A-2 類	堀之内1?	RLの横文を地文に、その上に沈線で半文字の幾何学文様を模倣。	R167
第44図 PL-11	253	F4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR4/3 褐	IV群 A-2 類	堀之内	複節RLRを横位に施文し地文とし、平行沈線あるいは横線を平行して圧痕し、縦に区画している。	R84
第44図	254	F4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR4/3 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	複節RLRを横位に施文し地文とし、平行沈線あるいは横線を平行して圧痕し、縦に区画している。	R58
第44図	255	E1Gr	7.5YR4/4 褐	5YR5/4 ぶい赤褐	IV群 A-2 類	堀之内	253, 270と同一個体。	R186
第44図	256	F4Gr	7.5YR4/1 焼灰	7.5YR5/4 ぶい黄	IV群 A-2 類	堀之内	沈線による垂下線と縦に区画された内部に、縦位にLRの横文を充填する。	R186
第44図	257	G4Gr	10YR3/2 黒褐	7.5YR5/4 ぶい黄	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。角をもつ棒状工具で平行沈線を引き、その内部を同じ工具で連続斜交文を施した反面の内部をRLの横文で埋める。	R203
第44図	258	2Tr	5YR6/6 橙	7.5YR5/4 ぶい黄	IV群 B-2 類	堀之内	粗製土器。太いRLの横文を口縁に沿って横位に施文後、口縁と平行して沈線を引く。	R23
第44図	259	G4Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	IV群 B-2 類	堀之内	粗製土器。LRの横文を口縁に沿って横位に施文。	R230

神道 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第44図 PL.11	260	G3Gr	7.5YR5/4 に近い褐色	5YR6/6 褐色	IV群 B-2 類	堀之内 1 ?	粗製土器。口唇に沿う沈降の下にLRの縄文を横位で全面に施す。半部Lの膨張した原体を斜めにR268押し付けている。	R268
第44図 PL.11	261	G4Gr	5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	IV群 B-2 類	堀之内 1 ?	粗製土器。口唇上面に沈降を施す。地文としてLRの縄文を横位に施した後に、沈降による垂下層で縦の区画を形成する。	R232
第44図 PL.11	262	2Tr	7.5YR6/4 に近い褐色	7.5YR5/4 に近い褐色	IV群 B-2 類	堀之内	口縁に平行する沈降の下に三条のRLの太い縄文を施す。A土坑近くで出土。	R26
第44図 PL.11	263	G4Gr	7.5YR6/3 に近い褐色	7.5YR7/6 褐色	IV群 B-2 類	堀之内隆行?	粗製土器。太い無節Rの縄文を地文とし、その後二本の平行する1を押し立て長方形区画のように施す。さらにその間に縦位に沈降か縦線の側面圧痕で縦線状の沈降文を施す。	R210
第44図 PL.11	264	F4Gr	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR6/4 に近い褐色	IV群 A-2 類	堀之内	やや斜に平行する集合沈降文を施す。	R167
第44図 PL.11	265	G4Gr	7.5YR6/6 褐色	5YR7/8 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	断面三角形のための沈降で斜行文を描く。	R174
第45図 PL.11	266	F4Gr	7.5YR6/4 に近い褐色	5YR6/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製?深鉢底部付近。地文に細かいLRの縄文を縦76位施した後に、磨いている。その後、条線状の沈-R79磨を描くが、沈降間の縄文を磨消している。	R76 - R166
第45図 PL.11	267	G4Gr	2.5Y4/1 黄灰	7.5YR6/4 に近い褐色	IV群 A-2 類	堀之内	LRの縦位施文?	R271
第45図 PL.11	268	2Tr・SU01	7.5YR6/4 に近い褐色	5YR6/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。大きなRLの原体を右下がり斜めに断面全体にランダムに施すし、地文としている。	R25
第45図 PL.11	269	2Tr・SU02	7.5YR5/2 灰褐色	7.5YR7/8 黄褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。深鉢下半部。LRの縄文を全体に施すとした後、縦に常状に磨り消している。	R28
第45図 PL.11	270	F4Gr	5YR5/4 に近い赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。腹部RLRの縄文を横位に施す地文とし、平行沈降あるいは横線を平行して圧痕し、縦R84に区画している。253.254と同一個体。	R84
第45図 PL.11	271	E2Gr	10YR3/2 黒褐色	7.5YR4/3 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。ゆるやかなに底状になる口縁。RLの縄文を横位に施す。	R193
第45図 PL.11	272	1Tr	5YR6/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に対し右斜めにRLの縄文が施される。	R14
第45図 PL.11	273	G3Gr	7.5YR7/6 褐色	5YR6/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行してLRの縄文を横位に施す。	R189
第45図 PL.11	274	7.5YR6/4 に近い褐色	5YR6/6 明赤褐色	5YR5/3 に近い赤褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。LRの縄文を横位に施す。	R181
第45図 PL.11	275	E2Gr	5YR5/4 に近い赤褐色	5YR5/3 に近い赤褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。太いLRの縄文を横位に施す。	R160
第45図 PL.11	276	D4Gr	5YR7/8 褐色	5YR6/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。底状口縁の突起部。細かいRLの縄文をラフに施す。	R110
第45図 PL.11	277	E1Gr	7.5YR7/4 に近い褐色	10YR5/3 に近い黄褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して薄くRLの縄文を横位に施す。	R186
第45図 PL.11	278	E3Gr	7.5YR7/6 褐色	5YR6/8 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器?。口縁に平行してLR?の縄文を横位に施す。	R45
第45図 PL.11	279	G4Gr	7.5YR6/4 に近い褐色	5YR6/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。角ばった口縁に横位のLRの縄文を施す。	R227
第45図 PL.11	280	G4Gr	5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に横位のLRの縄文を施す。	R206
第45図 PL.11	281	G4Gr	7.5YR6/4 に近い褐色	7.5YR6/4 に近い褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。LRの縄文を横位に施す。	R226
第45図 PL.11	282	G4Gr	7.5YR7/6 褐色	10YR5/2 灰黄褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して太いLRの縄文を施す。	R174
第45図 PL.11	283	G4Gr	5YR6/6 褐色	7.5YR5/4 に近い褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して太いLRの縄文を施す。	R174
第45図 PL.11	284	2Tr	7.5YR6/4 に近い褐色	7.5YR6/4 に近い褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して太いLRの縄文を施す。南側サブト出土。	R13
第45図 PL.11	285	G4Gr	7.5YR6/6 褐色	7.5YR5/4 に近い褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行してLRの縄文を横位に施す。	R187
第45図 PL.11	286	G4Gr	10YR7/4 に近い黄褐色	5YR7/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行してRLの縄文を横位に施す。	R172
第45図 PL.11	287	F4Gr	7.5YR6/4 に近い褐色	5YR7/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行して、Rを磨り立てた原体を横位に施す?	R165
第45図 PL.11	288	E2Gr	7.5YR6/4 に近い褐色	10YR5/3 に近い黄褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に平行してLRの縄文を施す。	R157
第45図 PL.11	289	F4Gr	5YR6/6 褐色	7.5YR4/3 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁部に平行してRLの縄文をゆるく施す。	R74
第45図 PL.11	290	F2Gr	5YR6/4 に近い褐色	5YR5/4 に近い赤褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に対して縦位にRの縄文を施す後、斜めに重ねることやや縦の羽状にみえる。	R213
第45図 PL.11	291	A7r	5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。無節Rを横位に施す。	R17
第45図 PL.11	292	1Tr	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR4/3 褐色	IV群 B-2 類	堀之内	粗製土器。荒いLRの縄文を横位に施す。	R8
第45図 PL.11	293	F4Gr	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR6/4 に近い褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。口縁に沿ってLRの縄文が横位施される。	R83
第45図 PL.11	294	1Tr	7.5YR6/6 褐色	7.5YR5/3 に近い褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。底状口縁に無節LRの縄文を横位に施す。	R8
第45図 PL.11	295	F3Gr	2.5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	IV群 A-2 類	堀之内	粗製土器。太い無節Rの縄に磨りこみ逆方向にを付加後にした原体を口縁に平行して横位施す。	R164
第45図 PL.11	296	E1Gr	7.5YR6/4 に近い褐色	7.5YR6/4 に近い褐色	IV群 A-3 類	加曾利 B1	平行沈降内にLRの磨消縄文を施すし、[の]字文で区分する。裏面口縁部に平行する沈降。B-1 グリッド出土。	R186
第45図 PL.11	297	D4Gr	7.5YR4/2 灰褐色	10YR5/2 灰黄褐色	IV群 A-3 類	加曾利 B ?	表に三本の平行沈降。裏に集合沈降を横位に施す。丁寧な研ぎ。	R69
第45図 PL.11	298	ATr1Gr	5YR6/6 褐色	5YR6/6 褐色	IV群	後期	底状口縁部。	R2
第45図 PL.11	299	BT1r	10YR5/3 に近い黄褐色	5YR4/2 褐色	IV群	後期	口縁部。	R18
第45図 PL.11	300		5YR5/6 明赤褐色	5YR4/4 に近い赤褐色	IV群	後期	小さな突起部のある口縁部。口唇上縁に斜め刻み。裏面に口縁に平行する沈降を施す。	R19
第46図 PL.11	301	2Tr	10YR6/4 に近い黄褐色	10YR5/3 に近い黄褐色	IV群	後期	口唇に平行する沈降の直下に薄い角のあるヘラ状の工具で連続斜交文を施す。裏面に丁寧な研ぎがみられるが、胎土は浮石状の粒子を多く含む。西日本系(磨っ地)か。	R23

埋蔵 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第46図 PL-11	302	E1Gr	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群	後期?	大きくひろく口縁部に、外側より受け口状の圧えを加えた成形を施す。	R186
第46図 PL-11	303	G4Gr	5YR6/6 橙	7.5YR4/4 褐	IV群	後期?	鉢胴部の屈曲部に平行する沈線と、そこからやや斜めに弧状に下がる3本の集合沈線。四ッ池式か。	R230
第46図	304	SK1	7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR5/3 に近い褐	IV群 C 類	緑帯文系?	鉢形土器の胴部。薄く、多量の砂粒を含む灰白色の粘土で、肩の屈曲部に粘土で肥厚した後、平行沈線を施して鋭角状に成形する。平行沈線内は細かいLの単純織文で充填する。	R112
第46図	305	SK21	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR5/4 に近い褐	IV群 C 類	緑帯文系?	胴部。薄く、多量の砂粒を含む灰白色の粘土で、横位の平行沈線による施文。	R182
第46図	306	BT1	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	口縁裏に浅い沈線。	R13
第46図	307		5YR6/6 橙	7.5YR4/2 灰褐	不明	後期?	無文の口縁部。	R55
第46図	308	2Tr	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	IV群 C 類	後期?	角のある口唇に平行して二本の沈線を施す。多量の砂粒を混入し、表面が白肌色を呈す。西日本系の土器か。南側サプトン出土。	R13
第46図	309	G4Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR5/3 に近い褐	不明	後期?	口縁に平行して沈線が引かれ、その下にダッシュ状の刺突文が施文される。	R211
第46図	310	1Tr	5YR5/6 明赤褐	7.5YR4/3 褐色	不明	後期?	縦位 R 標赤で器体全域に施文。粘土は白色砂粒を多く含む泥が焼成は良好。南側サプトン東部分出土。	R9
第46図	311	1Tr	10YR5/3 に近い黄褐	5YR6/6 橙	不明	後期?	底部。胴代直。	R15
第46図	312	SKA・2Tr	10YR6/3 に近い黄	10YR6/4 に近い黄橙	不明	後期?	粗製土器。無文の深鉢底部近くの下平部。	R25
第46図	313	ATr-1	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	底部。	R8
第46図	314	E2Gr	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR6/6 橙	不明	後期?	胴代直のある薄い底部。	R160
第46図	315	F4・G4Gr	2.5Y3/2 黒褐	2.5YR6/8 橙	不明	後期?	胴代直のある底部。	R167・R212
第46図	316	G4Gr	7.5YR6/3 に近い褐	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 C 類	後期?	はっきりとした胴代直の底部。粘土が灰白色で砂粒を多く含んでおり西日本系の土器と思われる。	R200
第47図	317	1Tr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 に近い橙	不明	後期?	底部。1 トレンチ出土。	R20
第47図	318	F3Gr	7.5YR6/4 に近い橙	2.5YR5/6 明赤褐	不明	後期?	尖底に近い平底の底部。	R163
第47図	319	G4Gr	10YR5/2 灰黄褐	5YR7/6 橙	不明	後期?	底部。胴代直のある底部。G-4 グリッド出土。	R207
第47図	320	BT-5	7.5YR6/4 に近い橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	底部。胴代直のある底部。	R4
第47図	321	1Tr	10YR6/4 に近い黄橙	7.5YR6/6 橙	不明	後期?	胴代直のある底部。	R2
第47図	322	G4Gr	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR6/4 に近い橙	不明	後期?	胴代直のある底部。種子痕。G-4 グリッド出土。	R227
第47図	323	2Tr	7.5YR6/4 に近い橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	胴代直のある底部。	R3
第47図	324	G4Gr	10YR8/4 浅黄橙	10YR5/3 に近い黄褐	不明	後期?	胴代直のある底部。	R231
第47図	325	SK1	7.5YR6/4 に近い橙	5YR6/6 橙	不明	後期?	胴代直のある底部。	R112
第56図 PL-12	362	SK8	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	不明	不明	コップ状のミニチュア土器。全体に縦位の研ぎをかけ、底部に沿って沈線を引き高台状に整形している。SK-8 出土。	R144
第56図 PL-12	363	1Tr	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/4 に近い黄橙	不明	不明	壺のミニチュア土器。1 トレンチ出土。	R2
第56図	364	1Tr	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR7/2 に近い黄褐	土師器		小型の鉢形の壺胴部。1 トレンチ出土。	R20
第56図	365	ATr-1	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	土師器		高坪口縁部。	R8
第56図	366	SD01・D2Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	土師器		高坪口縁部。SD-1 出土。	R39
第56図	367	SD01・D2Gr	5YR6/6 橙	2.5YR6/8 橙	土師器		円孔透しのある高坪胴部。SD-1 出土。	R39

第5表 E地区 出土石器観察表

種別 国産	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	処理 番号
第48区 PL.12	326	ATr1Gr 延長部	石鏃	黒曜石	2.48	1.6	0.47	1.01	凹基無茎鏃。	R2
第48区 PL.12	327	SD01	石鏃	黒曜石	1.67	1.47	0.36	0.68	左腰部欠損。SD-1出土。	R64
第48区 PL.12	328	E2Gr	石鏃	黒曜石	(1.2)	1.03	0.23	0.24	先端部に衝撃剥離がある凹基無茎鏃。	R262
第48区 PL.12	329	SK07	石鏃	黒曜石	0.69	1.04	0.31	0.26	上部、左腰部欠損の凹基無茎鏃。SK-7出土。	R112
第48区 PL.12	330	F4Gr	削器	黒曜石	3.47	2.98	1.48	12.77	刃部の角度が大きいため、掻器としても良い。	R92
第48区 PL.12	331		楔形石器	黒曜石	3.26	1.54	1.46	6.49	両縁石核の可能性もある。覆土より出土。	R256
第48区 PL.12	332	3Tr	楔形石器	黒曜石	2.4	0.96	0.64	1.11		R19
第48区 PL.12	333	D4Gr	楔形石器	黒曜石	1.89	1.59	0.66	1.69		R69
第48区 PL.12	334	F4Gr	楔形石器	黒曜石	1.23	1.85	0.58	1.2		R166
第48区 PL.12	335		剥片	軟玉 (ネフタイト)	2.7	3.25	0.69	8.71	両端打法によって剥離された剥片。玉斧の素材剥片と考えられる。	R274
第48区 PL.12	336	F2Gr	玉斧	軟玉 (ネフタイト)	2.54	9.98	0.52	2.32	非常に小さな定角式磨製石斧。全面磨面仕上げ。	R216
第48区 PL.12	337		磨製石斧	蛇紋岩?	(6.4)	5.2	2.6	162.63	定角式磨製石斧。後石として再利用されたのか、焼熱による亀裂が全面におよぶ。	R217
第48区 PL.12	338		打製石斧	硬砂岩	10.45	4.91	1.56	88.98	バナ形に近い短冊形。表採品。	R273
第48区 PL.12	339		打製石斧	硬砂岩	8.9	3.6	1.4	53.18	小型の短冊形。	R20
第49区 PL.12	340	2Tr 南側サブトレ	打製石斧	硬砂岩	8.32	5.48	2.12	115.22	リダクションで短くなった短冊形。	R13
第49区 PL.12	341	F4Gr	打製石斧	砂岩	7.12	4.28	1	41.75	円礫面をもつ剥片素材の小型短冊形石斧。	R52
第49区 PL.12	342	ATr-1 拡張区	打製石斧	粘板岩	11.86	4.95	2.05	124.58	アーモンド形状だが短冊形に分類可能。	R8
第49区 PL.12	343	ATr-1 拡張区	打製石斧	緑色岩	8.72	4.88	1.74	90.85	短い短冊形。	R8
第49区 PL.12	344	1Tr	打製石斧	砂岩	6.92	4.4	1.28	30.88	バナ形に近い短冊形。台石的に再利用されている。	R2
第49区 PL.12	345	F4Gr	打製石斧	硬砂岩	9.12	5.53	1.85	103.97	分銅形に近い短冊形。	R68
第49区 PL.12	346	SK14	打製石斧	粘板岩	22.26	8.41	3.61	764.63	分銅形に近い短冊形。SK14出土。	R180
第49区 PL.12	347	B4Gr	打製石斧	粘板岩	8.11	5.58	1.81	92.78	分銅形?	R1
第49区 PL.12	348		打製石斧	硬砂岩	(4.91)	4.38	1.97	48.18	短冊形の頭部。表採品。	R60
第49区 PL.12	349	ATr	打製石斧	硬砂岩	(4.72)	5.31	2.45	40.62	短冊形の刃部と頭部欠損。	R17
第49区 PL.12	350	BTr・SD01	打製石斧	富士川ホルン フェルス	(4.92)	4.71	1.68	45.7	短冊形のリダクションの進んだ刃部部分。	R12
第50区	351	2Tr	打製石斧	硬砂岩	8.82	9.38	2.41	243.1	石鏃に近い大型のバナ形。	R3
第50区	352		磨製	砂岩	9.52	7.88	3.51	306.39	円礫を分割し、その主要剥離面に平坦剥離を施す。打製石斧としても良い。表採品。	R272
第50区	353		石鏃	粘板岩	7.15	4.21	0.98	44.11	上下左右に打ちききのある礫石鏃。	R20
第50区	354	D2Gr・SD02	石鏃	粘板岩	5.59	2.42	1	18.31	長軸両端に切れ目を入れた円礫石鏃。SD-2出土。	R38
第50区	355	1Tr	敲石	凝灰岩質砂岩	10.72	5.89	4.48	393.36	全体を最打型形していることから、欠損した乳棒状磨製石斧の転用品の可能性が高い。	R14
第50区	356	2Tr・SKA	磨・敲石	砂岩	9.33	6.45	4.32	370.4	SKAの埋塞に伴出。	R24
第50区	357	F4Gr	敲石	粗粒凝灰岩	(8.03)	4.11	3.55	149.69	小型の石棒の可能性もあり。	R94
第50区	358	BTr・SD01 北端	磨・敲石	砂岩	11.78	5.81	5.41	553.12		R13
第50区	359	BTr・SD01 北端	磨・敲石	石英閃緑岩	(8.38)	(5.28)	(5.31)	285		R13
第50区	360	G4Gr	石棒	砂岩	(12.13)	(9.98)	(3.86)	346.37	大型石棒の角部分。	R225
第50区	361	G4Gr	石棒	粗粒安山岩	(11.35)	(11.92)	(6.1)	1009.5	大型石棒の頭部。	R224

第4章 天間沢遺跡 G 地区（第7地区）

第1節 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

天間地区内において個人住宅建設に伴う小規模開発が増加し、遺跡保護のために緻密な遺跡範囲確認が急務であると判断されたことから、昭和58年秋、富士市教育委員会は遺跡範囲確認のための調査（旧：第8次調査）を実施することとなった。

第3地区の北東に位置する第7地区（天間1045-5、旧：第8次 G 地区）、第1地区から南へ200 mほどの第8地区（天間1130-1、旧：第8次 H 地区）、同じく南へ330 mほどの第9地区（天間1121、旧：第8次 I 地区）、第4地区から南へ180 mほどの第10地区（天間529、旧：第8次 J 地区）の4地点に調査地区を設定した。

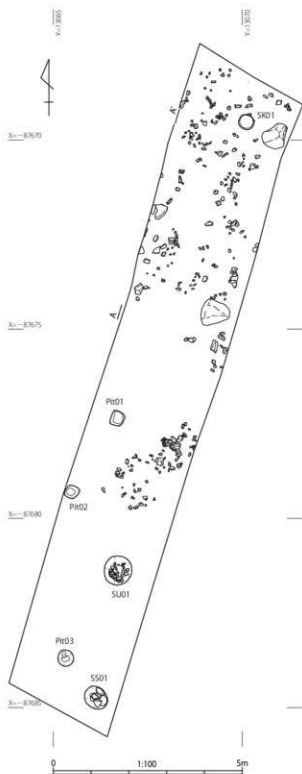
発掘調査の経過

G 地区の調査は昭和58年10月20日から24日にかけて行われた。

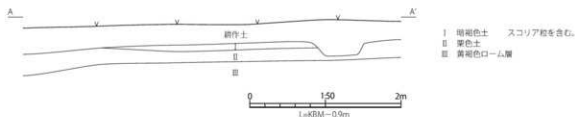
南北方向に、幅3 m、長さ17.5 mのトレンチを設定し掘削したところ、トレンチ北半で縄文時代の配石と土坑1基（SK01）が、南半で縄文時代の配石土坑1基（SS01）、埋甕土坑1基（SU01）、古墳時代と思われるピット3基（Pit01～03）が検出された。



第57図 G 地区 位置図



第58図 G 地区 トレンチ全体図



第59図 G地区 トレンチセクション図

第2節 発掘調査の成果

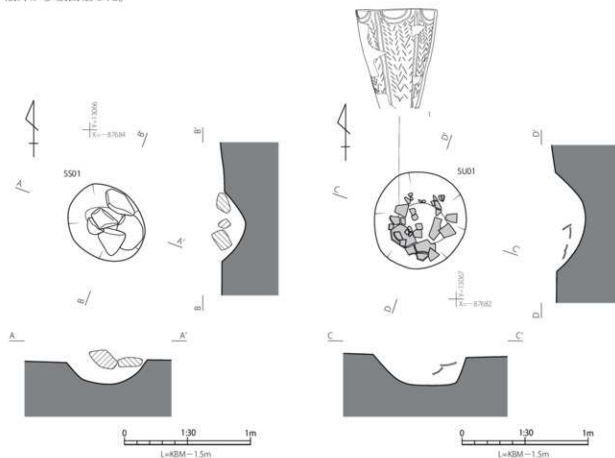
遺構

配石土坑 SS01 は、長軸 64cm、短軸 55cm、深さ 19cm で丸底の円形土坑で、中から長さ 15 ～ 30cm ほどの石が 5 つ出土した。

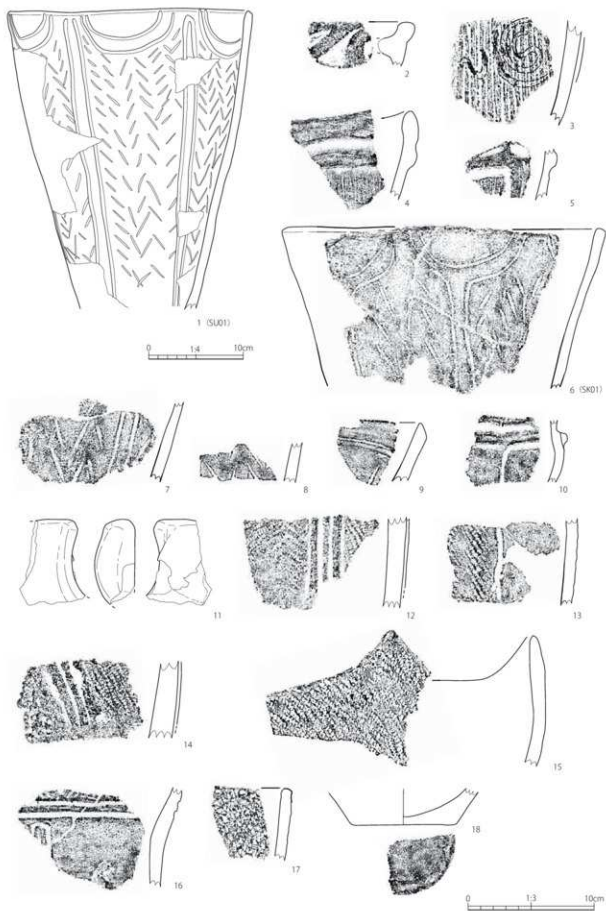
埋壺土坑 SU01 は、長軸 77cm、短軸 72cm、深さ 25cm で丸底の円形土坑で、中から縄文土器（Ⅰ）の破片が多数出土した。

土坑 SK01 は径 40cm の正円形を呈する。

Pit01・02 は長軸 40cm ほどの隅丸方形、Pit03 は径 45cm ほどの正円形である。



第60図 G地区 SS01・SU01



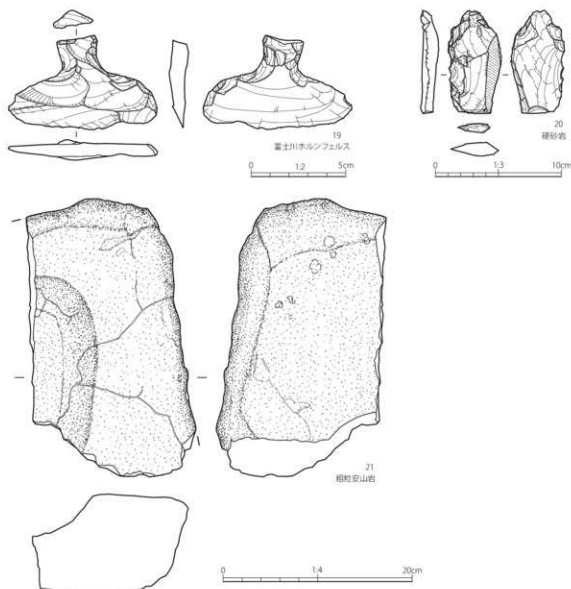
第 61 図 G 地区 出土物実測図 (1)

遺物

出土遺物は縄文時代中・後期の遺物のみで、最も古いものは2の中期中葉、Ⅲ群A-1類(井戸尻式)と3のⅢ群A-2類(曾利Ⅱ式)のみ、最も新しいものが16の後期のⅣ群A-2類(堀之内Ⅰ式)のみで、それ以外はⅢ群A-2類の曾利Ⅳ・Ⅴ式とⅢ群B-2類の加曾利E式に比定される。遺構から出土する土器も、埋壺土坑SUからは1の曾利Ⅴ式の深鉢、土坑SKからも6の曾利Ⅴ式の深鉢の大型破片が

出土していることから、G地区の主な活動期は、縄文時代中期末の短い期間といえる。法量は1が口径(最大径)25.9cm、残存高31.5cmで、6が推定口径25.8cm、残存高12.6cmである。

石器は、19の横形石ヒと、打製石斧の再生剥片を削器とした20、そして全体を4分の1に分割し、焼礫として再利用している21の石皿が出土している。



第62図 G地区 出土遺物実測図(2)

第6表 G地区 遺構一覧表

遺構種別	報告遺構名	調査時遺構名	位置	時代	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (古→新)	備考
土坑	SK01	土坑	1Tr	縄文	40	40	-	正円形	-	-	
土坑	SK01	配石土坑	1Tr	縄文	64	55	19	正円形	丸底	-	
土坑	SU01	埋篋土坑	1Tr	縄文	77	72	25	正円形	丸底	-	
ピット	PI01	P1	1Tr	古墳	38	35	-	隅丸方形	-	-	
ピット	PI02	P2	1Tr	古墳	40	35	-	隅丸方形	-	-	
ピット	PI03	P3	1Tr	古墳	45	41	-	正円形	-	-	

第7表 G地区 出土土器観察表

探検 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第61図 PL13	1	SU	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	管利 V	口縁部に7単位の高張の文様を配し、その間を口縁から口字を起点を平行沈線による懸垂文を下ろす。それによる区画内を八の字で埋める。	R99
第61図	2	SK	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻?	口縁部内側に受口状の突起を持つ。口縁部文様帯に斜位の隆帯と渦巻文を連続した文様を施す。	R2
第61図 PL14	3		10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	管利 II	大型縄目土器の胴部。縦位の条線を地文に、粘土粒の平行浮線文による懸垂文と渦巻文を貼付する。	R5
第61図 PL14	4	SK	7.5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	管利 IV	両側に浅い凹線を作る低い幅広の隆帯による区画内を縦位条線で埋める。	R2
第61図	5	SK	5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	管利 IV	両側に浅い凹線を作る低い幅広の隆帯による区画内を縦位条線で埋める。	R2
第61図 PL14	6		5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	管利 V	凹形の連続弧線文の沈線で、そのまま懸垂文として垂下し、それによる区画内を八の字で埋める。	R1
第61図 PL14	7	土坑一括	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	管利 V	平行沈線の懸垂文に区画された中を八の字で埋める。	R1
第61図	8	土坑一括	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	管利 V	八の字文を全体に施文。	R1
第61図 PL14	9	SK	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群 A-2 類	管利 V	口縁部に平行する沈線と、そこから垂下される懸垂文による区画内を八の字で埋める。	R2
第61図 PL14	10	SK	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	Ⅲ群 A-2 類	管利	小型蹄付土器の口縁部。蹄部分から沈線による懸垂文が垂下される。	R2
第61図 PL14	11	SK	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	管利?	外反する板状の肥手部分。	R2
第61図 PL14	12		7.5YR4/3 褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加管利 E	三本の半隆帯による懸垂文の区画内を、LR の縄文で縦・横位を組み合わせて縦位の羽状縄文として施文する。	R5
第61図 PL14	13	SK	10YR5/2 灰黄褐	5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-2 類	加管利 E	沈線によって区画された内部を多量の LR の縄文で充填する。	R2
第61図 PL14	14		7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加管利 E	三本の半隆帯による懸垂文による区画内を RL の縄文で横位に施文する。	R5
第61図 PL14	15		7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	Ⅲ群 B-2 類	加管利 E?	板状三角形の把手をもつ口縁部。地文として RL の縄文をワフに横位施文する。	R2
第61図 PL14	16	SK	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR7/6 橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内1?	深鉢の頸部に平行沈線による文様を描き、凸状の文様内に突起を施す。頸部から口縁部の文様帯には同心円状の沈線が観察される。	R2
第61図 PL14	17	SK 一括	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	不明	不明	口縁に平行して、太くワフな LR の縄文を横位に密接施文する。	R1
第61図	18	SK	10YR5/2 灰黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	Ⅲ群	中期	高台のような突出しがある底部。	R2

第8表 G地区 出土土器観察表

探検 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第62図 PL14	19		石七	富士川ホルンフェルス	4.93	7.8	0.93	25.92	横形石七。	R5
第62図 PL14	20		削器	硬砂岩	5.23	4.09	1.28	52.06	打製石片製作時の剥片を素材としている。	R4
第62図 PL14	21		石皿	船粒安山岩	29.43	17.48	10.9	7780	全体にうすくピンク色に赤化している。	R6

第5章 天間沢遺跡 H 地区（第8地区）

第1節 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

天間地区内において個人住宅建設に伴う小規模開発が増加し、遺跡保護のために緻密な遺跡範囲確認が急務であると判断されたことから、昭和58年秋、富士市教育委員会は遺跡範囲確認のための調査（旧：第8次調査）を実施することとなった。

第3地区の北東に位置する第7地区（天間1045-5、旧：第8次G地区）、第1地区から南へ200mほどの第8地区（天間1130-1、旧：第8次H地区）、同じく南へ330mほどの第9地区（天間1121、旧：第8次I地区）、第4地区から南へ180mほどの第10地区（天間529、旧：第8次J地区）の4地点に調査地区を設定した。

発掘調査の経過

H地区の調査は昭和58年11月7日から11日にかけて行われた。

南北方向に、幅3m、長さ15.2mのトレンチを設定し掘削したところ、トレンチ南端で2基のピットが検出され、トレンチ北半で古墳時代前期の建物（SB01）が検出された。SB01検出部分のみトレンチを東西に拡張して、可能な範囲で完掘した。



第63図 H地区 位置図

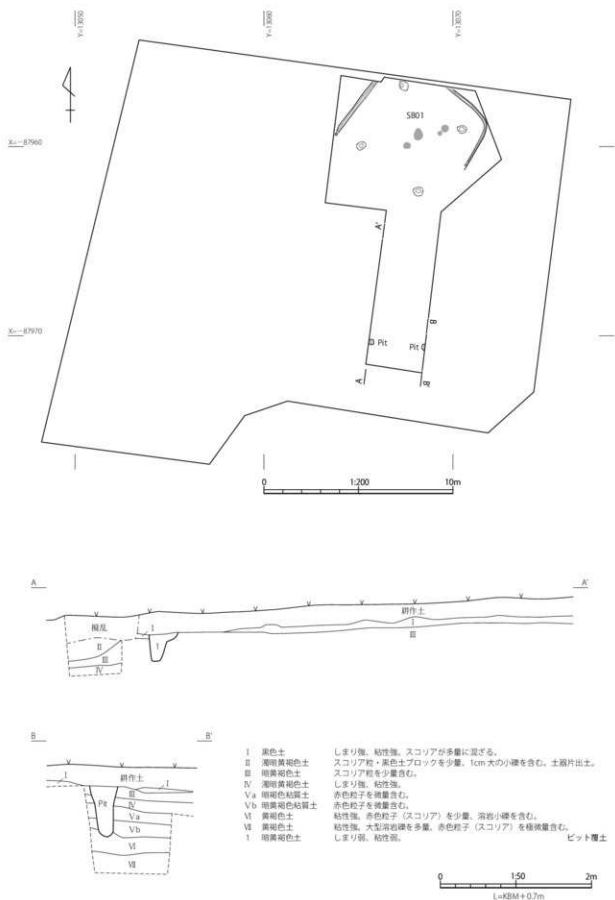
第2節 発掘調査の成果

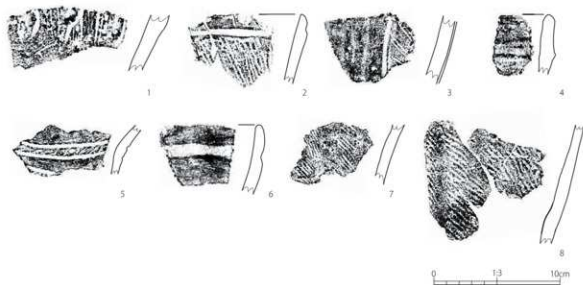
縄文時代

調査区内より、縄文時代中期～後期の土器片および、それに伴うと考えられる石器が出土した。遺構は検出されなかった。

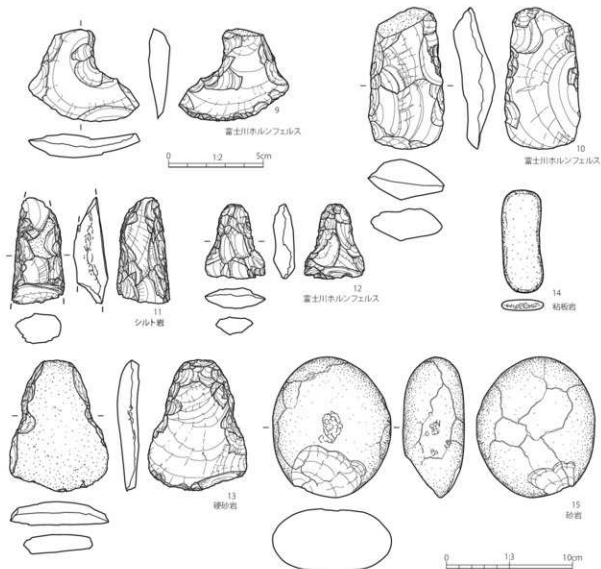
縄文時代の遺物は、1～4がⅢ群A-2類の曾利Ⅳ式の土器で、5がⅣ群A-2類の堀之内2式の土器である。6～8は時期不明土器であるが、7は胎土から西日本系の土器かもしれない。

石器では、9の横形石ヒと10・11のバチ形に近い短冊形の打製石斧、12はバチ形の小型打製石斧、13はバチ形の打製石斧であるが、11と12は緻密な石材を素材としており、筈形石器的な利器としての機能をもつ石器として別分類すべきかもしれない。14は石器製作用の小型の敲石で、15は敲・凹石を焼石として再利用している。

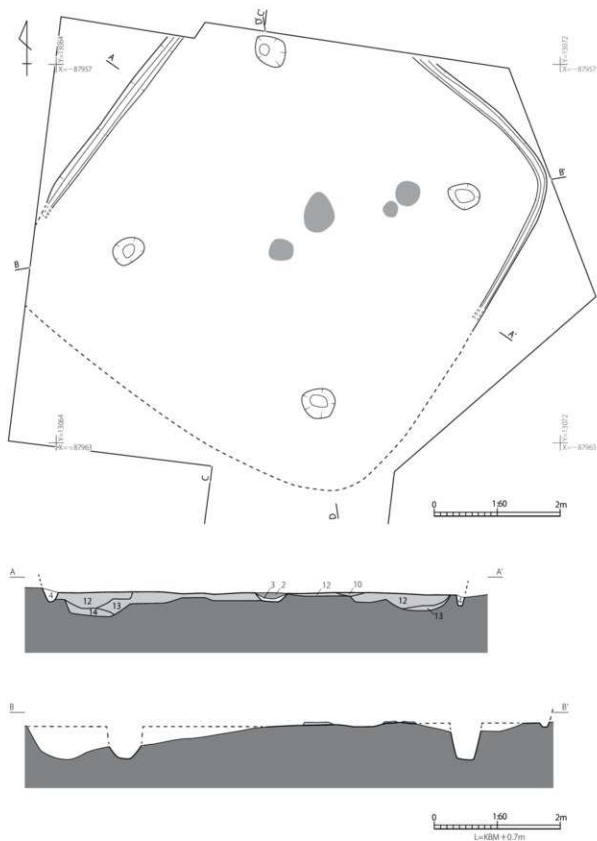




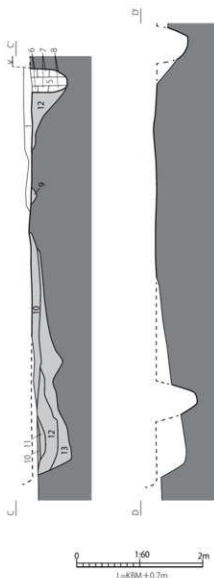
第65図 H地区 出土遺物実測図(縄文時代)(1)



第66図 H地区 出土遺物実測図(縄文時代)(2)



第67図 H地区 SB01 平面図、セクション図



- | | | |
|----------|-----------------|-------------|
| 1 黄褐色土 | スコリアが混ざる。 | SB01 覆土 |
| 2 粘土 | スコリアが混ざる。 | SB01 壁? 覆土 |
| 3 暗茶褐色土 | スコリアを少量に含む。 | SB01 壁? 覆土 |
| 4 暗褐色土 | 黄褐色ブロックが混ざる。 | SB01 壁溝? 覆土 |
| 5 暗褐色土 | | SB01 柱穴柱痕 |
| 6 黄褐色土 | | SB01 柱穴覆土 |
| 7 暗褐色土 | スコリアを少量含む。 | SB01 柱穴覆土 |
| 8 暗褐色土 | スコリアを少量含む。 | SB01 柱穴覆土 |
| 9 黄褐色土 | スコリアがブロック状に混ざる。 | SB01 壁方埋土 |
| 10 暗褐色土 | スコリアが混ざる。 | SB01 壁方埋土 |
| 11 暗黄褐色土 | スコリアを少量に含む。 | SB01 壁方埋土 |
| 12 黒色土 | スコリアを多量に含む。 | SB01 壁方埋土 |
| 13 暗褐色土 | スコリアを多量に含む。 | SB01 壁方埋土 |
| 14 暗褐色土 | スコリアを少量含む。 | SB01 壁方埋土 |
| | 黄褐色ブロックが混ざる。 | SB01 壁方埋土 |

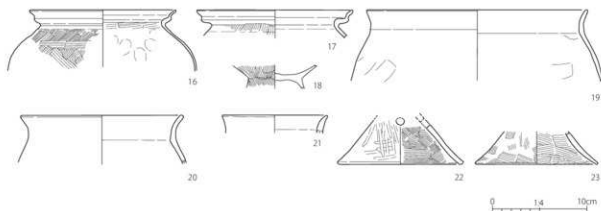
古墳時代

建物 SB01 は、北の角が調査区外にあり、南半は上面を削られて掘方のみの検出であるが、主軸方位を N-34.6°-E にとり、南北幅 6.90 m、東西幅 6.70 m を測る方形の建物と推定できる。建物中央付近に焼土を覆土とする浅い掘り込みが認められ、炉の可能性もある。壁の残存部分には、幅 25cm、深さ 15cm ほどの壁溝が巡る。4 基の柱穴が検出され、南北・東西とも柱間寸法 3.90 m、床面からの深さは 50～60cm と推定される。掘方は壁際を溝状に深く掘削しており、特に東・南・西は掘削幅が広い。

トレンチ南端の西壁際と東壁際に検出された 2 基のビットは、いずれも平面形は径 30cm ほどの正円形を呈するとみられる。深さは西が 35cm、東は 66cm を測り、断面形は U 字形を呈する。

古墳時代の遺物は、16～18 が S 字状口縁甕で、肩部にヨコハケが施されている。19～21 は在地の台付甕の口縁部分である。22・23 は高坏あるいは器台の脚部で、円形透しが確認できる。SB01 に伴う遺物と考えられることから、SB01 も古墳時代前期の所産であろう。

第 68 図 H 地区 SB01 セクション図



第69図 H地区 出土遺物実測図（古墳時代）

第9表 H地区 出土土器観察表

神国 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第65図 PL.16	1		10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	縦位の粗い条線を地文に、粘土粒の浮露による蛇行懸垂文を貼付けている。	R1
第65図 PL.16	2		7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	斜め条線を地文とし、口縁に沿った沈帯を口唇近くに引く。	R1
第65図 PL.16	3		7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈帯を伴う低い幅広い隆帯で弧状文を描き、その区画内を半截竹管による斜め条線で埋める。	R1
第65図 PL.16	4		7.5YR7/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁に沿って低い断面三角形の隆帯を施文し、その下に半節 L の縄文を施文する。	R1
第65図 PL.16	5		10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	Ⅳ群 A-2 類	堀之内 2	LR の帯縄文を頸部に平行して施文。	R1
第65図 PL.16	6		10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	不明	不明	表面に粗い縦線を横に撫でるように施し、口縁に沿って凹線を引く。	R1
第65図 PL.16	7		7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	不明	不明	半節 L の縄文を縦位に帯状施文している。胎土に多くの砂粒を含む。西日本系か？	R3
第65図 PL.16	8		7.5YR6/4 にぶい橙	10YR4/1 褐灰	不明	不明	半節 L の縄文を縦位に密接施文する。	R2
第69図 PL.16	16		5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR4/2 灰褐	土師器		S 字巻の口縁部。	R2
第69図 PL.16	17		7.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	土師器		S 字巻の口縁部。	R2
第69図 PL.16	18		7.5YR4/2 灰褐	7.5YR6/4 にぶい橙	土師器		S 字巻の脚部。	R2
第69図 PL.16	19		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	土師器		台付狭口縁部。	R1・R2
第69図 PL.16	20		7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	土師器		台付狭口縁部。	R1
第69図 PL.16	21		7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	土師器		胸の口縁部。	R3
第69図 PL.16	22		7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	土師器		高坪脚部。	R3
第69図 PL.16	23		7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	土師器		高坪脚部。	R1

第10表 H地区 出土石器観察表

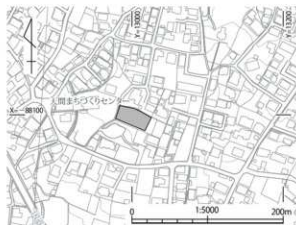
神国 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第66図 PL.16	9		石匕	富士川ホルンフェルス	4.75	5.68	1.09	24.66	両面ボジ面の等比な大型削片を素材とする模形石匕。	R3
第66図 PL.16	10		打製石斧	富士川ホルンフェルス	11.18	5.87	2.89	208.19	短冊形。	R4
第66図 PL.16	11		打製石斧	シルト岩	(8.33)	4.2	2.63	96.42	刃部と頸部欠損の短冊形。	R4
第66図 PL.16	12		打製石斧	富士川ホルンフェルス	5.87	4.7	1.44	43.78	刃部両生の進行により小型バザ形の形態となっている。	R1
第66図 PL.16	13		打製石斧	硬砂岩	10.38	7.82	1.64	157.11	バザ形。	R4
第66図 PL.16	14		磨石	粘板岩	8.15	3.31	0.87	34.37	右側製作用ハンマー。	R3
第66図 PL.16	15		磨・磨石	砂岩	11.5	9.42	4.89	659.18	比熱を受け全体に亀裂が入る。	R4

第6章 天間沢遺跡I地区(第9地区)

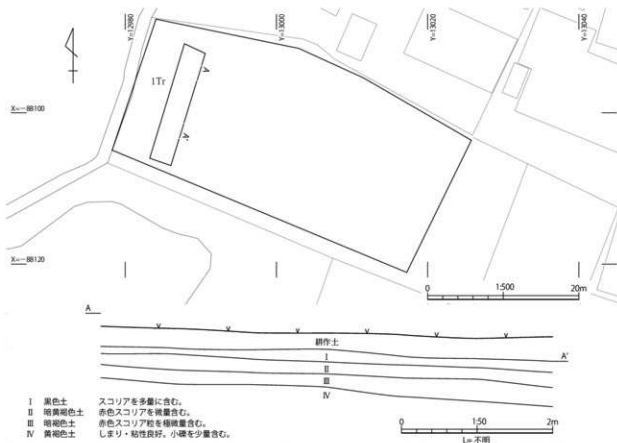
天間地区内において個人住宅建設に伴う小規模開発が増加し、遺跡保護のために緻密な遺跡範囲確認が急務であると判断されたことから、昭和58年秋、富士市教育委員会は遺跡範囲確認のための調査(旧:第8次調査)を実施することとなった。

第3地区の北東に位置する第7地区(天間1045-5、旧:第8次G地区)、第1地区から南へ200mほどの第8地区(天間1130-1、旧:第8次H地区)、同じく南へ330mほどの第9地区(天間1121、旧:第8次I地区)、第4地区から南へ180mほどの第10地区(天間529、旧:第8次J地区)の4地点に調査地区を設定した。

I地区の調査は昭和58年11月12日から17日にかけて行われた。南北方向に1本のトレンチ(1Tr)を設定し掘削したが、図化不能な縄文土器片が数点出土したのみで、遺構は検出されなかった。



第70図 I地区 位置図



第71図 I地区 トレンチ配置図、セクション図

第7章 天間沢遺跡J地区（第10地区）

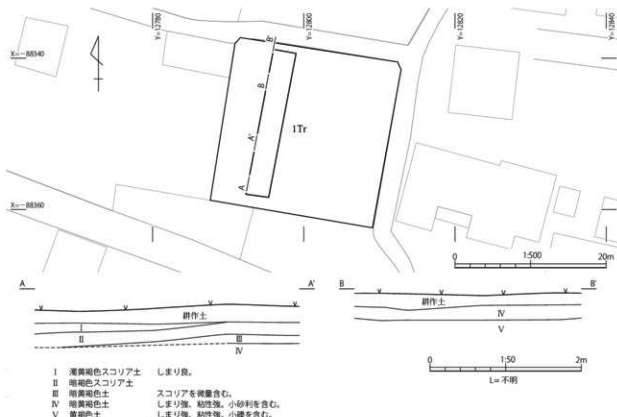
天間地区内において個人住宅建設に伴う小規模開発が増加し、遺跡保護のために緻密な遺跡範囲確認が急務であると判断されたことから、昭和58年秋、富士市教育委員会は遺跡範囲確認のための調査（旧：第8次調査）を実施することとなった。

第3地区の北東に位置する第7地区（天間1045-5、旧：第8次G地区）、第1地区から南へ200mほどの第8地区（天間1130-1、旧：第8次H地区）、同じく南へ330mほどの第9地区（天間1121、旧：第8次I地区）、第4地区から南へ180mほどの第10地区（天間529、旧：第8次J地区）の4地点に調査地区を設定した。

J地区の調査は昭和58年11月18日から22日にかけて行われた。本地区は天間沢遺跡範囲の南端に位置する。南北方向に1本のトレンチ（ITr）を設定し掘削した。数十点の土師器片・須恵器片が採集されたものの、遺構は検出されなかった。



第72図 J地区 位置図



第73図 J地区 トレンチ配置図、セクション図

第8章 天間沢遺跡 K 地区（第11地区）

第1節 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

昭和59年、埋蔵文化財保護事業の一環として富士市内の埋蔵文化財分布地図・地名表を作成することとなった。そこで、規模・出土遺物量において市内最大の遺跡である天間沢遺跡の範囲・性格等をより詳細に把握するために、分布確認調査を行うこととなった。

調査地（天間1011-1、旧：K地区）は、市営団地建設に伴って発掘調査が行われた第3地区（旧：第4次調査C地区）の東に位置する。

発掘調査の経過

K地区の調査は昭和59年10月15日から10月31日にかけて行われた。

南北13.9m、東西9.5mの調査区を掘削し、縄文時代の建物5軒（SB22～26）、埋壊土坑4基（SB23U1～2・SKAU2～U3）、土坑7基（SKA～SKG）を調査・完掘した。



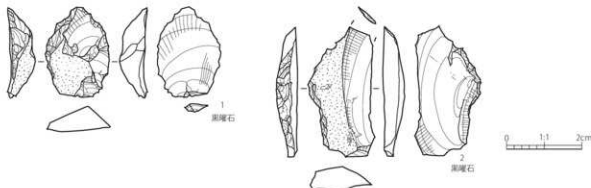
第74図 K地区 位置図

第2節 発掘調査の成果

後期旧石器時代

黄褐色ローム層（休場ローム相当）からではないが、1と2の2点のナイフ形石器が出土しており、天間沢遺跡が旧石器時代からの遺跡であることが確認された。資料数が少ないので明確な時期決定はで

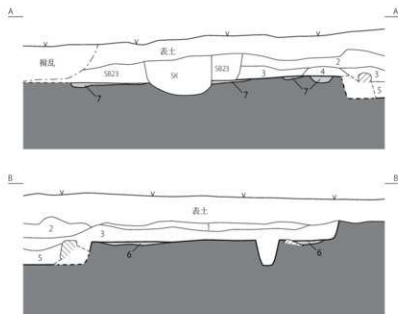
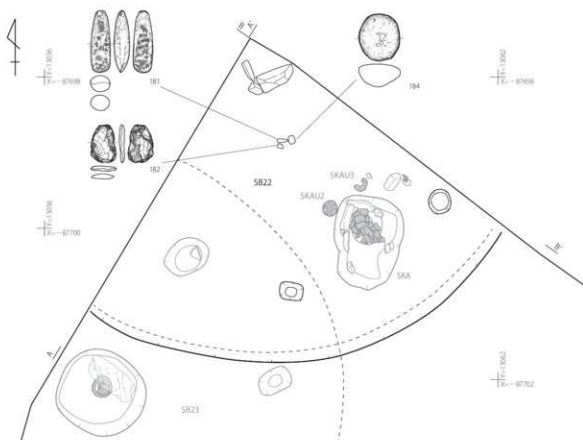
きないが、1の小型ナイフ形石器の形態は、片面・半両面加工の小型槍先形尖頭器を伴う時期、愛鷹・箱根第4期後半のナイフ形石器終末期のものに相似する。



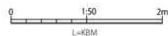
第75図 K地区 出土遺物実測図（旧石器）



第76図 K地区 調査区全体図



- | | | |
|----------|----------------------------|-----------|
| 1 暗褐色土 | やや黄色がかる。小砂利を含む。 | SB22 覆土 |
| 2 暗黄褐色土 | 砂利を多量。カーボン・赤色粒子を少量含む。 | SB22 覆土 |
| 3 暗褐色土 | やや黄色がかる。砂利・カーボン・赤色粒子を少量含む。 | SB22 覆土 |
| 4 埴土 | 埴土・赤色粒子・小砂利・カーボンを少量含む。 | SB22 埴土 |
| 5 暗褐色土 | 埴土・赤色粒子・小砂利・カーボンを少量含む。 | SB22 埴土 |
| 6 濁泥黄褐色土 | 黄褐色土ブロックを含む。 | SB22 埴方埋土 |
| 7 黄褐色土 | 黒色土を含む。 | SB22 埴方埋土 |



第 77 図 K 地区 SB22

縄文時代

・建物

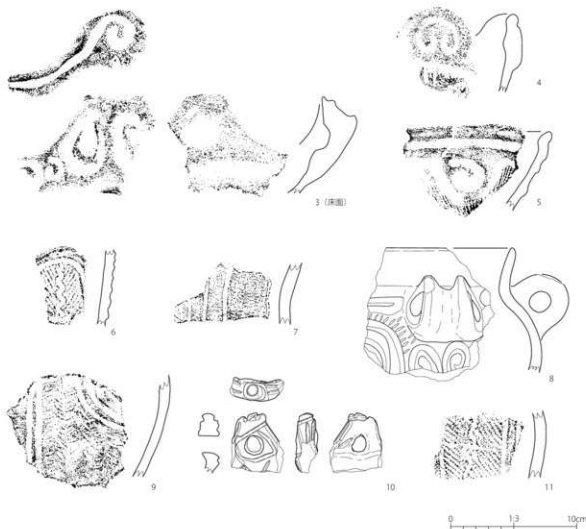
SB22

調査区の北西で、円形の建物の4分の1が検出された。建物の北半・西半は調査区外にあり、南側はSB23に切られている。調査区北西隅に石組みの炉が検出され、調査区西壁の土層で確認できる建物の立ち上がりと、北壁の土層に見える建物掘方の残存から、炉を中心とした径8.0mの円形の平面プランが復元できる。

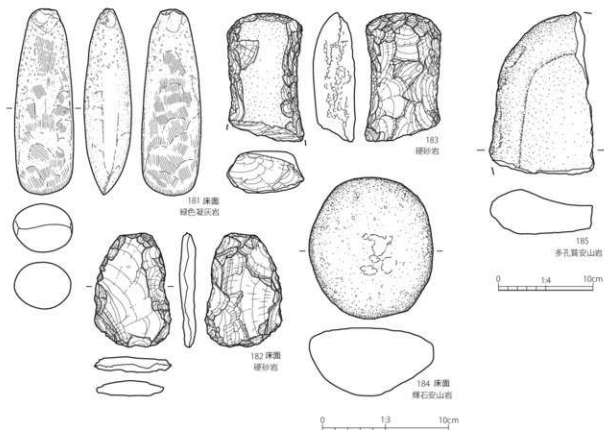
炉は床面から30cmほど掘り下げており、石組みには長さ50cm、幅23cm、厚さ25cmの大型のものが含まれる。柱穴とみられるピットは東と南に2基確認され、いずれも径は30cmほど、深さは東が35cm、南が21cmを測る。

出土遺物は、土器ではⅢ群A-2類の曾利Ⅲ式（3・4）、曾利Ⅳ式（5・6）、曾利式（7～9）、曾利式の把手部分（10）、加曾利E式の胴部（11）を覆土内から検出している。石器は、181の完形の乳棒状石斧、ややバチ形を呈する182の打製石斧、分銅形の183の打製石斧、磨・凹石の184、全体の4分の1にされた石皿が出土している。

SB22の出土土器の型式は曾利Ⅲ～Ⅴ式まで幅をもっているが、SB23よりも古いことを考えると、曾利Ⅲ式期の所産と考えてもよいかもしれない。



第78図 K地区 SB22出土遺物実測図（1）



第79図 K地区 SB22出土遺物実測図(2)

SB23

調査区の北西で円形の建物の2分の1ほどが検出された。西半は調査区外にあり、北側でSB22を、南側でSB24を切っている。平面プランは明確ではないが、炉と調査区西壁の土層で確認できる建物の立ち上がりから、炉を中心とした径6.2mの平面プランを復元した。

炉の掘方は径約120cmの円形で、深さは床面から約30cmを測る。丸底の掘方の中央から、別個体であるが、曽利IV式のキャリバー形深鉢の下半部(13)と上半部(12)が入り子状に正位置で出土した。その上に長さ75cm、幅30cm、厚さ6cmの板状の石が残存している。土層観察では炉石の抜き取り痕が確認でき、深鉢の口縁部まで土で埋めて固定し、その周囲を石で囲んだ石組みの炉であったとみられる。

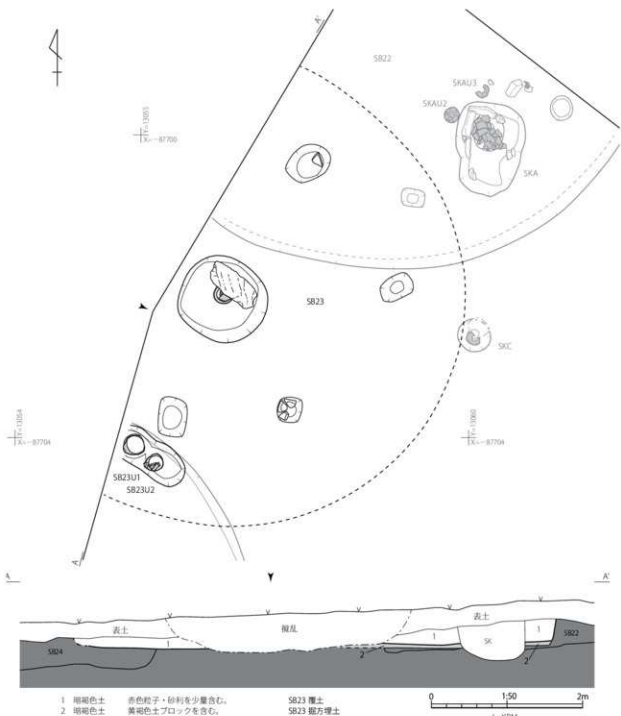
柱穴とみられるピットは4基検出され、北の1基がやや大きく長径60cm、南と北東の2基は長径約50cm、南東の1基は径33cmを測る。

出土土器は、ほぼすべてⅢ群A-2類の曽利IV式なので、建物の所属時期は曽利IV式期としてよいと考えられる。中央炉内には炉体土器(12・13)が出土したが、12の残存最大径は29.1cm、残存高は21.7cm、13の底部径は9.2cm、残存高は10.6cm、残存最大径は18.2cmである。器体を全周する状態で遺存しているものが多く、建物内からも16の推定径34.6cm、残存高16.9cmなど、大型の破片が多数出土している。土器の出土量に比して、石器は186のやや分銅形を呈する短冊形打製石斧が出土しているのみである。

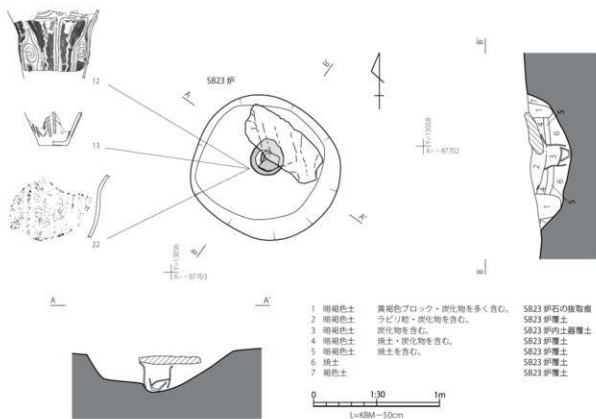
SB23U1・SB23U2

SB23 南柱穴の南側に検出された埋土土坑である。長軸 95cm 以上、短軸 45cm、深さ約 30cm の楕円形の土坑内に 2 個体（東側 SB23U1・西側 SB23U2）の深鉢胴部が正位置で並んでいる。土坑底面の様子からは、本来はそれぞれの深鉢に対して土坑が掘られていたとみられるが、その境は確認されず、切り合い関係は不明である。ごく近接して掘られている

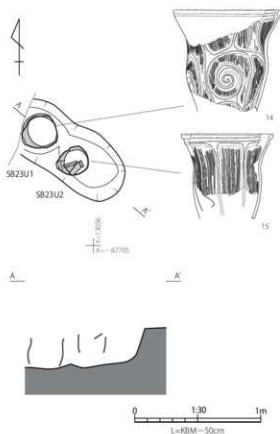
が土器の残存状況が良い様子から既に埋甕があることを承知のうえ、もうひとつを埋納したとも思われる。どちらも曽利Ⅳ式のキャリバー形深鉢である。SB23U1 の埋甕 14 は、推定口径 34.1cm、残存高 32.1cm であり、SB23U2 の埋甕 15 は、推定口径 29cm、残存高 27cm になる。



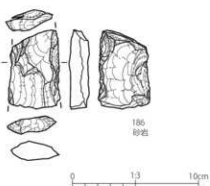
第 80 図 K 地区 SB23



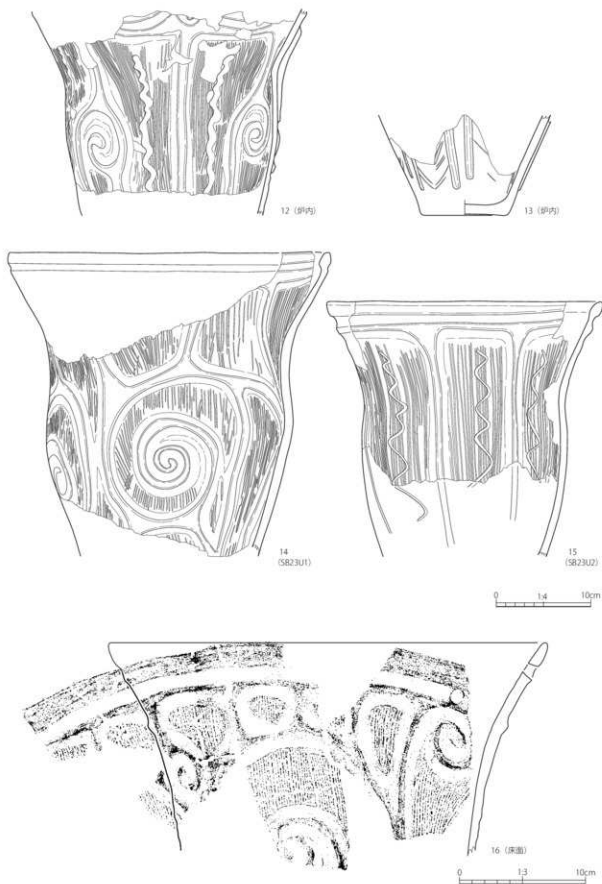
第81図 K地区 SB23 伊



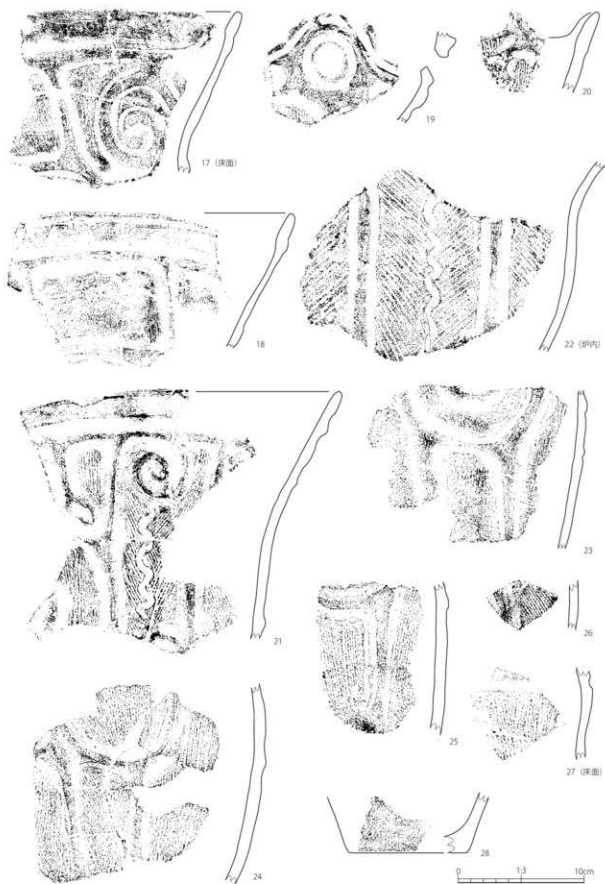
第82図 K地区 SB23U1・SB23U2



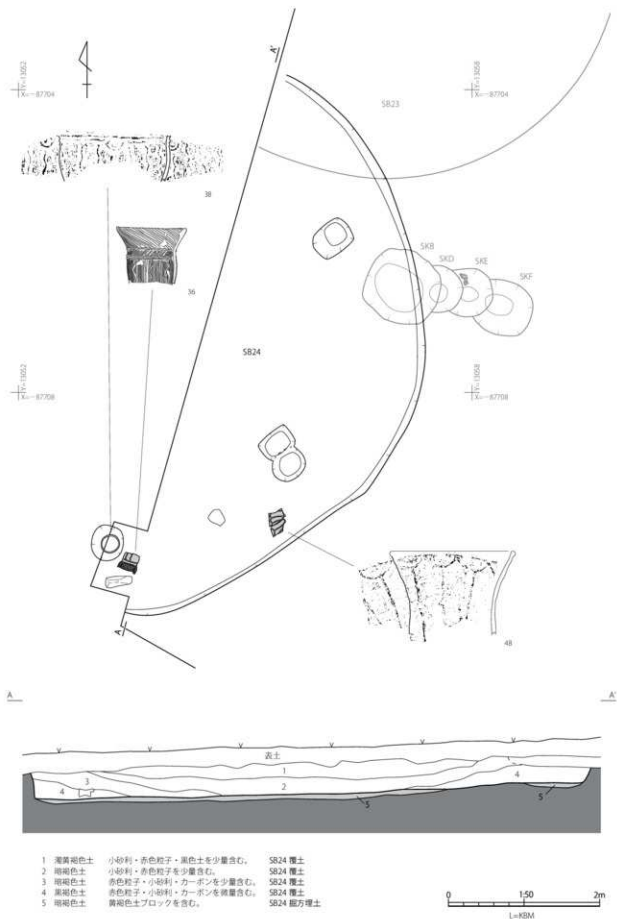
第83図 K地区 SB23 出土遺物実測図(1)



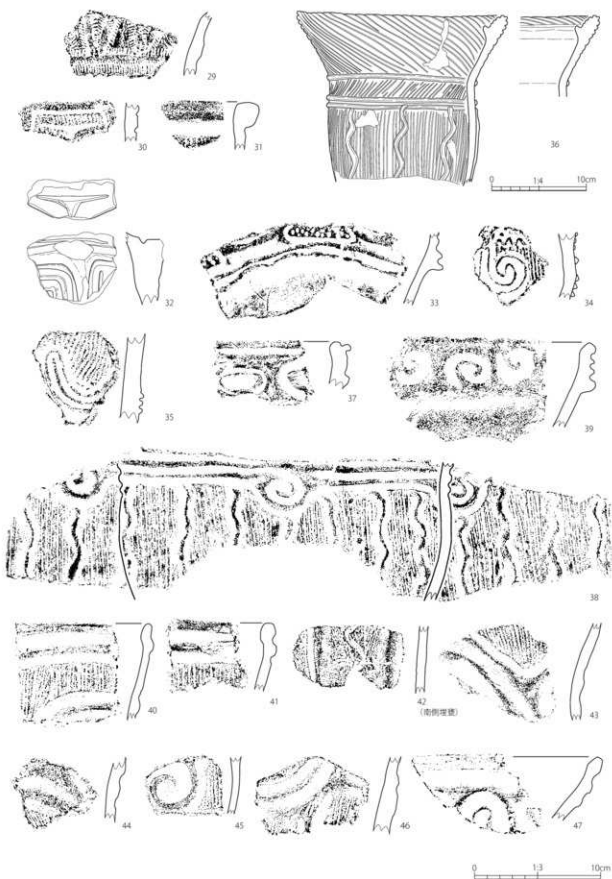
第84図 K地区 SB23 出土遺物実測図(2)



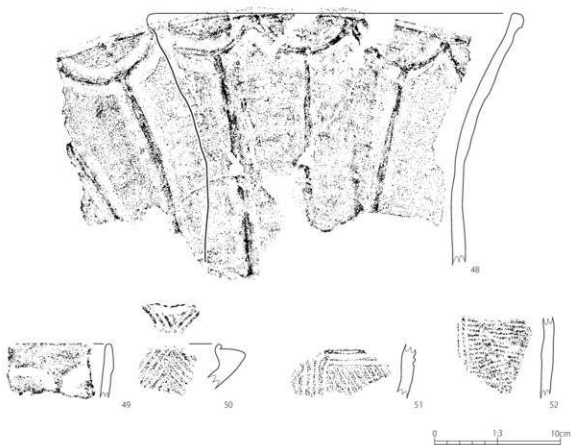
第 85 図 K 地区 SB23 出土遺物実測図 (3)



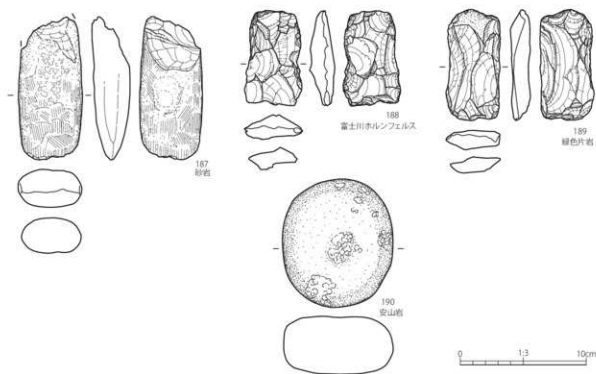
第86図 K地区 SB24



第 87 図 K 地区 SB24 出土遺物実測図 (1)



第88図 K地区 SB24出土物実測図(2)



第89図 K地区 SB24出土物実測図(3)

SB24

調査区の南西で円形の建物の2分の1ほどが検出された。西半は調査区外にある。炉は検出されておらず、調査区外に位置するとみられる。径7.5mの建物と復元できる。調査区西壁の土層観察によれば、北側をSB23に切られている。調査区西壁南端で倒れた深鉢の上部が検出され、その部分の調査区を西側に拡張したところ、深鉢を埋納した径47cmの土坑を発見した。柱穴の可能性があるピットは、北東に長軸50cmの隅丸方形のものが1基、南東に長軸45cmほどの方形と楕円形の2基が切り合って検出されている。

土器は、Ⅲ群A-1類の新道式(29)、藤内式(30・31)、井戸尻式(32)、Ⅲ群A-2類の曾利Ⅱ式(33～35)、曾利Ⅲ式(36～39)、曾利Ⅳ式(40～47)、曾利Ⅴ式(48)と縄文時代中期中葉から後葉と時期幅はあるが、主体となる時期は曾利Ⅱ・Ⅲ式期なので、SB23との土層図での新旧関係(SB23が新しい)と併せて、曾利Ⅱ～Ⅲ式期の建物と考えたい。しかし、48の大型破片が床面に広がるような出土状況であることから、曾利Ⅴ式期の可能性もある。器形が復元できる36の口径は22.3cm、残存高は18cm、38は推定最大径26.8cm、残存高11.1cm、48は推定口径29.7cm、残存高21.1cmである。

出土土器は、回石に転用された乳棒状磨製石斧(187)、ゆるい挟りが入り、やや分銅形を呈す短形の短冊形打製石斧(188・189)、磨・回石(190)が出土している。

SB25

調査区の南東で円形の建物の2分の1ほどが検出され、径7.5mの建物と復元できる。東半は調査区外にある。炉は検出されておらず、調査区外に位置するとみられる。南東部分でSKGを切っている。

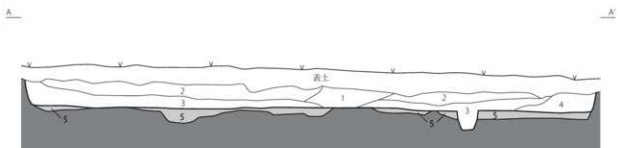
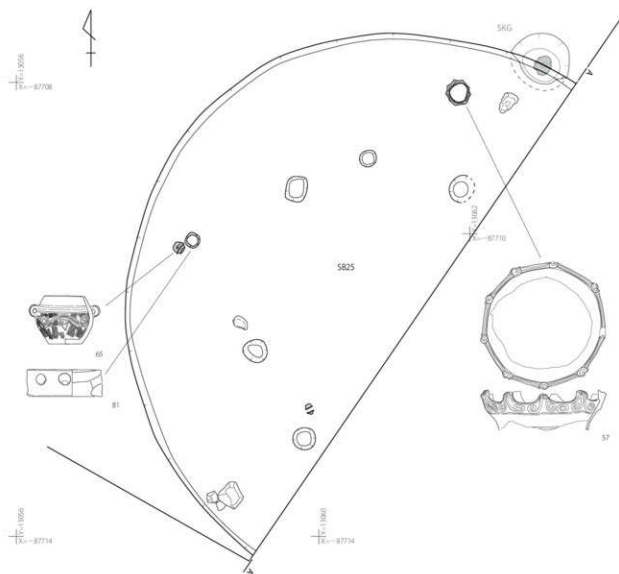
柱穴とみられるピットは5基検出された。そのうち4基は径35cm前後であるが、東から2番目の1基のみ径23cmとひとまわり小さく、位置関係的にも他の4基とは性格が異なる可能性がある。

出土土器は、53のⅢ群A-1類、井戸尻式が最も古く、54がⅢ群A-2類の曾利Ⅰ式、55・56が曾利Ⅱ式、57・58が曾利Ⅲ式、59～66が曾利Ⅳ式、67～69を曾利Ⅴ式に比定したので、縄文時代中期中葉から後葉までの時期差がある。しかし主体を成すのは曾利Ⅲ～Ⅳ式の土器群である。特に9単位の把手をもち、口縁部が全周する57の土器や完形の65の両耳鐙付土器は、床面に据えられたような出土状況であったことから、建物の帰属時期は曾利Ⅲ～Ⅳ式期の縄文時代中期後葉と考えられる。なお81の器台は、65とセットのように近接して出土していることから同時期とみなせるだろう。66の小型の両耳鐙付土器も同時期と考えられるが、内面に黒色有機質のタール状付着物がびっしりと付着している。

また、1点、籠目文土器片を加工した土製円盤(82)が出土しているが、曾利ⅠかⅡ式と思われるので、建物に伴うものではないと思われる。

器形のわかる土器は、57、61、65、66、81であるが、57は口径40cm、残存高11.5cm、61は推定最大径29.9cm、残存高17.9cm、65は口径9.2cm、底径7.7cm、最大径13.9cm、両耳幅16.9cm、66は最大径11cm、両耳幅12.3cm、底径6.8cm、残存高7.5cmである。また、器台81は径17.6cm、器高6.3cmで、径1.8cmの円孔透しが8単位ある。

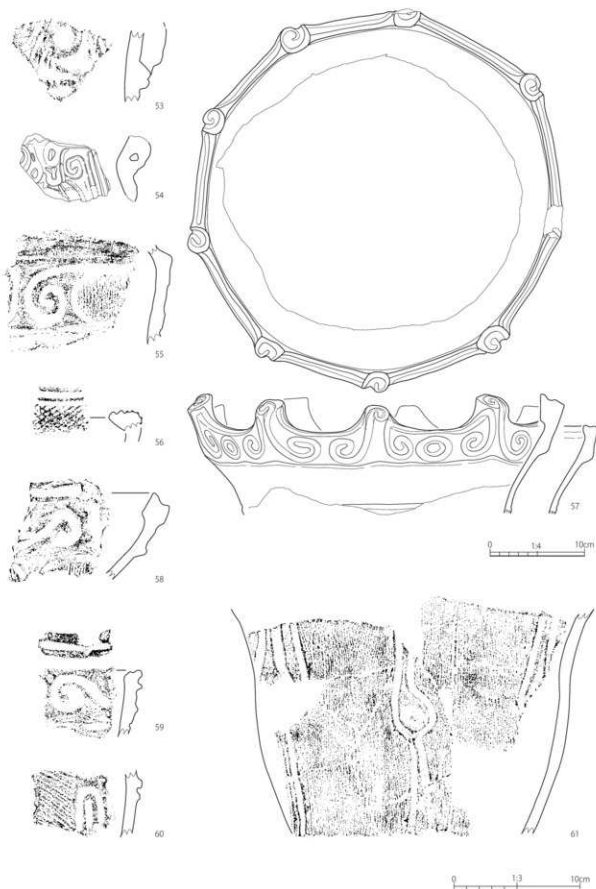
石器は、198(第110図)の黒曜石製の楔形石器が出土している。



- | | | |
|---------|------------------------------|-----------|
| 1 暗褐色土 | 溶岩礫を多量に含む。 | SB25 覆土 |
| 2 暗褐色土 | やや黄色がかかる。小砂利・赤色粒子を微量含む。 | SB25 覆土 |
| 3 暗褐色土 | やや黄色がかかる。小砂利・カーボン・赤色粒子を少量含む。 | SB25 覆土 |
| 4 暗赤褐色土 | しまり良好、粘性強。赤色粒子・小砂利を含む。 | SB25 覆土 |
| 5 黒褐色土 | 黄褐色土ブロック・砂利を含む。 | SB25 南方埋土 |

0 1:50 2m
L=KBM

第90図 K地区 SB25



第91図 K地区 SB25出土遺物実測図(1)



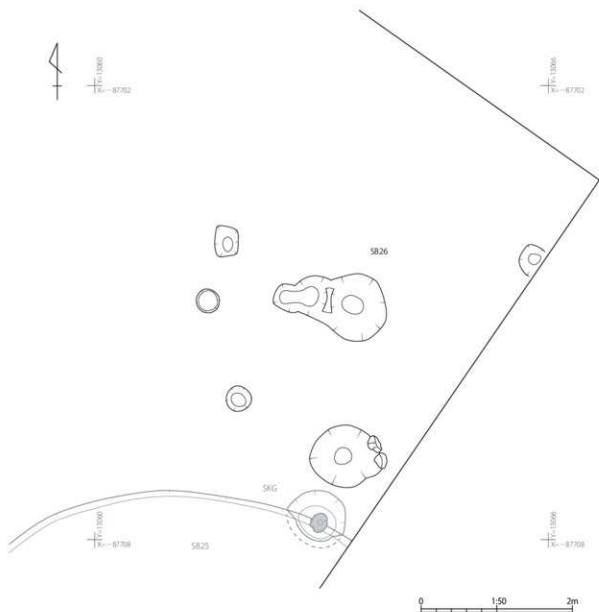
第92図 K地区 SB25出土物実測図(2)

SB26

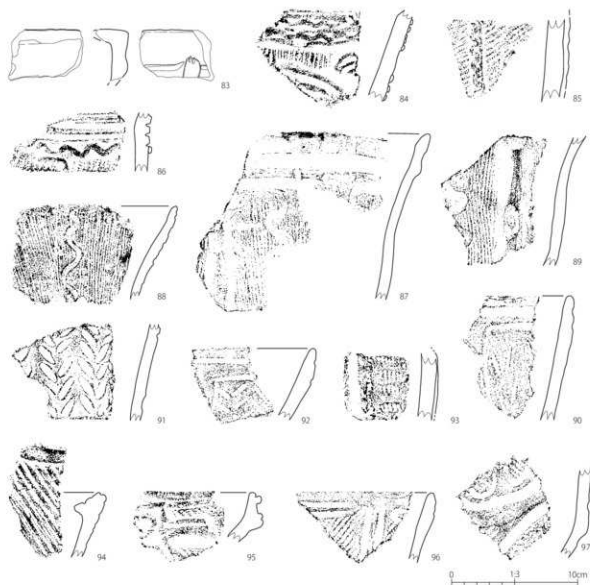
調査区の北東で4基のビットと2基の土坑を検出し、平面プランは不明なものの、建物と判断した。ビットは径30～40cm、南の円形土坑は径80cm、北の不整形土坑は長軸150cm、短軸90cmを測る。

出土した土器は、83のⅢ群A-I類の井戸尻式と思われる口縁部が古い。この土器には、両生類系の前肢を形象した隆帯がみられる。主となるのはⅢ群

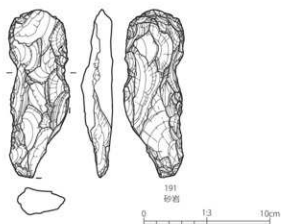
A-2類で、84が曾利Ⅰ式、85・86が曾利Ⅱ式、87～89が曾利Ⅳ式、90～93を曾利Ⅴ式に比定した。また、95～97は加曾利E式系と思われる。特に曾利Ⅳ～Ⅴ式が多いので、建物の帰属もこの時期になるとと思われる。石器は、刃部を欠損した、頭部両端に柄付けのためと思われる、挟りのある分銅形に近い短冊形打製石斧が出土している。



第93図 K地区 SB26



第94図 K地区 SB26出土遺物実測図(1)



第95図 K地区 SB26出土遺物実測図(2)

調査区壁面の土層観察から、SB22はSB23に切られ、SB23はSB24の覆土と分離できていないが、SB24の覆土中に床面が存在する。このことから、堅穴建物の新旧関係はSB22→SB24→SB23になる。SB25と重複するSB26は、明確な切合いを検出することができていないが、SB25から出土する土器が曾利Ⅲ・Ⅳ式主体で、SB26からの出土土器が曾利Ⅳ・Ⅴ式を主体とするので、SB25が古くSB26が新しいと思われる。

なお、SB22内のSKAは、通常、堅穴建物の中央部に設置される石囲いの埋甕炉（曾利Ⅳ式）と考えられるので、確認できなかった建物があった可能性がある。

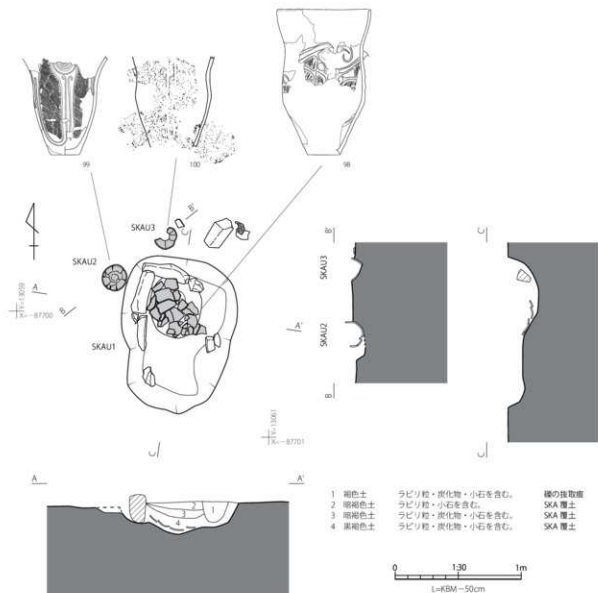
・土坑

SKA

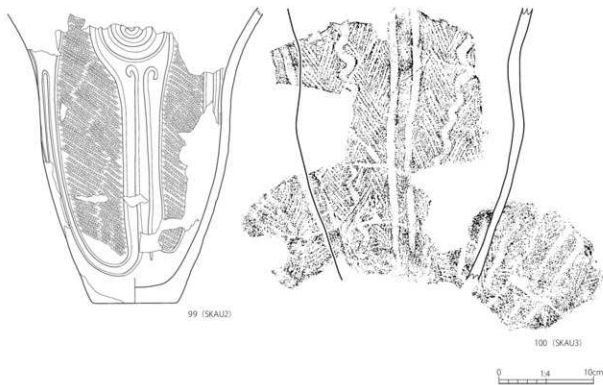
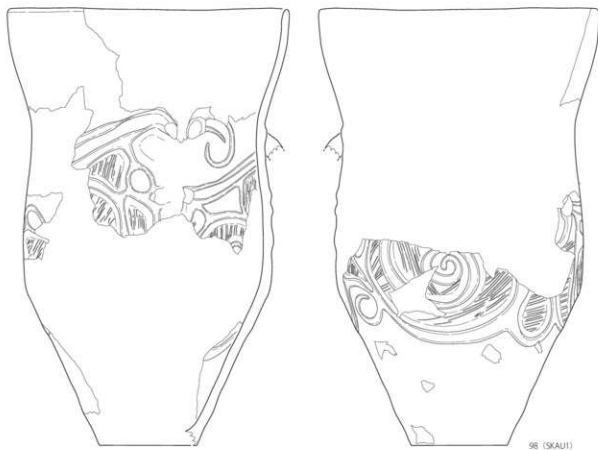
調査区の北西に位置する。調査時には土坑と呼称されているが、石組みの炉であるとみられる。炉の掘方の平面形は長軸 120cm、短軸 89cm を測り、北側がやや広くなる隅丸方形である。断面形は、北側は検出面からの深さ 25cm の丸底、南側は一段高くなって深さ 12cm の平底を呈する。広く深くなる北側に、多数の土器片と石組みに使われた石材が出土しており、炉の本体はこちらにあったものと推定される。SB22 床面より SKA の検出面が高く、SB22 より新しい遺構と判断できる。

土坑底面に敷かれた炉体土器 98 (SKAU1) は、くびれ部に環状把手状の耳をもつ曽利Ⅳ式の大型のキャリバー形深鉢である。残存状況は非常に悪いが、全体を復元できるパーツがあり、推定口径(最大径) 29.3cm、推定底径 10.2cm、推定器高 46.2cm を測る。さらに石組みの一部と思われる 193 は、台石とされた石棒を再転用したものと考えられる。また 192 の短冊形打製石斧も出土している。

このように SKA は、建物の中央炉と考えられるため、未確認の SKA を中心とした建物が存在したものと考えられる。



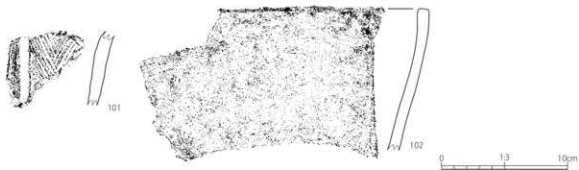
第 96 図 K 地区 SKA



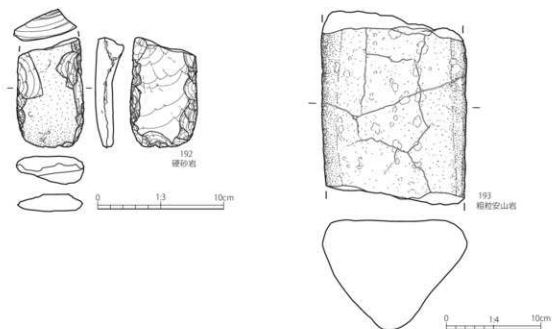
第97図 K地区 SKA出土遺物実測図(1)

SKAU2・SKAU3

SKAの北西に、2基並んだ埋甕土坑（SKAU2・SKAU3）である。上部の大半が削平されて明確な土坑の形は検出されず、深鉢が出土したことにより埋甕と確認された。SKAとごく近接して存在するが、その関係は不明である。SKAU2（99）は加曽利E系と思われる縄文施文の深鉢で、SKAU3（100）は曾利IV式のキャリパー形深鉢である。99は残存最大径27cm、底径9cm、残存高31.3cmである。100は推定最大径19.5cm、残存高21.7cmである。



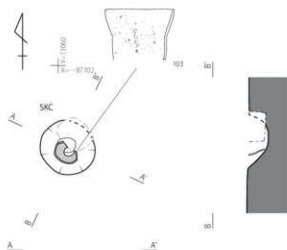
第98図 K地区 SKA出土遺物実測図(2)



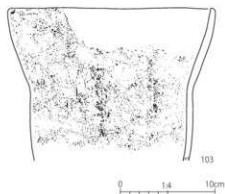
第99図 K地区 SKA出土遺物実測図(3)

SKC

調査区の北西、SB22・SB23の東に位置する。調査時には土坑と呼称されているが、埋壙土坑であるとみられる。平面形は径45cmの円形を呈し、断面形は丸底で深さ16cmを測る。土坑の中央から曽利式と考えられる無文の底部のない深鉢103が正位置で出土した。法量は、推定口径（最大径）21.3cm、残存高16.1cmである。



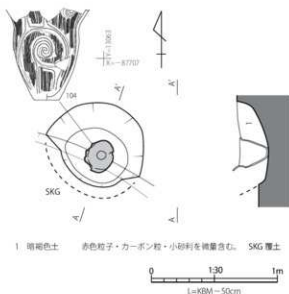
第100図 K地区 SKC



第101図 K地区 SKC出土遺物実測図

SKG

調査時には土坑と呼称されているが、埋壙土坑であるとみられる。SB25の北東に、SB25に切られて検出されたことからSB25よりも古いと考えられる。平面形は径80cmの正円形と推定され、検出面からの深さは25cmを測る。曽利IV式の底部のあるキャリバー形深鉢104が正位置で出土した。この土器の法量は残存最大径26.5cm、底径8cm、残存高28.9cmである。



第102図 K地区 SKG



第103図 K地区 SKG出土遺物実測図

SKB・SKD・SKE・SKF

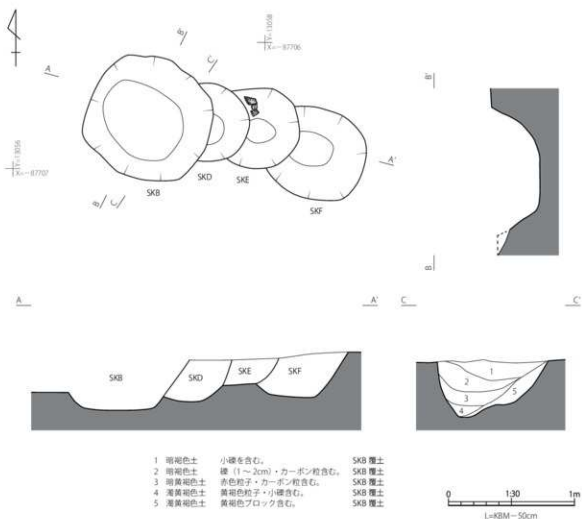
調査区の南西、SB24の東に4基の土坑が切り合って検出された。SKBが最も新しく、SKDを切り、SB24に切られ、径100cm、検出面からの深さは40cmを測る。SKDは、SKEを切りSKBに切られ、径約60cm、検出面からの深さは33cmを測る。SKEは、SKFを切りSKDに切られ、径約70cm、検出面からの深さは20cmを測る。現地実測図をみると曾利Ⅴ式と思われる土器を伴っている。最も古いのはSKFで、長径70cm以上、検出面からの深さ35cmを測る。

・遺構に伴わない遺物

土器では、Ⅲ群A-1類の藤内式からⅣ群A-2類の堀之内式までの縄文時代中期中葉から後期前葉まで出土している。105は藤内式のキャリバー形深鉢の環状把手部分になる。106～108が藤内式で、110～113までを井戸尻式に比定した。

114～168を曾利式と認識した。114～119はⅢ群A-2類の曾利Ⅰ式で、ほとんどが龍目文土器の深鉢であると思われる。115の突帯部分は蛇体把手となっている。120～125は曾利Ⅱ式、126～130は曾利Ⅲ式、131～155は曾利Ⅳ式、158・161を曾利Ⅴ式に比定、163～168は曾利式と考えられる口縁部を図示した。169～173は加曾利E4式に比定した。

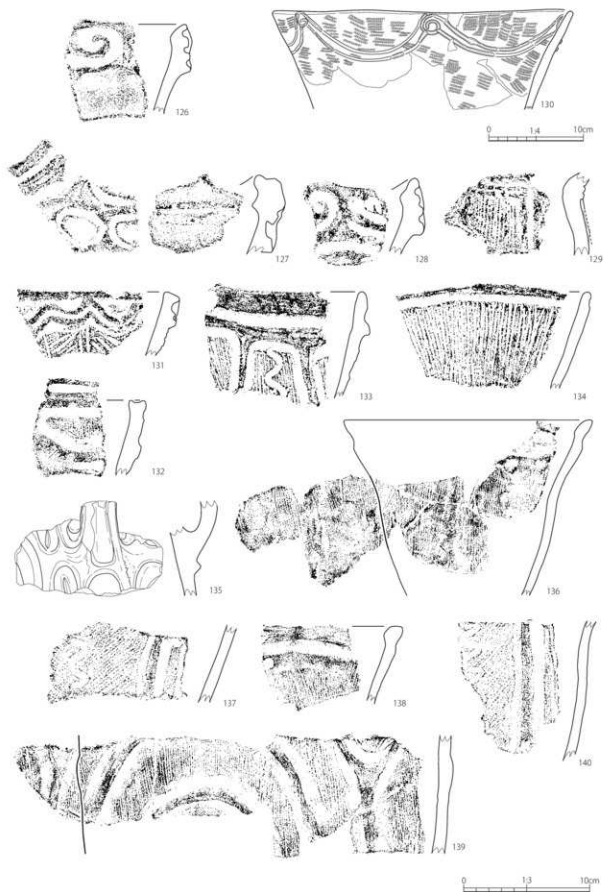
そのうち器形の推定できる130は、推定口径31.3cm、残存高10.3cm、136は推定口径19.6cm、



第104図 K地区 SKB・SKD・SKE・SKF



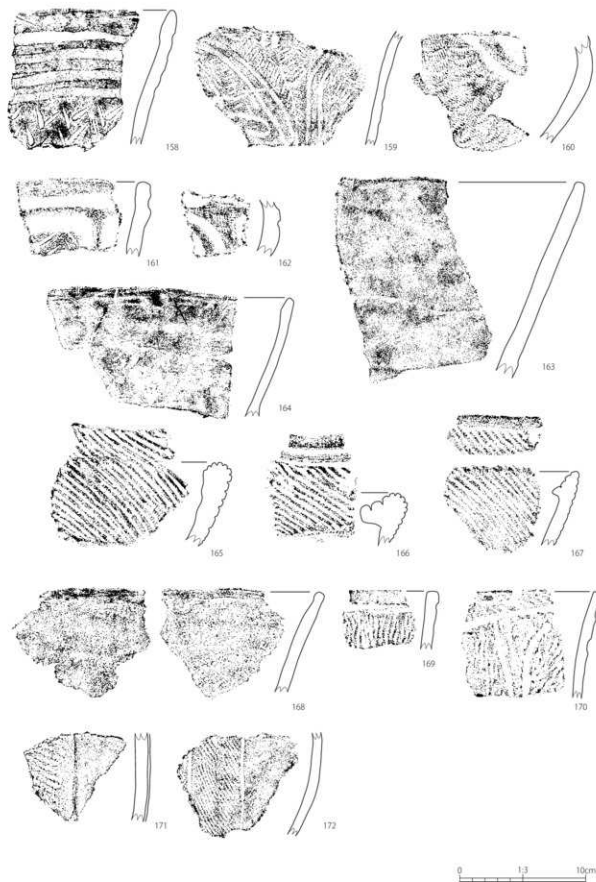
第105図 K地区 出土遺物実測図(1)



第106図 K地区 出土遺物実測図(2)



第107図 K地区 出土遺物実測図(3)



第108図 K地区 出土遺物実測図(4)

残存高 18.9cm、139 が残存最大径 29.8cm、残存高 9.4cm、141 が推定残存径 25.2cm、残存高 15.3cm、56 の底部は、底径 6cm、残存高 5.7cm である。なお出土位置不明であるが、完形復元された無頭壺形の深鉢土器 173 は、推定口径 15cm、推定底径 9.2cm、推定最大径 28.4cm、推定高 32.5cm になる。

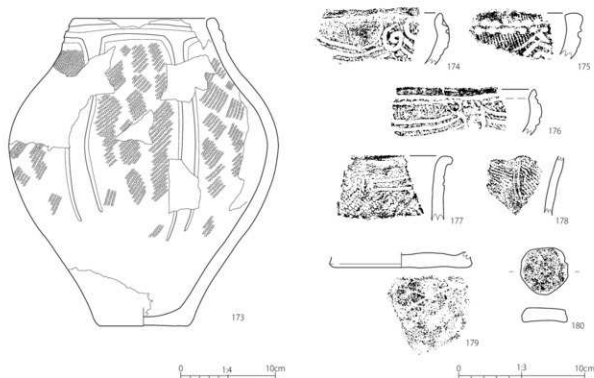
174 ～ 176 は、胎土が灰青色系で、砂粒を多く含む粗い胎土をもつ西日本系と思われる土器である。咲畑式に比定した。

177 と 178 は、やや器壁が薄く縄文時代後期の堀之内Ⅰ式と思われる。179 は時期不明だが、木葉痕のある底部である。180 は時期不明の土製円盤である。

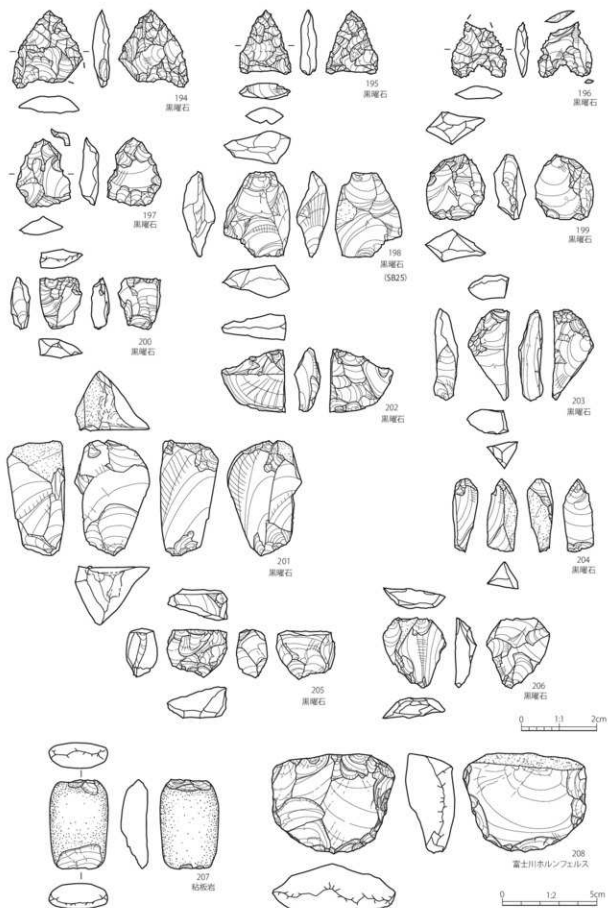
土器に関して、縄文時代中期中葉から後期前葉まで出土しているが、主体となるのは曽利Ⅳ式期であり、この時期が K 地区を遺跡として最も利用された時期であったと考える。

石器は、194 ～ 196 が黒曜石製の無茎凹基の石鏃で、196 がやや両脚的な加工をしている。197 は石鏃の未製品と考えられることから、198 ～ 206 の楔形石器は、石鏃等の素材剥片作出による残核である可能性が高く、K 地区で石鏃製作が行われていたと

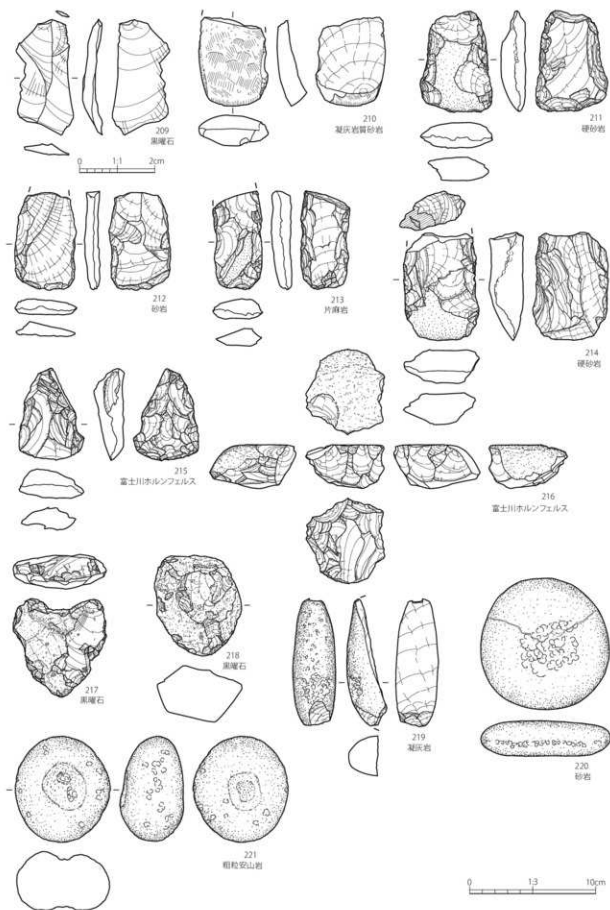
思われる。207 は石器素材となるスレート質結板岩の小円礫を分割しようとした結果の楔形石器と思われる。208 は分厚い富士川ホルンフェルスの剥片の縁辺に刃部を形成した削器であるが、石核の再生品の可能性もある。209 は黒曜石製の石刃状剥片で、旧石器時代の可能性があるが、石刃技法によるものではなく水和層の発達も少ないので、縄文時代の偶発的産物と思われる。210 は、磨製石斧の刃部で、裏面刃部側面からの打撃で欠損している。211 ～ 215 は打製石斧であるが、211 と 215 がバチ形を呈する以外は短冊形である。216 は富士川ホルンフェルスの石核で、稜面を打面とし、円周して等幅剥片を作出している。217 と 218 はおそらく神津島産と考えられる黒曜石原石で、217 には試し割りと思われる剥離痕が存在する。219 は石器製作用ハンマーと考えられる敲石で、打撃点からの衝撃で半砕している。220 と 221 は敲・凹・磨石で、221 はとくに深い凹部が形成されている。222 ～ 224 は敲・磨石で、224 は小型だが石皿的な使用がなされたかもしれない。225 はほぼ球形の磨石で、あるいは祭祀的なものかもしれない。



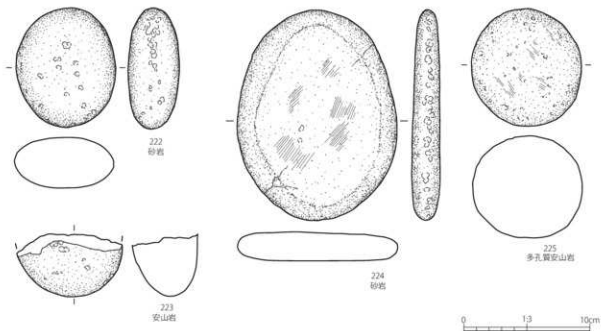
第 109 図 K 地区 出土遺物実測図 (5)



第110図 K地区 出土遺物実測図(6)



第111図 K地区 出土遺物実測図(7)



第112図 K地区 出土遺物実測図(8)

第11表 K地区 遺構一覧表

遺構種別	組合遺構名	調査時遺構名	位置	時代	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (古→新)	備考
壁穴建物	SB22	22号住		縄文	[770]	-	28	円形	平底	SB22→SB23・SKA	
壁穴建物	SB23	23号住		縄文	[620]	-	32	円形	平底	SB22・SB24→SB23	
壁穴建物	SB24	24号住		縄文	[760]	-	34	円形	平底	SB24→SB23	
壁穴建物	SB25	25号住		縄文	[760]	-	37	円形	平底	SB25→SKG	
壁穴建物	SB26	26号住		縄文	-	-	-	-	-	-	
土坑	SKA	A土坑		縄文	120	89	25	隅丸方形	丸底	SB22→SKA	炉とみられる。
土坑	SKB	B土坑		縄文	98	95	40	円形	平底	SKD→SKB	
土坑	SKC	C土坑		縄文	45	45	16	円形	丸底	-	埋没とみられる。
土坑	SKD	D土坑		縄文	61	(44)	33	円形	丸底	SKE→SKD→SKB	
土坑	SKE	E土坑		縄文	64	(57)	20	円形	平底	SKF→SKE→SKD	
土坑	SKF	F土坑		縄文	(73)	71	35	円形	平底	SKF→SKE	
土坑	SKG	G土坑		縄文	80	(80)	25	正円形	丸底	SB25→SKG	埋没とみられる。
埋没	SB23U1～2	23号住南埋没		縄文	(93)	47	30	楕円形	平底	-	
埋没	SKAU2	A土坑西側埋没		縄文	-	-	-	-	-	-	
埋没	SKAU3	A土坑北側埋没		縄文	-	-	-	-	-	-	

第12表 K地区 出土土器観察表

神国 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第78図 PL-24	3	SB22 床面	10YR6/3 に近い黄橙	10YR7/4 に近い黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	口縁部把手部分。肥厚した文様帯内に連結した渦巻文を配する。口唇上部には沈線を引き、そのまま把手上面で渦巻文となる。把手裏面は半環状の凹みとなっている。	R6
第78図 PL-24	4	SB22	10YR3/2 黒褐	10YR5/4 に近い黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	口縁部の把手部分。幅付けられた平円状の把手に1状の文様を描き、その下から三つ本の沈線による懸垂文を垂下する。	R6
第78図 PL-24	5	SB22	7.5YR4/3 に近い褐	7.5YR4/3 に近い褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口縁に沿って沈線とその下に渦巻文を施し、その下に斜め条線を施す。	R6
第78図 PL-24	6	SB22	10YR3/2 黒褐	7.5YR7/6 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈線による区画内を、集合沈線の破折文とその中央部に沈線による蛇行文を施す。	R6
第78図 PL-24	7	SB22	10YR3/1 黒褐	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	三本の沈線による懸垂線による区画内を、先端の丸い工具の列状刻文で埋める。	R6
第78図 PL-24	8	SB22	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/8 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	胴部のある鉢形土器。口縁部は無文で、肩に大きな横状把手をつけて胴部には大きな渦巻文を描き、R5文様帯には斜め刻文を充填する。	R5
第78図 PL-24	9	SB22	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/8 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	並行する浅い凹線の弧状文による区画内を八の字文で埋める。	R5
第78図 PL-24	10	SB22	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR7/4 に近い橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利?	板状の把手部分。円形の透しの周りを細目の沈線で直線状に囲う。	R6
第78図 PL-24	11	SB22	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E	平行沈線による懸垂文で区切られた区画内を、S字状結節をもつL状の縦文で縦位に施す。	R6
第84図 PL-24	12	SB23 伊	5YR5/4 に近い赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなラインのキャリバー形深鉢。胴部中央部に、低い幅広の隆帯の両側に指頭による浅い凹線を区画線として大型の渦巻文を描出し、区画内を縦位条線で埋める。その区画の中央に指による凹線で蛇行懸垂文を施す。	R93
第84図 PL-26	13	SB23 伊	10R4/4 赤褐	10R4/4 赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	深鉢底部。二本の薄い断面三角形の隆帯で6単位の懸垂文を施す。区画内を縦斜め条線で埋める。	R89
第84図 PL-25	14	SB23U1・AZGr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなラインのキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に指頭による浅い凹線を区画線として、連結した渦巻文を描出し、区画内を縦位条線で埋める。	R100
第84図 PL-25	15	SB23U2・AZGr	2.5Y4/2 灰赤	2.5Y4/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	低い幅広の隆帯の両側に指頭による浅い凹線を口縁に平行し、懸垂線で長方形の区画をつくり、その中を縦の条線で埋める。その区画の中心に沈線による蛇行懸垂文を施す。	R88
第84図 PL-26	16	SB23 床面	7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、つなげてその下の胴部に大小の渦巻文を描画する。その区画内は縦位の条線で埋める。	R10・R46
第85図 PL-26	17	SB23 床面	7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR5/4 に近い褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、その下に大型の渦巻文を描画する。区画された内部は縦の条線で埋める。	R10
第85図 PL-26	18	SB23	5YR5/4 に近い赤褐	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、その下に略長方形の区画をつくり、その中を縦位の条線で埋める。	R10
第85図 PL-26	19	SB23	5YR5/4 に近い赤褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	円孔の把手部分。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線で区画し、その中を斜め条線で埋める。	R10
第85図 PL-26	20	SB23	7.5YR5/4 に近い褐	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	北量皿状の角形突起部。浅い凹線による区画内を縦位の条線で埋める。	R10
第85図 PL-26	21	SB23・AZGr	7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、そこから懸垂文を垂下するが、一部の懸垂文は渦巻文と連結する。区画内中央には口縁部に接して、凹線による渦巻文から蛇行懸垂文を垂下し、その両側を破折文で埋める。	R10・R35・R46
第85図 PL-26	22	SB23	10YR7/4 に近い黄橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形深鉢の胴部。両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内中央部に、薄い凹線による蛇行懸垂文を引き、その両側を斜め条線で埋め、破折文とする。	R3
第85図 PL-27	23	SB23	7.5YR5/3 に近い褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって複雑な曲線文を描き、その内部を縦位の条線で充填する。	R10
第85図 PL-27	24	SB23	7.5YR4/1 褐灰	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い沈線を伴う低い幅広の隆帯の曲線文による区画内を、破折文の縦位条線で充填する。	R10
第85図 PL-27	25	SB23	10YR3/2 黒褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い沈線を伴う低い幅広の隆帯の曲線文による区画内を、縦位条線で充填する。	R10
第85図 PL-27	26	SB23	10YR4/1 褐灰	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い沈線を伴う低い幅広の隆帯による区画内を、斜め条線で充填する。	R10

神岡 図例	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第85図 PL-27	27	SB23	7.5YR6/4 に近い青	7.5YR5/4 に近い青	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	太い沈殿による区画内を条線によって埋める。	R9
第85図 PL-27	28	SB23	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群	中期	底部。	R10
第87図 PL-27	29	SB24	2.5Y3/1 黒褐	10R3/6 暗赤	Ⅲ群 A-1 類	新道	両側に爪形押引文によって圧えられた隆帯で、縦に長い三角形区画をつくり、その中を蛇行沈殿を垂下する。粘土と雲母片を多く含有する。	R57
第87図 PL-27	30	SB24	10YR6/4 に近い黄橙	2.5YR6/8 橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内	沈殿による区画内に、連続爪形文と三叉文を施文する。	R2
第87図 PL-27	31	SB24	10YR4/1 褐灰	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内?	肥厚した口唇の下に連続爪形文を施文する。	R2
第87図 PL-27	32	SB24	7.5YR5/3 に近い青	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 3	口唇が欠損しているが把手状に肥厚した口縁部で、平行沈殿による隅丸方形の構文が描かれ、把手状の突出部上面には三叉文が施文される。	R2
第87図 PL-27	33	SB24	5YR4/2 灰褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	小型深鉢?の胴部、二重の隆帯の上に刺突文を充て、横に施文した条線と縦に施文した文様等を形成する。	・R46
第87図 PL-27	34	SB24	5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	縦目文土器の胴部、胴部に並行して首状浮線文を三重に貼付し、その下に半条竹管による縦位の条線を施文として施文後、断面三角形の浮線に近い隆帯で施文と連結した施文文を描く。	R2
第87図 PL-27	35	SB24	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	3本の L 形の施文を施文とし、三本の隆帯による J 字状施文を施文する。	R46
第87図 PL-28	36	SB24	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	縦目文土器。裏面に大きく内向した口唇に合う凹部から表、胴部まで、斜行条線を周回するよう施文する。胴部は上に一本、下に二本の粘土紐による浮線を配し、その内部を口縁部とは逆方向の条線で充填する。胴部は縦位の条線を施文とし、胴部浮線から浮線による蛇行施文を 11 単位配座する。	R92
第87図 PL-27	37	SB24	5YR5/2 灰褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	口縁の肥厚した文様帯内に連結した構文を描き、口唇上面には沈殿を引く。	R2
第87図 PL-27	38	SB24 ・A2B2	5YR5/4 に近い赤褐	5YR5/3 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	縦目文土器胴部、胴部に幅広い浅い沈殿を両側とした隆帯を二本引き、縦位の条線を施文とする。6 単位?の施文を配して、胴部から粘土紐の浮線による蛇行施文を垂下する。	R12
第87図 PL-27	39	SB24	7.5YR6/3 に近い青	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	肥厚した口縁部で文様帯を形成し、その中に連続した沈殿による施文を配置する。	R46
第87図 PL-27	40	SB24	5YR5/4 に近い赤褐	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	低い幅広の隆帯の両側に浅い凹部を口縁に沿って引き、その下に大型の施文を描画する。区画された内部は縦の条線で埋める。口縁部に補修孔あり。	R2
第87図 PL-27	41	SB24	5YR5/3 に近い赤褐	7.5YR4/3 褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	低い幅広の隆帯の両側に凹部を口縁に沿って施文し、施文は縦の条線を施文する。	R2
第87図 PL-27	42	SB24 南壇壁	N21 黒	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹部を伴う低い幅広の隆帯の施文を施文し、その区画内を条線による斜紋文で埋め、その中央部に浅い蛇行沈殿を垂下する。	R11
第87図 PL-28	43	SB24	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹部を伴う低い幅広の隆帯で面線を描き、その区画内を条線で埋める。	R46
第87図 PL-28	44	SB24	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR5/3 に近い褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹部を伴う低い幅広の隆帯で面線を描き、その区画内を条線で埋める。	R2
第87図 PL-28	45	SB24	10YR7/3 に近い黄橙	7.5YR5/3 に近い褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹部を伴う低い幅広の隆帯で面線を描き、その外側を縦条線で埋める。	R2
第87図 PL-28	46	SB24	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/3 に近い黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹部を伴う低い幅広の隆帯で面線を描き、その区画内を条線で埋める。	R2
第87図 PL-28	47	SB24	5YR5/4 に近い赤褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	口縁に平行して凹線状の太い沈殿を施文し、その下に同じ工具で施文を描画する。	R46
第88図 PL-28	48	SB24	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR5/4 に近い褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ?	ゆるやかなキャリバー形深鉢で、口縁に連珠の隆帯を施文し、その弧の内部から隆帯を懸垂する。その区画内は無文である。	R90
第88図 PL-28	49	SB24	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	浅く幅広い沈殿を口縁に沿って引き、そのまま平行沈殿による施文として垂下する。	R2
第88図 PL-28	50	SB24	5YR6/8 橙	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	縦目文土器口縁部、裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯に近い斜行条線による波状文を、裏面口唇に平行する隆帯まで周回するよう施文する。	R2
第88図 PL-28	51	SB24	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利?	平行沈殿あるいはその集合によって区画された中を斜条線で充填する。	R2
第88図 PL-28	52	SB24	7.5YR5/3 に近い褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-1 類	加曾利 E?	三本?の沈殿による施文による区画内を、L 形の施文を条が水平になるように充填している。	R2

神国 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第91図 PL-29	53	SB25	7.5YR7/4 に近い黄	5YR6/4 に近い黄	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻	現状把手部分、爪形の刻みがある隆帯と連結した隆帯部に、区画された内部は集合沈殿によって充 R14 填されている。	
第91図 PL-29	54	SB25	7.5YR3/1 褐灰	7.5YR5/3 に近い黄	Ⅲ群 A-1 類	曾利Ⅰ	半隆帯に近い細い粘土柱による隆帯で満巻文等の 文様を構成する。小型の現状把手をもち、両耳 R17 窓形の土器と考えられる。	
第91図 PL-29	55	SB25	10YR7/3 に近い黄緑	10YR5/2 灰黄緑	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	口縁部文様帯。条線が充填された横文とそれに 挟まれた満巻文の連結。 R17	
第91図 PL-29	56	SB25	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	龍目文土器の口縁部。裏面に大きく内向した口唇から 表面に、半隆帯と細い浮線をつくる繊細な斜行 格子目文を、裏面口唇に平行する半隆帯で周り 込ように施文する。 R13	
第91図 PL-29	57	SB25	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	キャリバー形浮線の口縁部。九単位の把手をもつ 波状口縁で、肥厚した文様帯を形成する。文様帯 には満巻文に挟まれた同心円文の三単位。あるいは 三単位満巻文の区画と相対する満巻文の二単位 の区画がある。口唇上には間隔が引かれ、把手上 面の満巻文と連結する。25号出土。 R101	
第91図 PL-29	58	SB25	10YR6/3 に近い黄	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	波状口縁の肥厚した文様帯内に細部が顕著となっ た弧線文を配し、口唇上には間隔を引く。 R13	
第91図 PL-29	59	SB25	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	肥厚した口唇の上面に沈殿を引き、口縁部文様帯 には満巻文と弧線の連結文を描く。文様帯の下に R13 には沈殿を伴う斜めの刻みのある半隆帯を配する。	
第91図 PL-29	60	SB25	10YR6/3 に近い黄緑	7.5YR6/6 浅黄緑	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	太い隆帯の懸垂文上に沈殿による逆U字と垂下線 を組み合わせた文様を描き、区画内は斜条線で埋 R17 める。	
第91図 PL-29	61	SB25 + A2G	7.5YR6/4 に近い黄	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形浮線調。地文として縦 位の条線を施文後、浅い二本の懸垂文を下ろし、 R16 側部張り出し部のあたりで小型の満巻文を描き、・R44 またその下に沈殿を垂下する。	
第92図 PL-29	62	SB25	5YR4/3 に近い赤褐	7.5YR3/3 暗褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に沈殿を伴う隆帯で満巻文を描き、その満巻 文から放射状に条線を施文する。 R17	
第92図 PL-29	63	SB25	10YR6/3 に近い黄緑	10YR4/1 褐灰	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂 文の区画内を縦条線で埋め、薄い凹線で弧線文を R15 描く。	
第92図 PL-29	64	SB25	5YR5/4 に近い赤褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂 文の区画内を縦条線で埋め、懸垂文の一部は途中 で満巻文を連結する。 R13	
第92図 PL-30	65	SB25	7.5YR5/3 に近い黄	7.5YR6/4 に近い黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両耳窓形の肩付土器。無節Rの懸垂文を縦位文 として施文し、並行沈殿による弧線文の両側を満 巻文とする。凸状の弧線文の中央部には沈殿によ る満巻文とその下にV字の逆Qの文様を描く。No.3 耳部分の現状把手には刻み隆帯を施し、その下 には満巻文を片側に配した平行沈殿による懸垂文 を描く。	
第92図 PL-30	66	SB25	10YR6/4 に近い黄緑	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ?	無文小型肩付土器。角度のある肩部に、左右二 単位のX字状把手をもつ。内面にターム状の付着 R94 物がみられる。	
第92図 PL-29	67	SB25	7.5YR6/4 に近い黄	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	八の字文を全面に施文。 R14	
第92図 PL-29	68	SB25	10YR5/3 に近い黄緑	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	浅く幅広の沈殿の曲線文による区画内を、柳歯 の押引き文を施した八の字状に配置する。 R13	
第92図 PL-29	69	SB25	10YR6/3 に近い黄緑	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	二単位の爪形文を点状に施文する。 R14	
第92図 PL-29	70	SB25	7.5YR5/3 に近い黄	7.5YR5/3 に近い黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利	浮線の無文口縁部。頸部に縦位の集合沈殿を充填 する横文?が施文される。 R13	
第92図 PL-29	71	SB25	10YR6/3 に近い黄緑	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	龍目文土器の口縁部。裏面に大きく内向した口唇 から表面に、半隆帯に近い斜行条線を裏面口唇に R17 平行する半隆帯まで周り込ように施文する。	
第92図 PL-29	72	SB25	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	集合沈殿による横線文の中央に、波状隆帯による 懸垂文を施付している。 R14	
第92図 PL-29	73	SB25	5YR6/6 橙	5YR5/3 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	半枝竹管の平行沈殿等を等間隔に垂下して器面全体 に施文して地文とし、その上に波状浮線文を垂下 R13 し懸垂文としている。	
第92図 PL-30	74	SB25	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 に近い黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利	平行する幅広の集合沈殿を地文に、頸部に沿って 波状浮線文を施付する。 R14	
第92図 PL-30	75	SB25	7.5YR5/2 灰褐	10YR4/2 灰黄褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 B2?	口縁部文様帯部分。両側に沈殿を伴う隆帯で横文? や曲線を描き、それによる区画内をLRの横文を縦 位で充填する。文様帯下には無文帯が設定されて R13 いる。	
第92図 PL-30	76	SB25	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR5/3 に近い黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利	口唇部表面に半隆帯を横に引き、RLの横文を縦密 接に施文し、地文としている。 R13	

神楽 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第92図 PL.30	77	SB25	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁に沿う薄い断面三角形の隆帯の下半以下に LR の織文を縦位密接で施文する。	R13
第92図 PL.30	78	SB25	5YR6/6 橙	5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 B-1 類	加曾利 E	断面三角形の隆帯による懸垂文で区画された区画内を、縦位 RL の織文で充填する。	R14
第92図 PL.30	79	SB25	7.5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E	太い刻みのある隆帯の懸垂文に区画された内部を、RL の織文を条が垂直になるように斜行施文で充填 R14 している。	R14
第92図 PL.30	80	SB25	5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6	Ⅲ群	中期?	網代紋のある底部。	R14
第92図 PL.30	81	SB25	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群	中期	円形通しをもつ唇台、25 号位出土。	No.2 ・ R7
第92図 PL.30	82	SB25	5YR4/2 灰褐	5YR4/3 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	土製円盤、太い条盤を施文。	R17
第94図 PL.31	83	SB26	7.5YR6/3 に近い褐	7.5YR6/4 に近い褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻?	肥厚させ、角をもって内向する口縁部。口唇の無文部の下に平行する沈線が引かれるが、その上に R19 両生帯の曲線状の浮文を貼付している。	R19
第94図 PL.31	84	SB26	7.5YR5/4 に近い褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 I	大型のキャリバー形深鉢あるいは縦目土器の頸部。粘土貼付けによる三本の平行する浮線の間を蛇行する浮線で埋め、その下は半隆帯に近い縦の条盤を全体に施文して地文とする。底部には粘土貼付けの半隆帯で J あるいは U 字状文を描いている。	R19
第94図 PL.31	85	SB26	7.5YR7/4 に近い褐	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 II	RL の織文を密接に縦位施文して地文とし、波状と直線の浮線を組み合わせた粘土柱で懸垂文を施文、懸垂文の一部は渦巻あるいは J 字文となる。	R19
第94図 PL.31	86	SB26	5YR5/3 に近い赤褐	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 II	深鉢頸部に平行半隆帯文を施文し、その下に LR の織文で条が垂直になるように密接施文して地文とし、波状浮線文を平行に施文、さらにその下に浮線文を貼り付けている。	R19
第94図 PL.31	87	SB26	5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 IV	ゆるやかなキャリバー形深鉢。低い幅広の隆帯の両側に浅い凹線を口縁に沿って引き、そこから懸垂文を垂下する。縦長方形の区画は縦の条盤で埋め、中心に薄い凹線で蛇行懸垂文を描く。	R18
第94図 PL.31	88	SB26	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 IV	ゆるやかなキャリバー形深鉢の口縁部。縦位の条盤を地文とし、口唇から直接、沈線の蛇行懸垂文 R19 を垂下する。	R19
第94図 PL.31	89	SB26	7.5YR4/2 灰褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 IV	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を縦条盤で埋め、その中央部に薄い凹 R18 線の蛇行懸垂文を施文する。	R18
第94図 PL.31	90	SB26	10YR6/3 に近い黄橙	10YR4/1 褐灰	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	口唇に沿って浅い平行沈線を引き、その下縁をそのまま平行沈線で懸垂文として垂下する。区画内 R19 は条盤的な H の字文を施文する。	R19
第94図 PL.31	91	SB26	2.5YR6/6 橙	5YR4/2 灰褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	H の字文を密接に施文。	R19
第94図 PL.31	92	SB26	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/1 褐灰	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	口唇に沿って浅い平行沈線を引き、その下縁をそのまま平行沈線で懸垂文として垂下する。区画内 R19 は条盤的な H の字文を施文する。	R19
第94図 PL.31	93	SB26	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利	両側に浅い沈線を伴う隆帯の懸垂文による区画内を、懸垂文に平行して網目状工具による連続斜突を施文し、さらにその中に網目状工具による押印文で密接平行して充填している。	R19
第94図 PL.31	94	SB26	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	縦目土器の口縁部。裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯を沿う斜行条盤を唇台下面に平行する半隆帯まで周回込むように施文する。	R18
第94図 PL.31	95	SB26	5YR4/3 に近い赤褐	2.5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E2?	口縁部に LR の織文を縦位密接に施文後、隆帯を貼り付けて渦巻文と連結した條盤を形成している。	R18
第94図 PL.31	96	SB26	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	浅い幅広の沈線で口唇に沿って弧状の槽円文を配し、その間から平行沈線による懸垂文を垂下する。R19 区画内は RL の織文を縦位で充填する。	R19
第94図 PL.31	97	SB26	7.5YR6/4 に近い橙	5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	両側に浅い沈線を伴う、太さの変異する隆帯で曲線文を描き、その内部を RL の織文で充填する。	R19
第97図 PL.32	98	SKAU1	10YR8/4 浅黄橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 IV	無文の口縁部をもつ、ゆるやかなラインのキャリバー形深鉢。頸部には環状の把手が付き、頸部以下には、低い幅広の隆帯の両側に凹線による浅い凹線で複雑な曲線の区画をつくり、その内部を縦位条盤で埋める。	R96
第97図 PL.32	99	SKAU2	2.5YR4/2 灰赤	10YR5/2 灰黄褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E3?	口縁部に沈線により同心円文を描き、その両側から四本の懸垂文を垂下、その内側二本は上端が縦手文となっている。その区画内は、LR の縦位沈線で充填する。	R98
第97図 PL.31	100	SKAU3	10YR3/1 赤褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 IV	ゆるやかなキャリバー形深鉢。平行沈線による懸垂文によって区画された中央部に、凹線による蛇行懸垂文を配す。その間を縦形状の条盤で埋める。	R22

神原 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第98図 PL-31	101	SKA	10YR5/2 灰黄褐色	10YR3/2 黒褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	平行する浅い沈線の懸垂文による区画内を条線に よる横線文で埋める。	R22
第98図 PL-31	102	SKA	10YR8/4 浅黄褐色	7.5YR6/3 に近い褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ	大型の深線の無文口縁部。	R22
第101図 PL-33	103	SKC	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅴ?	小型で無文のゆるやかなキャリバー形深線。	R87
第103図 PL-33	104	SKG	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなラインのキャリバー形深線。胴部中央 部に、低い幅広の隆起の両側に指部による浅い凹 線を区画線として大型の渦巻文を描画し、区画内 を縦位条線で埋める。	R91
第105図 PL-33	105		7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内2	角状に突出した横状把手部。腹の周りを三角押 引き文で押さえ、下部に集合沈線を施す。	R47
第105図 PL-33	106	A1Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/3 に近い褐色	Ⅲ群 A-1 類	藤内2	連続爪形文が施された隆帯によって口縁部近くに 文線帯がつくられ、その内部に交互斜突と爪形文 が施された隆帯による横間文を配置する。横間文 内は横位の集合沈線で埋める。	R24
第105図 PL-33	107	A1Gr	2.5YR5/6 明赤褐色	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内2	両側を連続爪形文とした隆帯による三角文の辺に 平行して、三角押文を施す。	R24
第105図 PL-33	108	A1Gr	10YR6/3 に近い黄褐色	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-1 類	藤内2	くの字状に突出する口縁部。連続爪形文を口唇 に平行、その下に斜平行に施し、その間に半 横竹管による連続斜突文を施している。	R27
第105図 PL-33	109	A1Gr	10YR5/2 灰黄褐色	5YR7/8 橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻	沈線による渦巻文の間を交互の斜突文によってクラ ンク状の波状文としている。	R86
第105図 PL-33	110	A2Gr	7.5YR5/3 に近い褐色	5YR5/4 に近い赤褐色	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻	ピラミッド状の突起部に、沈線による曲線と切込 みで文様を構成する。	R36
第105図 PL-33	111	A1Gr	10YR5/1 褐黄	5YR5/4 に近い赤褐色	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻3	深線の頸部に沿って平行する隆帯の間を、交互に 沈線状の斜突で波状とし、その下に縦位集合沈線 を施す。	R24
第105図 PL-33	112	A1・2Gr	5YR5/3 に近い赤褐色	2.5YR5/6 明赤褐色	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻Ⅲ	外状の突起の表面に沈線による渦巻文を描き、口 唇上の沈線を上面の渦巻文と連続させる。	R32
第105図 PL-33	113	A1・2Gr	7.5YR5/3 に近い褐色	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻	沈線による渦巻文と縦線とを一体的表現をした把手 部分。	R31
第105図 PL-34	114	A2Gr	10YR6/3 に近い黄褐色	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	龍目文土器類部。浮線状の隆帯で横り字状の文様 を形成し、その接点部の上互円形浮点文を貼付す る。口縁部には浮線による斜め條子文を施す。	R37
第105図 PL-34	115	A1Gr	10YR6/2 灰黄褐色	10YR7/4 に近い黄褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	深線頸部の蛇頭形突起部。広い縦位の条線を地 文に、粘土結の浮線で蛇頭を表現し、そこから懸 垂線と連続する渦巻文を施す。	R25
第105図 PL-34	116	A1Gr	7.5YR5/2 灰褐色	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	半隆帯の縦条線を地文とし、半横竹管による押引 きの刻みを施した浮線による平行懸垂文（途中に 横り字状の突出し）を施す。	R25
第105図 PL-34	117	A1Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	集合沈線を地文として、爪形の刻みをもつ平行 する隆帯の懸垂文を垂下し、その上から上面に沈線 を施す浮線文を水平に貼付する。	R23
第105図 PL-34	118	B2Gr	7.5YR5/2 灰褐色	7.5YR5/3 に近い褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	内湾した口縁をもつ深線の口縁部。浮線に近い隆 帯を、湾曲した口縁を包むように並行する弧状集 合線として貼付し、その中心部にギザの浮線文を 施す。	R43
第105図 PL-34	119	C3Gr	5YR5/4 に近い赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅰ	内湾した口縁をもつ深線の口縁部。浮線に近い隆 帯を、湾曲した口縁を包むように並行する弧状集 合線として貼付する。	R39
第105図 PL-34	120	A2Gr	10YR6/6 赤褐色	2.5YR5/4 に近い赤褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	肥厚した口縁部の文線帯に、渦巻文と連続した横 間文を配置し、横間文内には縦位の集合沈線が充 填される。	R36
第105図 PL-34	121	B1Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	縦条線を地文とした深線頸部の屈曲部に、平行す る蛇行浮線文を貼付し、そこから2本の蛇行浮線 文で懸垂文を施す、その交点の一部に瘤状の突起 を付している。	R38
第105図 PL-34	122	B2Gr	10YR4/1 褐黄	10YR7/4 に近い黄褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ?	粘土結による貼付けで浮線に近い隆帯を口唇に 沿って施し、突起部で丸める。その下に平行し て隆帯を施し、その間を間隔の広い条線で埋め る。口唇内側には受口状の突起がめぐる。	R42
第105図 PL-34	123	A2Gr	7.5YR6/4 に近い橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	深線頸部に平行する集合沈線を施し、その下に 地文として縦条線を密接施した後、蛇行浮線文 を水平に貼付、そこから同じ蛇行浮線文の懸垂文 を垂下する。	R37
第105図 PL-34	124	A1・2Gr	7.5YR5/2 灰褐色	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ	L.Rの渦文を縦位密接に施文して地文とし、並行す る浮線によるY字懸垂文を貼付する。	R31
第105図 PL-34	125	B2Gr 区外	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ?	頸部に沿って、半横竹管のU字形先端による連続 斜突が施された平行浮線文を施し、その下に縦 位条線を施す。	R41
第106図 PL-34	126	A1Gr	10YR6/3 に近い黄褐色	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	肥厚した口縁部で文線帯を形成し、その中に連続 した沈線による渦巻文を配置する。	R46

神奈川版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地番号
第106図 PL34	127	A2Gr	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	底状口縁部の文様帯部分、粘土帯を塗り付けて肥厚した文様帯に透し状の横円文を連続して施し、R35口唇上面に沈線を描く。	
第106図 PL34	128	A1Gr	5YR5/4 に近い赤褐	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	底状口縁部の文様帯部分、満巻文を交点としたつなぎ弧文を描き、弧文の内部を太い集合沈線で充填する。	R26
第106図 PL34	129	B2Gr	2.5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅲ	胴部に、半截竹管による押引き爪形文の刻みを施した平行隆帯を横状に施し、縦位条線を地文とした胴部に平行した隆帯による懸垂文と蛇行浮線文による懸垂文を施す。	R43
第106図 PL34	130	A1Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/4 に近い褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅱ・Ⅲ?	地文にL状の縄文を縦位に施し、粘土線による浮線をつなぎ弧文を描き、弧の交点には満巻文を配置する。	R28
第106図 PL34	131	C3Gr	7.5YR4/1 褐灰	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口縁に沿って、粘土線上面に沈線を引き、並行な屈折状の底状文とする。その下に平行沈線による懸垂文を垂下し、両側に被杉になる形で集合沈線で区画を埋める。	R39
第106図 PL34	132	B1Gr	10YR6/2 灰黄褐	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口縁に沿って、両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって連続状の文様を施し、区画内を縦位の条線で埋める。	R38
第106図 PL34	133	B2Gr	10YR8/4 浅黄褐	7.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に凹線で押さえた隆帯を口縁に沿って施し、そこから懸垂文を垂下してできる縦長方形の区画内に縦位の条線で埋め、中央部に浅い凹線の蛇行懸垂文を施す。	R42
第106図 PL34	134	B2Gr	7.5YR5/3 に近い黄	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口唇に沿う凹線の下に縦の条線を密接に施す。	R42
第106図 PL34	135	A1・2Gr	10YR7/4 に近い黄橙	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	腰状把手部分、凹線的な沈線で複雑な曲線を描画している。	R30
第106図 PL34	136	A1Gr	10YR3/2 黒褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	ゆるやかなキャリバー形小型深鉢の胴部、両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を縦位の条線で埋め、中央部に浅い凹線による蛇行懸垂文を垂下する。	R27
第106図 PL34	137	A1Gr	10YR5/3 に近い黄橙	10YR7/4 に近い黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の平行隆帯による懸垂文の区画内を条線による被杉文で埋め、その中央部に浅い凹線の蛇行懸垂文を施す。	R86
第106図 PL34	138	A1Gr	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/3 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	肥厚した口縁部の口唇に沿ってゆるい凹線を引き、その下にやや複雑な条線を施す。	R86
第106図 PL34	139	A1Gr	7.5YR6/4 に近い黄	10YR6/3 に近い黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	深鉢胴部に、両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって懸垂文と大小の満巻文を連続した文様を描く。文様間には縦位の条線が施される。	R26
第106図 PL34	140	A1Gr	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 に近い橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の平行隆帯による懸垂文の区画内を条線による被杉文で埋め、その中央部に浅い凹線の蛇行懸垂文を施す。	R46
第107図 PL35	141	B1・B2Gr	5YR4/3 に近い赤褐	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	深鉢胴部に、両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって、大小の満巻文を連結した文様を描く。・R45	R45
第107図 PL35	142	A1Gr	10YR6/3 に近い黄橙	7.5YR5/4 に近い褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を条線による被杉文で埋め、その中央部に浅い凹線の蛇行懸垂文を施す。	R46
第107図 PL35	143	A1Gr	7.5YR5/3 に近い褐	7.5YR5/3 に近い褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈線による曲線文を描き、その区画内を放射状の条線で埋める。	R25
第107図 PL35	144	A2Gr	10YR5/3 に近い黄橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	浅い沈線による満文と曲線文の連結により、複雑な文様を描画し、区画された内部は条線によって充填される。	R35
第107図 PL35	145	A2Gr	7.5YR7/6 橙	10YR6/3 に近い黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	キャリバー形深鉢胴部くびれ部、両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯による懸垂文の区画内を、縦位条線で埋め、その中央部に浅い沈線による蛇行懸垂文を施す。	R36
第107図 PL35	146	A2Gr	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う低い幅広の並行隆帯による曲線文の内部を、凹線的な集合沈線による被杉文で充填する。	R36
第107図 PL35	147	A1Gr	7.5YR7/4 に近い橙	7.5YR7/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	平行沈線による曲線文の区画内を、放射状の条線で充填する。	R24
第107図 PL35	148	A1・2Gr	7.5YR4/3 褐	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口唇に平行して凹線状の沈線を引き、その下に沈線を両側にもつ隆帯で満巻文や弧線文を描き、その区画内を縦位条線で埋める。	R31
第107図 PL35	149	A1Gr	5YR4/2 灰褐	5YR4/3 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	口縁に平行して、凹線状の幅広沈線を引き、その下を斜条線で埋める。	R23
第107図 PL35	150	B1Gr	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の並行隆帯による曲線文と満巻文の内部を条線で埋める。	R38
第107図 PL35	151	A2Gr	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈線による満巻文と弧線文を施し、それによる区画内を縦位条線で埋める。	R37

神国 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第107図 PL-35	152	A2Gr	7.5YR6/4 に近い黄	7.5YR6/4 に近い黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	波状口縁の突起部分。口唇上面に渦巻文を基点とした連続弧文を施し、その突起表面に渦巻文を施す。	R37
第107図 PL-35	153	A3Gr	10YR4/2 灰黄褐	5YR6/6 黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	沈隆による渦巻文を端部とする連続弧文が施されている。	R33
第107図 PL-35	154	B2Gr	7.5YR3/3 暗褐	5YR6/6 黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	縦長条線を地文とするキリバー形深鉢の口縁部。網代直の表面。両側に浅い凹線に伴う低い幅広い隆起による。6単位?の懸垂文の区画内を縦位の条線で埋める。	R42
第107図 PL-35	155	A1 + 2Gr	7.5YR6/4 に近い黄	2.5YR6/8 黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利Ⅳ	隆起による長方形区画の内部をへら状工具による連続斜突文で平行および斜平行に施す。	R37
第107図 PL-35	156	A2Gr	7.5YR6/4 に近い黄	7.5YR5/4 に近い黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利	短いへら状工具の先端による連続斜突文を、略的に密接平行して施している。	R43
第108図 PL-35	158	C3Gr	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	口縁に沿って西本の凹線を平行に施し、その下を八の字文で埋める。	R39
第108図 PL-35	159	A2Gr	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR6/6 黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利	ゆるやかなキリバー形深鉢の突起の軌跡がある口縁部。突起?部を基準にして凹字状の横四文を連続状に配置し、さらに突起?から平行沈隆で二方向に放射状に弧状文を描き、それによる区画内を八の字状文で充填する。	R37
第108図 PL-35	160	A1 + 2Gr	2.5YR3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	両側に浅い凹線に伴う低い幅広い隆起の曲線文による区画内を、磨面状工具による凹形の押引文で八の字状に施し充填する。	R29
第108図 PL-35	161	A1 + 2Gr	10YR6/4 に近い黄褐	7.5YR5/4 に近い黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	口縁部に沿って凹面状の幅広い沈隆を引き、その下に平行して低く太い隆帯と懸垂文を施す。区画内をへら描きによる線状文を施す。	R29
第108図 PL-35	162	A1 + 2Gr	10YR5/2 灰黄褐	5YR4/3 に近い赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	両側に浅い沈隆に伴う低い幅広い隆起の曲線文による区画内を、磨面状工具による凹形の押引文で八の字状に施す。	R29
第108図 PL-35	163	A2Gr	10YR6/2 灰黄褐	10YR3/2 黒褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型深鉢の無文口縁部。	R36
第108図 PL-35	164	B1 + B2Gr	5YR4/1 褐灰	10YR5/2 灰黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型の深鉢の無文口縁部。	R42
第108図 PL-35	165	A1 + 2Gr	7.5YR7/6 黄	7.5YR8/6 浅黄褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型の龍目文土器口縁部。口唇内湾部が欠落している。口唇を含めた全体を斜行の条線を密接して施す。	R31
第108図 PL-35	166	A1 + 2Gr	7.5YR7/6 黄	7.5YR6/6 黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型の龍目文土器の口縁部。裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯に近い斜行条線を裏面口唇に平行する半隆帯まで回り込むように施す。	R29
第108図 PL-35	167	A1Gr	10YR7/4 に近い黄褐	7.5YR6/8 黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利	龍目文土器の口縁部。裏面に大きく内向した口唇から表面に、半隆帯に近い斜行条線を裏面口唇まで回り込むように施す。	R25
第108図 PL-35	168	A1 + 2Gr	7.5YR6/4 に近い黄	7.5YR5/3 に近い黄	Ⅲ群 A-2 類	曾利	大型の深鉢の無文口縁部。	R31
第108図 PL-35	169	A1Gr	5YR5/4 に近い黄	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁部に沿って縦線のような沈隆を引き、その下に平行沈隆の懸垂文を施した後、その区画内を RL の織文で縦の条が密接になるように充填する。	R46
第108図 PL-35	170	B2Gr	7.5YR4/1 褐灰	5YR6/6 黄	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁に平行して沈隆を引き、その下に直線と弧線による懸垂文を施す。その区画内を多方向に施された RL の織文で埋める。	R43
第108図 PL-35	171	A2Gr	2.5YR2/2 灰白	10YR1/3 に近い黄褐	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E	薄い断面三角形の隆起による懸垂文の区画内を縦位の LR の織文で埋める。	R35
第108図 PL-35	172	A2Gr	7.5YR5/4 に近い黄	5YR6/6 黄	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E	沈隆による懸垂文の区画内を単純 R の織文を縦位密接で充填する。	R37
第109図 PL-36	173		5YR6/6 黄	7.5YR7/6 黄	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	広口壺形の深鉢。口唇近くに浅い平行沈隆を引き、そこから8単位?の平行沈隆による懸垂文を施す。その区画内は太めの単純 R の織文を縦位で充填する。	R97
第109図 PL-36	174	A1Gr	10YR6/4 に近い黄褐	10YR7/4 に近い黄褐	Ⅲ群 C-2 類	吹埴 (中富・神明式2期?)	内湾する口縁部の口唇に沿って沈隆と斜突を施し、その下に渦巻文を起点とした三本の並行沈隆によるつなぎ弧文で文様帯を形成する。文様は、L の橋糸文を縦位で地文的に全体に施した後に引かれている。胎土は白肌色で薄い。	R24
第109図 PL-36	175	A1Gr	10YR6/3 に近い黄褐	10YR4/1 褐灰	Ⅲ群 C-2 類	吹埴 (中富・神明式2期?)	R の橋糸をやや斜め縦位に施し地文とし、口縁に沿って、小型巻貝の底部を工具とした連続斜突文を上下交互に施す。その下に浅い三本の並行沈隆で連結した連弧を描く。胎土は灰白色の色調を呈す。	R24
第109図 PL-36	176	A1Gr	10YR7/4 に近い黄褐	10YR8/4 浅黄褐	Ⅲ群 C-2 類	吹埴 (中富・神明式2期?)	内湾する口縁部の口唇に沿って沈隆と斜突を施し、その下に渦巻文を起点とした三本の並行沈隆によるつなぎ弧文で文様帯を形成する。文様は、L の橋糸文を縦位で地文的に全体に施した後に引かれている。胎土は白肌色で薄い。	R18 - R24

神奈川 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第109図 PL.36	177	A1Gr	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 に近い橙	IV群 A-2 類	堀之内1?	外反する口唇をもち、縦位 RL の縄文を地文として、口縁に沿って平行沈線を描文する。平行沈線は角をもって閉じ、その終端部分には円文?の両側に縦平行の短い沈線が区切る。	R24
第109図 PL.36	178	A1・2Gr	7.5YR5/3 に近い黄	7.5YR5/3 に近い黄	IV群 A-2 類	堀之内2	平行沈線の懸垂文による区画内を単軸 L の縄文で充填する。	R31
第109図 PL.36	179	C3Gr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	III群	中期?	広葉樹の本葉痕をもつ底部。	R40
第109図 PL.36	180	B1Gr	7.5Y2/1 黒	2.5YR6/8 橙	III群	中期?	土製円盤。無文。	R38

第13表 K地区 出土石器観察表

神奈川 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第75図 PL.24	1	A1Gr	ナイフ形石器	黒曜石	2.33	1.65	0.58	1.89	一側縁加工で、右刃部に使用痕と思われる細かい剥離が顕著。	R67
第75図 PL.24	2	A2Gr	ナイフ形石器	黒曜石	(3.41)	1.7	0.45	2.18	先端部欠損。横断片素材の一側縁加工。	R73
第79図 PL.36	181	SB22 床	磨製石斧	緑色凝灰岩	14.73	4.72	3.81	408.84	敲打整形の後、全体を研磨した乳棒状石斧。22号住出土。	R54
第79図 PL.36	182	SB22 床面	打製石斧	硬砂岩	9.06	6.11	1.1	79.47	22号住の床出土。	R58
第79図 PL.36	183	SB22	打製石斧	硬砂岩	(10.15)	6.11	3.31	309.41	分銅形に近い短冊形。刃部欠損。22号住出土。	R56
第79図 PL.36	184	SB22 床面	磨・回石	輝石安山岩	11.33	9.84	5.42	793.13	22号住床面出土。	R58
第79図 PL.36	185	SB22	石皿	多孔質安山岩	(17.32)	(11.1)	(5.6)	1204.44	22号住出土。	R56
第83図 PL.36	186	SB23	打製石斧	砂岩	(6.29)	4.11	1.45	52.01	短冊形。刃部と頭部欠損。23号住出土。	R1
第89図 PL.36	187	SB24	磨製石斧	砂岩	(11.31)	5.11	2.93	242.86	乳棒状石斧。頭部欠損しており、回石に転用されている。24号住出土。	R60
第89図 PL.36	188	SB24	打製石斧	富士川ホルンフェルス	7.47	4.53	1.91	67.33	小型の短冊形。24号住出土。	R53
第89図 PL.36	189	SB24	打製石斧	緑色片岩	8.29	4.31	1.61	76.96	刃部再生の進んだ短冊形。24号住出土。	R60
第89図 PL.36	190	SB24	磨・回石	安山岩	10.19	8.73	4.55	652.3	24号住出土。	R80
第95図 PL.37	191	SB26	打製石斧	砂岩	13.29	4.82	2.32	157.83	刃部欠損。挟りのある短冊形。26号住出土。	R48
第99図 PL.37	192	SKA	打製石斧	硬砂岩	(8.71)	5.27	1.37	111.9	上半部欠損。短冊形。A土坑出土。	R71
第99図 PL.37	193	SKA	石棒	粗粒安山岩	(20.13)	15.71	11.88	4980	断面が隅丸正三角形で各面を磨いて整形している。A土坑出土。	R63
第110図 PL.37	194	C3Gr	石鐮	黒曜石	2.02	1.78	0.42	1.21	右側部欠損の回基無茎鐮。	R102
第110図 PL.37	195		石鐮	黒曜石	1.65	1.32	0.41	0.76	基部欠損。	R103
第110図 PL.37	196		石鐮	黒曜石	(1.39)	1.45	0.32	0.5	先端部欠損の回基無茎鐮。	R104
第110図 PL.37	197	A1Gr	石鐮未製品	黒曜石	1.73	1.39	0.49	0.95	剥片の打削面が除去でずしに座割か。	R66
第110図 PL.37	198	SB25	楔形石器	黒曜石	2.24	1.74	0.75	2.07	25号住出土。	R61
第110図 PL.37	199	A1Gr	楔形石器	黒曜石	1.66	1.52	0.7	1.6		R66
第110図 PL.37	200	C3Gr	楔形石器	黒曜石	1.33	1.12	0.43	0.68		R75
第110図 PL.37	201	A1Gr	楔形石器	黒曜石	3.01	1.94	1.53	6.5	両端石核の可能性あり。	R67
第110図 PL.37	202	A1Gr	楔形石器	黒曜石	1.64	1.65	0.63	1.39		R65
第110図 PL.37	203	A1Gr	楔形石器	黒曜石	2.39	1.02	0.55	1.35		R65
第110図 PL.37	204	C3Gr	楔形石器	黒曜石	1.92	0.76	0.55	0.82		R75
第110図 PL.37	205	A1Gr	楔形石器	黒曜石	1.24	1.55	0.76	1.52		R65
第110図 PL.37	206	A1Gr	楔形石器	黒曜石	1.79	1.62	0.54	1.19		R65
第110図	207	A1Gr	楔形石器	粘板岩	4.74	3.08	0.82	27.87	円筒素材。両端剥片剥離を目的としているかもしれない。	R81

採掘 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第110図 PL-37	208	A1Gr	削器	富士川ホルン フェルス	5.28	6.51	2.57	99.8	打製石斧の刃部のような加工がされる。	R49
第111図 PL-37	209	A1Gr	石刀状剥片	黒曜石	3.13	1.65	0.45	1.22	連続剥離されたものではなく、偶発的な石刀状剥片と考えられる。	R70
第111図 PL-37	210	B2Gr	磨製石斧	凝灰岩質砂岩	(7.1)	(5.51)	(2.35)	92.38	刃部のみ。	R84
第111図 PL-37	211	A1・2Gr	打製石斧	硬砂岩	8.03	5.67	1.96	109.92	バナ形に近い短冊形。	R50
第111図 PL-37	212	A1Gr	打製石斧	砂岩	(7.71)	4.91	1.08	55.29	頭部欠損。短冊形。	R49
第111図 PL-37	213	A1Gr	打製石斧	片麻岩	(7.79)	3.88	1.54	63.34	頭部欠損。短冊形。	R49
第111図 PL-37	214	A2Gr	打製石斧	硬砂岩	(8.58)	5.96	2.66	171.7	上半部欠損。短冊形。	R51
第111図 PL-37	215	B2Gr	打製石斧	富士川ホルン フェルス	7.31	5.17	2.26	79.84	バナ形に近い小型短冊形。	R52
第111図 PL-37	216	A1Gr	石槌	富士川ホルン フェルス	6.68	6.12	3.38	177.73	側面を打面として、打点が円周する剥離を行う。	R49
第111図 PL-37	217		原石	黒曜石	7.99	7.4	2.71	150.36	試し割りと思われる剥離痕あり。	R55
第111図 PL-37	218		原石	黒曜石	7.9	6.89	5.04	272.95		R55
第111図	219	B1Gr	敲石	凝灰岩	(10.32)	(2.18)	(3.23)	115.72	打撃による破砕時の剥片。	R83
第111図	220	B2Gr	磨・敲石	砂岩	10.42	10.25	2.81	386.66		R84
第111図 PL-37	221	A1Gr	磨・凹石	粗粒安山岩	8.34	7.52	5.1	340.12		R81
第112図	222	B2Gr	磨・敲石	砂岩	9.42	7.83	4.1	451.96		R84
第112図	223		磨石	安山岩	(8.35)	(4.92)	(5.01)	300.36		R85
第112図	224	B2Gr	磨石	砂岩	16.61	12.63	2.24	749.71	両面とも磨面が顕著で、右面的に使用されたと考えられる。	R76
第112図	225		磨石	多孔質安山岩	9.32	8.71	8.1	737.42	球状の磨石。	R85

第9章 天間沢遺跡L地区（第12地区）

第1節 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

昭和61年、事業者（個人）は、富士市天間1061-1外（約750㎡）において、宅地造成工事を計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置するため、昭和61年9月3日、事業者から文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。富士市教育委員会はこれを静岡県教育委員会に進達し（昭和61年10月20日付け、富教文体第183号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった（昭和61年10月28日付け、教文第1743号）。

昭和61年8月25日、事業者から富士市教育委員会へ「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」が提出された。これを受けて富士市教育委員会は、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出した（昭和61年9月5日付け、富教文体第145号）。当該地の北側では、昭和46年、市立幼稚園建設に伴って発掘調査が実施され（第2地区、旧：第3次B地区）、縄文時代中期の配石遺構、堅穴建物1軒、土坑6基が検出されている。当該地においてもこれに連続する遺構が存在する可能性があるため、富士市教育委員会文化体育課による確認調査を実施することとなった。

発掘調査の経過

調査は昭和61年9月5日から9月10日にかけて実施した。調査開始時、敷地の南側では道路および側溝の敷設工事が進んでおり、西側の斜面地については盛土工事が終了していたため、敷地北東部分を中心に調査することとなった。

南北方向のトレンチ（1Tr）を設定し、重機により表土を掘削、人力により遺構確認のための精査を



第113図 L地区 位置図

行ったところ、溝状遺構・土坑を検出したため、北側に東西方向のトレンチ（2Tr）と拡張区を設定し、遺構・遺物の検出、掘削、記録作業を行った。

調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	小川 清
事務局		教育次長	秋山 武雄
		文化体育課	課長 深澤 清一
			課長補佐 鈴木 政俊
		文化振興係	係長 山本 宣親
調査担当		主事	平林 将信
		主事	渡井 義彦

第2節 発掘調査の成果

調査の成果

溝状遺構1条(SD01)と土坑5基(SK63～67)を検出し、完掘した。

・溝状遺構

SD01

敷地北側で検出された東西方向に延びる溝状遺構である。東端はトレンチ外にあり、西端は攪乱により失われており、全長は不明であるが、検出部分で12.68mを測る。幅は東側で63cm、西側で136cmを測る。断面形は浅いU字形で、東から西に向けて下る傾斜をもち、その落差は60cmほどである。西端には大小の礫の集石が認められた。覆土中から縄文土器片が数点出土したが、遺構覆土が明らかに古墳時代以降のものであることから、流れ込みによるものと判断される。

・土坑

SK63

ITrの南側で検出された。平面形は長径140cm、短径120cmの楕円形を呈する。底部は平底で、検出面からの深さは39cmを測る。出土遺物はない。

SK64

ITr北側の拡張区で検出された。SK65・66・67を切っている。平面形は長径340cm、短径315cmの楕円形を呈する。底部は平底で、壁は緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは50cmを測る。

SK65

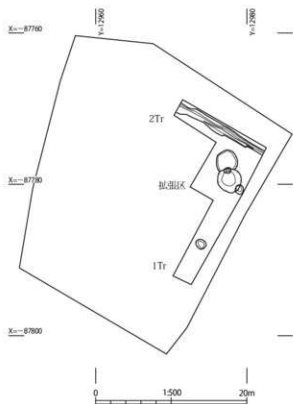
ITr北側で検出された。西側をSK64に切られている。平面形は楕円形を呈するとみられ、残存最大幅で125cmを測る。底部は平底で、検出面からの深さは40cmを測る。

SK66

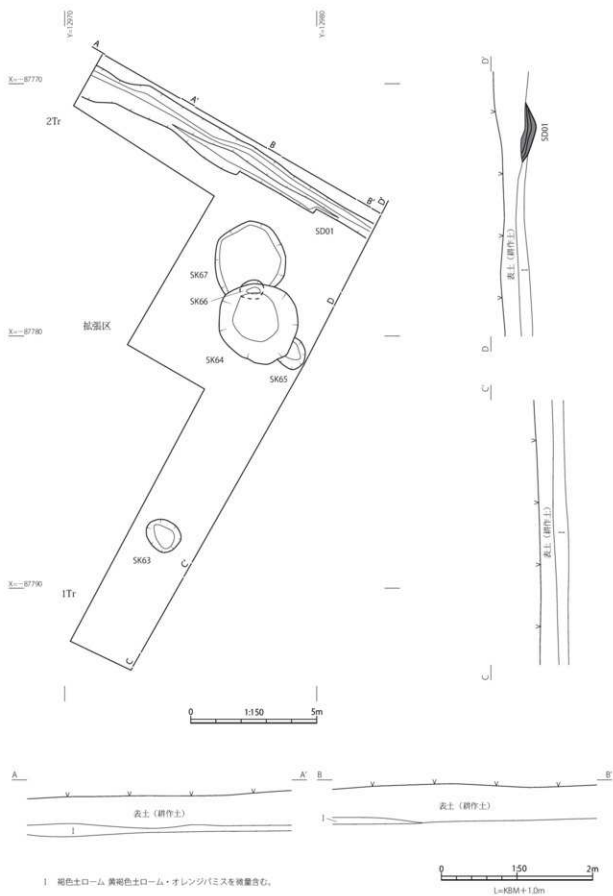
ITr北側の拡張区で検出された。SK64に切られ、SK67を切っている。平面形は楕円形を呈するとみられ、残存最大幅で95cmを測る。底部は平底で、検出面からの深さは63cmを測る。

SK67

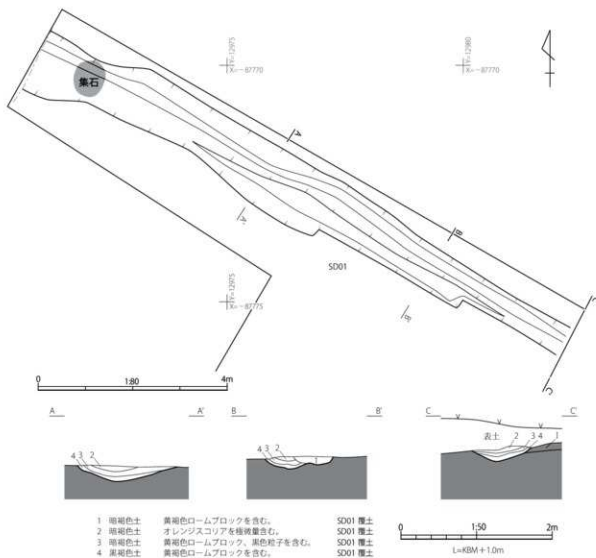
ITr北側の拡張区で検出された。SK64・66に切られる。平面形は楕円形を呈するとみられ、長径は285cm以上、短径は280cmを測る。底部は平底で、検出面からの深さは35cmを測る。



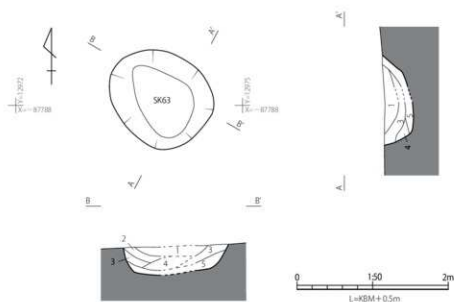
第114図 L地区 トレンチ配置図



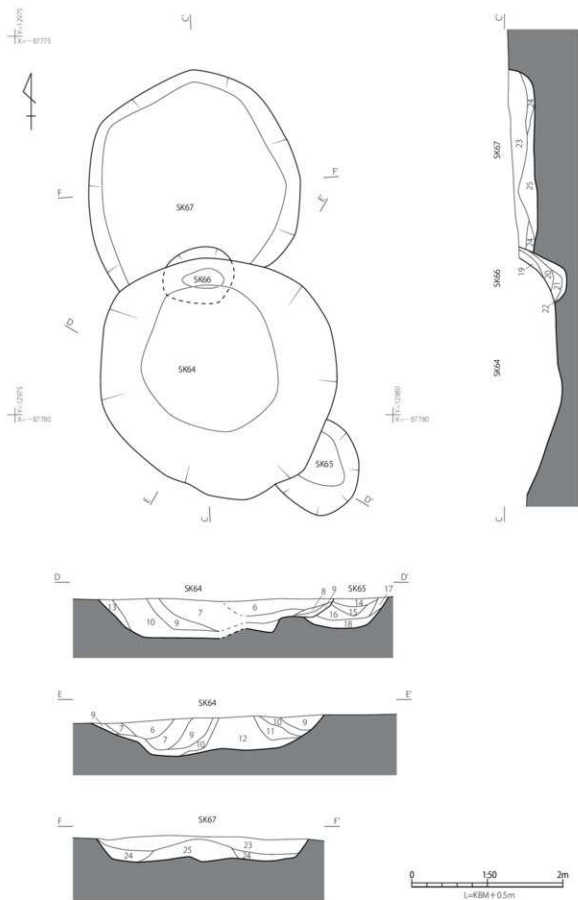
第 115 図 L 地区 トレンチ全体図、セクション図



第116図 L地区 SD01



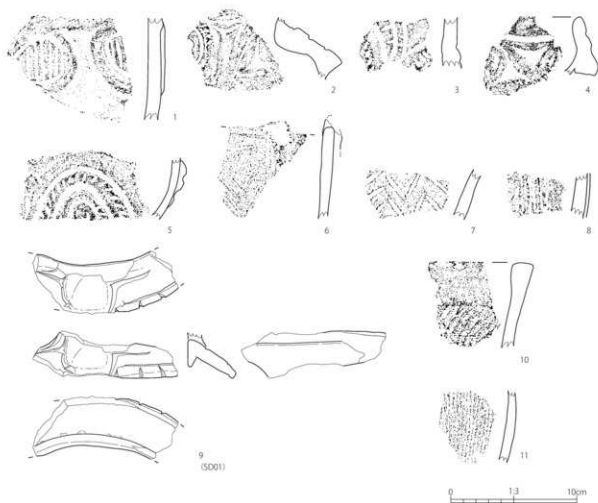
第117図 L地区 SK63



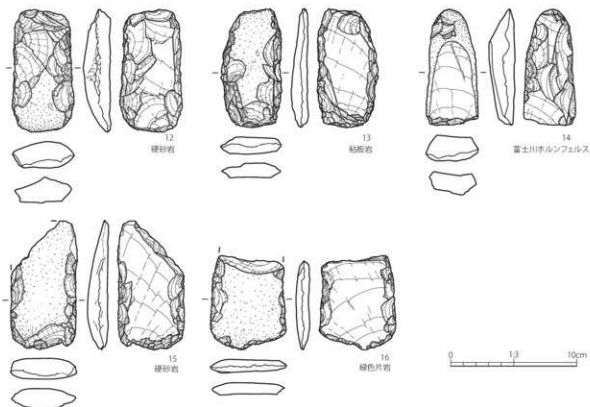
第118図 L地区 SK64～67

1 褐色土	黄褐色ロームブロック、オレンジスコリア粒を含む。	SK63 覆土
2 褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK63 覆土
3 暗褐色土	黒色土、スコリア粒を含む。	SK63 覆土
4 明褐色土	黄褐色ロームオレンジスコリア粒を含む。	SK63 覆土
5 明褐色土	黄褐色ロームブロックを多量、オレンジスコリア、炭粒を含む。	SK63 覆土
6 暗褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
7 黒褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
8 黄褐色ローム	ブロック状。	SK64 覆土
9 褐色土	黄褐色土、黒色土、オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
10 暗褐色土	黄褐色ロームブロック、黒色土を含む。	SK64 覆土
11 暗黄褐色土	黄褐色ロームブロック、黒色土を含む。	SK64 覆土
12 黄褐色ローム	オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
13 褐色土	黄褐色土、オレンジスコリア粒を含む。	SK64 覆土
14 暗褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK65 覆土
15 褐色土	黄褐色ロームを含む。	SK65 覆土
16 暗褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK65 覆土
17 暗褐色土	黄褐色ロームを含む。	SK65 覆土
18 明褐色土	黄褐色ロームブロック、オレンジスコリア粒、炭粒を含む。	SK65 覆土
19 明褐色土	黄褐色土を含む。	SK66 覆土
20 褐色土	黄褐色ローム、オレンジスコリア粒を含む。	SK66 覆土
21 暗褐色土		SK66 覆土
22 褐色土	黄褐色ロームを含む。	SK66 覆土
23 暗褐色土	オレンジスコリア粒を含む。	SK67 覆土
24 褐色土	黄褐色土、オレンジスコリア、炭粒を含む。	SK67 覆土
25 明褐色土	黄褐色ロームを多量、黒色土を少量含む。	SK67 覆土

第119図 L地区 SK63～67 土層注記



第120図 L地区 出土遺物実測図（縄文時代）（1）

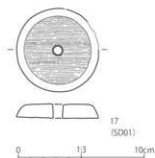


第121図 L地区 出土遺物実測図（縄文時代）（2）

・出土遺物

出土遺物は、土器では、1～5のⅢ群A-1類の井戸尻1・2式の縄文時代中期中葉と、6～8のⅢ群A-2類の曾利Ⅳ・Ⅴ式、10・11のⅢ群B-2類の加曾利E式の中期後葉の大きく二時期に分けられる。9は井戸尻式か曾利式の時期と思われるが、復元すると鐙付き環状の土製品となるようで、用途不明である。石器は、全て短冊形の打製石斧で、どの土器型式に帰属するかは判別できないが、縄文時代中期のものだろう。

SD01は現地調査で古墳時代以降の遺構であると判断されているが、SD01からは17の土製紡錘車が出土している。この紡錘車は、凸面部上面に非常に細かい条線が観察され、その反対面には製作時に平坦面に貼付けたバリ状の痕跡が見られる。



第122図 L地区 出土遺物実測図（古墳時代）

第14表 L地区 遺構一覧表

遺構種類	製品遺構名	調査対象遺構名	位置	時代	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (高→深)	備考
溝状遺構	SD01	溝状遺構	2Tr	(1260)	64	134	33	直行	丸底	-	
土坑	SK63	A (63号) 土坑	1Tr		140	120	39	楕円形	平底	-	
土坑	SK64	B (64号) 土坑	1Tr		340	315	50	楕円形	平底	SK64 → SK65 ~ 67	
土坑	SK65	C (65号) 土坑	1Tr	(125)	118	40		(楕円形)	平底	SK64 → SK65	
土坑	SK66	D (66号) 土坑	1Tr	(95)	(75)	63		(楕円形)	平底	SK64・SK67 → SK66	
土坑	SK67	E (67号) 土坑	1Tr	(285)	280	35		(楕円形)	平底	SK64 → SK67 → SK66	

第15表 L地区 出土土器観察表

採掘 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第120図 PL-39	1	Tr	7.5YR5/3 に近い褐色	5YR5/4 に近い赤褐色	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 1・2	口縁部近くに太い隆帯で連結した楕円文を描く。楕円区画内は縦位の集合状隆帯で充填する。	R2
第120図 PL-39	2	Tr	7.5YR7/6 褐色	7.5YR5/3 に近い褐色	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 1・2	直三角区画文と渦巻文の区画内は三叉文が描かれる。	R2
第120図 PL-39	3	Tr	5YR6/6 褐色	7.5YR4/2 灰褐色	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 1・2	斜め鋭角や爪形の刻みを施した隆帯文の区画内に、沈線で弧線を描く。	R2
第120図 PL-39	4	Tr	7.5YR5/4 に近い褐色	7.5YR4/3 褐色	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 1・2	ピラミッド状に突出した把手の面に、三叉文を内側にもつ三角文を施す。	R2
第120図 PL-39	5	Tr	7.5YR5/4 に近い褐色	5YR6/6 褐色	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 3	内湾する口縁部の表出し部、一部に斜め刻みを施した隆帯で、大きな渦巻文を描く。	R2
第120図 PL-39	6	西趾遺区	10YR7/3 に近い黄褐色	N3 暗灰	Ⅲ群 A-2 類	曾利IV	口唇を包むように突起を貼付け、そのまま左側面のみに刻みをつけた隆帯として懸垂文とし、区画内を線状の条線で埋める。胎土は白灰色を呈す。	R3
第120図	7	Tr	10YR6/3 に近い黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利V	八の字文を全体に施す。	R2
第120図	8	Tr	5YR6/4 に近い褐色	2.5YR6/6 褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利	三本の平行沈線を引いた隆帯二本の懸垂文。	R2
第120図 PL-39	9	溝状遺構	2.5YR6/6 褐色	2.5YR6/6 褐色	Ⅲ群 A-2 類	曾利?	環状で返しのある縁を持つ土製品。把手状の突起物の痕跡があり、沈線で文様を描画している。	R4
第120図 PL-39	10	Tr	7.5YR6/4 に近い褐色	7.5YR7/6 褐色	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E4	口縁部に無文帯を敷け、3本のLRの縄文をやや傾斜めに施文している。	R2
第120図	11	土坑	7.5YR5/4 に近い褐色	10YR3/2 黒褐色	Ⅲ群 B-2 類	加曾利 E 9	縦位に施文されたLの熱帯文。	R1
第122図 PL-39	17	7.5YR7/4 に近い褐色	5YR6/6 褐色		古墳?		土製紡錘車。	R4

第16表 L地区 出土土器観察表

採掘 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第121図 PL-39	12	溝状遺構	打製石斧	硬砂岩	9.74	4.83	2.09	130.96	短冊形。	R4
第121図 PL-39	13	西趾遺区	打製石斧	粘板岩	9.38	4.88	1.21	76.48	短冊形。	R3
第121図 PL-39	14	西趾遺区	打製石斧	富士川ホルンフェルス	9.2	4.1	1.96	93.32	刀部再生が著しく進行している。短冊形。	R3
第123図 PL-39	15	西趾遺区	打製石斧	硬砂岩	10.25	5.06	1.53	104.87	短冊形。	R3
第121図 PL-39	16	トレンチ内	打製石斧	緑色片岩	7.49	6.01	0.85	57.68	上半部欠損。短冊形。	R2

第10章 天間沢遺跡M地区（第13地区）

第1節 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

昭和62年4月、株式会社 富士総合開発センター（以下、事業者）は富士市天間1312番地の1外（2579.49㎡）において宅地分譲地造成工事を計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置するため、昭和62年4月15日、事業者から文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。富士市教育委員会はこれを静岡県教育委員会に進達し（昭和62年4月23日付け、富教文体第17号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった。

昭和62年4月22日、土地所有者から発掘調査承諾書が提出され、富士市教育委員会は、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し（昭和62年4月28日付け、富教文体第23号）、文化体育課職員による発掘調査を実施することとなった。

発掘調査の経過

調査は昭和62年5月11日から5月15日にかけて実施した。敷地の中央に南北方向のトレンチを1本設定し（1Tr）、重機による表土掘削後、人力で精査を行い、遺構・遺物の検出につとめた。敷地は工場跡地であり、工場建設時の整地のため上部は削平されており、北側部分では遺物包含層は完全に失われていた。南側部分においても縄文時代中期の栗色土層を一部で確認できたのみであった。

1Tr南寄りで2基の土坑（SK68～69）を検出したが、遺構からもトレンチ内からも遺物は出土しなかった。



第123図 M地区 位置図

調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	小川 清
事務局		教育次長	伊達 喬一
		文化体育課	課長 深澤 清一
			課長補佐 渡邊 誠
		文化振興係	係長 杉本 篤
調査担当		主事	平林 将信
		主事	渡井 義彦

第2節 発掘調査の成果

ITr 南寄りで切り合う2基の土坑 (SK68 ~ 69) を検出し、完掘した。

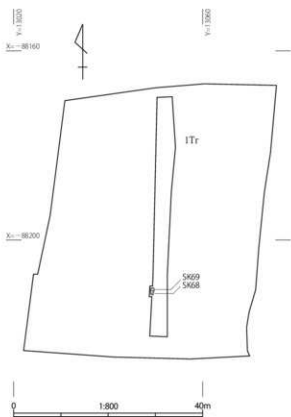
SK68

SK69 の南側を切っている。平面形は楕円形を呈し、長径 98cm、短径 66cm を測る。底部は平底で、検出面からの深さは 40cm を測る。遺物は出土しなかった。

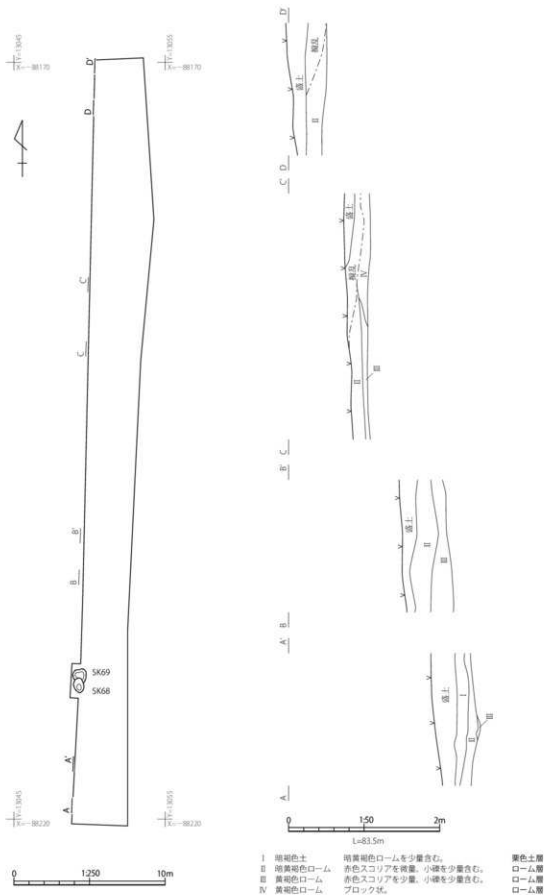
SK69

南側を SK68 に切られている。平面形は不整形で、長径 95cm 以上、短径 88cm を測る。底部は平底で、検出面からの深さは 40cm を測る。遺物は出土しなかった。

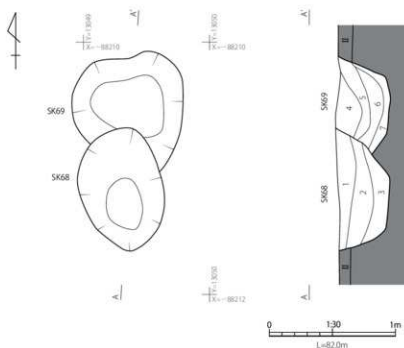
どちらの土坑も覆土が栗色土層 (Ku) あるいは富士黒土層 (FB) 相当と考えられるので、縄文時代の遺構と考えられる。



第 124 図 M 地区 トレンチ配置図



第125図 M地区 トレンチ全体図、セクション図



- | | | | |
|---|------|----------------------------|---------|
| 1 | 暗褐色土 | オレンジスコリア粒を微量含む。 | SK68 覆土 |
| 2 | 褐色土 | オレンジスコリア粒を少量含む。 | SK68 覆土 |
| 3 | 黒褐色土 | 黄褐色ロームを少量、オレンジスコリア粒を微量含む。 | SK68 覆土 |
| 4 | 黄褐色土 | オレンジスコリア粒・黄褐色ローム粒を微量含む。 | SK69 覆土 |
| 5 | 明褐色土 | オレンジスコリア粒を少量、黄褐色ローム粒を微量含む。 | SK69 覆土 |
| 6 | 黒褐色土 | 炭化物・オレンジスコリア粒・黄褐色ロームを微量含む。 | SK69 覆土 |
| 7 | 明褐色土 | 黄褐色ロームを少量、黒色土を微量含む。 | SK69 覆土 |

第126図 M地区 SK68～69

第17表 M地区 遺構一覧表

遺構種別	報告遺構名	調査時遺構名	位置	時代	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	平面形	断面形	切り合い (古→新)	備考
土坑	SK68	A 土坑	1Tr		98	66	40	楕円形	平底	SK69→SK68	
土坑	SK69	B 土坑	1Tr	(95)	88	40		不整形	平底	SK69→SK68	

第11章 天間沢遺跡N地区（第14地区）

第1節 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

平成元年、事業者（個人）は、富士市天間 1061-1 外（968 m²）において宅地造成工事を計画した。当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置するため、平成元年 2 月 10 日、事業者から文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。富士市教育委員会はこれを静岡県教育委員会に進達し（平成元年 2 月 14 日付け、富教文体第 205 号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった（平成元年 2 月 23 日付け、教文第 3-100 号）。

平成元年 6 月 2 日、土地所有者から発掘調査承諾書が提出された。これを受けて富士市教育委員会は、文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し（平成元年 6 月 5 日付け、富教文体第 33 号）、文化体育課職員による発掘調査を実施することとなった。

調査の経過

調査は平成元年 6 月 5 日から 6 月 22 日にかけて実施した。

調査地に東西方向のトレンチを 3 本設定し（1～3Tr）、重機により掘削し、遺構・遺物の検出につとめた。遺構・遺物が検出されたところについては、トレンチを拡張して調査を行った。掘削は 3 段階に分けて行い、1 段階目ではⅠ層またはⅡ層上層まで、2 段階目ではⅡ層下層まで、3 段階目はⅤ層上層まで、順に掘り下げて精査を行った。

1Tr の南壁土層断面観察により建物（SB01）の存在が確認されたため、1Tr と 2Tr の間を拡張して、SB01 の全面を検出し、完掘した。



第127図 N地区 位置図

遺物はSB01から土師器の高坏・甕が出土したほか、縄文土器破片や石器が出土した。遺物については、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」（平成元年 7 月 3 日付け、富教文体第 72 号）を、静岡県教育委員会宛に「埋蔵文化財保管証」（平成元年 7 月 3 日付け、富教文体第 71 号）を提出し、静岡県教育委員会から埋蔵物の文化財認定を受けている（平成元年 8 月 2 日付け、教文第 2-48 号）。

調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した（平成元年 7 月 3 日付け、富教文体第 73 号）。

調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	山本 厚
		教育次長	伊藤 輝英
	文化体育課	課長	小長谷秀夫
		課長補佐	渡邊 誠
	文化振興係	係長	杉本 篤
調査担当		主事	渡井 義彦
		主事	久松 義昭

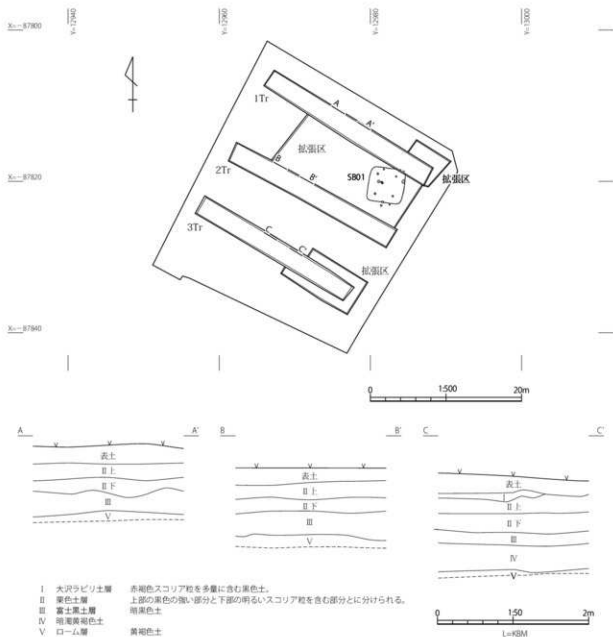
第2節 発掘調査の成果

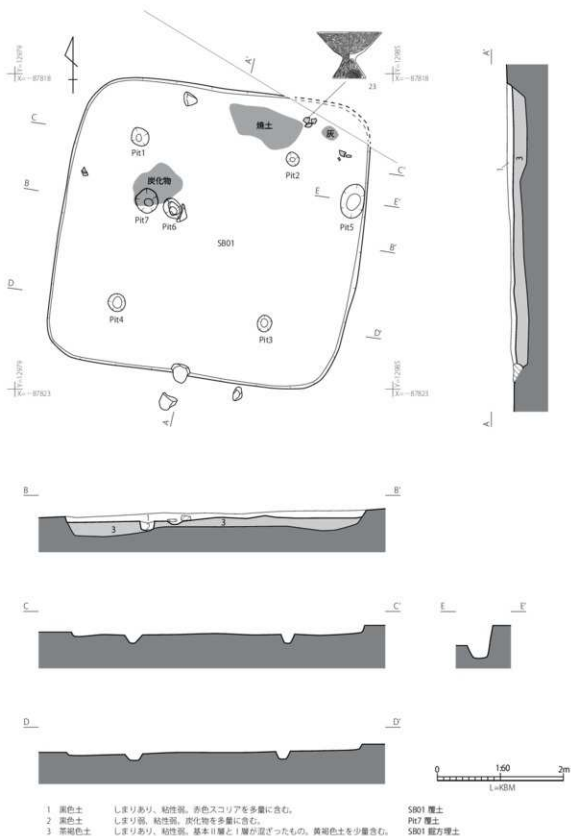
・ 竪穴建物

SB01

1Tr 南壁土層観察で確認され、1Tr と 2Tr の間の拡張区で全面検出された。平面形は隅丸方形を呈し、主軸（南北）幅 4.62m、直交（東西）幅 4.74m を測る。主軸方位は N-8.3°-E である。カマドは確認されず、建物内に検出された 7 基のピット（Pit1 ～ 7）のうち、Pit6 が炉であると考えられる。Pit1 ～ 4 は柱穴とみ

られ、柱間寸法は芯々で南北約 2.60 m、東西約 2.40 m を測る。東壁際に掘られた Pit5 は貯蔵穴の可能性が想定され、Pit7 は性格不明であるが、覆土下部から多量の炭化物が検出されている。本建物からは土師器の高坏・甕などが出土しており、古墳時代前期の遺構とみられる。





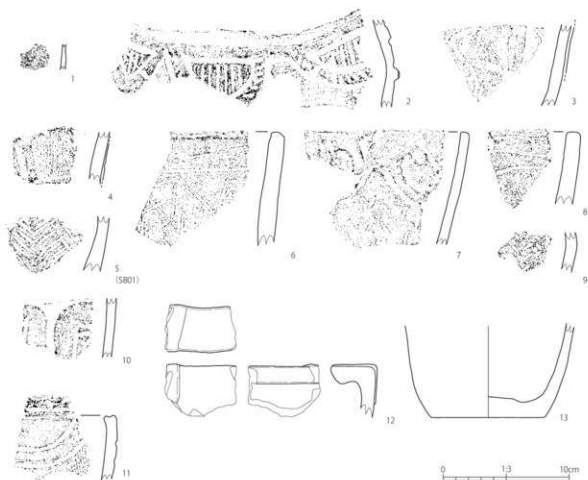
第129図 N地区 SB01

・遺物

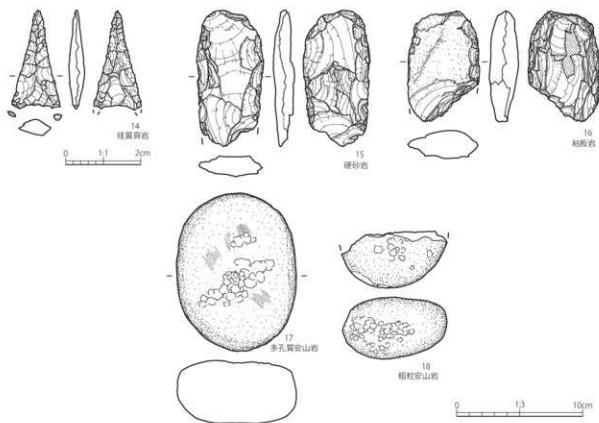
縄文時代の遺物は、包含層および古墳時代のSB01覆土内から出土しており、遺構に伴うものではない。その中には1の縄文時代前期初頭のⅡ群A類、木島式土器と思われる土器片がみられた。粗い胎土と細線文が観察されるので、木島式と判断したが、古墳時代前期のS字状口縁甕の可能性もある。2は縄文時代中期中葉のⅢ群A-1類、井戸尻3式の頸部の楕円文部分になる。3～9はⅢ群A-2類で、3・4は曽利Ⅳ式、6～9は曽利Ⅴ式の深鉢形土器である。10・12はⅢ群A-1類に属すると思われる。11は縄文時代後期Ⅳ群A-2類の堀之内式の深鉢形土器と思われる。13の深鉢底部は、無文であり時期は不明確だが、縄文時代中期の土器と思われる。

出土した石器は、14のやや細身の無茎団基形の石鏃、15・16は短形の短冊形打製石斧、17・18は磨・蔽・凹石である。

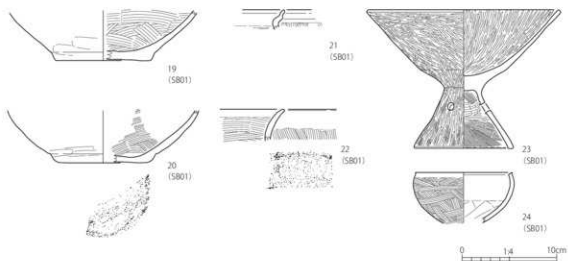
古墳時代前期の遺物は、19・20の壺、21のS字状口縁甕、22の在地系台付甕、23の脚部に3単位の円形透しのある有段高坏、24の碗が出土している。そのため、検出されたSB01の年代も古墳時代前期と考えられる。



第130図 N地区 出土遺物（縄文時代）（1）



第 131 図 N 地区 出土遺物（縄文時代）(2)



第 132 図 N 地区 出土遺物（古墳時代）

第18表 N 地区 出土土器観察表

採掘 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第130図 PL-42	1	SB01	10YR8/3 浅黄橙	10YR5/1 灰灰	Ⅱ群 A 類	木島?	薄く黒灰色の胎土で、薄い縦線文が施文される。1号住床内。	R30
第130図 PL-42	2	3Tr 東側	7.5YR6/4 に近い	5YR5/4 に近い赤褐	Ⅲ群 A-1 類	井戸尻 3	小型深鉢類。水平の隆帯に刻みのある凹状の弧文を連結し、弧文の内部を縦位の集合沈線で充填する。	R8 ・ R35
第130図 PL-42	3	2Tr	7.5YR6/4 に近い	7.5YR6/4 に近い	Ⅲ群 A-2 類	曾利 IV	両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の隆帯による懸垂文を施文後、条線によるラフな綾文で区画内を埋める。	R1
第130図 PL-42	4	1・2Tr 中間 拡張区中央	5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 IV	両側に浅い凹線を伴う、低い幅広の隆帯による懸垂文を施文後、条線による綾文で区画内を埋める。	R32
第130図 PL-42	5	SB01	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/6 黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 IV	間隔が粗い条線による綾文。1号住出土。	R17
第130図 PL-42	6	SB01 南側	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	口縁に沿って薄い二本の平行沈線を施文し、その下を八の字文で埋める。8と同一個体?	R31
第130図 PL-42	7	3Tr 東側	5YR5/4 に近い赤褐	7.5YR3/2 黒褐	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	口縁部に、両側に浅い凹線を伴う低い幅広の隆帯によって、連結する渦巻文を施文し、その下を八の字文で埋める。	R3
第130図 PL-42	8	2Tr 東側	5YR6/6 橙	10YR7/3 に近い黄橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	口縁に沿って薄い二本の平行沈線を施文し、その下を八の字文で埋める。6と同一個体?	R11
第130図 PL-42	9	2Tr	5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	Ⅲ群 A-2 類	曾利 V	沈線による懸垂文の区画内を八の字文で埋める。	R12
第130図 PL-42	10	3Tr 東側	7.5YR5/3 に近い褐	10YR4/2 灰黄褐	Ⅲ群	中層?	削出し縁のような隆帯による横文の内部を、縦線の沈線で充填する。	R3
第130図 PL-42	11	1・2Tr 中間 拡張区中央	7.5YR5/6 明褐	5YR6/6 橙	IV 群	後期?	口縁に沿って並行沈線による凹状の弧状文を施文し、その下に細かい L の隅文を密接施文する。口唇上部に一本の沈線を引く。	R32
第130図 PL-42	12	2Tr 東側	10YR6/4 に近い黄橙	7.5YR7/4 に近い橙	Ⅲ群	中期	器有の部分?。薄い角をもつ隆帯を貼り付けている。	R6
第130図 PL-42	13	3Tr 東側	10YR6/4 に近い黄橙	5YR6/6 橙	Ⅲ群	中期	底皿。	R35
第132図 PL-42	19	SB01	7.5YR6/4 に近い	7.5YR7/6 橙	土師器		壺の底部。1号住床直。	R20 ・ R21
第132図 PL-42	20	SB01	7.5YR6/4 に近い	5YR7/6 橙	土師器		壺底部。へう状工具による沈線で直線の放射線を引く。	R15
第132図 PL-42	21	SB01	10YR7/3 に近い黄橙	7.5YR7/4 に近い橙	土師器		小型の S 字口縁部の口縁部。	R17
第132図 PL-42	22	SB01	7.5YR6/3 に近い褐	7.5YR6/3 に近い褐	土師器		台付甕の口縁部。1号住床直。	R20 ・ R21
第132図 PL-42	23	SB01	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	土師器		脚部に 3 単位の円形通しのある高坏。	R37
第132図 PL-42	24	SB01	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	土師器		小型台付甕の胴部。土坑内出土。	R16 ・ R21 ・ R26 ・ R28

第19表 N 地区 出土土器観察表

採掘 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第131図 PL-42	14	SB01	石碗	庄貫頁岩	2.59	1.27	0.38	0.87	両脚とも欠損。1号建物土から出土。	R27
第131図 PL-42	15	1Tr と 2Tr 間	打製石斧	硬砂岩	(10.8)	5.3	1.58	102.42	刃部欠損。	R18
第131図 PL-42	16	3Tr	打製石斧	粘板岩	(8.8)	5.65	2.31	126.48	刃部下半欠損。	R28
第131図 PL-42	17	2Tr	磨・凹石	多孔質安山岩	12.48	9.48	5.01	885.29	磨石としても使用。2トレンシ出土。	R7
第131図 PL-42	18	3Tr	磨・磨石	粗粒安山岩	(4.61)	(8.25)	(4.89)	234.66	比熱を受け劣化している。3トレンシ出土。	R2

第12章 天間沢遺跡O地区(第15地区)

第1節 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯

事業者(個人)は、富士市天間 1896-2 外(4,758.28㎡)において、農産物集出荷場および農家住宅の建設工事を計画した。平成元年8月23日、富士市教育委員会文化体育課に当該地の埋蔵文化財の所在の有無について問い合わせがあり、8月25日に埋蔵文化財分布確認調査依頼書が提出された。これを受けて、8月26日、事業者・設計者の立ち会ひのもと、文化体育課職員による表面観察調査を実施した。当該地の現状は原野であり、遺物等の散布は認められなかったが、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置することから、確認調査を実施する必要があると判断された。

平成元年8月28日、事業者から文化財保護法第57条の2第1項(当時)の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。8月31日、富士市教育委員会は届出を静岡県教育委員会に達達し(富教文体第102号)、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった(平成元年9月5日付け、教文第3-67号)。富士市教育委員会は文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し、富士市教育委員会文化体育課職員による確認調査を実施することとなった。

調査の経過

調査は平成元年9月5日から9月13日にかけて実施した。地形に合わせて5本のトレンチ(1~5Tr)を設定し、重機により掘削を行い、遺構・遺物の検出につとめた。掘削は3段階に分けて行い、1段階目ではI層上面まで、2段階目でII層上層まで、3段階目はIV層上層まで、順に掘り下げて精査を行った。



第133図 O地区 位置図

4・5Trで中世~近現代とみられる土坑2基(SK01~02)を検出した。

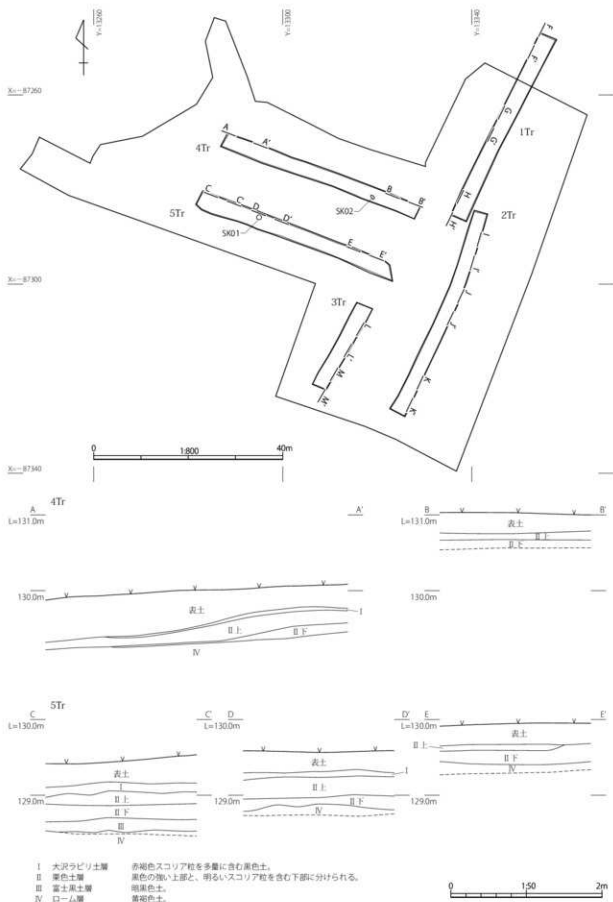
遺物は縄文土器と思われる土器片1点が出土したが、流れ込みとみられる。遺物については、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」(平成元年9月25日付け、富教文体第116号)を、静岡県教育委員会宛に「埋蔵文化財保管証」(平成元年9月25日付け、富教文体第115号)を提出し、静岡県教育委員会から埋蔵物の文化財認定を受けている(平成元年11月10日付け、教文第2-134号)。

調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した(平成元年9月25日付け、富教文体第114号)。

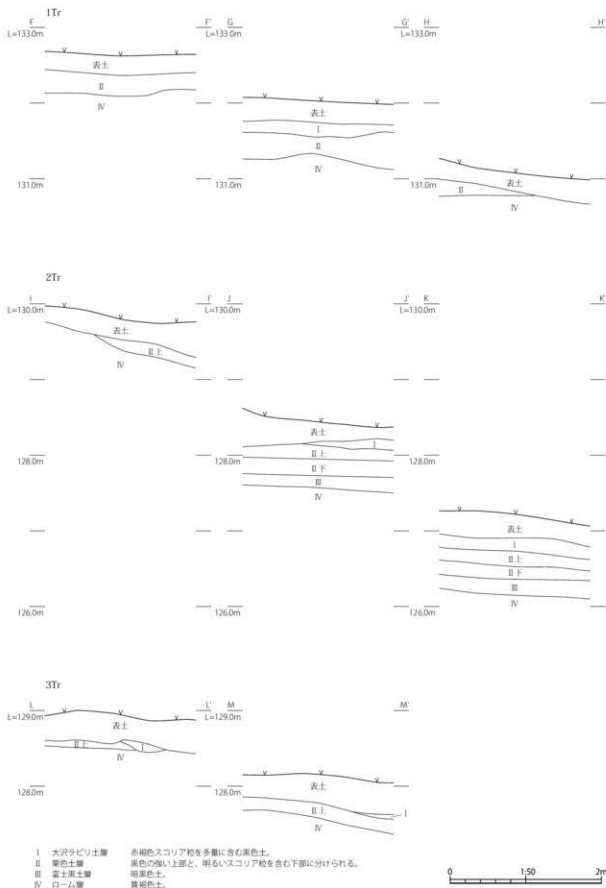
調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	山本 厚
		教育次長	伊藤 輝英
	文化体育課	課長	小長谷秀夫
		課長補佐	渡邊 誠
調査担当	文化振興係	係長	杉本 篤
		主事	渡井 義彦
		主事	久松 義昭



第134図 O地区 トレンチ配置図、セクション図

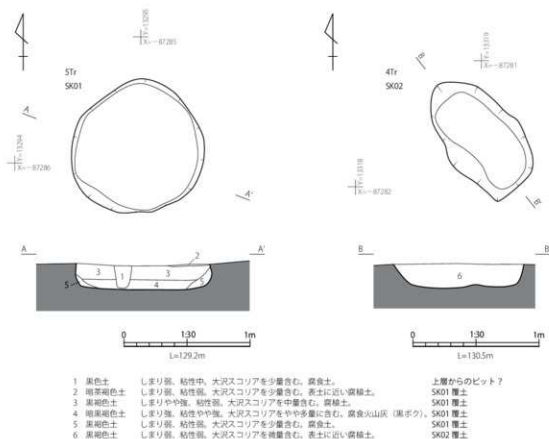


第135図 O地区 セクション図

第2節 発掘調査の成果

4・5Trで、遺物等は検出されなかったが、覆土の土質から中世から近現代のものとみられる土坑2基（SK01～02）を検出した。

5TrのSK01は長径106cm、短径103cm、検出面からの深さ21cmを測る円形土坑でⅡ層を切りこんでいる。4TrのSK02は、長径103cm、短径62cm、検出面からの深さ19cmを測る不整形土坑で、Ⅲ層を切りこむ状況で検出されたが、本来はSK01と同様にⅡ層から切り込まれていたとみられる。



第136図 O地区 SK01～02

第13章 天間沢遺跡P地区（第16地区）

第1節 調査に至る経緯と経過

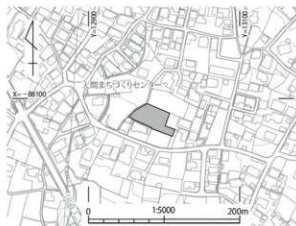
調査に至る経緯

平成3年、富士市役所都市整備部みどりの課では平成4年度事業として、天間沢地区に地域の特色である天間沢遺跡を活かした遺跡公園の造成を計画した。造成予定地（富士市天間 1120-14、1,329 m²）が周知の埋蔵文化財包蔵地「天間沢遺跡」の範囲内に位置することから、文化財保護法第57条の3第1項（当時）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」（平成3年11月20日付け、富都み第111号）を提出するとともに、富士市教育委員会に「埋蔵文化財確認調査依頼書」を提出した。11月22日、富士市教育委員会は通知を静岡県教育委員会に進達し（富教文第154号）、静岡県教育委員会から事業者に対して、富士市教育委員会と協議して発掘調査を実施するように通知があった。富士市教育委員会は文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を静岡県教育委員会に提出し、富士市教育委員会文化振興課職員による確認調査を実施することとなった。

調査の経過

調査は平成3年12月2日から12月12日にかけて実施した。調査地に東西方向に3本、南北方向に1本、合計4本のトレンチ（1～4Tr）を設定し、重機による掘削後、人力により精査を行い、遺構・遺物の検出につとめた。敷地の南西、2Trと3Trが接する部分で堅穴状遺構が確認されたため、可能な限り調査範囲を拡張し、検出部分を完掘した。

遺物は縄文時代早期後葉と中期後葉の土器片、古墳時代前期の土師器片がコンテナ2分の1箱出土した。遺物については、富士警察署長宛に「埋蔵文化財発見届」（平成3年12月13日付け、富教文第168号）を、静岡県教育委員会宛に「埋蔵文化財保管証」（平成3年12月13日付け、富教文体第169号）を提出し、静岡県教育委員会から埋蔵物の文化財認定を受



第137図 P地区 位置図

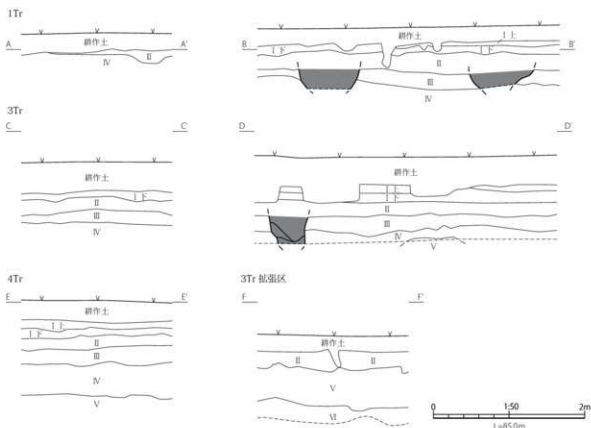
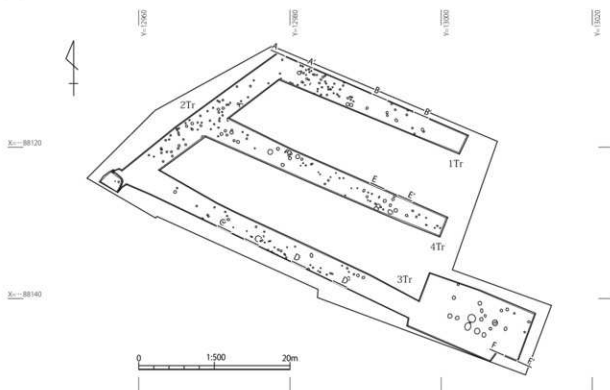
けている（平成4年2月25日付け、教文第2-259号）。

調査の結果について、「発掘調査終了報告書」を静岡県教育委員会に提出した（平成3年12月21日付け、富教文第175号）。

調査の体制

調査は以下の体制で実施した。

調査主体	富士市教育委員会	教育長	山本 厚
		教育次長	伊藤 輝英
		文化振興課 課長	小長谷秀夫
調査担当		課長補佐	小出 禮節
	文化財係	係長	佐野 誠一
		主事	久松 義昭



- I 大沢スコリア層
II 栗色土層
III 富士黒土層
IV 黄褐色土
V 休耕地
VI 古富士泥流層上層か
- 黒色土。しまりやや強。粘性弱。明褐色スコリア粒を密に含む。白色粒子を微量含む。上層・下層に分けられる。
暗褐色土。
黄褐色土。しまりやや強。粘性やや強。径2~3cmの礫を少量。褐色粒子を微量含む。
にぶい黄褐色土。にぶい褐色の軟らかいスコリアを微量含む。
黄褐色土。褐色スコリア (2~3mm) をやや多量に含む。礫 (3cm位) が目立つ。
礫が多い。

第138図 P地区 トレンチ配置図、セクション図

第2節 発掘調査の成果

遺構

調査時に多数のビット状の落ち込みが検出され図化した。人工的なものか判断がつかなかった。調査区全体で縄文時代早期後葉と中期後葉の土器および石器が出土している。

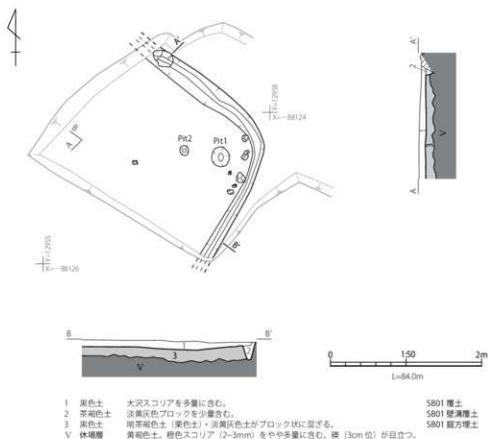
調査地の南西、2Trと3Trが接する部分で竪穴建物(SB01)の北東部分を検出した。検出部分で南北幅2.00m、東西幅2.60mを測り、傾きはN-32°-Eほどである。掘方に12〜18cmほどの埋土を入れ、床面をつくっている。検出された壁には幅15〜30cm、深さ18cmほどの壁溝が認められる。北東角寄りに2基のビット(Pit1〜2)が検出されたが、調査時所見によれば、壁寄りのPit1は配置的に柱穴とは考えられず、Pit2は配置は良いが浅い。遺構覆土および少量の出土土器から古墳時代前期の建物と考えられる。

遺物

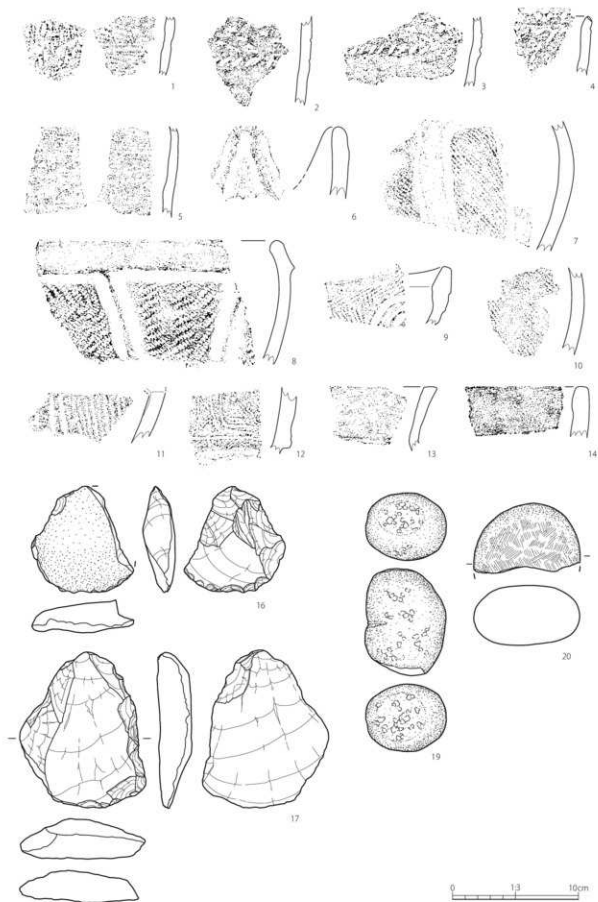
遺物は、縄文土器と古墳時代前期と考えられる土師器、平安時代の灰輪陶器が出土しているが、土師器に関しては図示できるものがなかった。

1〜5は、縄文時代早期後葉、I群A類のハツ崎式の深鉢形土器である。6は縄文時代中期後葉、III群A-2類の曾利式土器の把手部分で、7〜11まではIII群B-2類の加曾利E4式の深鉢形土器と考えられる。12は肌色系の胎土で粗い粒子を含んでおり、西日本系の土器と思われる。III群D-2類の北白川C式に比定した。13・14は無文の口縁部であるが、縄文時代中期後葉の深鉢形土器と考えられる。

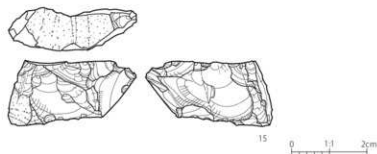
石器は、15と18が石器素材の作出用の石核で、16・17は機能的に打製石斧としたが、削器としても良い成形となっている。19は軟石材の敲石、20は硬質な石材の磨石である。



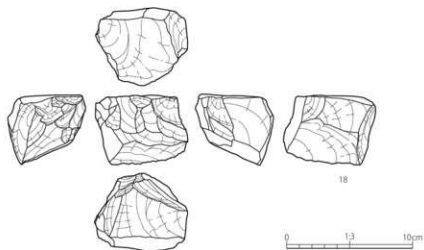
第139図 P地区 SB01



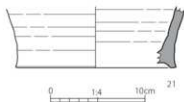
第140図 P地区 出土物実測図（縄文時代）（1）



第141図 P地区 出土遺物実測図（縄文時代）(2)



第142図 P地区 出土遺物実測図（平安時代）



第20表 P地区 出土土器観察表

採掘 図版	番号	出土場所	色調内側	色調外側	分類	型式	観察	現地 番号
第140図 PL-46	1	1・2・3Tr	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	I群 A 類	ハッ崎 I	斜めの爪形文を横位に施文し、その下に斜め平行に施文し、文様帯を構成する。裏面に薄い貝殻条痕を横位に施す。灰白色の胎土で多量の繊維を含有する。	R1
第140図 PL-46	2	2Tr	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	I群 A 類	ハッ崎 I	斜めの爪形文を横位に施文。多量の繊維を胎土に含有する。	R7
第140図 PL-46	3	2Tr	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	I群 A 類	ハッ崎 I	段の部分に、斜めの爪形文を横位に施文。多量の繊維を胎土に含有する。	R7
第140図 PL-46	4	1・2・3Tr	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	I群 A 類	ハッ崎 I	横位に、斜め爪形の連続刺突と口唇に同じ工具による刻みを施す。胎土に繊維を多く含有する。	R1
第140図 PL-46	5	4Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	I群 A 類	ハッ崎 I?	横位の斜め刺突文を施文。裏面に薄く貝殻条痕を施す。胎土は灰白色に近く、繊維を含む。	R3
第140図 PL-46	6	2Tr	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	II群 A-2 類	曾利	頂点が丸い板状三角形の把手部分。中央部と口唇に沿って隆帯を施文する。	R7
第140図 PL-46	7	3Tr 拡張区	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	II群 B-2 類	加曾利 E4	平行沈線による懸垂文に区画された中を、縦位 LR の縄文で埋める。	R5
第140図 PL-46	8	3Tr	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	II群 B-2 類	加曾利 E4	両側に浅い凹線を伴う低い断面三角形の隆帯を口縁に沿って施文し、底部に向かってやや収束する懸垂文を垂下する。区画内には、RL の縄文を縦位に密接施文する。	R6
第140図 PL-46	9	3Tr	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	II群 B-2 類	加曾利 E4	肥厚した口唇をもつ底状口縁部。地文に LR の縄文を多方向に施文し、浅い並行沈線による曲線で文様を描いている。	R6
第140図 PL-46	10	4Tr	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	II群 B-2 類	加曾利 E	LR の縄文を縦位に施文し、ナデによる懸垂線で磨消して区画としている。	R2
第140図 PL-46	11	4Tr	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR3/6 橙	II群 B-2 類	加曾利 E	両側に二本の沈線を伴う刻みのある隆帯の懸垂文による区画内を、多条(3条)の RL の縄文で、隙が縦になるように密接施文する。	R3
第140図 PL-46	12	3Tr	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	II群 D-2 類	北白川 C	口縁部に段を設け文様帯とし、地文として薄い RL の縄文を施文後、平行沈線で隅丸長方形の文様を描く。	R6
第140図 PL-46	13	3Tr	7.5YR4/2 灰褐	10YR3/2 黒褐	II群	中期?	角ばった口唇をもち、外反する無文口縁部。	R6
第140図 PL-46	14	2Tr	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	II群	中期	無文口縁部。	R7
第142図 PL-46	21	4Tr	2.5YR6/2 灰黄	10YR5/2 灰黄褐	灰輪陶器	平安	10世紀代、瀬美・湖西系(二川系?) 灰輪陶器の大型版? の高台部。	R2

第21表 P地区 出土石器観察表

採掘 図版	番号	出土場所	器種名	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	観察	現地 番号
第141図 PL-46	15	1・2・3Tr	石槌	黒曜石	1.67	3.39	0.84	5.92	両極石槌。上下左右に打撃痕が多数残存している。	R1
第140図 PL-46	16	4Tr	打製石斧	ホルンフェルス	(8.35)	(7.98)	2.45	66.8	円形に近い形状で、削器に分類しても良い。	R11
第140図 PL-46	17	4Tr	打製石斧	火山礫凝灰岩	12.38	9.98	2.21	373.15	ラフなバチ形を呈す。	R11
第141図 PL-46	18	4Tr	石槌	富士川ホルンフェルス	7.21	5.58	6.16	310.97	打面転移を横割りに行い、等比剥片を剥離。	R11
第140図 PL-46	19	4Tr	敲石	安山岩	8.41	6.42	5.48	375.68	上下に敲痕多数。	R11
第140図 PL-46	20	4Tr	磨石	石英閃緑岩	(5.62)	8.42	4.3	316.43	硬質な石材で表面に磨痕が顕著に観察される。	R10

第14章 総括

各地区の様相

登録されている天間沢遺跡の範囲は約70万平方メートルを越え、当然ひとつの遺跡というよりも遺跡群として捉えるべきものである。それゆえ、各地区ごとに様相は異なり、時代も大きく異なっていることが多いので、各地区ごとに概観する。

遺物が無いが、ほとんど出土しなかったD、I、J、M、O地区については遺跡の性格を述べることはできないが、E、G、K、L、N、P地区について、その特徴を考察する。

E地区

E地区は、天間沢遺跡のほぼ中央部の西寄りに位置し、隣接するジゲン沢遺跡とを隔てる谷部を望む立地になる。天間沢遺跡の最盛期である縄文時代中期の遺物も多く出土しているが、主体を成すのは縄文時代後期前葉の堀之内式土器になる。静岡県東部地域は堀之内1式土器の出土が多い傾向にあるが、E地区では堀之内2式が主体的に出土した。特に完形になるものはなかったが、器形が推定できる注口土器の大型破片が多く出土していることが注目される。この注口土器がF-2グリッド中心に多く出土していることと、同じグリッドから非常に小型の緑色軟玉製玉斧が出土していることは、E地区が通常の生活空間ではなく祭祀のような特殊な活動空間であったことが推察される。

また、静岡県東部地域の特徴的な堀之内式期の粗製土器として注目されていた、付加条縄文を施す深鉢形土器が多く出土した点も重要である。同時伴出の証拠はないが、ほぼ堀之内2式主体の土器群とともに出土したことから、土器組成に含まれるものと思われ、型式編年を考えるうえで良好な資料といえるだろう。

少量であるが古墳時代前期の遺構、遺物も確認されている。遺構では何らかの区画の一部と思われる溝状遺構が検出されており、天間沢遺跡全体で確認できる古墳時代前期集落に関わる遺構だろう。

G地区

G地区の調査は、調査面積50㎡の非常に狭い調査区であるが、縄文時代中期末の埋蔵や配石土坑など墓域と思われる遺構が検出されている。縄文時代中期集落の中心と考えられるA・B・C・F・K地区に接していながら建物を確認できていないことから、環状あるいは馬蹄形集落であった場合には外周部にあたる領域の可能性がある。

K地区

200㎡の狭い調査区であったが、5軒以上の建物を確認された。遺構の時期は、ほぼ縄文時代中期後葉の曽利式期内で収まっており、A～C・F地区で確認された集落の一部であると考えられる。この集落は少なくとも中期中葉の井戸尻式期から始まり、中期後葉の曽利式の終わりごろまで営まれたことが確認できるが、K地区部分は曽利Ⅲ～Ⅴ式までの中期後葉の時期に限定される。SB25では、小型壺形鐙付土器(65)とそのセットのような出土状況で器台(81)が出土しており、有孔鐙付土器と器台のセット関係を示唆する事例かもしれない。さらにもう一つ、SB25には内部にタール状の付着物が残存した、より小型の壺形鐙付土器(66)も出土している。何か特別な性格をもつ建物なのかもしれない。

なお、K地区で2点のナイフ形石器が検出され、天間沢遺跡で確認されていなかった旧石器時代の証拠が見出された。これによって富士宮市の下高原遺跡とあわせて、古富士火山活動期の約2万年前頃には富士山麓において人類活動が行われていたことが確認された。

L地区

主な出土遺物は縄文時代中期の土器であるが、遺構の時期は不明確である。溝状遺構SD1は、覆土の土質から古墳時代以降と判断され、土製紡錘車が出土しているが、時期の判る遺物は伴出していない。隣接するN地区では古墳時代前期の建物が確認されているので、これに関係する遺構の可能性がある。

N 地区

遺構では古墳時代前期の建物を検出している。脚部3単位円孔透しの段付き坏部をもつ高坏(23)やS字甕を伴出していることから、4世紀代の建物と考えられ、横道下(23)地区など天間沢遺跡全体に広がる古墳時代前期集落の一部と考えられる。

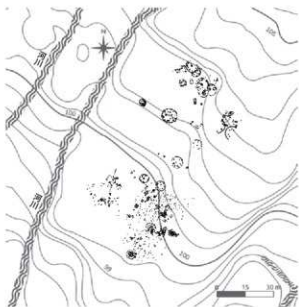
P 地区

縄文時代早期後葉と中期末の縄文土器、平安時代の灰釉陶器が出土している。量的に縄文時代早期後葉のハッ崎Ⅰ式の比率が高いので、当期の中心となるQ地区の端部といえよう。また、調査区の西端で古墳時代前期と考えられる建物の一部が確認され、古墳時代前期の集落が天間沢遺跡全体に広がっていることが想定される。

縄文時代中期集落について

天間沢遺跡の各地区ほぼすべてにおいて縄文時代中期の遺物が出土し、特に中期後葉の曾利、加曾利式系の土器の出土量が多い。多数の建物が確認されたA・B・C・F・K地区の建物群が拠点集落として中心となり、縄文時代中期の天間沢遺跡群を構成すると思われる。

この中心部の集落は、植松章八氏により「第2章 第2節 縄文期の集落と配石遺構をめぐって」『天間沢遺跡Ⅱ』にて、A・B・F地区の配石および土坑群を中央広場と墓域域ととらえ、その外周域に堅穴建物群が配置される環状集落が想定されている。ただしその場合には、通常、径約150mを最大とする大型環状集落の規模を大きく越えて、堅穴建物群の範囲のみで径200mを越える規模となり、谷部分を越えてジゲン沢遺跡まで集落範囲となることから、現実的ではないだろう。また、集落形成においても、より古い建物はF地区の配石・土坑群に隣接し、新しくなるにつれ北へ徐々に離れていく傾向がみられる。これは関東・中央高地における環状集落の建物配置が、時間の経過とともに中央にむかって収縮するという一般的傾向とは逆になる(谷口2005)。



※等高線は現在

第143図 縄文時代中期集落全体図

現状の調査状況から鑑みれば、谷に沿う列状の建物群になるか、C地区の空間部分を中央広場とみなし、集落(C・K地区)外周部に墓域あるいは廃棄場(A・B・F・G地区)をもつ、谷部に開いた径100m程度の馬蹄形集落を想定すべきかもしれない。

参考文献

- 谷口康浩 2005『環状集落と縄文社会構造』学生社
- 富士市教育委員会 1984『天間沢遺跡Ⅰ 遺構編』
- 富士市教育委員会 1985『天間沢遺跡Ⅱ 遺物・考察編』
- 富士市教育委員会 2016『天間沢遺跡』富士市埋蔵文化財調査報告第58集
- 富士市教育委員会 2019『天間沢遺跡 第45地区』富士市埋蔵文化財調査報告第65集
- 富士市史編纂委員会 1984『鷹岡町史』富士市

写真図版

PLATE



天間沢遺跡 K 地区 S825 出土遺物 (65・81)



1. E 地区 (3 次) 本調査区全景 (古墳時代以降、北から)

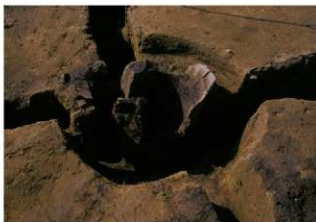


2. E 地区 (3 次) 本調査区全景 (縄文時代、北から)

PL.2 E 地区



1. E 地区 (2 次) 2Tr 全景 (北西から)



2. E 地区 (2 次) 2Tr SU01 (268)



3. E 地区 (2 次) 2Tr SU02 (269)



4. E 地区 (2 次) 3Tr SK01



5. E 地区 (3 次) SD01 全景 (南西から)



1. E地区 (3次) SD02 全景 (北から)



2. E地区 (3次) SD01 北端 (南から)



3. E地区 (3次) SD01 南端 (北東から)



4. E地区 (3次) SK02 (南西から)



5. E地区 (3次) Pit01・Pit02 (南西から)



1. E 地区 (3 次) 縄文時代遺構全体 (E Gr 以北、南から)



2. E 地区 (3 次) 縄文時代遺構全体 (D Gr 以南、東から)



1. E 地区 (3 次) 縄文時代全体 (EGr 以南、南東から)



2. E 地区 (3 次) FP01 (南から)

PL.6 E 地区



1. E 地区 (3 次) SU03 (北から)



2. E 地区 (3 次) FP01 セクション (南西から)



3. E 地区 (3 次) FP03 セクション (南から)



4. E 地区 (3 次) FP03 (南西から)



5. E 地区 (3 次) FP04 セクション (西から)



6. E 地区 (3 次) FP04 (南西から)



7. E 地区 (3 次) FP05 セクション (東から)



8. E 地区 (3 次) FP05 (東から)



1. E 地区 (3 次) 縄文時代全体 (G Gr、東から)



2. E 地区 (3 次) G-4 Gr 遺物出土状況 (北西から)



3. E 地区 (3 次) F-2 Gr 遺物 (200) 出土状況



4. E 地区 (3 次) F-2 Gr 遺物出土状況



5. E 地区 (3 次) 作業の様子 (北から)













1. G 地区 1Tr 全景 (南西から)



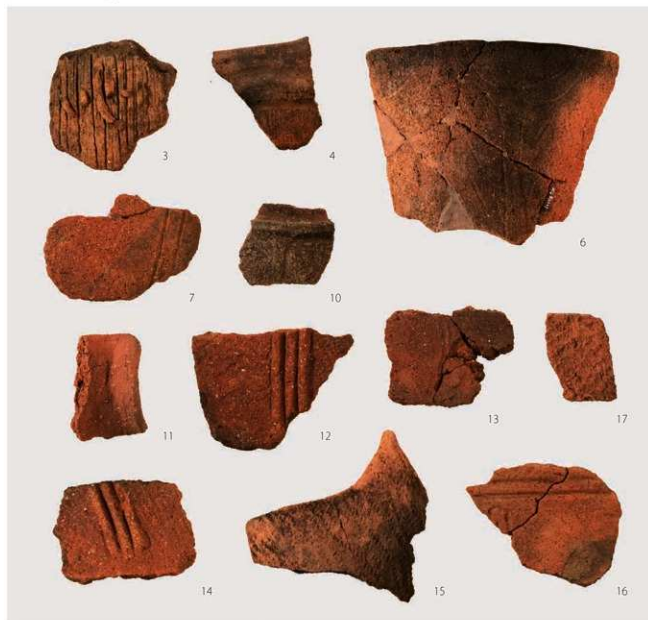
2. G 地区 SU01 遺物出土状況



1
(SU01)



1 (展開)





1. H地区 1Tr 5B01 (南東から)



2. H地区 1Tr 全景 (南から)



3. H地区 1Tr 東壁セクションB8' (西から)



4. I地区 調査地全景 (南から)



5. I地区 1Tr 全景 (南から)



H地区 出土遺物



1. J地区 調査地全景（南から）



2. J地区 1Tr全景（南から）



1. K 地区 調査区全景（南西から）



2. K 地区 調査区南半（東から）



1. K 地区 調査区北半 (東から)



2. K 地区 SB22 全景 (南東から)



1. K 地区 SB22 炉 (南から)



2. K 地区 SB22 石器 (181・182・184) 出土状況



3. K 地区 SB23 全景 (東から)



4. K 地区 SB23 炉 セクション (東から)



5. K 地区 SB23 炉 (12・13・22) (東から)



1. K 地区 SB23U1 (14)・SB23U2 (15) (北東から)



2. K 地区 SB24 全景 (東から)



1. K 地区 SB24 遺物 (36・38) 出土状況 (東から)



2. K 地区 SB24 遺物 (48) 出土状況 (南西から)



3. K 地区 SB25 全景 (西から)



4. K 地区 SB25 遺物 (57) 出土状況



5. K 地区 SB25 遺物 (65・81) 出土状況



1. K 地区 SB26 全景 (西から)



2. K 地区 SKC (103)



3. K 地区 SKA セクション (南から)



4. K 地区 SKA (東から)



5. K 地区 SKAU2 (99) (南西から)



6. K 地区 SKAU3 (100) (西から)



7. K 地区 SKG (104) (北から)



8. K 地区 調査地遠景 (南西から)





K 地区 出土旧石器



K 地区 SB22 出土土器



12
(SB23 炉)



12 (展開)

K 地区 SB23 出土土器







K 地区 SB23 出土土器

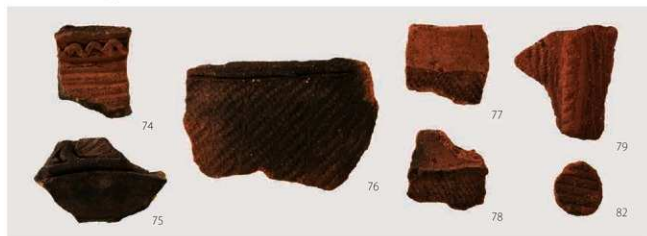


K 地区 SB24 出土土器



36 (展開)

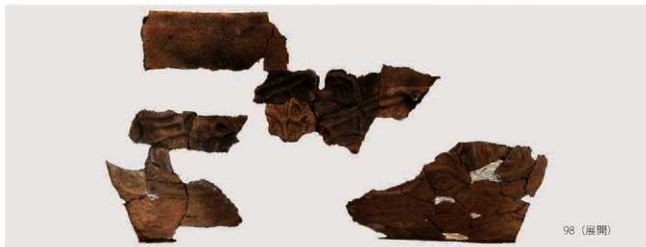






K 地区 SB26 出土土器

K 地区 SKA 出土土器





103

K 地区 SKC 出土土器



104



105

107

108

109

106

110

112

113

111

K 地区 出土土器



104 (展開)

K 地区 SKG 出土土器







K 地区 出土土器

K 地区 SB22 出土石器



K 地区 SB23 出土石器

K 地区 SB24 出土石器



191



192



193

K 地区 SB26 出土石器

K 地区 SKA 出土石器



208



221

K 地区 出土石器



1. L地区 1Tr・拡張区全景（北東から）



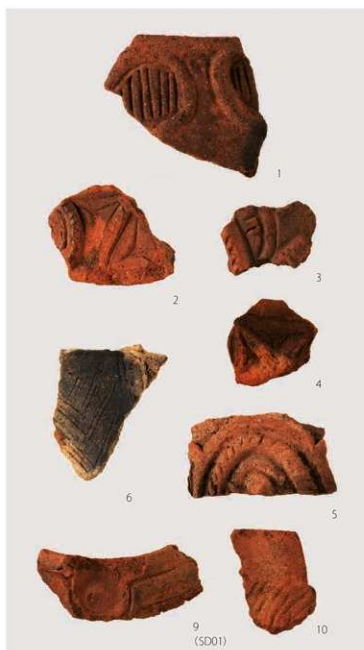
2. L地区 2Tr SD01 全景（南東から）



3. L地区 SK63 南北セクション（西から）



4. L地区 SK63（西から）





1. M地区 1Tr 全景 (南から)



2. M地区 SK68・69 南北セクション西壁 (東から)



3. M地区 SK68・69 (東から)



4. N地区 調査の様子 (東から)



5. N地区 3Tr 東西セクション北壁 (南から)



1. N 地区 SB01 (東から)



2. N 地区 SB01 セクション (南東から)



3. N 地区 SB01 掘り方 (東から)



4. N 地区 SB01Pit6 (炉?) (南から)



5. N 地区 SB01 高坪 (23) 出土状況





1. O 地区 1Tr 全景 (南から)



2. O 地区 2Tr 全景 (南から)



3. O 地区 5Tr 全景 (東から)



4. O 地区 2Tr 南北セクション東壁 (西から)



5. O 地区 5Tr 東西セクション北壁 (南から)



1. P 地区 調査地全景 (西から)



2. P 地区 S801 (北東から)



1. P 地区 SB01 セクション (東から)



2. P 地区 SB01 完掘 (北東から)



3. P 地区 1Tr 全景 (北西から)



4. P 地区 1Tr 東西セクション北壁 (南から)



5. P 地区 2Tr 全景 (北東から)



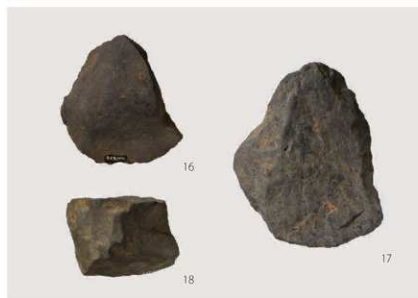
6. P 地区 3Tr 全景 (南東から)



7. P 地区 4Tr 全景 (北西から)



8. P 地区 4Tr 東西セクション北壁 (西から)



報告書抄録

ふりがな	てんまざわいせき
書名	天間沢遺跡
副書名	D・E・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P地区 (4・5・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16地区)
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第80集
編著者名	筱原芳郎・若林美希
編集機関	富士市教育委員会 (担当課：文化財課)
所在地	〒417-0061 静岡県富士市伝法 66 番地の 2 TEL 0545-30-7850
発行年月日	令和 6 年 3 月 29 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯 東経	地区名	調査期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
でんまざわ いせき	しずおかけん ふじし てんま	22210	7	35 12' 18.61" 138 38' 26.29"	D 地区 (第 4 地区)	19730325 ～ 19730329	100	試掘調査	
				35 12' 38.84" 138 38' 39.85"	E 地区 (第 5 地区)	19721224 ～ 19721229	50	試掘調査	
						19930420 ～ 19930428	170	試掘調査	
						19930524 ～ 19930705	300	本発掘調査	
				35 12' 34.50" 138 38' 36.60"	G 地区 (第 7 地区)	19831024 ～ 19831028	50	試掘調査	
				35 12' 25.25" 138 38' 36.42"	H 地区 (第 8 地区)	19831107 ～ 19831112	50	試掘調査	
				35 12' 20.71" 138 38' 34.08"	I 地区 (第 9 地区)	19831114 ～ 19831117	50	試掘調査	
				35 12' 12.83" 138 38' 26.12"	J 地区 (第 10 地区)	19831118 ～ 19831122	50	試掘調査	
				35 12' 33.72" 138 38' 36.40"	K 地区 (第 11 地区)	19841015 ～ 19841031	200	試掘調査	
天間沢 遺跡	静岡県 富士市 天間			35 12' 31.26" 138 38' 32.56"	L 地区 (第 12 地区)	19860905 ～ 19860910	300	試掘調査	
				35 12' 17.78" 138 38' 36.01"	M 地区 (第 13 地区)	19870511 ～ 19870515	150	試掘調査	
				35 12' 29.86" 138 38' 32.83"	N 地区 (第 14 地区)	19890605 ～ 19890622	367	試掘調査	
				35 12' 47.34" 138 38' 46.31"	O 地区 (第 15 地区)	19890905 ～ 19890913	660	試掘調査	
				35 12' 20.19" 138 38' 33.25"	P 地区 (第 16 地区)	19911202 ～ 19911211	495	試掘調査	
				所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
				天間沢遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 古墳時代	建物跡 (竪穴) 5 炉跡 (縄文) 7 埋藏土坑 (縄文) 10 建物跡 (古墳) 3	ナイフ形石器 (旧石器) 縄文土器 (縄文早期～後期) 石器 (縄文) 土師器 (古墳前期)	小型跨付土器 軟玉製玉弁
要 約	本書は昭和 47 年以降に調査され、天間沢遺跡の未報告であった地区を報告する。 本書で報告する D ～ P (4 ～ 16) 地区は、広大な天間沢遺跡のほぼ中央部に位置し、天間沢遺跡の最盛期となる縄文時代中期の遺構・遺物を主体とする。特に K 地区は縄文時代中期集落の中心部分にあたりと考えられ、曾利Ⅲ～V 式期の 5 軒以上の建物が重複して検出された。A ～ F 地区と K 地区の調査を合わせると、天間沢遺跡の縄文時代中期集落の構成を知る重要な資料となった。また、E 地区は堀之内式期の注口土器が多く出土し、玉弁なども伴出するなど、祭祀的な場であることが想定される。								

富士市埋蔵文化財調査報告 第80集

天間沢遺跡

D・E・G・H・I・J・K・L・M・N・O・P地区
(4・5・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16地区)

発行年月日 令和6年3月29日

編集・発行 富士市教育委員会

〒417-0061 静岡県富士市伝法66番地の2

TEL 0545-30-7850 FAX 0545-30-6210

E-mail: ky-bunkazai@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本 株式会社文光堂

〒417-0041 静岡県富士市御幸町3-18

(富士市行政資料登録番号 R5-67)